

福岡市埋蔵文化財調査報告書第476集

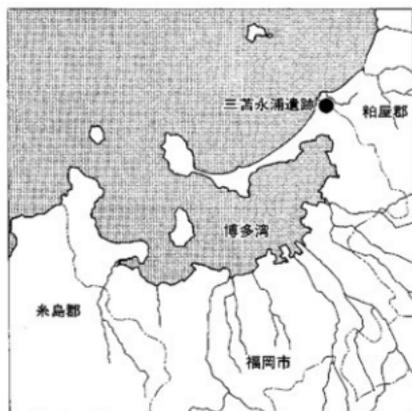
<sup>み</sup>三 <sup>とま</sup>苦 <sup>なが</sup>永 <sup>うら</sup>浦 遺 跡

1 9 9 6

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第476集

み とま なが うら  
三 苫 永 浦 遺 跡



1 9 9 6

福岡市教育委員会



1. 遺跡全景 (南から)



2. H地区全景 (南から)



1. H地区溜井 S X 10 (北から)



2. J・L地区全景 (南から)

## 序

九州の北岸に位置する福岡市域はその地理的条件から、古代より大陸や朝鮮半島からさまざまな文化を受容し栄えてきました。都市化の進む中であって、多くの史跡が残された地域となっております。

三苫永浦遺跡群は福岡市の東端にあつて、弥生時代から古墳時代を中心とした大規模な遺跡です。この地に区画整理事業が計画されましたので、事前の埋蔵文化財の発掘調査をおこないました。調査によって山石器時代から古墳時代に及ぶさまざまな遺構、遺物が発見されました。遺構では、特に弥生時代の溜井や高地性集落が発見され、本地域の歴史や文化を語る上で、また弥生時代の生産や社会を考える重要な手がかりとなるものと考えられます。

発掘調査から報告書作成に至るまで、三苫永浦地区区画整理組合の関係者、並びに関係機関、各位に多大なご協力、ご援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第です。

本書が文化財保護の理解を深める一助となり、併せて研究資料としてご活用いただければ幸いです。

1996年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 尾花 剛

## 例 言

- 1、本書は、三苫永浦地区区画整理事業にともない、福岡市教育委員会が1994年2月15日～1995年3月31日まで発掘調査を実施した三苫永浦遺跡群第1次の調査報告書である。
- 2、本書使用の遺構実測図は、井英明、杉内郷、立石真二、八丁由香、井上蘭子、石井博司、石川健、藤木聡、坂田規子、河村敬子、鎌原恒、茅野嘉雄、丸尾文彦、吉野純子、原ひろみ、荒井吉正、秋山幸代、須賀淳一、赤松伸夫、大野哲二、奈良康正、本田祐二、田之上裕子、内田直美、井田まゆみ、甲斐孝司、佐々木りえ、中澤哲、平古場豪、笠瀬明宏、井上義也、水口由香、石橋忠治、林潤也、北島大輔、加藤隆也、吉留秀敏が作成し、浄書は加藤隆也、立石真二、吉留秀敏が行った。
- 3、本書使用の遺物実測図は杉内郷、立石真二、藤木聡、甲斐孝司、水口由香、森部順子、長家伸、比佐陽一郎、吉留秀敏が作成し、浄書は加藤隆也、吉留秀敏が行った。
- 4、本書使用の写真は加藤隆也と吉留秀敏が撮影した。なお、遺跡の航空写真は御空中写真企画に依頼した。
- 5、本書に掲載した遺物の縮尺は、土器類が1/4、礎石器類、石製品、土製品等が1/2、縄文時代以降の剥片石器類が2/3、旧石器時代遺物と玉類が1/1を基本としている。ただし、大型の遺物や遺構は任意である。
- 6、本書使用の標高は海拔高であり、方位は磁北である。本地域における真北との偏差は6'21"である。
- 7、本書の執筆は第3章第2節を加藤隆也・吉留秀敏、第4章第1節を藤木聡氏、第4章第3節6を古環境研究所杉山真二氏、第4章第4節2と鉄器についてを比佐陽一郎氏が執筆し、そのほかを吉留秀敏が執筆した。編集は吉留秀敏がおこなった。
- 8、本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

# 本文目次

第1章 はじめに			
1、調査に至る経過	1		
2、調査の経過	2		
3、調査組織	3		
第2章 地理的歴史的環境			
1、三苫永浦遺跡群の位置と立地条件	5		
2、周辺遺跡の調査研究と成果	7		
3、分布調査の成果	12		
4、三苫永浦遺跡の歴史的環境	14		
第3章 調査の記録			
調査の方法	15		
第1節 試掘調査	15		
1、調査工程と結果	15		
2、判明した遺跡範囲と概要	18		
第2節 A地区の調査	19		
1、調査の概要	19		
2、旧石器時代の調査	19		
3、弥生時代以降の調査	23		
4、表面採集の遺物	29		
5、小結	30		
第3節 D地区の調査	31		
1、調査の概要	31		
2、検出遺構と遺物	32		
3、小結	40		
第4節 E地区の調査	41		
1、調査の概要	41		
2、1号墳の調査	42		
3、小結	52		
第5節 F地区の調査	53		
1、調査の概要	53		
2、2号墳の調査	54		
3、小結	56		
第6節 H地区の調査	57		
1、調査の概要	57		
2、遺構と遺物	59		
3、小結	133		
第7節 I地区の調査	135		
1、調査の概要	135		
2、遺構と遺物	138		
3、小結	183		
第8節 J地区の調査	191		
1、調査の概要	191		
2、遺構と遺物	191		
3、小結	196		
第9節 K地区の調査	197		
1、調査の概要	197		
2、遺構と遺物	197		
3、小結	208		
第10節 L地区の調査	209		
1、調査の概要	209		
2、遺構と遺物	210		
3、小結	213		
第4章 調査資料の分析、検討			
第1節 新宮浜～恋の浦地域の旧石器時代資料について	215		
第2節 三苫永浦遺跡群の縄文時代資料	222		
第3節 三苫永浦遺跡の弥生時代資料			
1、三苫地区の弥生時代土器編年	223		
2、H地区溜井群の構造と性格	224		
3、J地区集落の性格とその評価	225		
4、永浦遺跡における弥生時代鉄器、石器類の組成と構造	226		
5、三苫永浦遺跡群の集落変遷とその背景	227		
6、福岡市、三苫遺跡の球蓋分析	228		
第4節 三苫永浦古墳群の成立と背景			
1、三苫永浦1、2号墳の系譜について	231		
2、三苫永浦1号墳出土の弓金具	232		
遺物観察表	243		

# 挿 図 目 次

Fig. 1.	三苫永浦遺跡群発掘調査工程	3	Fig. 29.	その他の出土遺物 1 (1/4)	38
Fig. 2.	三苫永浦遺跡の位置と周辺地形図 (1/150,000)	5	Fig. 30.	その他の出土遺物 2 (1/2・2/3)	39
Fig. 3.	三苫永浦遺跡周辺の地質図 (1/10,000)	6	Fig. 31.	E地区全体図(1/300)	41
Fig. 4.	三苫永浦遺跡の周辺遺跡分布図 (1/10,000)	7	Fig. 32.	永浦1号墳墳丘図(1/300)	42
Fig. 5.	飛山古墳群と出土遺物	8	Fig. 33.	永浦1号墳墳丘・周溝土層断面図 (1/80)	43
Fig. 6.	三苫京塚古墳と主な出土遺物	9	Fig. 34.	地山整形状況と墳丘下柱穴群 (1/100)	44
Fig. 7.	白峯遺跡の遺構と出土遺物	11	Fig. 35.	永浦1号墳主体部(1/40)	45
Fig. 8.	人丸古墳と出土遺物	12	Fig. 36.	永浦1号墳遺物出土状況 (1/40・1/50)	47
Fig. 9.	分布調査で確認された周辺の遺跡 (1/10,000)	13	Fig. 37.	永浦1号墳出土遺物鉄器(2/3)	48
Fig. 10.	分布調査による採集遺物 (1/4・1/2)	14	Fig. 38.	永浦1号墳出土遺物玉類(1/1)	49
Fig. 11.	試掘調査区設定図(1/3,000)	16	Fig. 39.	永浦1号墳出土遺物須恵器・土師 器(1/4)	49
Fig. 12.	試掘調査出土遺物(1/2・1/4)	17	Fig. 40.	SB05(1/60)	50
Fig. 13.	確認された遺跡とその範囲 (1/5,000)	18	Fig. 41.	その他の出土遺物 1 (1/4)	50
Fig. 14.	A地区全体図(1/500)	20	Fig. 42.	その他の出土遺物 2 (2/3)	51
Fig. 15.	SU07グリッド地点図・遺物出土 地点図(1/800・1/40)	21	Fig. 43.	永浦1号墳墳丘復元図(1/400)	52
Fig. 16.	SU07出土遺物(1/1)	22	Fig. 44.	F地区全体図(1/300)	53
Fig. 17.	SC05(1/60)	24	Fig. 45.	永浦2号墳奥壁に利用されたと みられる転石(1/20)	54
Fig. 18.	SC05出土遺物(1/3)	25	Fig. 46.	永浦2号墳主体部(1/40)	55
Fig. 19.	SC05出土遺物(2/3)	25	Fig. 47.	F地区出土遺物 (1/1、2/3、1/3、1/4)	56
Fig. 20.	SC05出土遺物(1/3)	26	Fig. 48.	永浦2号墳墳丘復元図(1/400)	56
Fig. 21.	SK08遺構・出土遺物実測図 (1/60・1/3)	28	Fig. 49.	H地区調査前地形図(1/1,000)	57
Fig. 22.	表面採集の遺物(2/3)	29	Fig. 50.	H・K地区全体図(1/800)	58
Fig. 23.	D地区全体図(1/300)	31	Fig. 51.	II地区東側遺構分布状態 (1/250)	59
Fig. 24.	SC05-07・06(1/60)	33	Fig. 52.	SC01・05(1/60)	60
Fig. 25.	SB01-02・09(1/60)	34	Fig. 53.	SC02(1/60)	61
Fig. 26.	SB11(1/60)	35	Fig. 54.	SC03(1/60)	61
Fig. 27.	SK08(1/30)	36	Fig. 55.	SC04(1/60)	62
Fig. 28.	遺構出土遺物(1/4)	37	Fig. 56.	SC07・SD08(1/60)	63
			Fig. 57.	住居跡出土遺物(1/2・2/3・1/4)	64

Fig. 58.	SC07・SD08出土遺物 (1/2・1/4) .....	65	Fig. 94.	SX10出土遺物31(1/2) .....	102
Fig. 59.	H地区東側包舍層出土遺物 (2/3・1/4) .....	66	Fig. 95.	SX10出土遺物32(1/2) .....	103
Fig. 60.	SX10(1/300) .....	67	Fig. 96.	SX20(1/120) .....	105
Fig. 61.	SX10横断面土層図(1/120) .....	68	Fig. 97.	SX20横断面土層図(1/80) .....	106
Fig. 62.	SX10、SD11・12横断面土層図 (1/120) .....	69	Fig. 98.	SX20出土遺物(1/2・2/3・1/4) .....	107
Fig. 63.	SD11・12・13(1/80) .....	70	Fig. 99.	SX30(1/120) .....	108
Fig. 64.	SX10出土遺物1(3層)(1/4) .....	72	Fig. 100.	SX30横断面土層図(1/80) .....	109
Fig. 65.	SX10出土遺物2(3層)(1/4) .....	73	Fig. 101.	SD31(1/40) .....	109
Fig. 66.	SX10出土遺物3(4層)(1/4) .....	74	Fig. 102.	SX30出土遺物(1/2・1/4) .....	110
Fig. 67.	SX10出土遺物4(4層)(1/4) .....	75	Fig. 103.	SX40(1/120) .....	111
Fig. 68.	SX10出土遺物5(4層)(1/4) .....	76	Fig. 104.	SX40横断面土層図(1/60) .....	112
Fig. 69.	SX10出土遺物6(4層)(1/4) .....	77	Fig. 105.	SX40出土遺物(1/4・1/2・2/3) .....	113
Fig. 70.	SX10出土遺物7(4層)(1/4) .....	78	Fig. 106.	SX50・51、SD52~57(1/200) .....	114
Fig. 71.	SX10出土遺物8(5層)(1/4) .....	79	Fig. 107.	SX50横断面土層図(1/80) .....	115
Fig. 72.	SX10出土遺物9(5層)(1/4) .....	80	Fig. 108.	SD53土層断面図(1/80) .....	116
Fig. 73.	SX10出土遺物10(5層)(1/4) .....	81	Fig. 109.	SD54・55・57土層断面図(1/80) .....	117
Fig. 74.	SX10出土遺物11(5層) (1/4・1/8) .....	82	Fig. 110.	SX50出土遺物1(1/4) .....	118
Fig. 75.	SX10出土遺物12(5層)(1/4) .....	83	Fig. 111.	SX50出土遺物2(1/4) .....	119
Fig. 76.	SX10出土遺物13(5層)(1/4) .....	84	Fig. 112.	SX50出土遺物3(2/3・1/2) .....	120
Fig. 77.	SX10出土遺物14(5層)(1/4) .....	85	Fig. 113.	SX51・70・73、SD71・72(1/400) .....	121
Fig. 78.	SX10出土遺物15(5層)(1/4) .....	86	Fig. 114.	SX51、SD71・72土層断面図 (1/60) .....	122
Fig. 79.	SX10出土遺物16(5層)(1/4) .....	87	Fig. 115.	SD71谷頭付近土層断面図 (1/60) .....	123
Fig. 80.	SX10出土遺物17(6層)(1/4) .....	88	Fig. 116.	SX51出土遺物(1/4) .....	124
Fig. 81.	SX10出土遺物18(6層)(1/4) .....	89	Fig. 117.	SX70・73、SD71・72出土遺物 (1/2・2/3・1/4) .....	124
Fig. 82.	SX10出土遺物19(6層)(1/4) .....	90	Fig. 118.	SD60・82、SX80・81(1/200) .....	125
Fig. 83.	SX10出土遺物20(1/4) .....	91	Fig. 119.	SD60土層断面図(1/40) .....	126
Fig. 84.	SX10出土遺物21(1/4) .....	92	Fig. 120.	SD60出土遺物1(2/3・1/4) .....	128
Fig. 85.	SX10出土遺物22(1/4) .....	93	Fig. 121.	SD60出土遺物2(1/2・2/3) .....	129
Fig. 86.	SX10出土遺物23(1/4) .....	94	Fig. 122.	SD60出土遺物3(1/2・1/3) .....	130
Fig. 87.	SX10出土遺物24(2/3・1/2) .....	95	Fig. 123.	SX81(1/20) .....	131
Fig. 88.	SX10出土遺物25(1/2) .....	96	Fig. 124.	SX80・81出土遺物(1/4・1/2) .....	131
Fig. 89.	SX10出土遺物26(1/2) .....	97	Fig. 125.	SX90・91(1/60) .....	132
Fig. 90.	SX10出土遺物27(1/2) .....	98	Fig. 126.	SX91出土遺物(2/3) .....	133
Fig. 91.	SX10出土遺物28(1/2) .....	99	Fig. 127.	その他の出土遺物1(1/4) .....	133
Fig. 92.	SX10出土遺物29(1/2) .....	100	Fig. 128.	その他の出土遺物2 (1/1・2/3・1/2) .....	134
Fig. 93.	SX10出土遺物30(1/2) .....	101	Fig. 129.	I地区調査前地形図(1/1,000) .....	135

Fig. 130. I地区全体図(1/500) .....	136	Fig. 164. SC38・SC40出土遺物 (1/4・2/3・1/2) .....	171
Fig. 131. SC02(1/60) .....	137	Fig. 165. SC43・44(1/60) .....	172
Fig. 132. SC02建替変遷模式図(1/120) .....	138	Fig. 166. SC43~45・SD47出土遺物 (1/4・1/2) .....	173
Fig. 133. SC02出土遺物(1/4・1/2) .....	139	Fig. 167. SC45(1/60) .....	174
Fig. 134. SC02・SX05出土遺物 (1/2・1/4・2/3) .....	140	Fig. 168. SC61(1/60) .....	175
Fig. 135. SX05土層断面図(1/40) .....	141	Fig. 169. SC62(1/60) .....	176
Fig. 136. SC09(1/60) .....	142	Fig. 170. SC61・62出土遺物(1/4・2/3) .....	176
Fig. 137. SC09・12出土遺物 (1/4・1/2・2/3) .....	143	Fig. 171. SC32(1/60) .....	177
Fig. 138. SC12・17(1/60) .....	144	Fig. 172. SX31・SC32出土遺物 (2/3・1/4・1/2) .....	178
Fig. 139. SC14(1/60) .....	145	Fig. 173. SC32出土遺物 (1/1・2/3・1/2・1/4) .....	179
Fig. 140. SC14出土遺物(1/4・1/2・2/3) .....	146	Fig. 174. SC37(1/60) .....	180
Fig. 141. SC18(1/60) .....	147	Fig. 175. SC37出土遺物(1/4・1/3) .....	181
Fig. 142. SC33(1/40) .....	148	Fig. 176. SC63(1/60) .....	182
Fig. 143. SC33出土遺物 1 (1/4) .....	149	Fig. 177. その他の遺構出土遺物 (2/3・1/4) .....	182
Fig. 144. SC33出土遺物 2 (1/4・1/2・1/1) .....	151	Fig. 178. 包含層出土遺物 1 (2/3) .....	183
Fig. 145. SC42(1/60) .....	152	Fig. 179. 包含層出土遺物 2 (1/4) .....	185
Fig. 146. SC46(1/40) .....	153	Fig. 180. 包含層出土遺物 3 (1/2) .....	186
Fig. 147. SC42・46・SX48・64出土遺物 (1/4・2/3・1/2) .....	154	Fig. 181. 包含層出土遺物 4 (1/2) .....	187
Fig. 148. SC01(1/40) .....	155	Fig. 182. 包含層出土遺物 5 (1/2) .....	188
Fig. 149. SC01出土遺物 (1/8・1/4・2/3・1/2) .....	156	Fig. 183. 包含層出土遺物 6 (1/2) .....	189
Fig. 150. SC04(1/60) .....	157	Fig. 184. 包含層出土遺物 7 (1/2・1/3) .....	190
Fig. 151. SC04・06出土遺物 (1/4・2/3・1/2) .....	158	Fig. 185. J地区全体図(1/400) .....	191
Fig. 152. SC06(1/60) .....	159	Fig. 186. SC04(1/60) .....	192
Fig. 153. SC06出土遺物(2/3・1/2) .....	160	Fig. 187. SC07(1/60) .....	193
Fig. 154. SC07(1/60) .....	161	Fig. 188. SK05・06(1/40) .....	194
Fig. 155. SC07出土遺物(1/4・2/3・1/2) .....	162	Fig. 189. J地区出土遺物(1/4・2/3・1/2) .....	195
Fig. 156. SK08・10・11(1/60) .....	163	Fig. 190. K地区全体図(1/300) .....	197
Fig. 157. SK08・10・11出土遺物(1/4・1/3) .....	164	Fig. 191. SC02~09(1/60) .....	198
Fig. 158. SC13(1/60) .....	165	Fig. 192. SC01(1/60) .....	199
Fig. 159. SC13出土遺物 1 (1/4) .....	166	Fig. 193. SC01建替変遷模式図(1/120) .....	200
Fig. 160. SC13出土遺物 2 (1/4・2/3・1/2) .....	167	Fig. 194. SC02・03(1/40) .....	201
Fig. 161. SC13・SX35出土遺物 (1/2・1/3) .....	168	Fig. 195. SC04~09(1/40) .....	202
Fig. 162. SC38(1/60) .....	169	Fig. 196. SX09(1/40) .....	203
Fig. 163. SC40(1/60) .....	170	Fig. 197. 遺構出土遺物 1 (1/4) .....	204
		Fig. 198. 遺構出土遺物 2 (1/2) .....	205

Fig. 199.	遺構出土遺物 3 (1/2) ……………	206	Fig. 212.	九州島内の遺跡群分布概略図 (吉留1983を改変)……………	220
Fig. 200.	遺構出土遺物 4 (1/2) ……………	207	Fig. 213.	溜井の貯・排水システム略図 (2/3,000) ……………	224
Fig. 201.	L地区全体図(1/400) ……………	209	Fig. 214.	J地区からみた360°の眺望 ……	225
Fig. 202.	永浦3号墳墳丘図(1/100) ……	210	Fig. 215.	北部九州における弥生時代中期 の高地性集落と連絡網の推定 ……	225
Fig. 203.	永浦3号墳墳丘上層断面図 (1/100) ……………	211	Fig. 216.	三苫永浦遺跡の珪藻化石 (10 $\mu$ m) ……………	230
Fig. 204.	永浦3号墳主体部(1/40)…………	212	Fig. 217.	三苫永浦1号墳出土弓金具実測 図(1/1) ……………	237
Fig. 205.	永浦3号墳閉塞状況(1/40)…………	213	Fig. 218.	福岡市内出土弓金具実測図1 (1/1) ……………	238
Fig. 206.	永浦3号墳石室内遺物出土状況 (1/40)……………	213	Fig. 219.	福岡市内出土弓金具実測図2 (1/1) ……………	239
Fig. 207.	永浦3号墳出土遺物(1/4・2/3) ……	214	Fig. 220.	福岡県内弓金具出土古墳位置図 (番号は一覧表に対応)……………	240
Fig. 208.	周辺地形と旧石器分布図…………	215			
Fig. 209.	周辺旧石器遺跡(1/150,000) ……	217			
Fig. 210.	周辺地域出土及び採集旧石器 実測図1 (2/3・1/1) ……………	218			
Fig. 211.	周辺地域出土及び採集旧石器 実測図2 (1/1) ……………	219			

## 図 版 目 次

### PL. 1

1. 三苦永浦遺跡全景 (西から)
2. 試掘トレンチ T-115 (西から)
3. 試掘トレンチ T-95 (南から)
4. 試掘トレンチ T-2 (南から)
5. 試掘トレンチ T-50 (北から)
6. 試掘トレンチ T-51 (東から)

### PL. 2

1. 三苦永浦周辺航空写真 (1947年)
2. 三苦永浦周辺航空写真 (1989年)

### PL. 3

1. A地区全景 (北から)
2. A地区遠景 (南東から)
3. SC05遺物出土状態 (北東から)
4. SC05遺物出土状態 (南東から)
5. SC05完掘状態 (北西から)
6. SK12遺物出土状況 (東から)
7. SC03 (東から)
8. 旧石器調査区 (SU07) (北から)

### PL. 4

A地区出土遺物

### PL. 5

1. D地区近景 (南から)
2. D地区遠景 (西から)
3. D地区遠景 (南から)
4. D地区作業風景 (南から)
5. D地区全景 (北から)
6. D地区全景 (東から)
7. SC05 (東から)
8. SC06 (東から)

### PL. 6

1. D地区 SC07 (北から)
2. SB01 (北から)
3. SB02 (北東から)
4. SB09 (北から)
5. SB01土層断面 (南東から)
6. SB11 (西から)

### PL. 7

1. D地区 SK08 (西から)
2. SK08完掘状態 (南東から)
3. SK08遺物出土状態 (南から)
4. SK08土層断面 (南から)

### PL. 8

D地区出土遺物

### PL. 9

1. E地区1号墳墳丘遠景 (西から)
2. 1号墳墳丘 (西から)
3. E地区調査前状況 (西から)
4. 1号墳調査前状況 (南から)
5. 1号墳調査前状況 (西から)
6. 1号墳墳丘 (西から)
7. 1号墳墳丘 (西から)
8. 1号墳墳丘土層 (北から)

### PL.10

1. E地区1号墳調査風景 (南から)
2. 1号墳石室 (南から)
3. 1号墳石室 (東から)
4. 1号墳石室 (南から)
5. 1号墳石室 (東から)
6. 1号墳石室全景 (南から)
7. 1号墳掘方 (南から)
8. 1号墳掘方 (西から)

### PL.11

1. E地区1号墳周溝土層断面 (北から)
2. 1号墳周溝遺物出土状況 (東から)
3. 1号墳周溝遺物出土状況 (東から)
4. SB05 (西から)
5. E・F地区全景 (南から)
6. E地区全景 (上から)

### PL.12

E地区出土遺物 (含F地区遺物)

### PL.13

1. F地区調査前風景 (南から)
2. 2号墳周溝 (西から)

3. 2号墳墓坑状態 (南から)
4. 2号墳石材抜跡 (西から)
5. 2号墳敷石 (西から)
6. 2号墳敷石 (南から)
7. 2号墳石室掘方 (西から)
8. 2号墳石室掘方 (南から)

PL.14

1. F地区全景 (上から)
2. D～F地区全景 (北から)
3. F地区古墳石材 (北から)
4. 2号墳奥壁石材 (東から)
5. D～F地区全景 (西から)

PL.15

1. H地区周辺風景 (新宮方面を望む)
2. H地区全景 (南から)
3. H地区全景 (西から)
4. H地区遠景 (東から)
5. H地区全景 (南から)

PL.16

1. H地区 SX00 (南から)
2. SX00 (南から)
3. SC01・05 (北から)
4. SC02・03 (東から)
5. SC01・05完掘状態 (西から)
6. SC01・05完掘状態 (西から)
7. SC02完掘状態 (西から)
8. SC04完掘状態 (南から)

PL.17

1. H地区 SC03 (東から)
2. SC03完掘状態 (西から)
3. SC04完掘状態 (南から)
4. SC07 (東から)
5. SC07・SD08完掘状態 (北から)
6. SD08完掘状態 (東から)
7. SD08遺物出土状態 (南から)
8. SX09 (北から)

PL.18

1. H地区 SX10完掘状態 (南から)
2. SX10全景 (上から)
3. SX10全景 (南から)

4. SX10a～h区 (南から)
5. SX11土層断面 (北から)

PL.19

1. H地区 SX10AA'ベルト土層断面 (北西から)
2. SX10BB'ベルト土層断面 (南から)
3. SX10CC'ベルト土層断面 (南西から)
4. SX10'ベルト土層断面 (東から)
5. SX10BB'ベルト東側土層断面 (南から)
6. SX10BB'ベルト中央断面 (南から)
7. SX10CC'ベルト土層断面 (南から)
8. SX10EE'ベルト土層断面 (北から)

PL.20

1. H地区 SD11土層断面 (北東から)
2. SD11土層断面 (北から)
3. SD12土層断面及び完掘状態 (北から)
4. SD12暗渠石組 (西から)
5. SX13 (北から)
6. SX13 (西から)

PL.21

1. H地区 SX10作業風景 (南から)
2. SX20冠水状態 (南西から)
3. SX10冠水状態 (南西から)
4. SX10測量風景 (南東から)
5. SX10C区遺物出土状態 (北東から)
6. SX10C区遺物出土状態 (北東から)
7. SX10遺物出土状態 (西から)
8. SX10紡錘車出土状態

PL.22

1. H地区 SX20 (上から)
2. SX30 (上から)
3. SX20 (北から)
4. SX20・30 (北から)
5. SX30土層断面 (北から)
6. SX30暗渠出土状態 (西から)
7. SX30暗渠出土状態 (西から)
8. SX30暗渠出土状態 (南から)

PL.23

1. H地区 SX50～70 (上から)
2. SD53 (西から)

3. SX50~60 (上から)
4. SX50BB'ベルト土層断面 (西から)
5. SX50CC'ベルト土層断面 (北から)
6. SD54・55 (北から)
7. SD55 (北から)
8. SD54 (北から)

PL.24

1. H地区 SX50DD'ベルト土層断面(北から)
2. SX30土層断面 (南から)
3. SD53石組 (北西から)
4. SX50水田跡欄列出土状態 (北から)
5. SX30完掘状態 (南西から)
6. SX80石戈出土状態

PL.25

1. H地区 SX40 (上から)
2. SD60 (東から)
3. SX90 (北から)
4. SD60CC'ベルト土層断面 (東から)
5. SX90土層断面 (北から)
6. SX91 (南から)
7. SX91鉄斧出土状態

PL.26

H地区出土遺物 1

PL.27

H地区出土遺物 2

PL.28

1. I地区 SC01~17全景 (南から)
2. I地区全景 (北から)
3. I地区南側全景 (西から)
4. SC01~17全景 (南から)
5. I地区土層断面 (南から)
6. SC04土層断面 (北から)
7. SC02 (西から)
8. SC18 (東から)

PL.29

1. I地区 SC14 (南から)
2. SC12炭化物出土状態 (東から)
3. SC17 (北から)
4. SC17 (北から)
5. SC33遺物出土状態 (東から)

6. SC33 (北から)
7. SC01ベルト (西から)
8. SC01遺物出土状態 (西から)

PL.30

1. I地区 SC01 (西から)
2. SC07 (西から)
3. SC13遺物出土状態 (北から)
4. SC13遺物出土状態 (東から)
5. SK10遺物出土状態 (東から)
6. SK08土層断面 (西から)
7. SC06 (西から)
8. SK11 (東から)

PL.31

1. I地区 SC42・43・45・46 (西から)
2. SC37~40 (西から)
3. SC45 (北から)
4. SC45 (西から)
5. SC43 (北から)
6. SC42土層 (北から)
7. SC61 (北から)
8. SC38 (東から)

PL.32

1. I地区 SC62 (南から)
2. SC63 (西から)
3. SC32遺物出土状態 (南から)
4. SC32 (北から)
5. SC37ベルト (北から)
6. SC37 (東から)

PL.33

I地区出土遺物

PL.34

三苜水浦遺跡出土鉄器

PL.35

1. J地区周辺風景 (志賀島方面を望む)
2. J地区遠景 (東から)
3. J地区全景 (北から)
4. J地区全景 (上から)
5. SC04調査風景 (南から)
6. SC04 (南から)
7. SC04中央土層断面 (東から)

8. SC04中央土壌 (南から)

PL.36

1. J地区SC07 (東から)
2. SC07 (東から)
3. SK05土層断面 (南から)
4. SK06遺物出土状態 (南から)
5. J地区包含層 (東から)
6. SC04 (南から)

PL.37

1. K地区a区全景 (南西から)
2. SC01作業風景 (北から)
3. SC01炭化物検出状態 (東から)
4. SC01完掘状態 (東から)
5. SC01完掘状態 (東から)
6. SC01完掘状態 (西から)
7. SC01中央土壌土層断面 (北西から)
8. SC01中央土壌完掘状態 (東から)

PL.38

1. K地区b区全景 (北西から)
2. SC02完掘状態 (西から)
3. SC02土層断面 (北東から)
4. b区AA'ベルト土層断面 (東から)
5. b区BB'ベルト土層 (北西から)
6. SC08完掘状態 (西から)
7. SC07、09完掘状態 (北東から)

PL.39

1. L地区3号墳調査前状況 (西から)
2. 3号墳調査前状況 (西から)
3. L地区周辺風景 (博多湾方向を見る)
4. L地区全景 (上から)
5. 3号墳 (南から)

6. 3号墳 (上から)

7. 3号墳全景 (北から)

8. 3号墳北側周溝土層 (北東から)

PL.40

1. L地区3号墳裏込め (東から)
2. 3号墳石室裏込め (南から)
3. 3号墳石室上半部 (北から)
4. 3号墳閉塞施設 (東から)
5. 3号墳石室出土状態 (東から)
6. 3号墳敷石検出状態 (北から)
7. 3号墳敷石検出状態 (北から)
8. 3号墳石室全景 (南から)

PL.41

1. L地区3号墳遺物出土状態 (東から)
2. 3号墳石室内遺物出土状態 (北から)
3. 3号墳敷石奥壁 (南から)
4. 3号墳敷石 (東から)
5. 3号墳石室西側石組及び床石出土状態 (東から)
6. 3号墳石室東側石組及び床石出土状態 (西から)
7. 3号墳石室西側石組 (北東から)
8. 3号墳羨道石組 (東から)

PL.42

1. L地区3号墳羨道 (北から)
2. 3号墳石室敷石除去状態 (南から)
3. SK02 (南から)
4. K地区SC01出土石斧
5. 3号墳出土須恵器高杯
6. 3号墳出土須恵器杯身
7. 3号墳出土須恵器杯蓋

# 表 目 次

Tab. 1. 確認された遺跡と概要 .....	18
Tab. 2. 周辺地域旧石器時代遺跡地名表 .....	216
Tab. 3. 珪藻化石産出表 .....	229
Tab. 4. 三苦永浦1号墳出土弓金具 計測値(単位: mm) .....	237
Tab. 5. 福岡市内出土弓金具 計測値(単位: mm) .....	240
Tab. 6. 福岡県弓金具出土地名表 .....	241
Tab. 7. A地区 土器 .....	243
Tab. 8. A地区 石器 .....	243
Tab. 9. D地区 土器 .....	243
Tab. 10. D地区 石器 .....	243
Tab. 11. D地区 鉄器 .....	243
Tab. 12. E地区 土器 .....	243
Tab. 13. E地区 石器 .....	244
Tab. 14. E地区 鉄器 .....	244
Tab. 15. E地区 玉類 .....	244
Tab. 16. F地区 土器 .....	244
Tab. 17. F地区 玉類 .....	244
Tab. 18. F地区 鉄器 .....	244
Tab. 19. H地区 土器 .....	244
Tab. 20. H地区 石器 .....	249
Tab. 21. H地区 鉄器 .....	250
Tab. 22. I地区 土器 .....	250
Tab. 23. I地区 石器 .....	251
Tab. 24. I地区 玉類 .....	252
Tab. 25. I地区 鉄器 .....	252
Tab. 26. J地区 土器 .....	252
Tab. 27. J地区 石器 .....	252
Tab. 28. K地区 土器 .....	252
Tab. 29. K地区 石器 .....	252
Tab. 30. L地区 土器 .....	252
Tab. 31. L地区 鉄器 .....	252
Tab. 32. 試掘 土器 .....	252
Tab. 33. 試掘 石器 .....	252
Tab. 34. 周辺表採 土器 .....	252

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

1993(平成5)年8月9日に福岡市三苫永浦土地区画整理組合(理事長塙登)(以下、甲とする)から、福岡市東区大字三苫字平原の全部並びに三苫五丁目、美和台新町及び美和台五丁目の一部における区画整理事業に関する埋蔵文化財事前審査願申請(受付番号5-2-185)がなされた。総事業面積は147,468㎡を測る大規模なものである。この事業については既に前年より打診を受けていたものであった。

福岡市教育委員会(以下、乙とする)では申請地が永浦遺跡群の範囲に含まれていることから、事前の埋蔵文化財の確認調査の必要を認め、同年8月20日に現地において予定地の踏査と、関係者との協議を実施した。その結果、工事対象地の北から東側は山林、雑木林であり、現状では踏査、試掘調査が困難であった。南から西側にかけての永浦池北側斜面は畑地であり、土器片などの散布が認められた。ここを第一次の試掘調査対象地とした。

第一次の試掘調査は1993年9月16日に実施し、約8,000㎡の範囲に12本のトレンチを設定した(Fig.11)。その結果、3カ所のトレンチで遺構、遺物を確認し、古墳時代の集落跡の存在が予測された(D地区)。遺跡の範囲はおおよそ2,000㎡である。この結果を受けて、甲、乙は文化財保護についての協議をおこなった。しかし、造成工事の計画上、遺跡の保存は困難であり、発掘調査して記録にとどめることとなった。甲乙は次の点を確認した。

1) 埋蔵文化財の存在が確認されたことから、文化財保護法に基づく書類提出と、建築工事に関する詳細な図面を添えた埋蔵文化財事前調査願いを提出されること。

2) 造成予定地内の遺跡は工事内容から工事に関わる部分の破壊は避けられず、発掘調査を行い記録に残す必要があると判断された。発掘調査の期間、予算については今後協議を進める。

その後、乙は発掘調査の対象面積、期間、予算の策定をおこない、甲に報告した。両者は数回の協議を重ね、1994年2月14日に発掘調査の受託契約を締結した。発掘調査は同年2月から3月の予定で開始された。

1994年からは、事業地内の未踏査部分の山林等の伐倒が開始された。踏査をおこなった結果、調査地区の隣接地で古墳墳丘や石室材の散乱が認められ、また遺物の散布が数カ所で確認された。このことを受け、残りの未踏査地区の試掘を伐採が終わった部分から開始することとなった。これを第二次試掘とし、1994年2月から3月までに119本のトレンチを設け、実施した。

その結果、12地区で遺構、遺物を確認した(A～C、E～L地区)。遺跡の範囲はおおよそ30,000㎡である。この結果を受けて、甲、乙は文化財保護についての協議をおこなった。

協議の結果、盛り土による保存が可能なB地区や、遺構の遺存状態の著しく悪いC、G地区を除く9地区については、造成工事の計画上、遺跡の保存は困難であり、発掘調査して記録にとどめることとなった。

甲乙は協議を重ね、調査日程などについて打ち合わせた。1994年3月に9地区についての発掘調査の受託契約を締結した。発掘調査は同年4月から1995年3月の予定で開始された。整理作業については、前契約の変更とあわせて1995年4月～1996年3月に実施するものとした。

## 2. 調査の経過

発掘調査は1994年2月15日から1995年3月31日の予定で開始した。9地区の調査地点は区画整理予定地内に分散、独立しており、見通すことのできない地区が多い。したがって一人の調査員で同時に発掘作業を進めることは、安全管理や調査精度上、不可能であった。

したがって、調査員の員数に対応した、同数の地区を調査することとした。各地区ごとの調査期間はFig.1の工程図に示した。

調査はまず重機によって、表土、攪乱部分の除去をおこない、次に人力により、遺構の検出、調査を進めた。対象地は畑地造成など数回の削平によって、遺構の破壊や、多数の攪乱がみられ、調査は困難を極めた。調査後は遺構の写真撮影、実測、遺物の取り上げなどをおこなった。調査は、1995年3月31日に予定通り全作業を終了した。

### 〈調査日誌〉

- 1994.02.15(火) 現場事務所への発掘機材搬入。D地区の重機による表土剥ぎ、降突のため作業難航。  
02.18(木) D地区人力による攪乱除去作業。杭打作業。  
02.22(月) 遺構検出。住居跡、土壇、掘立柱建物などの確認。  
02.26(金) 遺構精査開始。  
02.29(金) D地区調査範囲平板測量開始。  
03.01(月) 遺構実測作業開始。写真撮影。  
03.08(月) 掘立柱建物実測。  
03.23(火) 包含層調査。  
03.31(水) D地区調査終了。  
04.01(木) E地区(1号墳)の表土剥ぎ開始。  
04.04(日) 1号墳墓頂調査開始。  
04.10(日) 午前-A地区試掘トレンチ重機掘削。午後-1号墳後円部東側斜面盛土剥ぎ。  
04.14(木) 1号墳前方部盛土剥ぎ、墓壇裏込め上除去。  
04.16(土) 1号墳後円部西側斜面盛土剥ぎ・遺構検出。  
04.18(日) F地区(2号墳)重機による表土剥ぎ、掘削。  
04.19(火) A地区平面精査(遺構検出)・落の掘り下げ。1号墳北側墳丘斜面盛土剥ぎ。三古永福地区区画整理事業起上式。  
04.20(水) 2号墳下にユニットハウス設置。  
04.21(木) 午前中ユニットハウスへ引っ越し。  
04.26(火) 1号墳墳丘、平板測量(S=1/100)開始。  
04.27(水) 2号墳墳頂部盛土剥ぎ。  
05.02(月) 1号墳墳丘コンタ図作成。  
05.07(日) 1号墳墳丘ベルト断面図・写真撮影。2号墳南・北斜面盛土剥ぎ。  
05.09(日) 1号墳墳丘ベルト付近、墓壇内及び周辺精査の後写真撮影・墳丘ベルト外し。  
2号墳攪乱掘り。A地点グリット杭打ち・重機による掘削。  
05.12(木) 2号墳墳丘平板測量・墓壇掘り下げ。A地区平面精査(遺構検出作業)。  
05.16(月) 2号墳墳丘コンタ図。A地区溝掘り下げ、遺構3cm掘り下げ。  
05.20(金) A地区攪乱掘り・遺構平面図(S=1/100)。1号墳ベルト断面図。2号墳墓頂平面図作成(石室石材抜跡 S=1/20)。  
05.21(土) A地区コンタ図・調査風景写真撮影。1・2号墳石室平面図。  
05.23(月) A地区グリット杭打ち。2号墳床石平面図。  
05.24(火) 午前-航空写真撮影のため全面精査。午後-A地区コンタ図、攪乱掘り。2号墳石室床石平面図。  
05.25(水) A・E・F地区の空中写真撮影。  
05.27(金) A地区堅穴住居跡精査後写真撮影。E地区墳丘盛土除去、地山形成面検出。F地区墓壇内裏込め上除去。  
05.28(土) A地区堅穴住居跡掘り下げ。F地区墓壇平面掘り方図面、礎床土層写真撮影。  
05.30(月) E地区東側墳丘斜面盛土剥ぎ。墳壇及びその周辺写真撮影のため精査。F地区主体部精査後写真撮影。調査終了。  
06.01(火) E地区調査終了、ユニットハウス・トイレ移動。L地区調査開始。杭打作業。  
06.06(日) J地区重機による表土掘削開始。  
06.07(月) L地区重機による表土掘削開始。主体部ベルト(十字)設定。  
06.14(火) H地区重機による表土掘削開始(H1区)。  
06.17(金) H2区重機による表土掘削開始。  
06.28(火) A地区午前高所作業車で写真撮影。午後専修大学亀井明徳氏見学。  
06.30(木) A地区調査終了。  
07.06(水) 調査事務所J地区に近い新事務所へ引っ越し。  
07.08(金) 大した雨量もなく、梅雨が明け。J、L地区へ散水用の水運搬を始める。  
07.11(月) 九州大学川中良之氏、澤口孝司氏見学。  
07.12(火) 福岡大学小田富士雄氏見学。

- 07.30日 H・J・L区空中写真撮影。  
 08.12日 J地区調査終了。  
 08.16日 H5区人力による表土掘削開始。  
 08.22日 H地区内各所にある大型遺構を土層観察などから「窠井」遺構と判断。  
 08.26日 L地区調査終了。  
 09.09日 西日本新聞夕刊に本調査に関する記事掲載される。  
 09.10日 朝刊各紙に調査記事掲載される。夕方のTVにも放映される。  
 09.14日 香川県埋蔵文化財調査センター大久保氏見学。  
 09.19日 16日の大雨の為H5区冠水、排水、土砂除去作業。  
 09.21日 H4区調査開始。  
 10.10日 最大の「窠井」SX10底部から石組遺構検出、堆積状態から「暗渠」の可能性高い。  
 10.31日 H1区調査終了。  
 11.07日 志免町教育委員会徳永氏見学。  
 11.10日 K地区重機掘削開始。  
 11.15日 前日の降雨により冠水、各遺構午前中排水作業。  
 11.28日 徳島文理大学石野博信氏、宗像市教育委員会原氏、徳島大学北条芳隆氏ら見学。  
 12.01日 K地区写真撮影、調査終了。  
 12.11日 九州史学会（九州大学）にて吉留が三苫永浦遺跡群の調査成果を中間報告する。  
 12.12日 雨の為15:00で作業中止。H地区各遺構ポンプで排水作業。  
 12.13日 午前中排水作業。「暗渠」に関して各新聞社・TV局取材。  
 12.20日 「窠井」内精査作業。各遺構写真撮影。  
 12.26日 午前-H地区全面清掃、空中写真撮影。  
 12.29日 H地区調査終了。平成6年の作業終了。  
 1995.01.05日 平成7年の作業開始。  
 01.09日 I地区調査開始。午前中H地区のユニットハウス・トイレをI地区へ運ぶ。午後よりI地区を重機により表土掘削開始。  
 01.16日 人力で重機掘り残し分（攪乱）掘削。杭打ち作業。  
 01.20日 遺構の遺存部分は大規模な地滑り（幅20m以上）により、落ち込んだ部分と判明。  
 01.23日 雨の為作業中止、排水作業。  
 01.24日 I地区拡張予定区（西側）を大型重機（スクレイパー）にて除去、作業早い。  
 02.01日 降雪、積雪5cmぐらゐ。作業中止。  
 02.10日 本日にて重機による拡張区の掘削は終了。  
 02.20日 午後雨で作業一時中断。  
 02.24日 北九州文化財事業団の中村修身氏出土「石戈」調査、九州大学の宮本一夫氏現場見学。  
 02.28日 雨の為作業10:30で中断、排水作業。  
 03.06日 連日の雨、雪により現場水びなし。排水作業継続。  
 03.09日 雨の為作業15:30までで作業中断。  
 03.15日 午前中高所作業車でI地区の写真撮影。  
 03.20日 遺構の完掘作業進める。  
 03.21日 現場における作業は終了。  
 03.22日 出土遺物、図面整理開始。引越し作業開始。  
 03.23日 1、2号墳石室内墓糞埋土水洗作業、玉類発見。  
 1995.03.31日 三苫永浦遺跡群調査終了。

地区																			
A		4/11	—————																6/30
D		2/15	—————	3/31															
E			4/1	—————															5/31
F			4/1	—————															5/30
H																			6/14
I																			12/29
J																			1/9
K																			3/31
L																			6/6
																			8/12
																			11/10
																			11/30
																			6/1
																			8/26
		94/2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	95/1	2	3	4	月		

Fig.1 三苫永浦遺跡群発掘調査工程

### 3. 調査組織

本遺跡の調査にあたって以下の組織を準備した。また、調査、整理作業過程において各方面の協力をお願いした。

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第2係

教育長 尾花 剛 部長 後藤 直

課長 折尾 学 第2係長 山崎純男

調査庶務：中山昭則、内野保基、吉田麻由美、西田結香、入江幸男

事前審査、試掘調査：横山邦雄、山口譲治、荒牧宏行、菅波正人

調査担当：吉留秀敏、加藤隆也

調査補助：井英明（現古賀町教育委員会）、杉内郷（現筑穂町教育委員会）、立石真二、八丁由香（専属）

内田直美、田之上裕子（大谷女子大学）、石井博司、石川健、井上蘭子（九州大学院生）、藤木聡（熊本大学）、坂田規子（西南学院大学）、荒井吉正、奈良康正（専修大学院生）、赤松伸夫、秋山幸代、大野哲二、鎌原恒、河村敬子、須賀淳一、茅野嘉雄、原ひろみ、本田祐二、丸尾文彦、吉野純子（専修大学）、西谷郁（天理大学）、釜瀬明宏（福岡大学院生）、井田まゆみ、甲斐孝司、佐々木りえ、中澤哲、平古場豪（福岡大学）、石橋忠治、井上義也、林潤也、水口由香（別府大学）、北島大輔（明治大学）

調査作業：池聖子、一志久美子、伊東幾代、牛島幸子、内田朝子、大音輝子、小川博、小野千佳、鹿毛賢次郎、角谷知久、金子三枝、川上すぎえ、北原伊都子、木村文子、吉良仁美、草場恵子、黒岩晴美、黒木佐千子、小池温子、小石佳子、河面英子、小路丸嘉人、後藤美智子、坂中一子、指原始子、佐藤初美、塩屋友子、志賀隆子、島本初代、清水浩子、菅野シゲ、杉野七郎、園田豊、高尾孝輔、高尾美之、高澤忍、高田勲、高津千尋、田崎典子、田代春雄、立花和子、田原照子、長拓哉、長ますみ、堤正子、鶴岡五百子、鶴田久美子、寺崎千佳子、寺園恵美子、徳永志奈子、富田輝子、豊原早苗、中越智子、中込陽子、仲田静代、中野満代、中野美穂子、中野めぐみ、中野裕子、中間千衣子、中村幸子、永田優子、永田律子、成富由美子、西幸子、野村健一郎、羽迫邦将、花田勇、花田則子、平本恵子、平山かおる、福田美絵子、藤田ひろみ、藤野雅基、瀨上鶴美、益田麻実子、増田ゆかり、松岡芳枝、松崎幸子、松下邦江、三苦裕子、三宅紀子、村崎祐子、村田トモヨ、村本義夫、森敦子、安田光代、安元尚子、柳瀬重紀、柳瀬伸、山下真由美、山本順子、吉村智子、米村千夏、脇坂きゆり、脇田栄

整理作業：尾崎君枝、甲斐田嘉子、木村良子、丸井節子、宮坂環、森部順子

調査・整理協力：本田光子、下村 智、宮井善朗、菅波正人、池田祐司、長屋 伸、榎本義嗣、屋山 洋、久住猛雄、小畑弘己、奈良康正、松森暢邦、立石真二

調査、整理にあたって下記の方々・機関のご教示、ご指導やご援助を賜った。記して謝意を表したい。（順不順、敬称略）

小田富士雄、西谷 正、森浩一、亀井明徳、高倉洋彰、田中良之、宮本一夫、武木純一、溝口孝司、下條信行、村上恭通、田崎博之、新谷武夫、村上久和、西田大輔、森下靖士、城戸康利、山村信榮、池ノ上宏、安武千里、黒木正男、佐藤亜聖、福本俊美、杉尾彰一、岩崎三男、三苦永浦地区区画整理組合、株式会社奥村組、佐藤工業株式会社

## 第2章 地理的歴史的環境

### 1、三苫永浦遺跡群の位置と立地条件

九州北部の玄海灘、響灘沿岸には、複数の小平野が分布している。これらの平野には、例外なく扇状地、河川、砂丘、後背湿地が形成され、類似した地形環境を示している。平野は西から松浦、唐津、糸島、早良、福岡、新宮～勝浦、芦屋などがある。こうした小平野ごとに人類活動の所産である遺跡が多数残されているが、この地域ではとくに弥生時代開始以降から著しい遺跡の増加が認められる。これは日本列島における初期農耕社会の形成が、この地域を舞台として展開したことを物語っている。平野のうち比較的広い唐津、糸島、福岡の各平野は、魏志倭人伝にみられる「末羅国」「伊都国」「奴国」に対応すると考えられている。この地域で形成された弥生時代の稲作文化は「遠賀川文化」と呼ばれ、やがて全国へ拡大していくのである。

三苫永浦遺跡群の所在する福岡市東区大字三苫は、福岡市の北東端に位置し、粕屋郡新宮町に接している。市制定以前は粕屋郡和白村大字三苫であった。

遺跡の北側前面に広がる新宮～勝浦平野は、背後を立花山(367m)、三郡山境に囲まれ、西に玄海



Fig.2 三苫永浦遺跡の位置と周辺地形図 (1/150,000)

灘を面する開放形の沖積平野である。平野を貫流する川は概して小規模であり、南から湊川、花鶴川、西郷川と今川がある。三苫永浦遺跡は平野の南端に位置し、湊川左岸に所在している。

この一帯は古第三紀層の低平な丘陵地帯であり、最高所は40~60mを測る。丘陵は樹枝状に開析され、狭長な谷が丘陵奥まで進入している。また、西側の玄海灘に面する地域は、海にあらわれ、高さ10~20mの侵食崖となっている。三苫永浦遺跡群は立花山西麓から連なる低丘陵の先端付近に立地する。遺跡のある丘陵から見おろすとすぐ北側には沖積地、湊川がある。さらに湊川を隔てて新宮浜の海浜に沿った扇形に広がる砂丘を望む。これは海の中道砂層と呼ばれる完新世砂丘であり、約1kmの幅に複数の砂丘列を認めることができる。下山正一氏の研究によると、この湊川流域では完新世の海成堆積物はこの砂丘列を超えて丘陵の裾部付近まで認められる。いわゆる「縄文海進」時には現在の河口から数kmに及ぶ湾入があったと予測されている。ボーリングの成果によると、湊川流域の縄文海進の最深部は標高約2.5mであり、当時の海岸線は現在の夜白三代地区の西側まで、三苫では永浦丘陵の裾部付近まで及んでいたと推定されている。

なお、湊川の河口部は新宮浜砂丘と古第三紀層丘陵の接点となり、岩礁があらわれている。ここは水深がやや深く、また河口が隣接していることもあって、新宮浜では数少ない自然の良港となっている。「湊」の地名も近世以前に通る港集落の成立と関連していると見られる。

調査地点はこうした湊川の河口部を見おろす丘陵一帯であり、標高10~40mの範囲にある。丘陵尾根線は分水嶺であり、尾根の南側は博多湾に注ぐ和白川の流域となり、北側は湊川の流域である。つまり、調査地区の内A、D、K、L地区が和白川流域となり、H、I、J地区が湊川流域となる。E、F地区は分水嶺である尾根線上に立地している。

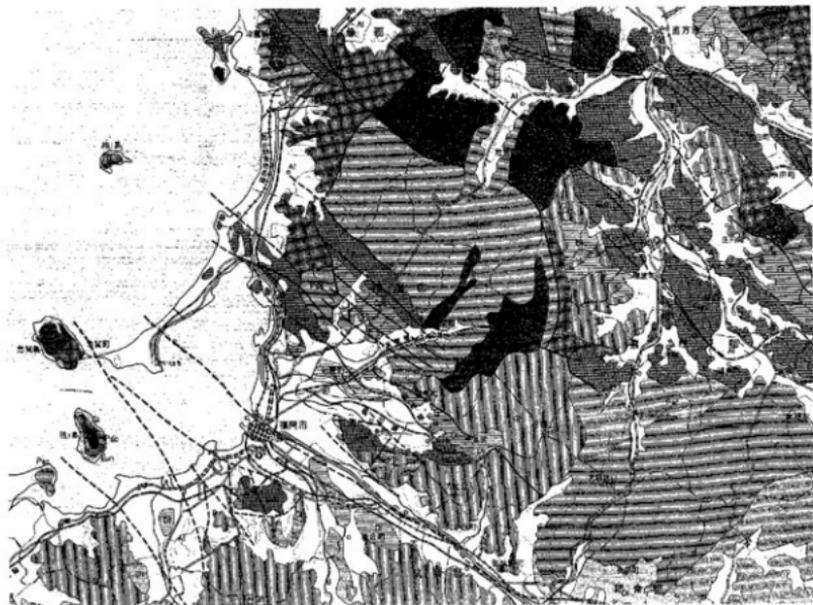


Fig.3 三苫永浦遺跡周辺の地質図 (1/10,000)

## 2. 周辺遺跡の調査研究と成果

三苦永浦遺跡群の周辺における考古学的調査は決して多くない。遺跡の所在する三苦地区は、現在行政的に福岡市に含まれるものの、市制以前は地理的にも湊川流域である粕屋郡側に属する様相が強い。ここでは福岡市と粕屋郡新宮町側の両方から調査研究の状況を代表的遺跡を概観したい。

福岡市では、1970年の福岡市教育委員会による和白地区区画整理事業にともなうの発掘調査が緒切となる（Fig.4・5）。ここでは古墳、遺跡などが調査された。また、1989年には住宅建設にともない三苦塚古墳が調査された。1990年には集合住宅建設にともない三苦遺跡群1次調査が、1994～95年には学校建設にともない三苦遺跡群2、3次調査が行われている。

新宮町では、1950～51年に森貞次郎氏ら日本考古学協会により発掘調査された夜白遺跡が皮切りである。その後、福岡県教育委員会、新宮町により湊川の流域に分布する遺跡の調査が行われている。このうち夜白三代遺跡群は周辺の区画整理事業や、住宅、道路建設などにより継続的な調査が行われ、大きな成果を挙げている。また、三苦永浦遺跡群に近く、連続した丘陵地帯である大字下府地区でも調査が行われた。1987年に人丸古墳、1988年に下府遺跡が調査された。これらはいずれも住宅建設にともなうものであった。



1. 三苦永浦遺跡群 2. 豊古墳群 3. 三苦針ヶ浦古墳 4. 三苦京塚古墳群 5. 二苦遺跡群 6. 下府遺跡(古墳群) 7. 下和白遺跡群 8. 飛山古墳群 9. 人丸古墳群 10. 塚原古墳群 11. 中和白古墳 12. 梅ヶ崎遺跡 13. 前ノ原遺跡(古墳群) 14. 香住ヶ丘古墳 15. 三苦熊山遺跡 16. 奈多砂丘A遺跡 17. 上和白古墳 18. 鎌の塚古墳 19. 宮の前古墳群 20. 志見古墳群A・B群 21. 志見古墳群C群 22. 高見原遺跡 23. 上和白遺跡 24. 穴花塚遺跡 25. 原上古墳 26. 笹原1号墳 27. 平原古墳 28. 春上古墳 29. 宮崎古墳 30. 瀬戸の坊古墳 31. 三代野ノ遺跡(古墳群) 32. 夜白・三代遺跡群 33. 自家遺跡 34. 高坂古墳 35. 大森古墳群 36. 神木遺跡 37. 岩山古墳 38. 新掛古墳 39. 下村古墳 40. 大形古墳 41. 上府遺跡 42. 香ノ木古墳群 43. 瓜尾ヶ橋ヶ乃古墳群 44. 道山古墳群 45. 川原塚山遺跡(古墳群) 46. 下府古墳 47. 巨口A1号墳 48. 高木遺跡 49. 大田町遺跡 50. 三田浦古墳群 51. 小牧古墳群 52. 浦口古墳群 53. 唐ヶ坪古墳群 54. 日焼古墳群 55. 鹿部ヶ東町遺跡群 56. 播磨古墳群 57. 極楽古墳

Fig.4 三苦永浦遺跡の周辺遺跡分布図 (1/10,000)

## 1. 和白遺跡群（福岡市東区大字下和白）

和白遺跡群は上和白地区と下和白地区の両地区の開発予定地内遺跡の総称である。このうち下和白地区が三苦永浦遺跡の南側に隣接している。下和白地区では旧石器時代、縄文時代の遺物、弥生時代溝や包含層、古墳群（飛山古墳群）などが調査されている。縄文時代遺物は各所から少量採集されている。弥生時代遺構と包含層は、Ⅲ区とされた博多湾側から開析された谷の奥部で発見されている。Ⅲ区は三苦永浦遺跡Ⅰ地区の南約200mの位置にあたる。谷の西向き斜面に並行する溝1条が10m以上伸びているのが確認された（b区）。溝は幅約1.75m、深さ0.7mを測り、黒色土が充満していた。溝内と斜面下方の谷部包含層（a、c区）からおもに弥生時代中期の遺物が出土した。土器類は跳上げ口縁甕を含む須玖Ⅱ式を主体としている。

飛山古墳群は、標高57mの丘陵頂部に3基の石室が隣接している。何れも直径10m前後の小規模の円墳と推定されている。1号墳は整穴系横口式石室であり、石室内から鉄刀、剣、刀子や玉類の装身具が副葬されていた。また、滑石製の有孔円板や白玉が多量に供献されていた。墳丘から須恵器甕片が出土しているのみであり、時期の比定は困難であるが、おおよそTK208からMT15に位置付けられ

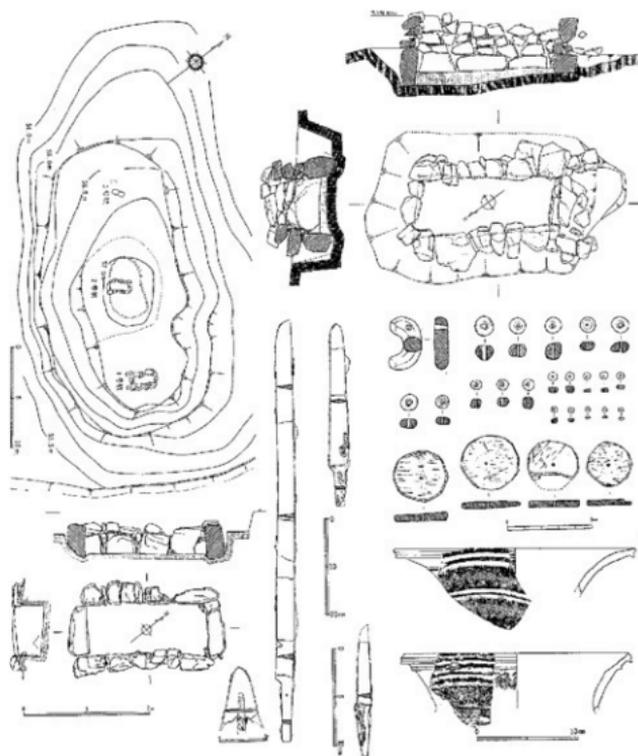


Fig.5 飛山古墳群と出土遺物

飯倉幸より転載。一部改変

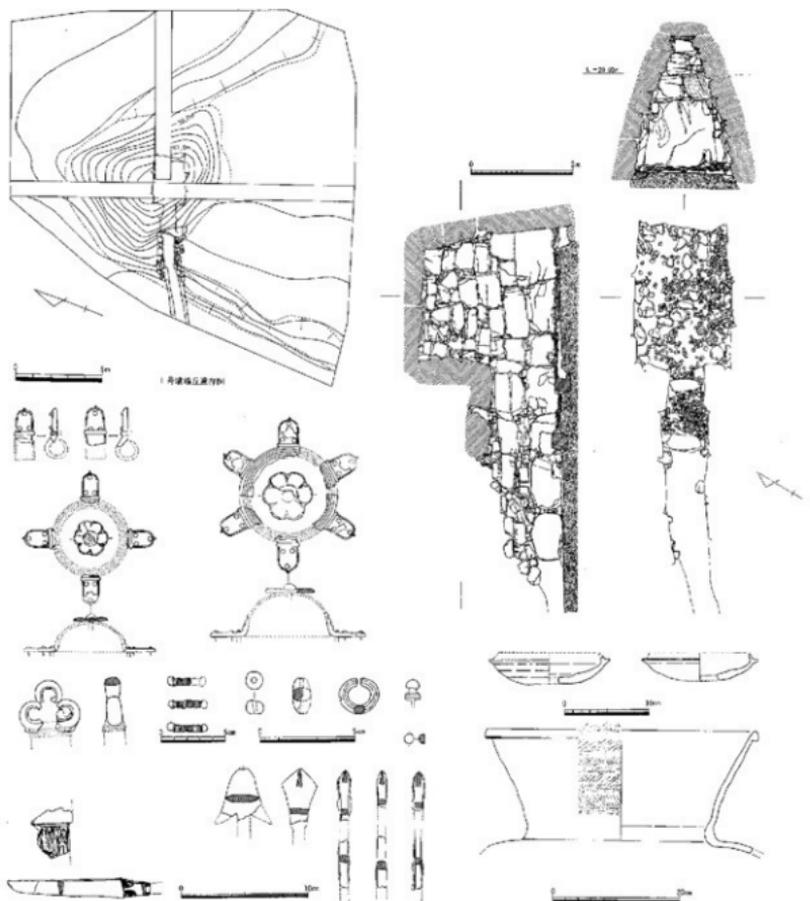


Fig. 6 三苜京塚古墳と主な出土遺物

資料館より提供、一部複製

よう。

2号墳は小竪穴式石室であり、鉄族1が出土したのみである。3号墳は鉄塔建設のために既に破壊されていた。1～3号墳は近接しており、共通の墳丘に含まれる可能性もある。

## 2. 三苜京塚古墳（福岡市東区大字三苜京塚）

三苜京塚古墳は、西から東に下がる標高約20mの丘陵上に立地する。この丘陵は和臼川と漢川の分水嶺である。丘陵上の数基の古墳群のなかでの盟主墳である。人型の単室横穴式石室を内部主体としている。調査前に墳丘の多くが削られ墳形は明かでない。調査者は直径13～15mの円墳を推定しているが、墓道が深く、調査区外に延びており、より大きな墳丘規模と予測される。石室内は荒らされて

いたが、三葉環頭太刀、鉄族、弓金具、刀子や馬具などの破片、さらに耳環、玉類などの装身具が出土し、当初は豊富な副葬品が存在したと考えられた。出土した須恵器はTK43からTK209に対応する時期と見られる。

また、墳丘下より弥生時代の竪穴式住居や遺物などが出土した。住居跡内から土器類は須玖Ⅰ式である。この丘陵上に該期の集落があるとみられる。

### 3. 三苦遺跡群（福岡市東区大字三苦）

第1次調査地区は三苦塚古墳のある丘陵から東に向かって突き出す低丘陵上に立地する。古代と中世の掘立柱建物、土塼、柱穴などが検出された。古代の遺物には鉄滓や玄海灘式製塩土器が含まれ、調査者は「甗」の貢納をした「厨戸」の可能性を指摘している。

第2・3次調査は、1次調査南側の別丘陵の先端部である。旧石器、縄文時代の石器類、弥生時代の竪穴式住居、古墳時代の竪穴式住居や倉庫などが多数発見された。弥生時代では青銅製の鏡が出土し、古墳時代の住居には滑石の玉造工房が見つかった。

こうしたことから三苦遺跡は旧石器時代から中世に及ぶ、和白川流域では比較的継続性のある集落遺跡であろうと考えられる。

### 4. 夜白三代遺跡群（新宮町大字上府、三代）

この遺跡群の中には著名な夜白貝塚、立花貝塚も含まれ、旧石器時代から中世に及ぶ湊川流域における拠点となる集落遺跡を含んでいる。

夜白、立花貝塚は丘陵先端、斜面にある。1950～51年に児島隆人、森貞次郎氏らにより3次の調査が行われ、日本列島の初期農耕文化についての研究に重要な成果を挙げた。夜白貝塚では夜白式から板付Ⅱ式段階の貯蔵穴や遺物、立花貝塚では板付Ⅱ式段階以降の遺物が多く出土している。出土遺物には土器類の他に魚貝類や獣骨などの自然遺物、土銃、鯨骨製十握り具、また土器底部に残された灰圧痕などが注目された。

1990～91年に、一帯の区画整理事業にともなう発掘調査が3地区で行われた。

夜白地区では丘陵を取り巻く弥生時代後期後半の大溝が検出された。大溝内側には弥生時代後期から古墳時代前期に及ぶ竪穴式住居跡、土塼、柱穴などがみられた。少なくとも弥生時代後期には環濠集落を形成していたとみられる。環濠内からは瀬戸内系の土器類も出土している。

前田・中島地区は夜白貝塚の北側低地である。標高約5mであり、試掘調査の結果、現地表下約2mで弥生時代終末から古墳時代初頭の水田面が確認された。また、地表下2.6m以下では水分の多い有機質土壌となり、弥生時代後期の遺物が出土した。

大森地区は立花（三代）貝塚を含む地域であり、丘陵斜面から竪穴式住居跡、貯蔵穴、土塼、柱穴、貝塚などが検出された。貯蔵穴や貝塚は板付Ⅱ式から城ノ越式におよび、多量の遺物が出土した。竪穴式住居跡は古墳時代前期から後期に位置付けられる。また、丘陵裾の低地から多量の土器類、木製品、仿製鏡、鉄製紡錘車などが出土した。低地での土器類は弥生時代後期から古墳時代中期を主体とするものであり、10個体の韓式系土器や内面朱付着土器などもある。

三代須川遺跡は1983年と1988年に調査が行われた。夜白貝塚と同じ丘陵であり、東へ300mの位置の丘陵頂部にある。後期古墳2基、貯蔵穴、竪穴式住居跡などが検出された。貯蔵穴は中期前葉、住居は弥生時代終末である。

### 5. 白峯遺跡（新宮町大字下府字白峯）

立花（三代）貝塚と同じ丘陵であり、海に向かって西側に延びる丘陵の端部にあたる。標高は約9mであり、周囲は後背湿地である。ここでは丘陵に沿って列状に配列された埋葬遺構、祭祀土塼、貯

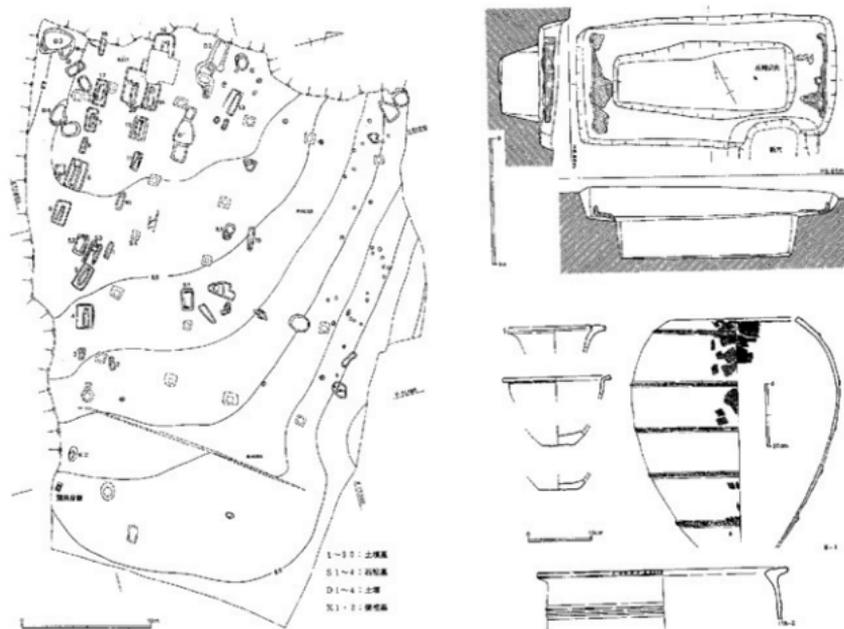


Fig.7 白峯遺跡の遺構と出土遺物

協力より転載、一部改定

蔵穴などが発掘された。埋葬遺構は二期に分かれ、まず弥生時代前期から中期初頭に（木蓋）土塚墓、小児嬰棺墓がある。その後埋葬の中断期間をおき、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけて甕棺墓、刳抜き式木棺墓、組合式石棺墓が設けられている。貯蔵穴は少数であるが、中断期間の中期初頭から前葉に設けられたと考えられている。なお、弥生時代前期の上塚墓18基の内、5基に石剣切先片や石鎌が出土した。最大の墓をもつ16号からは、比較的大きな石剣破片と石鎌が唯一併せて出土している。弥生時代後期以降の埋葬にはガラス玉や鉄剣切先の副葬が認められた。

#### 6. 下府遺跡（古墳群）（新宮町大字下府字祝取）

三苦永浦遺跡に連続する丘陵地帯であり、今回の発掘調査I、J地区の東側に隣接する地域である。宅地造成（現在の新宮町湊坂団地）の事前調査として1988年に発掘がおこなわれた。丘陵上に古墳群、土塚、竪穴式住居跡、柵列などが検出された。古墳群は出土遺物が少ないが、低墳丘で主体部に赤色顔料の分布が認められ、古墳時代前半期であった可能性が高い。住居跡は隅丸方形、四本柱で土師器が出土しており、古墳時代に位置付けられる。なお、本遺跡の丘陵裾にちかい湊川沿いの沖積地下に、縄文時代中期に属する貝塚がかつて発見されたと言う（新宮町教育委員会、西田氏談）。その後、不明となっているが、縄文海進や集落立地を検討する上で重要である。再確認が待たれる。

#### 7. 人丸古墳（新宮町大字下府字塩吹）

下府遺跡の更に東側の、丘陵頂部に築造された円墳である。永浦1号墳の北側約1kmの位置である。古墳は直径約20m、高さ約2mを測る。主体部は組合式箱式石棺であり、未盗掘であった。棺内から

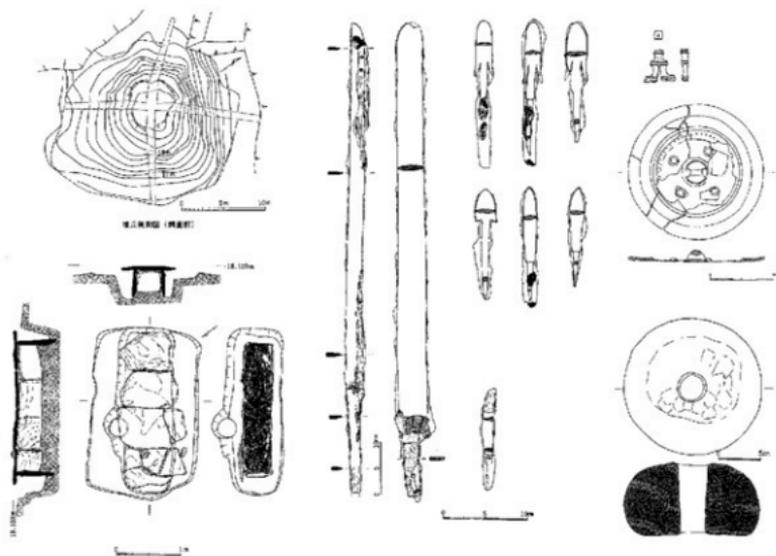


Fig.8 人丸古墳と出土遺物

西田大輔より転載、一部改変

は副葬品として銅鏡1面、鉄製武器類(刀1、劍3、鐵31)、装身具類(堅櫛5、白玉41、琴柱形石製品2、鉄針5)が棺内から、供獻品として「半球形有孔滑石製石製品」が石棺蓋上から出土した。古墳の時期は5世紀前半代に位置付けられる。

(参考文献)

- 柳田純孝1971「和白遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集  
 滝本正志1991「三苦塚古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第243集  
 常松智雄1992「三苦遺跡群1次調査の報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第271集  
 長家伸・榎本義嗣1996「三苦遺跡群2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第477集  
 森貞次郎1961「福岡県夜白遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会  
 洪田信也1984「三代須川遺跡」新宮町埋蔵文化財調査報告書第1集  
 西田大輔1989「三代須川遺跡II」新宮町埋蔵文化財調査報告書第2集  
 西田大輔1993「夜白・三代地区遺跡群 第1分冊」新宮町埋蔵文化財調査報告書第6集  
 西田大輔1994「夜白・三代地区遺跡群 第2分冊」新宮町埋蔵文化財調査報告書第7集  
 西田大輔1994「夜白・三代地区遺跡群 第3分冊」新宮町埋蔵文化財調査報告書第8集  
 西田大輔1994「夜白・三代地区遺跡群 第4分冊」新宮町埋蔵文化財調査報告書第9集  
 西田大輔1995「夜白・三代地区遺跡群 第5分冊」新宮町埋蔵文化財調査報告書第10集  
 西田大輔1989「三代須川遺跡II・下府古墳群」新宮町埋蔵文化財調査報告書第2集  
 中間研志1992「白峯遺跡」福岡県文化財調査報告書第95集  
 西田大輔1991「人丸古墳」新宮町埋蔵文化財調査報告書第3集

### 3. 分布調査の成果

三苦永浦遺跡群の周辺遺跡の状況を探る目的で分布調査を行った。分布調査は発掘調査終了後の夕方や、休日を利用した。その成果を記す。調査は踏査による地表面や、崖面の確認であり、不十分なものである。今後の再、追跡調査を望みたい。

調査の結果、5箇所を遺跡を確認した。遺跡名は現場で設けた仮称のままである。

- 1) 湊古墳群 (1) 湊集落の西側丘陵の南斜面に位置し、不明確のものを合せて3基がある。標高

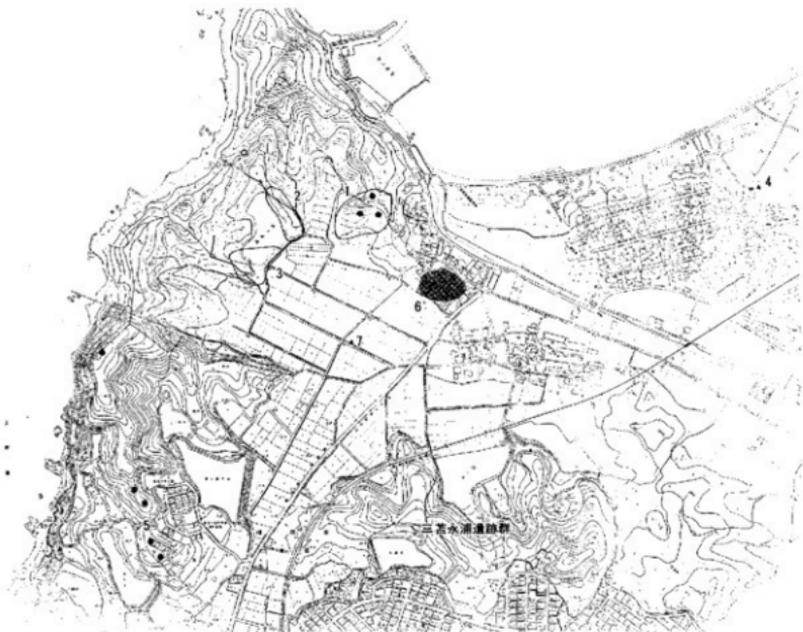


Fig.9 分布調査で確認された周辺の遺跡 (1/10,000)

は約15~25mであり、現在は荒地。畑地造成のために横穴式石室の石材がむき出しとなり、相当破壊されている。墳丘規模や形態は不明である。古墳の石室周囲から須恵器壺片を採集した。須恵器 (Fig.10-3) は大壺の頸部であり、上部にヘラ描きの沈線が施される。6世紀末から7世紀前半代のものか。

2) 西の浦池A遺跡 (2) 西の浦池の北側斜面にあり、少量の須恵器片、鉄滓を採集した。標高は10m前後である。古墳時代から古代の集落の可能性がある。なお、本地点の西側丘陵斜面には古墳の可能性のある石材集積がある (図中○印)。

3) 西の浦池B遺跡 (3) 西の浦池の南側丘陵にあり、池の波打ち際にも遺物が散布している。遺物は須恵質の鉢形陶器、土錘などであり、中世頃のものと思われる。

4) 磯崎神社遺跡 (4) 新宮浜の第2砂丘にある磯崎神社の境内で、削平を受けた部分で1点の紡錘車 (Fig.10-4) を採集した。これは土製であり、径約4.8cm、厚さ1.3cmを測る。弥生時代のものか。

5) 三苦古墳群 (5) 既調査以後、宅地造成により、3号墳の墳裾が削られている。流失した遺物がある。遺物は須恵器片、土師器片があり何れも小片である。須恵器には小型の高杯脚部 (Fig.10-1) や壺頸部 (Fig.10-2) などがある。三苦京塚古墳の時期に近い6世紀末から7世紀初頭頃のものと思われる。

なお、このほかに現在の漢集落隣接地 (Fig.9-6) の地下数mから多数の鉄滓が出土したという (黒木正男氏談)。これは時期や性格が不明である。この南側水田中 (Fig.9-7) から土器小片を採集した。

#### 4. 三苦水浦遺跡の歴史的環境

以上のように、三苫永浦遺跡周辺では多数の遺跡が知られている。時代も各時期に及んでいる。ここで改めて現時点での周辺の考古学的成果の概要を示す。

旧石器から縄文時代までは遺物が各所採集されているが、生活遺構などはなお明確でない。縄文時代中期から後期前半はこの地域で「縄文海進」のピークで、湊川流域では現在より2km以上の海岸線の後退が予測される。三苫永浦の丘陵裾部まで海岸線が迫っていたと見られる。

縄文時代晩期後半から弥生時代前期初頭になると、夜白三代遺跡群に集落が出現し、湊川上流の谷部の低地を水田耕地とする開発が始まったと見られる。これ以降前期末葉まで、引き続き夜白三代遺跡群の集落が継続する。白峯遺跡の墳墓はその集団墓とみられる。しかし、永浦周辺はこの時点でもまだ、集落形成がない。この段階に新宮浜の新砂丘形成がどの程度進んでいたか不明であるが、丘陵裾と湊川の間は砂丘後背湿地であり、なお一部には海水の流入する状況であったと予測される。

弥生時代中期前葉から後葉になると、夜白三代遺跡群での遺構、遺物が減少するとともに、流域の各所への集落の進出がみられる。三苫京塚や下和白川区などに住居などが見られ、ようやく新たな生産地開発として三苫永浦周辺への進出が始まったと見られる。集落にみられるこのような傾向は、東の西郷川流域の古賀町花見、浜山遺跡でも認められる。なお、弥生時代中期前葉から後葉の時期に集落が丘陵の頂部へ移り、条溝などを伴うことが指摘されている。

弥生時代後期前葉から同末葉には、再び夜白三代遺跡群に集落が形成される。永浦周辺での遺跡が減少する。白峯遺跡も再び墓地として利用される。後期後葉には集落のある夜白丘陵を取り巻くように、大規模な環濠が設けられる。土器類の中には瀬戸内、近畿系の特徴を持つものも多く、遠隔地との交流があったと考えられる。

古墳時代前期から中期にも夜白三代遺跡群が拠点となり、韓式系土器などの出土があり、遠隔地との交流が継続したとみられる。遺跡群の西側の丘陵上に人丸古墳が築造される。直径約20mの円墳であるが、副葬品からみて被葬者は本流域の酋長層と考えられる。

古墳時代後期には夜白三代遺跡群と共に流域の各所に再び集落が広がる。集落と対をなすように群集墳が各所に築造される。この時期に注目されるのは三苫遺跡や夜白三代遺跡などでは滑石製の玉類、模造品の製作がある。滑石は同じ柏屋郡内の若杉山などに産出することから、本地域集団がその生産に関わっていたと見られる。下和白の飛山1号墳への供献は、被葬者とこれらの集落との関連を示している。また、沖の島を始めとする近隣の同時期の祭祀遺跡との関連も今後追求が必要である。

なお、群集墳中にあるが三苫京塚古墳は6世紀末において、墳丘の規模と副葬品の内容において、一般の後期古墳の中では突出した存在である。この地域での最有力者層と見て良い。

古墳時代終末から古代の遺構は、本地域では希薄である。三苫遺跡群で溝、建物などがあり、製鉄遺構、製塩土器などが出土する。何らかの官衙関連施設が推定されている。

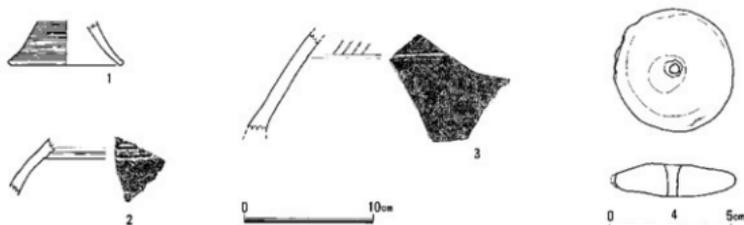


Fig. 10 分布調査による採集遺物 (1/4、1/2)

## 第3章 調査の記録

### 調査の方法

調査地区は区画整理事業地内にあり、分散している。工事範囲が東西約700m、南北約400m、比高差30m以上に及び、丘陵地帯であるために、調査区間で見通すことのできない地区が多い。また、調査期間が短く、造成工事と調整しながら同時併行で複数の地区を調査する必要があるために、当初に全体を覆う計画的な調査グリッドを設定することができなかった。調査に際しては地区ごとに、周辺の道路、鉄道、地形に沿って調査区画、測量基準を設け、調査を実施することにした。地区ごとの測量基準は調査中もしくは調査後に、光波測量機器を用い公共座標との関係を計測、記録している。

試掘調査の結果、調査地は相当の削平を受け、ほとんどの地区では表土、造成土を除去するとすぐに遺構検出面となることが判明していた。したがって、遺構検出面直上まで重機で掘り下げ、遺構検出、掘り下げは人力により行った。

### 第1節 試掘調査

#### 1. 調査工程と結果

三岩永浦遺跡の試掘調査は2次に分けておこなった。

第1次の試掘調査は1993年9月16日に実施した。永浦池の北側斜面7,800㎡に対して東西方向に12本のトレンチを設定した(a～1トレンチ)。全てのトレンチで現地表から20～40cmで黄褐色粘質土の地山となる。この面で精査し、遺構の確認をおこなった。その結果、東側のh、j、1トレンチで遺構を確認した。何れも柱穴、溝などが地表下約40cmで認められる。土師器などが出土し、古墳時代の集落関連遺構の存在が予測される。

第2次の試掘調査は1994年2月28日～3月5日と同年3月10日～3月11日におこなった。試掘対象面積は132,000㎡である。山林の伐開の終了した西側から順に開始し、119本のトレンチを設けた(T1～T119)。

T1～T14は、対象地の西端であり、南向きの緩斜面である。基盤土壌は古砂丘起源の砂粒を多く含む。西鉄線路に近いT1、T8、T9、T11～T13では削平が深く表土下すぐに三紀層が露出した。しかし、T2～T6、T10では柱穴、溝、包含層が確認された。弥生時代の集落関連遺構と見られた。T8の表土中から弥生時代中期前葉の土器片(Fig.12-1)と、古銅碑石安山岩製の横長削器(Fig.12-10)を採集した。

T16～T30は、「前の池」の西側丘陵上に設定した。ほとんどのトレンチで現地地表20cm程で三紀層が露出し遺構はない。ただしT16とT17では溝を確認した。この周辺に古墳石材が多く散布し、この溝が古墳の周溝と推定された。

T31～T41は、西側に開く丘陵谷部と周囲の斜面に設定した。谷底部のT32、T33、T37、T40では現地地表下0.5～2.2mで少数の柱穴、溝と少量の遺物を確認した。遺物には土師器、青磁片、石鏃片(Fig.12-2)がある。

T42～T46は、「前の池」西側丘陵先端部に設定した。すべてのトレンチで現地地表下20cm程で三紀層が露出し、遺構はない。

T47～T66は、「前の池」東側の丘陵に設定した。全体に西に下がる緩斜面である。このうち丘陵先端に近いT49～T52において、現地地表下0.2～0.4mの深さで竅穴住居跡、柱穴、溝と遺物を確認した。遺物は弥生時代から古墳時代後期のものがあり、集落関連遺構と考えられた。



原案りの設備・遺物検出トレンツ

Fig.11 試掘調査区設定図 (1/3,000)

T67～T74は、「前の池」の南側に位置する谷部に設定した。全体に湿潤で遺構の存在は無いと予測していた。ところが、ほとんどのトレンチで柱穴や溝、遺物を大量に含む包含層(?)を確認した。遺物には弥生時代中期の遺物 (Fig.12-3～9) が多く、この時期の集落関連遺構と推定した。

T75は、「前の池」の南側にあり、池に突き出す小丘陵の先端部に設定した。試掘段階には伐採した材木を運搬するために重機が幾度も通過したために既に0.5m近い削平があった。残丘部分を主にトレンチを設定した結果、断片的ではあるが、内辺で約7m四方の溝状遺構を確認した。溝は地表下10cmで現れ、深さ10cm以下の遺存であった。既に中央部は失われている。遺物の出土はない。

T76～T83は、事業地最東部の谷部に設定した。T76、T79、T81～T83において少数の柱穴、溝が検出された。出土遺物はない。

T84～T101は、事業地東端の丘陵尾根線上に設定した。T95、T97付近が本事業地内の最高所であり、標高42.3mを測る。最高所の北側の僅かな平坦面を中心に設けた T91、T92において、土壌と多

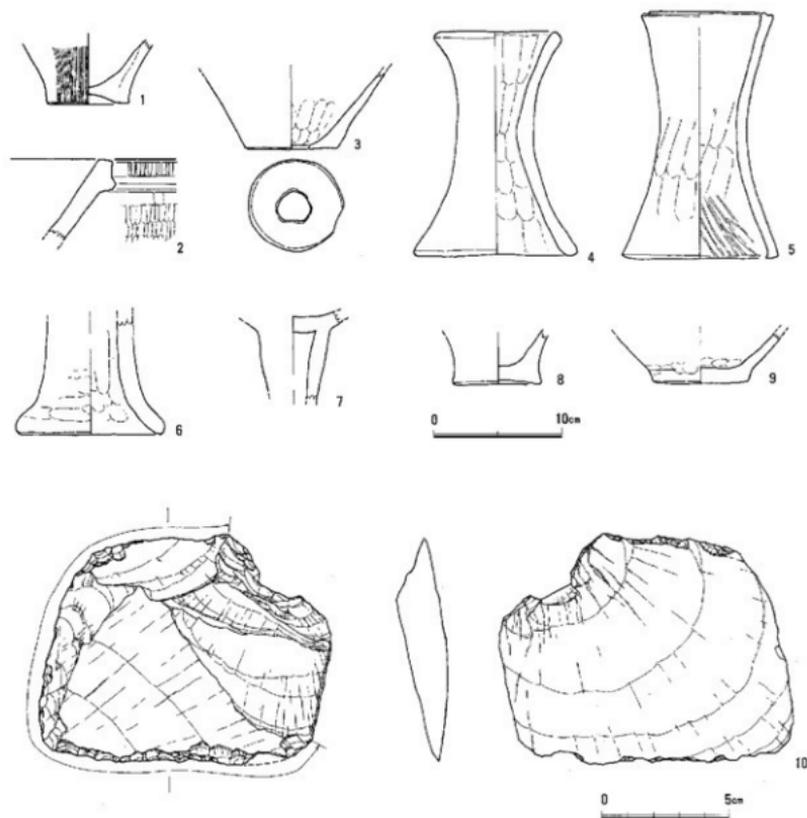


Fig.12 試掘調査出土遺物 (1/2・1/4)

量の炭化物片を確認した。遺物の出土はないが、立地からみて何らかの祭祀的遺構か。

T102～T106は、遺構の検出されたT67の東側、住宅の隣地である。遺構の広がりを確かめるために設けた。T105を除くトレンチから、柱穴土壌、弥生時代土器片が検出された。

T107～T109は、遺構のあったT71の南側、調査区南端に設けた。T108から溝状の遺構が検出された。

T110～T119は、永浦池と「前の池」の間にある丘陵尾根から南斜面に設けた。丘陵尾根上は既に相当の削平があり、遺構はない。南斜面のT110、T111に住居跡と弥生時代土器片を採集した。

## 2. 判明した遺跡範囲と概要

試掘調査の結果、事業地内に以下のように12箇所の遺跡があることが判明した。遺跡の予定される調査期間、造成工事の工程との調整を経て、このうち9箇所の遺跡、合計約25,500㎡を調査することとなった。調査予定期間は工事工程との関係から14ヶ月を確保した。

地区	トレンチ位置	概要(推定)	面積(約)	調査計画
A	T2-6・10	弥生、中世集落	6,800㎡	最初の工事予定地、調査早期終了要望あり
B	T27	溝	200㎡	遺構か不明。調査から除外。
C	T32,33,37,40	中世集落	1,100㎡	造成による盛り土部分。調査から除外。
D	T-h,j,l	弥生、古墳集落	2,100㎡	1993年度調査。3月31日に終了。
E	踏査	古墳(前方後円墳)	1,700㎡	削平予定。早期の調査必要。1994年春調査
F	T16,20	古墳	1,100㎡	削平予定。早期の調整必要。1994年春調査
G	T75	古墳(?)	200㎡	森林伐開の重機進入により壊滅。調査除外
H	T76他	弥生集落	6,200㎡	一部削平、盛り土。1994年夏以降調査予定
I	T49-52	弥生～古墳集落	5,200㎡	工事最終部分、1995年1～3月調査予定。
J	T91,92	(祭祀遺跡?)	400㎡	削平部分、1994年夏調査予定。
K	T110,111	弥生集落	700㎡	1994年末までに調査終了要望。
L	踏査	古墳	1,100㎡	削平部分、J地区と並行して調査終了予定
合計面積			26,800㎡	

Tab.1 確認された遺跡と概要



Fig.13 確認された遺跡とその範囲 (1/5,000)

## 第2節 A地区の調査

### 1. 調査概要 (Fig.14)

A地区は、今回の工事予定範囲の西端に位置する。現況は畑地である。調査面積6,800㎡を対象に4月からバックホーにより30~80cmの表土除去作業を行った。地勢は北側が高く、南側の低湿地に向かって傾斜する南向きの緩やかな斜面である。標高は高所で7.6m、低所にて4.7mを測る。6月30日をもって調査を終了した。

旧石器時代の遺物集中分布、弥生時代の竪穴住居跡、不定形土坑、柱穴等を調査した。

### 2. 旧石器時代の調査 (Fig.15)

調査進行中に、北端の攪乱溝より、ナイフ形石器をはじめ旧石器時代と考えられる遺物が確認されたことから、調査区内にグリッドを設定して調査することにした。グリッドは旧石器時代遺物を含むとみられる黄褐色シルト層が良好に残存すると思われる東側を中心に、100㎡に対して、2m×2mのグリッド1ヶ所を設定した。グリッドは北端をG1とし、西に順じてG2、G3と呼称し、計21地点を設定した。その結果、G8より少量ではあったが遺物の「集中分布」を検出した。これをSU07と呼び、遺物の出土の多い南と東側に4mずつ拡張し調査区を設けた。他のグリッドはそれぞれ40~60cm掘削を行ったが、遺物・遺構は何も確認されなかった。

#### SU07

##### 1) 位置 (Fig.15)

A地区中央北よりに位置し、検出面で標高8mの等高線が中央を走る位置にある。この場所は南へ下がる緩斜面であり、微地形をみるなら、南から入り込む谷状低地の底部にあたる。こうした地形は畑地造成の中で、比較的旧状を保っていると見られる。

##### 2) 地層

地層は3層に区分される。上部から1~3層とした。

1層は表土であり、畑地の耕作土である。20cm前後の層厚があり、当初に重機で除去した。

2層は茶褐色粘質土である。砂粒を多く含み、水分を含むと強くべとつく。本層に含まれる砂粒は、西側約500mの三苫遺跡群2、3次調査地点では量が増し、東側500mのII、I地区では減少する。このことから砂粒の給源はさらに西側にあり、しかも比較的近い位置にあると考えられる。本層形成がナイフ形石器段階の更新世後期を含むことからみて、該期の地形環境から、砂粒は海の中道を中心に形成される古砂丘を給源とした風成砂であると考えられる。2層は、本グリッド内では20~30cmの堆積があるが、調査区北側では削平により失われている。

3層は赤褐色粘質土であり、基盤である三紀層の風化土である。下位にしたがい硬質化する。

遺物は2層中に包含される。ただし、遺物の検出は上半部に集中し、下半部ではナイフ形石器 (Fig.16-3) と数点の黒曜石碎片だけであった。なお、本来は2層の上部に縄文時代に対応する黒色土があったと予測されるが、後の畑地造成により、2層まで削平されていると見られた。

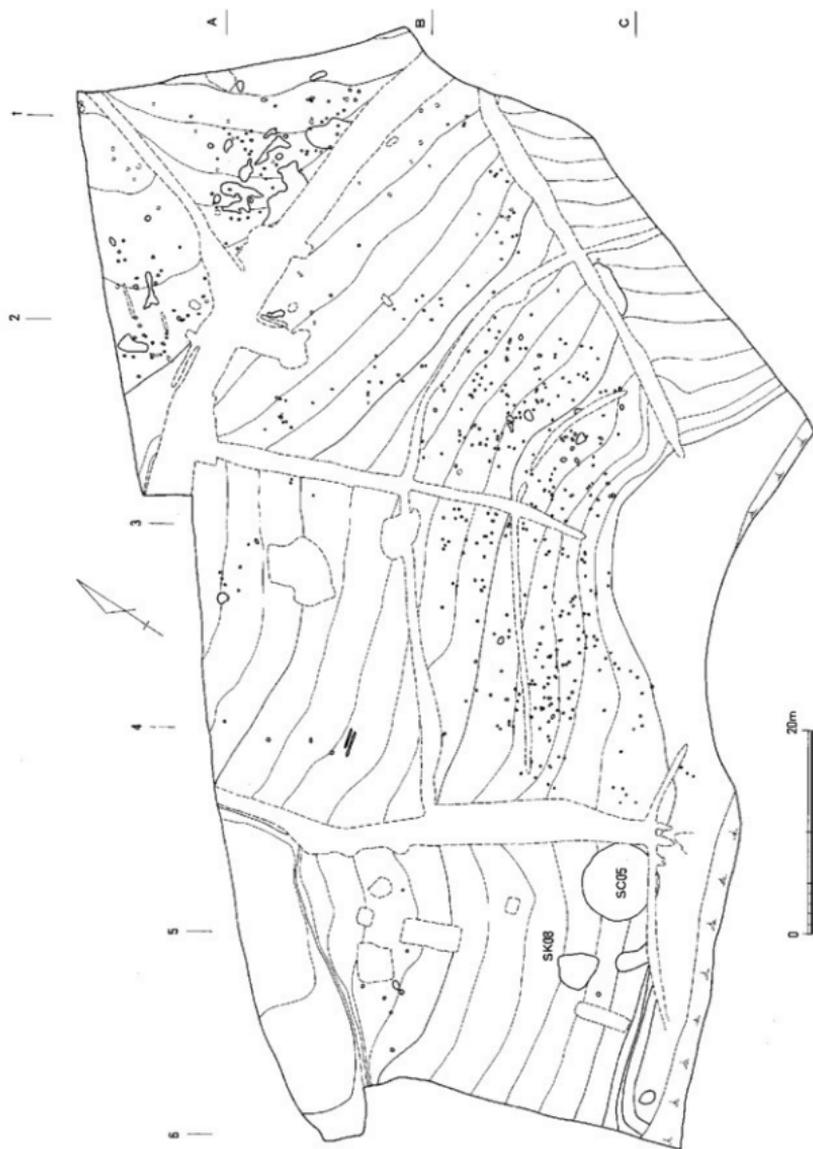


Fig.14 A地区全体图 (1/500)

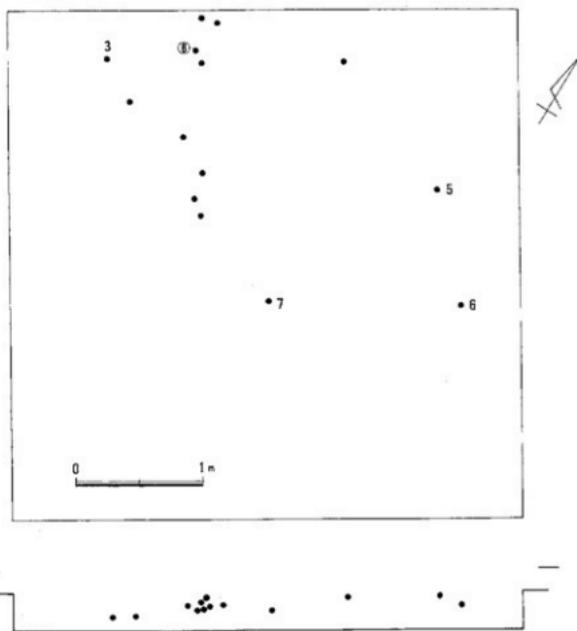
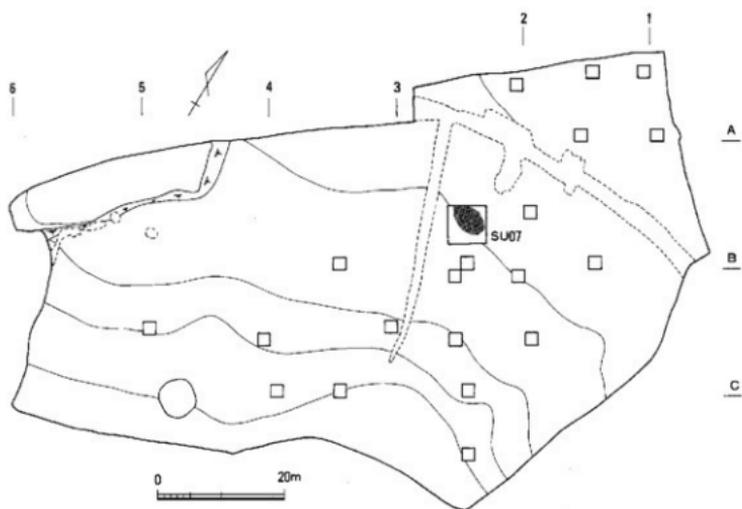


Fig. 15 SU07グリッド地点図・遺物出土地点図 (1/800・1/40)

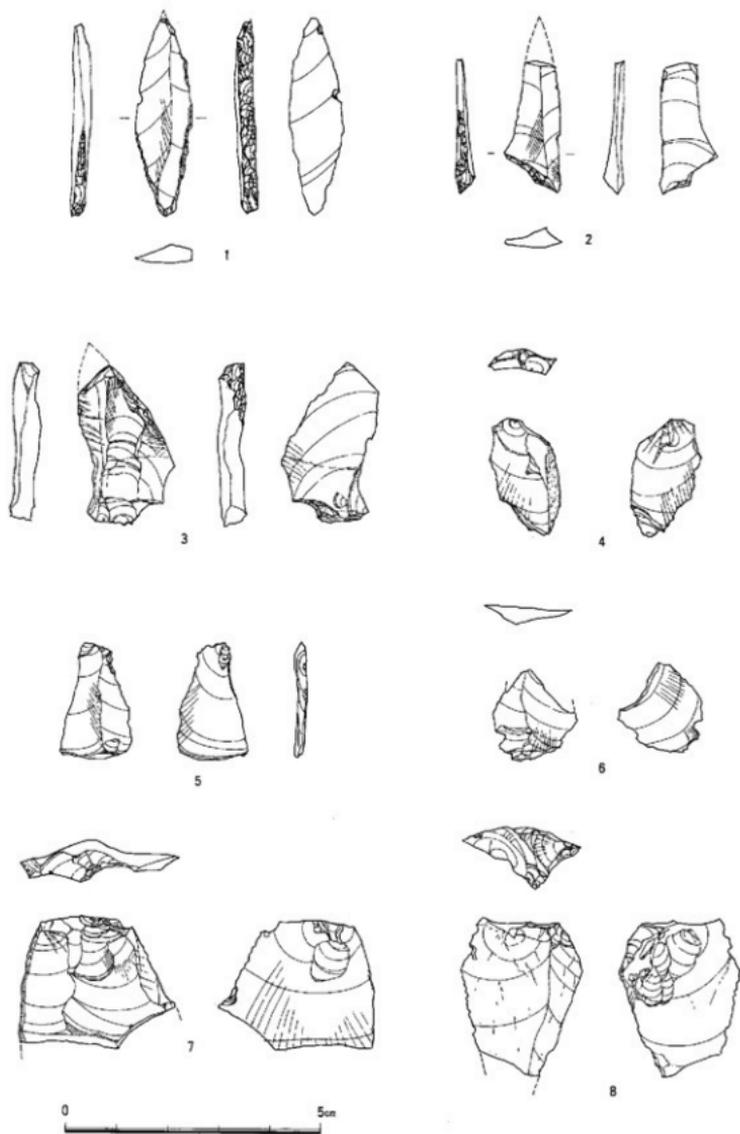


Fig. 16 SU07出土遺物 (1/1)

### 3) 出土状態 (Fig.15)

「集中分布」は調査区の北側に偏り、平面上は南北に長い楕円形を呈する。その範囲は東西約2.5m 南北約5mを測る。この範囲から約14点の遺物が出土した。なお、北側では2層上部に石織未製品があり、縄文時代以降の混入があると見られる。こうした遺物の出土状態からみて、本来「集中分布」は2層上部に包含のピークがあり、既に削平により分布遺物の多くを失っていると考えられる。

### 4) 出土遺物 (Fig.16)

ここでは、SU07の出土遺物とこの周辺から採集された旧石器時代の遺物をまとめて報告する。

1はナイフ形石器である。SU07の東側10m付近の畑側溝内埋土から出土した。素材は漆黒色黒曜石であり、表面の風化が著しい。端正な縦長剥片を素材とし、打点を上に二側面に刃潰し加工で整形している。先端は新しい割れがある。刃部には微細剥離がみられる。現状で長さ3.8cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ1.23gを測る。

2はナイフ形石器である。遺構検出時に出土した。素材は漆黒色黒曜石であり、表面の風化が著しい。縦長剥片を素材としている。打点を下にし、基部側の一侧面に刃潰し加工で整形している。先端は新しい欠損がある。刃部には微細剥離がみられる。現状で長さ2.6cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ0.70gを測る。

3はナイフ形石器である。SU07北端から出土した。素材は漆黒色黒曜石である。やや不整形な縦長剥片を素材とし、打点を下にし、先端の一侧面に刃潰し加工で整形している。打点は自然面である。先端割れは古い。刃部には微細剥離が認められない。現状で長さ3.1cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重さ2.15gを測る。

4は縦長の剥片である。遺構検出時に出土した。素材は黒い縞模様のある半透明黒曜石である。調整打面であり、背面に自然面が残る。長さ2.2cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ0.91gを測る。

5は縦長の剥片である。SU07の東端で出土した。素材は黒い縞模様のある半透明黒曜石である。打面、剥離面調整がある。左側面に切断状の割れがある。長さ2.3cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.53gを測る。

6は縦長の剥片である。SU07の南端で出土した。素材は黒い縞模様のある半透明黒曜石である。基部を新しく欠損する。現状で長さ1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ0.59gを測る。

7は縦長の剥片である。SU07の南側で出土した。素材は漆黒色黒曜石である。左側面に自然面を残す。打面、剥離面調整が入念である。先端部を新しく欠損する。現状で長さ2.5cm、幅3.0cm、厚さ0.7cm、重さ4.17gを測る。

8は縦長の剥片である。遺構検出時に出土した。素材は不純物を含む黒色黒曜石である。打面、剥離面調整が入念であり、断面三角形を呈する。先端部を新しく欠損する。現状で長さ3.0cm、幅2.3cm、厚さ1.2cm、重さ5.44gを測る。

旧石器時代と見られる確実な遺物は、ここに示した以外に剥片1点、砕片9点がある。また、A地区では総数90点の時期不明の剥片石器類が出土しており、この中に該期の遺物が含まれている可能性は高いといえよう。

## 3. 弥生時代の調査

A区において、堅穴住居、不定形土坑、150個を超える柱穴を検出した。しかし、後世の削平が著しく、比較的良好的な遺構は調査区の低所に位置する円形堅穴住居周辺に限られる。

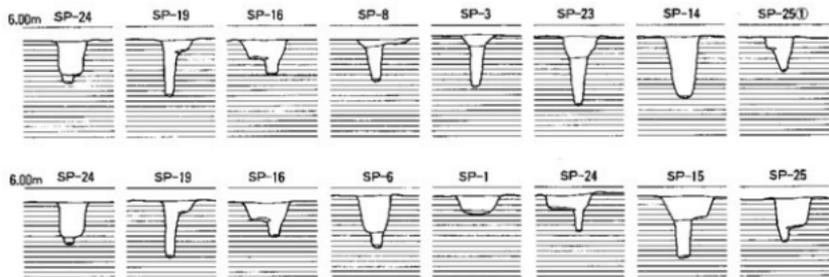
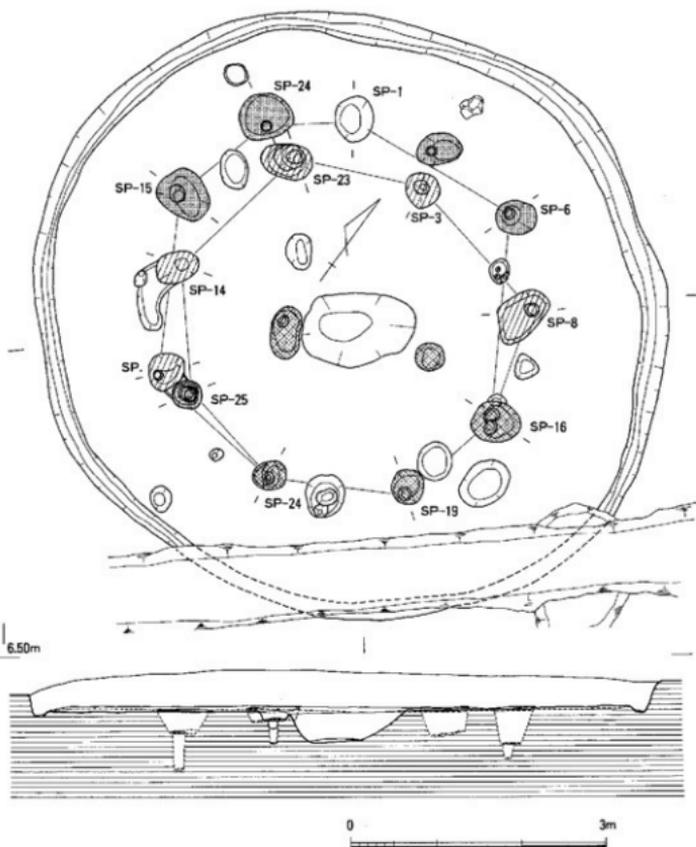


Fig. 17 SC05 (1/60)

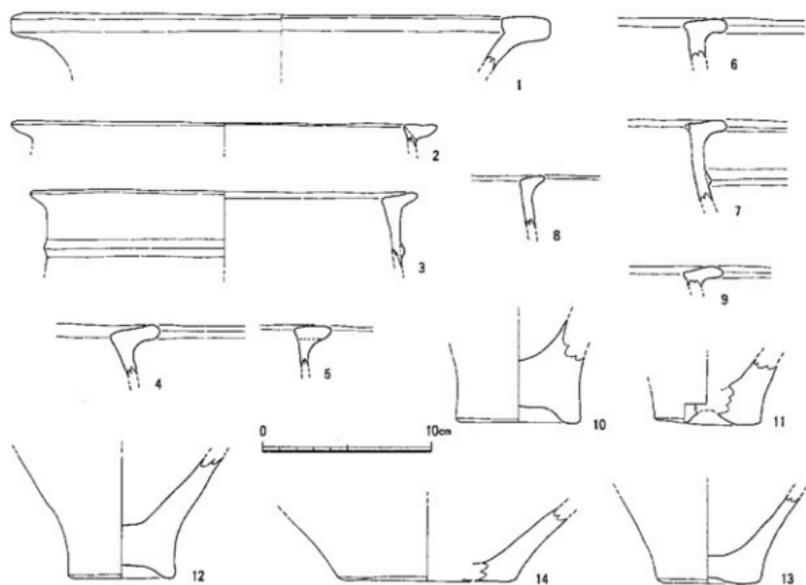


Fig. 18 SC05出土遺物 (1/3)

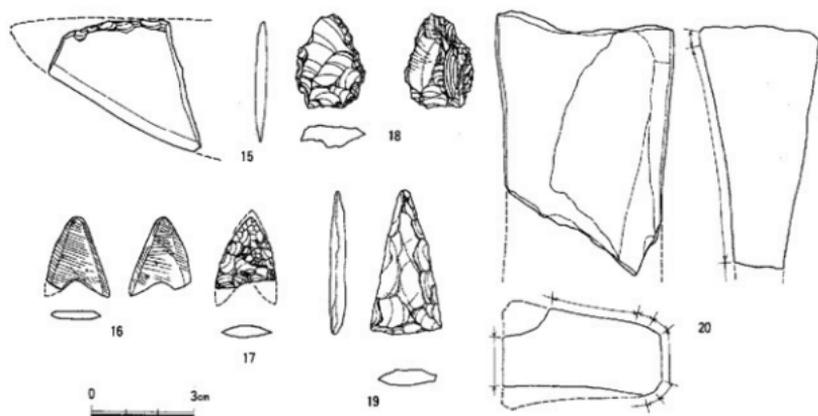


Fig. 19 SC05出土遺物 (2/3)

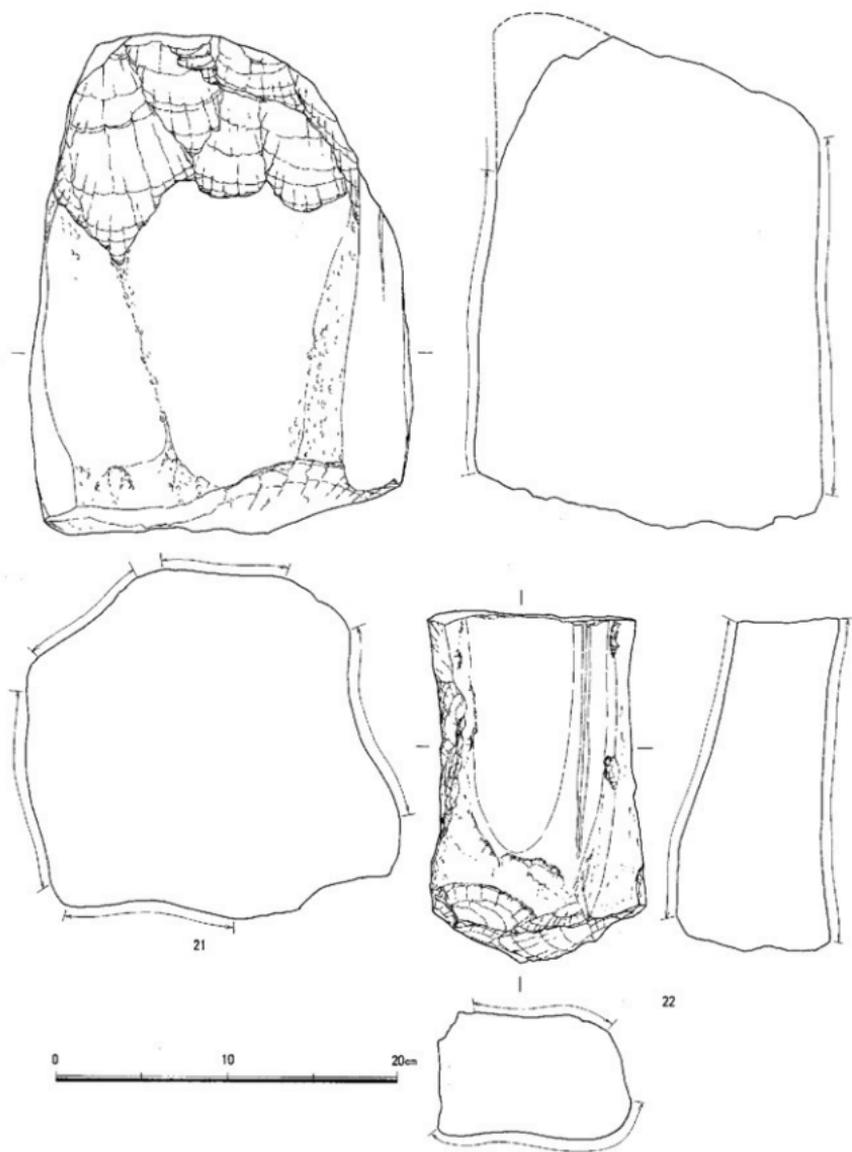


Fig.20 SC05出土遺物 (1/3)

調査区南西に位置する。南向きの緩斜面にあり、検出面で南北間に0.4mの比高差があった。南東部を近年の水路により切られている。平面形は円形を呈し、直径約7.3m、深さ5cm～30cmを測る。壁際には幅20～30cmの壁溝が巡る。いわゆる「松菊里」型住居である。中央に140cm×86cmの楕円形の土坑があり、その長軸両側に小柱穴が見られる。主柱穴は8本であり、1回の建て替えが行われている。建て替えは、南～東の4本の主柱位置は大きく変更せず、北～西側の主柱4本を外側に約0.5m拡大した円周位置に変更している。壁溝の掘り直しは認められない。柱穴の深さは床面から40～70cmを測る。住居跡内埋土は3群に分かれ、下部が床面直上の灰～明褐色土、中部が暗褐色土、上部が黒色土であり、すべて自然流入土である。床面には、北側の壁溝寄りに大型の砥石(Fig.20-20)が置かれたままであった。他に中～下層から少量の土器片、石器類が出土した。柱穴からは良好な遺物は確認されていない。

#### 出土遺物 (Fig.18～20)

本住居内からは土器類と石器類が出土した。土器類はすべて破片であり、全体の形状を知る資料はない。

1は壺の口縁である。口径31.4cmを測り、口縁部を厚くつくっている。

2～9は甕の口縁である。2は口径24.8cmを測る。断面三角形につくりあげた口縁をもつ。3は口径22.4cmを測る。口縁に三角突帯を貼り付けている。

10～13は甕の底部である。13は住居址内SP-15より出土している。10、11、12は厚い上げ底である。

14は壺の底部である。底径9.4cmを測る。これらの遺物は城ノ越～須玖I式古段階に対応し、遺構の時期は弥生時代中期初めに位置づけられる。

石器には石鎌、石包丁、砥石、石片などがある。

15は石包丁の破片である。風化が著しい。

16は磨製石鎌である。素材は灰色の玄武岩である。浅い抉りが入り、片脚を欠損している。全体を丁寧に研磨している。長さ2.3cm、幅1.8cm、厚さ0.2cm、重さ0.83gを測る。

17は、漆黒色黒曜石を素材とする石鎌である。住居中央の土壇から出土した。先端部を新しく、両脚を古く欠損する。現状で長さ2.1cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.98gを測る。

18は石鎌の未製品である。素材は漆黒色黒曜石である。表面右側より調整を試みているが、階段状剥離に終始し、製作を中断し、廃棄したものと見られる。長さ2.8cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重さ3.20gを測る。

19は大型の石鎌である。素材は頁岩であり、風化が著しい。両面ともに入念に剥離調整されている。長さ4.3cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重さ4.04gを測る。

20は砥石である。素材は砂岩であり、荒～中目である。長方形4面使用であり、欠損品である。中央は窪んでいる。表面は風化剥落がある。現状で長さ7.2cm、幅5.3cm、厚さ3.5cm、重さ153gを測る。

21は砥石で、大型の荒砥である。住居床面に据え置かれていた。素材は礫岩であり、柱状に6面を使用している。一部が熱破砕を起こしている。長さ29cm、幅22cm、厚さ20cm、重さ19.51kgを測る。

22は砥石である。素材は砂岩であり、中目である。長方形を呈し、使い込んで窪んでいる。表裏2面を用いるが、片面に溝状の研磨痕がある。長さ20cm、幅12.5cm、厚さ8.5cm、重さ3.36kgを測る。

これらの他に住居内からは、37点の黒曜石の剥片・破片、数点の頁岩、粘板岩の石片が出土してい

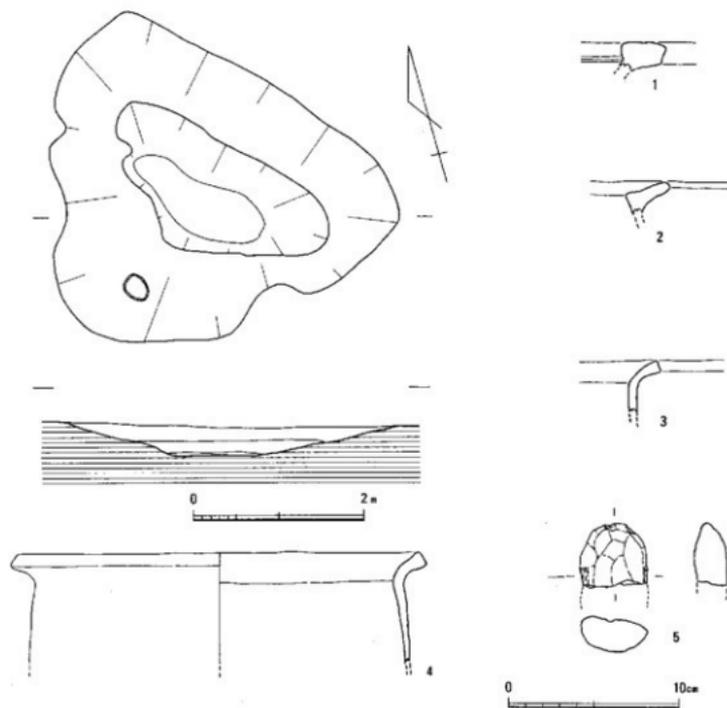


Fig.21 SK08遺構・出土遺物実測図 (1/60・1/3)

る。これらの全てが弥生時代のものかは不明であるが、前者は石鏃素材、後者は石斧、石包丁の素材も含まれているようである。

#### SK08(Fig.21)

円形竪穴住居址の西側に検出された。平面形は不定形を呈し、中央に同様の不定形の段を有する。長軸の長さ約4.3m、幅3.5m、深さ0.3mを測る。遺構内埋土はSK05に類似し、上部には黒色腐植土が形成される。遺構内から少量の土器片が出土した。

#### 出土遺物

- 1は壺の口縁である。口縁に粘土帯を貼付け分厚につくっている。
- 2～4は甕の口縁である。2は口縁が逆L字形となり、内面に明瞭な稜を有している。
- 3・4は口縁部を「く」字形に折りかえし、端部は厚みを増して端面を「コ」状に仕上げている。跳上げ系土器である。
- 4は口径24.2cmを測り、器面調整は磨滅しており、不明である。

5は石錘である。幅3.9cmを測る。

出土遺物は、土器が須玖式古段階の様相をもち、弥生時代中期前半に位置づけられる。

#### 4. 表面採集の遺物(Fig.22)

表土掘削時、遺構検出時において、土器片以外に石鏃などの石器類、土錘等が出土している。土器片は観察可能なものはない。土錘は長さ4cm～5cm、径1cm～2cmを測る。全て表土中からの出土であり、近世以降のものとみられる。

石鏃は9点出土した。

1は、漆黒色黒曜石を素材とする石鏃である。先端部を古く欠損する。両脚が大きく開く形態をもつ。現状で長さ2.3cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.84gを測る。

2は、白色チャート素材とする石鏃である。完形品である。先端が鋭く尖り、浅い抉りをもつ。現状で長さ2.0cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm、重さ0.64gを測る。剝離調整は入念であり、縄文早期のものと思われる。

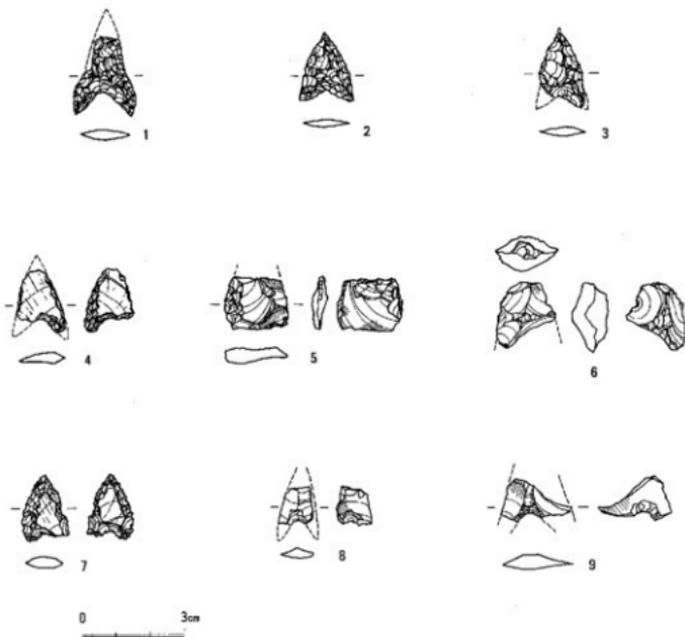


Fig. 22 表面採集の遺物 (2/3)

3は、漆黒色黒曜石を素材とする石鏃である。両脚をを古く欠損する。先端が鋭く尖り、浅い挟りが入る。現状で長さ2.2cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.62gを測る。

4は、古銅輝石安山岩を素材とする石鏃である。先端部と両脚を新しく欠損する。剥片の周囲を整形し造っている。浅い挟りをもつ。現状で長さ1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.69gを測る。

5は、漆黒色黒曜石を素材とする石鏃未製品である。SU07の上部で出土した。先端部を古く欠損する。基部は未調整であり、側面調整時に欠損したため廃棄したと考えられる。現状で長さ1.5cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重さ1.16gを測る。

6は、漆黒色黒曜石を素材とする石鏃未製品である。残核を転用したと見られる。粗い調整で終わっている。現状で長さ2.0cm、幅1.8cm、厚さ1.0cm、重さ2.10gを測る。

7は、漆黒色黒曜石を素材とする石鏃である。周辺のみ調整であり、表裏に素材面を残す。現状で長さ2.0cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.66gを測る。

8は、半透明黒曜石を素材とする剥片鏃である。先端部と両脚を欠損する。現状で長さ1.1cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、重さ0.32gを測る。縄文時代後期から晩期に属するものである。

9は、縞模様に入る半透明黒曜石を素材とする剥片鏃である。先端部と両脚を欠損する。現状で長さ1.2cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重さ0.64gを測る。縄文時代後期から晩期に属するものである。

## 5. 小 結

A区の調査において、旧石器時代から弥生時代にかけての遺物と遺構を検出した。地形的には南側斜面にあたり、集落の形成においては良好な環境を有している。それを裏付けるように、竪穴住居址、土坑、柱穴等が検出された。竪穴住居から弥生時代の集落の存在が考えられる。しかし、遺構面の直上に耕作土が覆っていることや、遺構の残存が浅いことなどから、後世の削平が著しく、多くの遺構が既に失われたことが考えられる。

旧石器時代の「集中分布」の確認は福岡市東区では蒲田遺跡に次いで2例目であり、貴重な資料といえよう。ただし、「集中分布」の上半部は削平などで既に失われたと見られる。撓乱内から出土した該期の石器に、共通する技術や、石材が認められることから、それらも本来は同一の石器群に含まれていたと考えられる。この石器群の時期は定型石器資料が少なく困難である。縦長剥片剥離が主体であること、打面調整が入念であるものの、単設であることからみてナイフ形石器段階の後半でも、より新相に近い時期であると考えたい。

弥生時代遺構は住居1、土壌1を検出した。これ以外に柱穴も多数検出したが、建物などを復元することはできなかった。したがって、これらを集落として把握できるかは問題が残る。時期は出土遺物からみて、弥生時代中期初頭～前葉の時期に位置付けられる。これは三苦地区において現時点で確認できる、弥生時代の最も古い住居と把握できる。また、住居は径7.3mと比較的規模が大きい。遺構内から、生産道具として僅かではあるものの石鏃、石包丁、石鏟、砥石などが出土した。この住人が農業、漁業、狩猟などの多様な生産に従事したことを垣間見せてくれる。集落の存続期間の短いことやその系譜、生産基盤、集団規模、その性格などの問題は今後検討していきたい。

### 第3節 D地区の調査

#### 1. 調査概要

D地区は、A地区の東約200mの位置にある。A地区と同じ丘陵の南斜面に位置するが、両地区の間は斜面が急となり、連続しない。調査地は「永浦池」に面する三面の段々畑である。地勢は北側が高く、南側の「永浦池」に向かって傾斜する南向きの斜面である。標高は高所が18m、低所が13mを測る。遺構は三面の畑の造成面に沿って遺存していた。以下ではこの造成面を高位から上段、中段、下段と呼ぶ。まず、バックホーにより20～60cmの表土除去作業を行った。その結果、調査区の中央を斜面に沿って東西に延びる幅15～10mの黒色土からなる包含層が現れた。上段では包含層の上端が現れたが、地山と包含層の境が明瞭で、複数の弧状を呈する部分があることがわかった。したがって、この包含層は一部が遺構内の埋土であることも想定された。中段でも包含層があることから、重機による掘削はこの面で一旦止め、人力の遺構検出に切り替えることとした。下段では削平が激しく、包含層は無く、少数の柱痕が検出されただけである。

調査の結果、古墳時代の竪穴式住居跡、掘立柱建物、土塚墓、不定形土坑、柱穴等を検出した。本地区の対象面積は2,100㎡であり、調査は2月15日から開始し、3月31日をもって終了した。

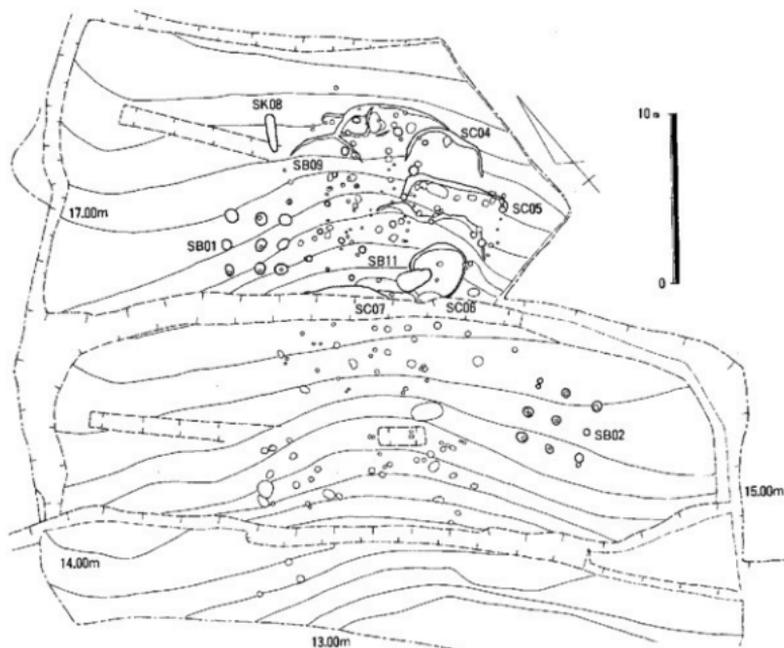


Fig. 23 D地区全体図 (1/300)

## 2. 遺構と遺物

### 1) 竪穴式住居、住居状遺構

#### SC04 (Fig. 23)

SC04は、上段上部で検出した住居状の遺構である。検出面は標高約17.5mである。平面は不整形であり、南北約4.5m、東西2.5m、深さ0.2mを測る。床面はやや傾斜し、柱穴は明らかにできなかった。遺構内埋土は暗黒色土であり、少量の須恵器片、土師器片を出土した。

須恵器には杯身 (Fig. 28-2) がある。口径8.5cmで、回転ヘラ削りが粗い。北部九州で蓋杯A類が最も小型化した段階のものであり、小田富士雄編年のV期、陶邑のTK217~TK46に対応しよう。

#### SC05 (Fig. 24)

SC05は上段で検出した竪穴式住居である。検出面は標高約17mである。中央に樹根があり、調査困難であった。斜面を段状に削り出している。平面形は隅丸方形を呈し、西側は斜面のため流されていると見られる。規模は床面の遺存する範囲で南北6.2m、東西2.5mを測るが、東西方向は柱穴の配置から本来4m以上となる。壁の深さは東側で0.3mである。北-東壁に沿って壁溝がある。主柱穴は明確でないが、南北の壁面に並行して径10~20cmの小さな柱穴列がある。北側には径6~8cmの柱痕があるが、あまりに小さく主柱とは考え難い。この柱間距離は0.5~0.8mであり、北側で四間分、南側で三間分を確認している。住居内の何らかの隔壁をなすものであろうか。

住居内埋土は、下半部が暗褐色土、上半部が黒色土であり、何れも自然流入土である。埋土中から須恵器片、土師器片を多く出土した。(Fig. 28-3~14)

須恵器には、杯蓋 (3~5)、杯身 (6)、椀 (7、8)、甕 (9、10、13) がある。土師器には高杯 (11)、壺 (12)、甕 (14) がある。須恵器の杯蓋は口径12~13cm、杯身は口径11cmを測り、回転ヘラ削りが入念である。小田富士雄編年のIII B期からIV期にかけて、陶邑ではTK209に対応しよう。

#### SC06 (Fig. 24)

SC06は上段で検出した住居状の遺構である。SC05の下方2mにあり、SC05を復元すると切り合うことになる。ただし、本遺構はSC05の中心主軸の延長上にあり、SC05の二列の小柱穴列に挟まれる位置に設けられている。検出は標高約16.5mである。平面は南北2.6m、東西約3.1mの楕円形を呈し、深さ約0.2mであり、床面はほぼ平坦である。遺構内埋土は暗褐色土であり、炭化物、焼土を多く含んでいる。床面に接して鉄滓 (Fig. 30)、埋土中から少量の須恵器片 (Fig. 28)、土師器片などが出土した。

鉄滓 (67) は椀形鍛冶滓である。径約9.5cm、厚さ4.6cmを測る。上面は割合平滑であり、一部ガラス化している。底面は下方に滲がしずく状に垂れ下がる。木炭痕が数カ所に残る。

須恵器には杯身 (15) と椀 (16) がある。杯身は口径10.5cmであり、切り離し後のヘラ削りが粗い。SC05出土の須恵器より新しい傾向があり、小田富士雄編年のIV期の新相、陶邑のTK217に対応しよう。

#### SC07 (Fig. 24)

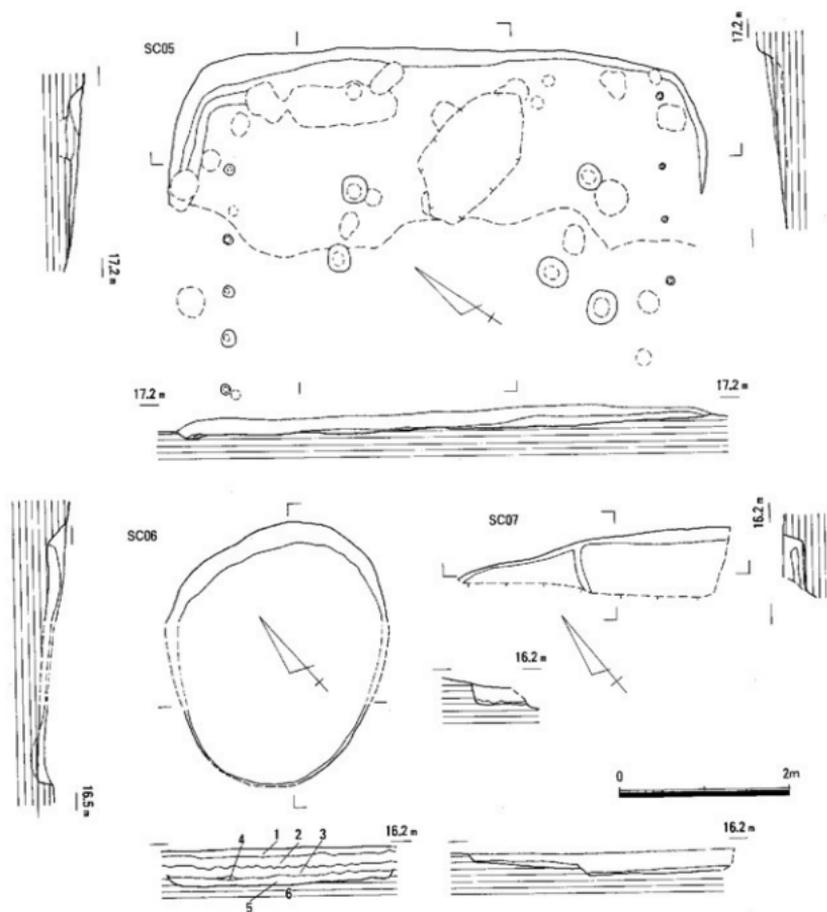
SC06の西側にある住居状の遺構である。畑の造成による切り通し面に落ち込みが認められた。既に大半を失っている。直線的な壁面が3.3m以上のびる。床面は平坦であり、西側にベット状の段がある。

埋土は黒~暗褐色土であり、少量の土器片が出土した。図化できるものはない。

### 2) 掘立柱建物

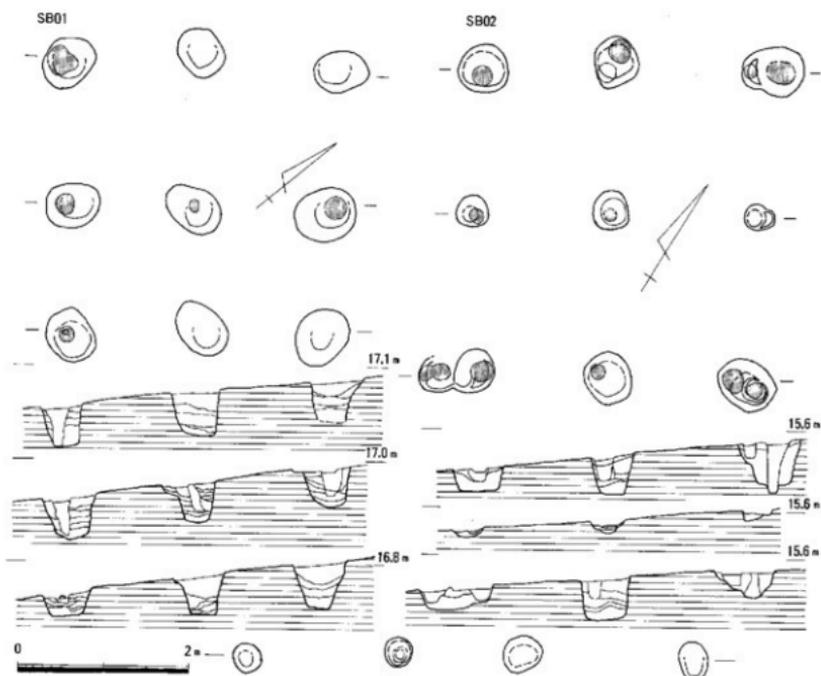
#### SB01 (Fig. 25)

上段の包含層の西側に検出した二間×二間の総柱建物である。検出面は標高16.4~17.0mの緩斜面である。建物はN-53°-Wを向き、規模は3.1m×3.1mのほぼ正方形である。柱掘り方は何れも50×70cmの楕円形である。また、柱穴は検出面から何れも深さ40~50cmを測り、斜面を平坦に造成すること



- |   |   |
|---|---|
| <p>1. 暗褐色土<br/>         2. 黒褐色土<br/>         3. 暗茶褐色土<br/>         4. 茶褐色土<br/>         5. 暗褐色土<br/>         6. 暗褐色土 (地山)</p> | <p>鉄分多し。土器片、炭化物片含む。硬くしまる。下位層に漸移変化。<br/>         やや粘性あり。上下層に漸移する。腐植土とみられ遺物包含層をなす。<br/>         硬くしまる。焼土、炭化物、土器片、ロームブロック少量含む。<br/>         地山ブロックレンズ堆積。硬くしまる。明瞭。<br/>         粘性あり。硬くしまる。土器片多し。焼土、炭化物あり。マンガング粒あり。上層(3層)とはやや不明瞭に接する。<br/>         やや硬い。含有物少ない。下位地山に漸移する。</p> |
|---|---|

Fig.24 SC05・07・06 (1/60)



SB09

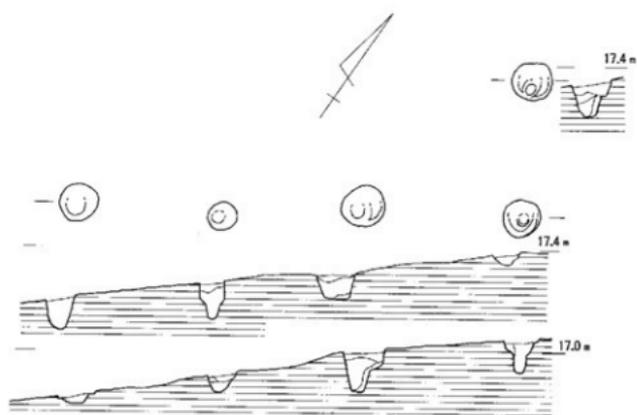


Fig. 25 SB01 • 02 • 09 (1/60)

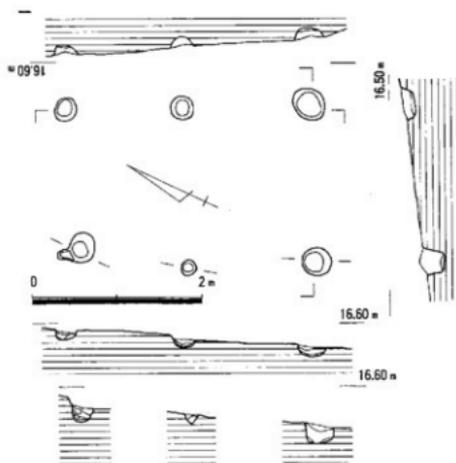


Fig. 26 SB11 (1/60)

なく建築したものと見られる。柱痕は約半数で認められ、平面で径12~20cm程度である。掘り方、柱痕からは少量の須恵器、土師器片が出土した。その中で南端の柱穴の柱痕から、須恵器杯身が出土した。杯身(1)は、口径8.6cmであり、ヘラ削りは比較的人念である。SC04と同じ時期のものと思われる。

#### SB02 (Fig. 25)

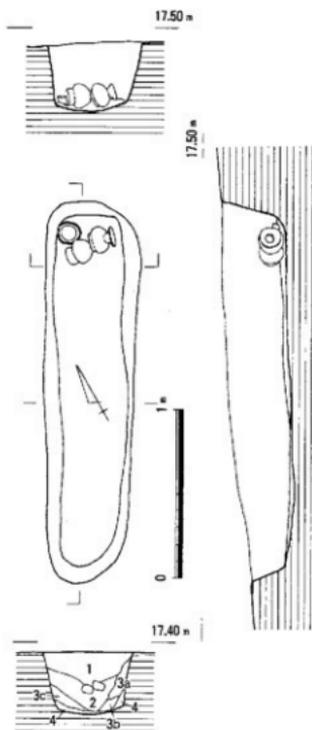
中段の包含層の東側に検出した二間×二間の総柱建物である。検出面は標高15.5~15.0mの緩斜面である。建物は1回の建て替えがあり、主軸が少し変わっている。最初はN-35°-Wであり、建て替え後はN-30°-Wとなる。規模は何れも3.7m×3.5mの長方形である。柱掘り方の平面は全て円もしくは楕円形である。南北側二辺の柱穴が径約50cm、深さ30~50cmと大きく、深い。中央の柱穴列は径約30~40cm、深さ10~15cmと浅く、小さい。この建物も斜面の傾きと柱穴の深さが共通しており、斜面を平坦に造成することなく建築したものと見られる。柱痕はほとんどで認められ、平面で径15cm程度である。掘り方、柱痕からの遺物の出土はほとんどなかった。

#### SB09 (Fig. 25)

SC04、SC05の北側にあり、切り合い関係にある。主軸をN-57°-Eにとる梁行二(三)間、桁行三間以上の建物である。柱間の間隔は、梁行が1.5mと2.8mで計4.3mであり、間にもう1本の柱が推定されたが、検出できなかった。桁行は2.0~1.5mの中でばらつくが、三間で両桁ともに5.3mと一致する。柱穴の掘り方は50~30cmの不整円形を呈し、深さは15~30cmを測る。柱痕は認められなかったが、底面に径10cm前後の段掘りがあり、柱の太さを反映していると見られた。柱穴底面は地形に沿って下がり、他の獨立柱建物と共通している。柱穴内からは少量の土器片が出土したが、時期を決めるものはないが、SC04やSC05を切り、より新しい時期であろう。また、SB02とは主軸が約90°振れて一致している。

#### SB11 (Fig. 26)

SB09の西側にあり、北側の柱筋が一致する。主軸をN-26°-Wにとる梁行一間、桁行二間の建物である。柱間の間隔は、梁行が1.7~1.8mであり、桁行が1.4~1.45mである。柱穴の掘り方は15~30cmの不整円形を呈し、深さは10~20cmを測る。柱痕は認められなかった。柱穴内からは少量の土器片が出土したが、時期を決めるものはない。SB09との関係から、同じ時期とみられる。



- |              |                                       |
|--------------|---------------------------------------|
| 1. 茶褐色土      | 赤褐色 (地山) ブロック多く含む。硬くし<br>まる。下面は明瞭。    |
| 2. 黒色土       | 赤～黄褐色 (地山) ブロック含む。下層に<br>はやや腐敗。硬くしまる。 |
| 3a. 茶褐色ブロック上 | 地山ブロック多く含む。                           |
| 3b. 赤褐色土     | 地山 (下層) 土レンズ堆積。                       |
| 3c. 茶褐色土     | 比較的きれいな壤土。均質。よくしまる。                   |
| 4. 茶褐色土      | 3c層と類似。やや明るい色調。硬くしま<br>る。             |

Fig. 27 SK08 (1/30)

### 3) 土塚

#### SK08 (Fig.27)

上段の包含層北側に検出した土塚墓である。検出面は標高17.2～17.4mである。主軸をN-32°-Eにとる。墓塚の規模は、上面で長さ2.23m、幅0.55～0.45mを測る。床面での長さ2.05m、幅0.4～0.35mを測る。深さは0.2～0.35mで、床面はほぼ平坦である。墓塚は北側の幅が広く、頭位を示していると見られる。床面の北側に供献品と見られる須恵器、土師器が出土した。何れも床面に密着しており、埋葬時に頭位上方に置かれたものであろう。器種は、須恵器直口壺1、同高杯杯部1、土師器台付き短頸壺1の計3個である。壺2個は横向きに置き、高杯は口縁、脚部を取り除いた杯部を正置している。3個は接しており、置かれたままの状態と見られた。他に副葬品や遺体は検出できなかった。

遺構内の埋土は上位から茶褐色土(1層)、黒色土(2層)、赤～茶褐色地山土塊混土(3、4層)であり、下部層は土塚墓被覆盛り土、上部層は風化土の流入と考えられる。

この埋葬遺構は、供献遺物の範囲を除いても、身長170cmの現代の男性が充分入る広さである。成人用の埋葬施設であるとみられる。

出土した須恵器、土師器から時期の判断は困難であるが、高杯杯部の特徴や壺の形態から、小田富士雄編年のV期以降に位置付けられると見られる。

#### 4) そのほかの遺物

以上で示した遺構以外に、多くの柱穴が検出されている。柱痕の確認できるものも多いが、建物を復元することはできなかった。中段の柱穴の一つからは須恵器杯蓋片が出土している。杯蓋(Fig.28-20)は、径11.0cmである。多くの柱穴から土師器、須恵器甕片などが出土しており、これらは竪穴式住居や掘立柱建物などに近い時期の所産と見られる。

包含層からは多くの遺物が出土した。以下では代表的遺物を報告する。

21～35は、弥生時代の土器類である。何れも土

器表面の風化が著しく、詳細な観察は困難である。

21～24は、甕の口縁部である。口縁部に三角突帯を付け、上面を平坦に仕上げている。21には、突帯上に浅い刻目が施される。

25、26は口縁部を逆L字形とする。26は外方への引き出しと共に内部へも引き出ししている。

27～30は甕底部である。27、28はふんばりはないが底が厚く、上げ底となる。

31は、器台脚部である。

32、33は壺底部である。何れも僅かに上げ底となる。32は底部と胴部下半がやや厚い。

34、35は高杯軸部である。34は中期、35は内部が充填されるもので後期以降のものであろう。

36は、椀である。径約15cmで口縁下に段があり、丸底の底部に続くものとみられる。

37～57、62、63は須恵器である。

37～39は杯蓋である。口径は10.3cm (37) と13cm (38) のものがある。40～51は杯身である。口径は約11.5cmのもの (40～42)、10.5cm前後のもの (46、48)、9.5cm前後のもの (44、45、47)、9cm以下のもの (43、49、50) がある。

52は甕である。口径は8.5cmと小さく頸部も強く縮まる。

53は椀である。

54、55、63は壺である。54は肩部であり、強く屈曲する。55は胴部下半から底部である。底径約6cmで平底である。63は中型で、底部に高台が付く。底径約9cmを測る。

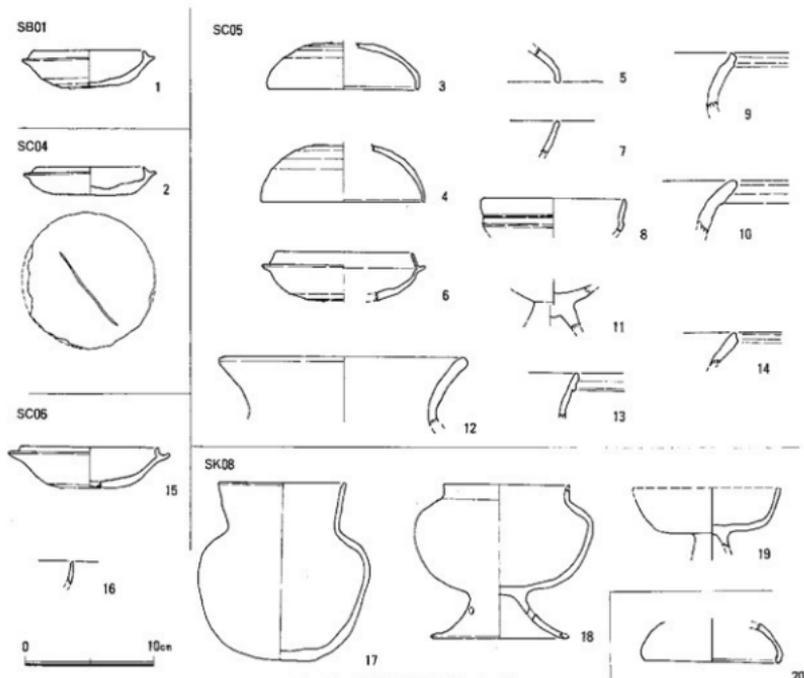


Fig. 28 遠構出土遺物 (1/4)

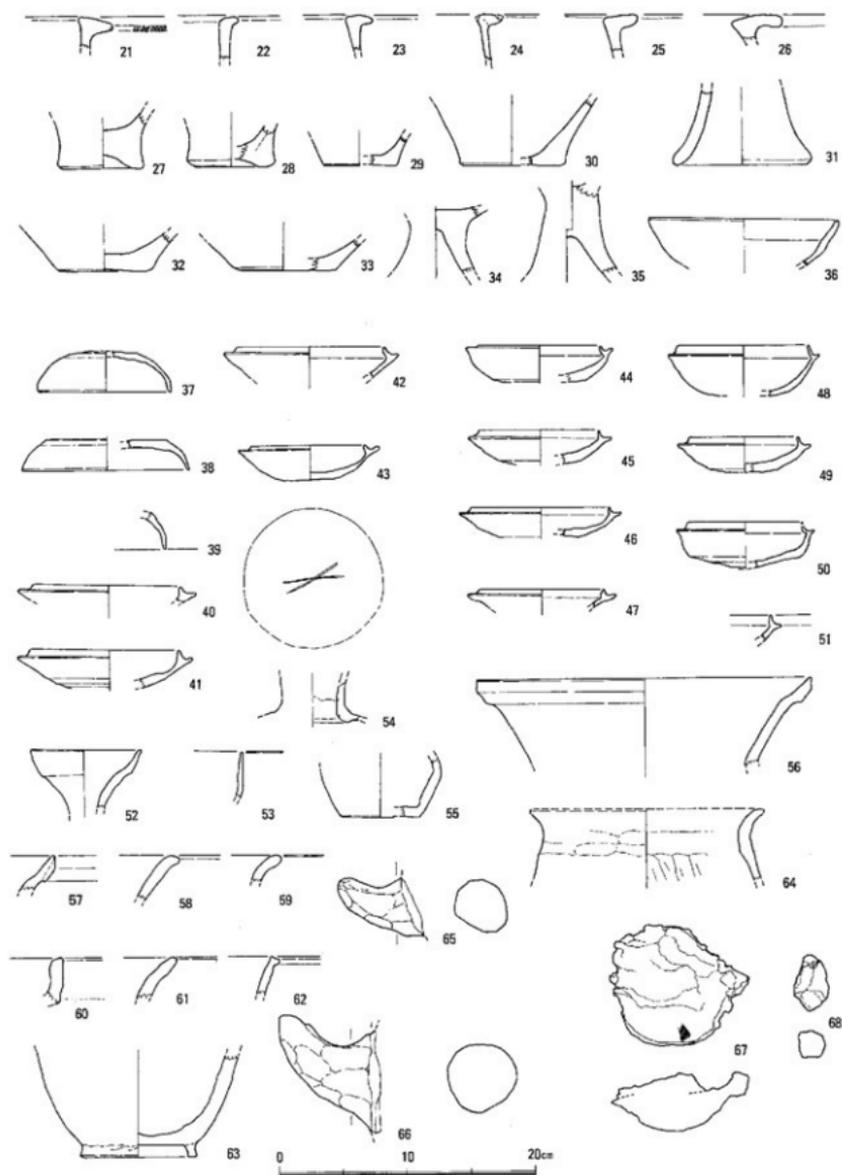


Fig. 29 その他の出土遺物 1 (1/4)

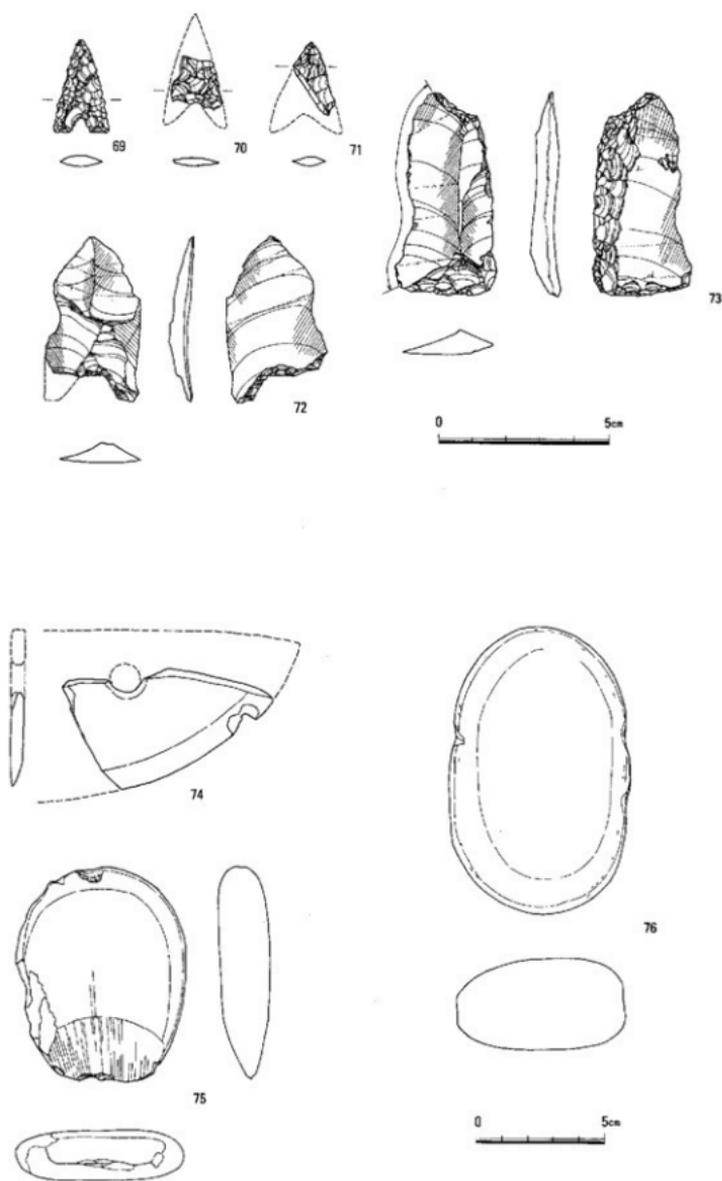


Fig.30 その他の出土遺物 2 (1/2・2/3)

56、57、62は甕である。56は口径26.3cmである。

58～61、64～66は上罽器である。全て甕もしくは甕の破片である。64は口径約18.5cmを測る。

68は鉄滓である。他に十数点の鉄滓が出土している。

69～76は石器である。剥片石器（69～73）と礫石器（74～76）がある。

69～72は石鎌である。

69は姫島産と見られる灰白色黒曜石を素材とする。完形の畝形鎌である。

70は不純物含黒曜石を素材とする。先端と両脚を欠損する。

71は古銅輝石安山岩製で先端破片である。

72は漆黒色黒曜石を素材とする剥片鎌である。素材剥片は打面両設である。長さ4.8cm、幅2.8cmと大きい。

73は削器である。端正な縦長剥片を素材とし、先端、基部、右側辺に背潰し状の調整を施し、左側辺を刃部としている。調整は裏面に対して施されている。

74は石包丁である粘板岩製であり、穿孔部を含む小破片である。

75は石斧である。砂岩の円礫を素材とし、一辺のみに研磨を加え刃部としている。

76は磨石を転用した石鎌である。玄武岩を素材とする。風化が著しい。

これらの遺物は、大まかに三時期に区分される。まず最も古いのは、縄文時代の石器類であり、縄文早期の石鎌（69）や縄文後期～晩期前半の石器（72、73）がある。次に弥生時代の遺物であり、土器類と石器類がある。土器の中には城ノ越式（21～24、27、28）や、須玖Ⅰ、Ⅱ式（25、26、29～31、33、34）、と後期終末期のもの（35、36）がある。城ノ越式には前期的なやや古相のものを含んでいる。石包丁などは中期の何れかの時期であろう。最後に古墳時代は、古墳時代後期に限られており、杯類からみて、小田富士雄編年のⅢB期からⅤ期に及ぶものである。

### 3. 小 結

D地区では多くの遺構と遺物を検出した。このうち縄文時代から弥生時代の遺物は何れも包含層からの出土であり、小片で、遺構を伴わない。おそらく、D地区の北側の丘陵上から二次的に混入したものと見られる。ただし試掘調査ではこの丘陵上からは、何等の遺構も確認できていない。ところでこれらの中で、弥生時代中期初頭の遺物は、A地区の資料と併せて今回の三苦永浦遺跡群の調査で出土した最も古い弥生時代資料である。

本地区の遺構、遺物は古墳時代後期が主体である。遺構には竪穴式住居、竪穴状遺構、掘立柱建物、柱穴などあり、切り合いが多い。施設の構築順は出土遺物から、①期：SC05→②期：SC04・SC06・SB01→③期：SB02・SB09・SB11と変遷する。①期の遺構、遺物は少なく、次の②、③期となり増加する。とは言え、建物群の規模は小さく、斜面を造成せず直接建物を建てるなど、関連する集団規模が大きいとは考え難い。これらの施設は③期の建物にみられる、母屋（SB09）と倉庫（SB02）の組み合わせを基本とする、小集団の単位の推移を示している可能性が高い。調査では③期以後の資料は認められず、この集落は③期を以て途絶えている。埋葬遺構であるSK08は③期か、その直後に設けられたものである。

なお、この中で②期のSC06からは梃形鍛冶滓や焼土、炭化物が出土し、包含層より鉄塊、鉄滓が出土している。このことから、何らかの鍛冶作業を行ったと見られる。

これらの時期の実年代は、おおよそ①期が6世紀末～7世紀初頭、②期が7世紀前葉、③期が7世紀前葉～中葉と推定している。

## 第4節 E地区の調査

### 1. 調査概要

E地区は「永浦池」と「前の池」に挟まれた丘陵尾根から北斜面にある。標高は21~15mである。調査以前は雑木林であり、今回の工事に先立つ伐開前は、下草が繁茂し分け入ることができない状態であった。伐開後、墳丘の一部と散乱した石室石材が現れ、古墳の存在が明かとなった。現況の地形観察から古墳の石室や墳丘南側は、早く畑地造成による削平で、破壊されていること、北側の地形から前方後円墳の可能性があることなどが注意された。このために、古墳の推定範囲を含めた約1,700㎡を調査範囲とした。

調査は、削平されている部分について、表土の除去を重機でおこなった。旧地形を残す北側斜面は測量の後、人力で表土から掘り下げをおこなった。墳丘には4本の土層観察ベルトを残した。調査は樹木根や動物牛痕による攪乱などで困難を極めた。石室は、相当の破壊を受け、基底部分のみが僅かに残されていた。十字ベルトを設定し、調査を進めた。攪乱を免れた床面の一部と、副葬品の断片を検出することができた。なお、墳丘外の調査区南端で、古墳以前のもつと見られる掘立柱建物や柱痕などを検出した。

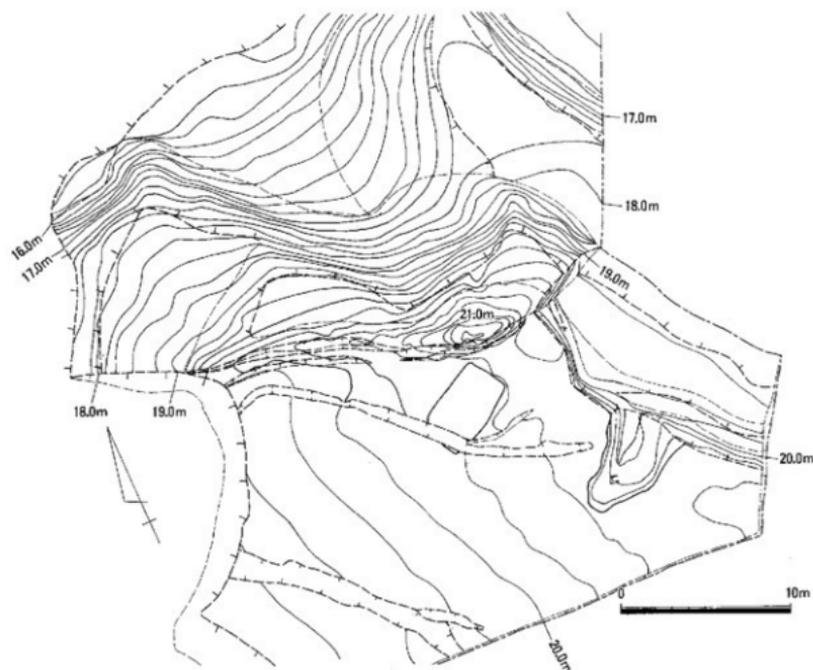


Fig. 31 E地区全体図 (1/300)

## 2. 遺構の調査

### 1) 1号墳

#### 1. 周溝

周溝は削平面の東側にのみ検出した。断面は緩いV～U字形をなす。北側斜面から6.5mの位置でせり上がり、途切れている。周溝の幅、深さは北側に大きく、南に狭くなる。溝壁面は墳丘側が急傾斜で、外側が緩やかとなる。北側で幅4.5m、深さ0.7mを測る。溝内埋土は全て流入土であり、中に黒色腐植土を挟んで、大きく三群に分かれる。下位に供獻土器の一括埋置がある。周溝の位置は主体部墓塚の中心からみて、外周で約12m、内周で約8～9mを測る。

#### 2. 墳丘

墳丘は丘陵上に開かれた畑地の北側斜面に高さ1m程の残丘として残されていた。この墳丘は現在の頂部が標高21.47mである。断面観察では標高約20.85mに旧地表面がある。したがって盛り土は0.6m程度である。この墳丘の遺存部分や北側斜面には樹齢50年以上の樹木があり、少なくとも戦後、大きく開墾された様子はない。しかし、斜面の中段や下方にみられる平坦面は、大きな樹木がなく、畑地として造成された面と見られた。この墳丘と北側斜面は、地形測量図でみるように西に向く前方後円形を呈する。括れ部付近は大きく抉れている。この抉れは一部に基盤層が露出していることから、近年に土取りが行われたと見られる。この抉れより西側では、直線的な斜面がみられる。調査ではこの斜面の中段、標高17.20m付近に段状の平坦部が検出された。この平坦部は西側に直線的にすすみ、南側へ折れている。平坦面上には、風化上とみられる硬い茶褐色の流入土が堆積しており、古墳の関

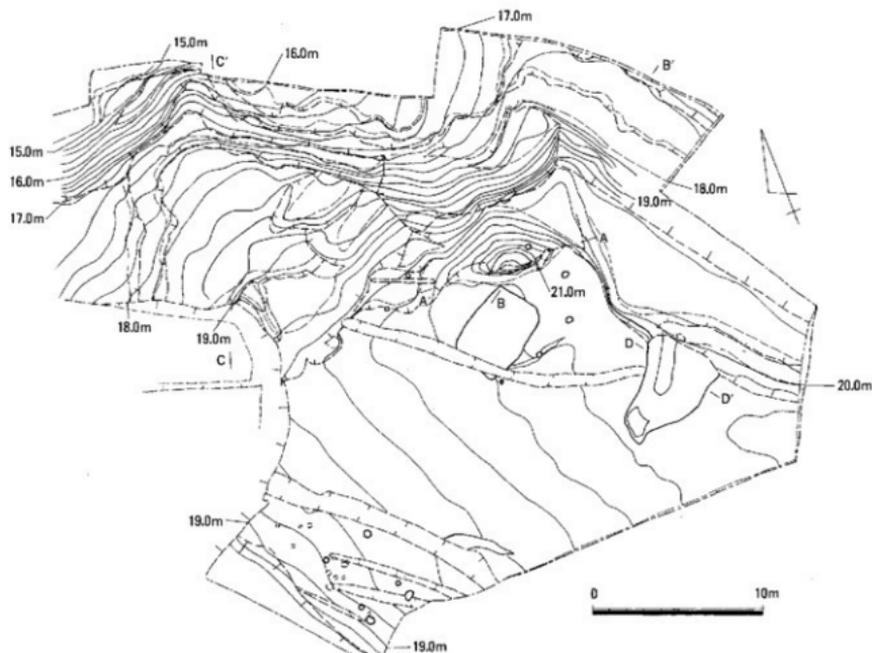


Fig. 32 永浦1号墳墳丘図 (1/300)



連施設であると見られた。しかし、この部分での斜面より上方は全て近年の造成により削平され、軟質の二次的堆積物に覆われており、墳丘盛上の痕跡は認められなかった。

### 3. 墓壇・石室

墓壇・石室は、墳丘遺存部分に接する畑地削平面で検出した。削平面は標高約20.2~20.4mであり、三紀層の岩盤である。墓壇は隅丸長方形を呈し、長さ5.10m、幅3.55mを測る。この主軸はN-63°-Eである。墓壇底は標高約20.0mでほぼ平坦である。石室基底部の設置に合わせて四周に溝を巡らしている。この溝は南西側中央で途切れていて、開口方向を示している。また、短辺である北東辺と南東辺の両脇が一段深く掘られ、それぞれ奥壁と両軸石の設置に伴う掘り方とみられた。

石室は破壊され、ほとんどの石材は抜き取られていた。北側の墳丘斜面には石材と見られる礫岩の角礫が数十個投棄されていた。墓壇基底部には2個の石材と数個の根締め石が現位置で残されていた。また、墓壇内北東側に奥壁石材と見られる玄武岩質の板石が内側に引き倒すように置かれていた。この板石は周囲を敲打により長方形に整形したものである。石材の一長辺の形状と、北東側の奥壁設置用の溝の断面形が一致することから、本来奥壁鏡石をその場で石室内側に引き倒したものと見られる。おそらく、畑地造成の際に障害となった石室材を抜き取り、最も大きいこの鏡石は埋め込んで処理したものと見られる。遺存する基底石は右側壁1番目と軸石間の仕切石である。これらと根締め石や掘り方から復元すると、本石室は右側壁が4個、左側壁が3個の基底石で構成されていたと考えられる。この復元による石室の規模は、内法で長さ3.1m、奥壁側の幅1.9m、軸石側の幅1.6mと推定される。したがって、平面形態は奥壁に広がる羽子板形をなす。また、石室の主軸はN-65°-Eを示す。

石室床面には拳大の円~亜円礫を主とする敷石が溝道側に遺存していた。奥壁側は全て抜き取られ

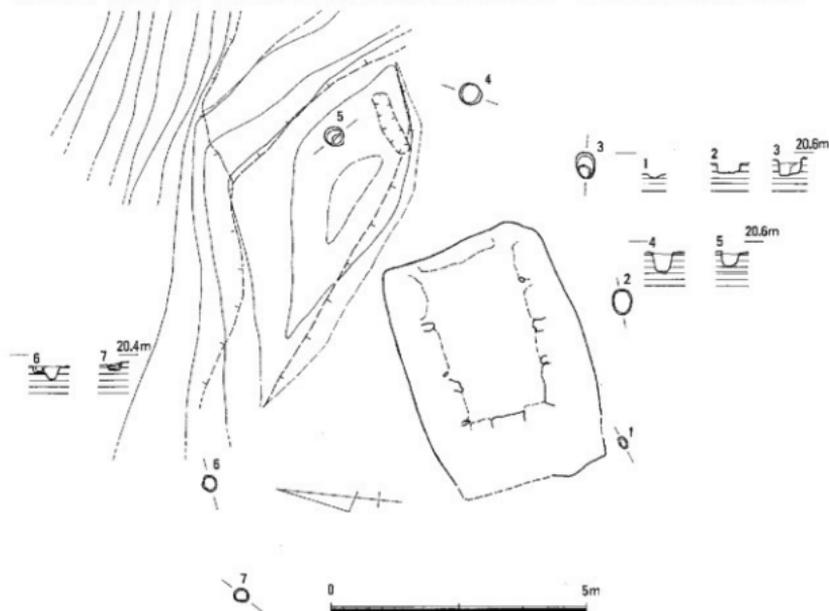


Fig. 34 地山整形状況と墳丘下柱穴群 (1/100)

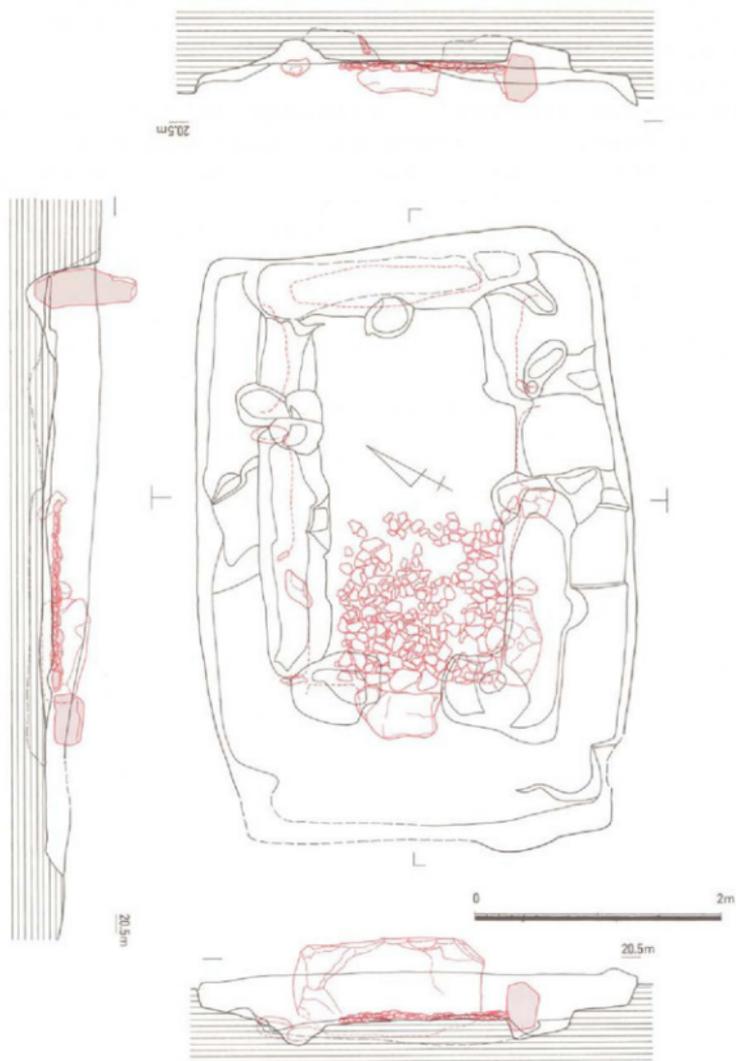


Fig. 35 永浦1号墳主体部(1/40)

ていた。敷石は墓壇床にはほぼ密着するように置かれていた。また、この敷石上には厚さ数cmの埋土を挟んでもう一面の敷石状の石群があったが、やや雑であり、床面の貼り替えであるのか、擾乱時に奥壁側の敷石を二次的に動かしたものであるかの判断はできなかった。

#### 4. 旧地表面遺構

墓壇の周囲には環状に巡る柱穴を検出した。これは墓壇の南側から東側にかけて5つの柱穴が、約2m間で巡るものである。このうち4本は削平面で検出したため墓壇との関係は不明である。しかし、1本の柱穴は遺存する墳丘内に検出し、旧地表面から掘られていると判断された。当初、古墳より古い弥生時代の竪穴式住居の柱穴と考えていたが、住居の掘り方がないこと、円形が正円でないこと、墳丘形成の直前に設けられたとみられることなどから、否定された。出土遺物はなく、性格は不明である。また、墓壇西側でも柱穴2を検出したが、やや離れており、一連のものかは明かでない。

#### 5. 副葬品・供献品出土状態

石室内は荒らされていたが、遺存していた敷石付近を中心に少量の副葬品を検出した。鉄器、玉類がある。玉類は敷石上、敷石間で出土したものと、埋土の水洗によって検出できたものがある。ガラス製の小玉類はほとんど後者である。

周溝内には、須恵器、土師器の一括埋納と破砕散布状態での出土がある。埋納は周溝内下部に方形の掘り方を設け、完形の須恵器壺1、土師器小型台付き壺4を不規則に入れている。また、北側に0.3m離れて土師器小型台付き壺1があった。掘り方内の埋土は、基盤層の二次堆積物であり、腐植土をほとんど含まない状態であった。破砕散布は周溝内中位の黒色土中に土師器、須恵器の破片が出土した。須恵器は壺（瓶）である。土師器は小片で、風化が進んでいる為に、図化は困難で器種など不明である。他に墳丘や北側斜面に少量の須恵器片が採集された。

### 2) 永浦1号墳の出土遺物

#### 1. 鉄器 (Fig.37)

石室より出土した鉄器には、鉄鏃、刀子、弓金具がある。

鉄鏃は、方頭もしくは圭頭と思われるもの（1、2）と、長頸鏃（3）の2種類及び分類不能の小片が見られる。2は刃部が失われているが、それ以外は比較的残っており、ある程度全体の形状は把握することができる。関の直下に矢柄の残片と見られる有機質の塊と、桜の皮の断片が遺存している。鏃身の断面は若干台形を呈し、関部分は片側だけ突出する左右非対称となっている。1は鏃身部分の破片のみで、やはり刃部が失われている。3は長頸鏃であるが刃部が失われているため、詳細は不明である。関部分に植物質の巻が残る。5、6はいずれも関部分の破片で、2点とも左右に突出が見られる。8は刀子と考えられるが、茎が失われ刃のラインが不明瞭であり、やや疑問の余地が残る。

弓金具は全部で7点出土した。主な部分の計測値は別表に示すとおりである（Tab.4）。材質はいずれも鉄製で、金具に直行した木目が残る。詳細は第4章4節2にゆずる。（比佐陽一郎）

#### 2. 玉類 (Fig.38)

石室内から出土した玉類には管玉、丸玉、小玉がある。管玉（10、11）は緑色凝灰岩製である。丸玉（12-17）、小玉（18-51）はガラス製である。

#### 3. 須恵器 (Fig.39)

壺、壺（瓶）がある。壺（52）は完形品であり、口唇部内面に段をもち、肩部がやや広く、頸部に櫛波状文を施す。壺（53）は胴部破片であり、口縁や底部は不明である。外面はカキ目を施す。取手（59）は提瓶の一部と見られる。

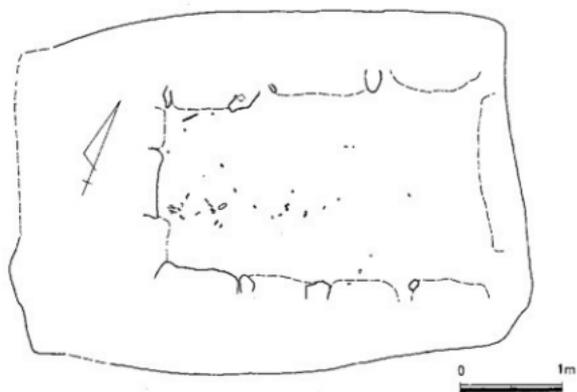
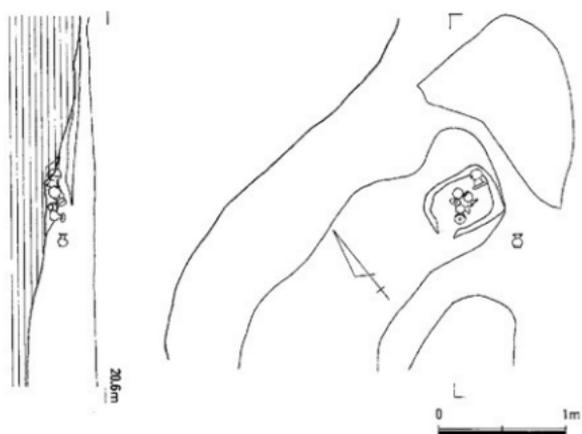


Fig. 36 永浦1号墳遺物出土状況 (1/40・1/50)

#### 4. 土師器 (Fig.39)

小型の付付き壺(54~58)は、基本的に共通した器形と胎土、焼成をもつ。広い口径と短い口縁部をもち、口径7~8cm、器高9~10cmを測る。

#### 3) そのほかの遺構と遺物

E地区では、この1号墳以外に掘立柱建物、柱穴などの遺構と土器片、石器類の遺物を検出した。

#### 1. SB02 (Fig.40)

1号墳主体部の南側にある、主軸をN-13°-Wにとる梁行一間、桁行一(二)間の建物である。柱間の間隔は、梁行が2.7mであり、桁行は南に偏った位置に添え柱状の柱穴1があり、それぞれ3.3mと0.9mを測る。東側の桁柱には建て替えの跡がある。柱穴の掘り方は60~30cmの不整形を呈し、深さは20~30cmを測る。柱痕は認められなかったが、内側の添え柱状の柱穴では径20cm前後の痕跡がある。柱穴内からは少量の土器片が出土したが、時期を決めるものはない。また、柱穴内から縄文時代後期から晩期と見られる緑色凝灰岩製の小形の勾玉が出土したが、整理中に失ってしまい、報告できない。

#### 2. そのほかの遺物

E地区では、1号墳墳丘内、古墳北側斜面、SB02周辺で少量の遺物が出土した。遺物には弥生時代土器類、古代須恵器、縄文時代石器などがある。

60、61は、甕形土器の口縁部である。口縁部外方に粘土帯を貼りつけ、やや引き出している。

62は、広口壺口縁部であり、口縁内面に粘土帯を貼りつけ、未発達な鋤先口縁をつくる。

63~65は、甕底部破片である。65は底が厚く、上げ底である。

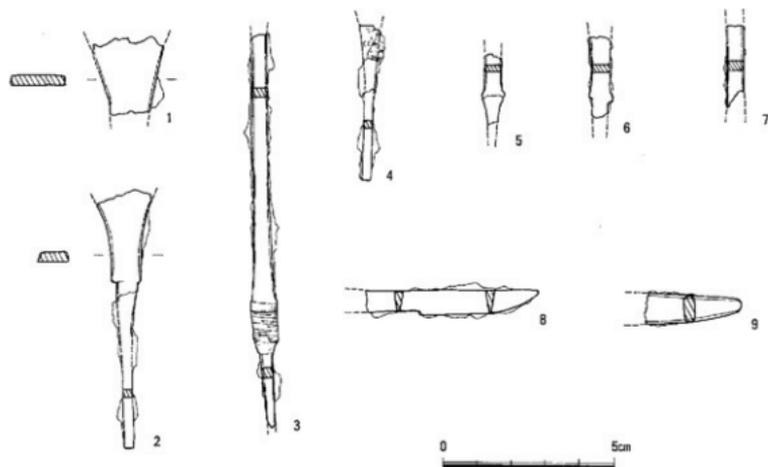


Fig.37 永浦1号墳出土遺物鉄器 (2/3)

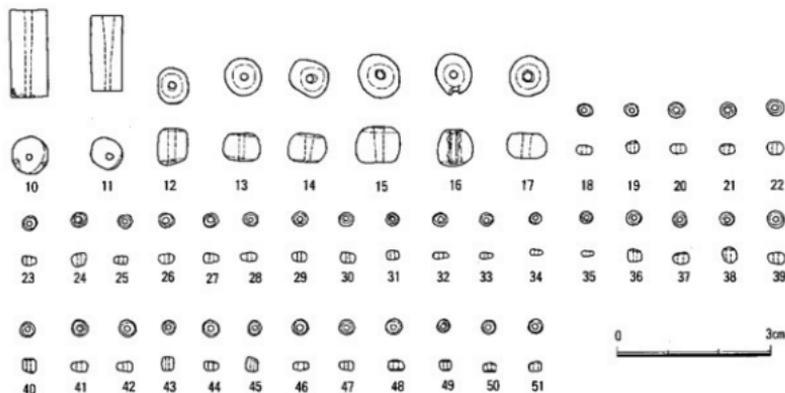


Fig. 38 永浦1号墳出土遺物玉類 (1/1)

以上の弥生時代土器類は、城ノ越式の新相に位置付けられよう。

66は、須恵器杯身の底部である。断面方形の高台をつける。

67～72は石鏃である。67は風化の進んだ黒曜石製である。

68は灰色黒曜石製であり、僅かに抉れる。片脚欠損。

69は黒曜石製であり、僅かに抉れる。先端部欠損。

70、71は鋸歯縁鏃である。70は流理の多い灰色黒曜石製である。71は半透明黒曜石製である。片脚欠損する。

72は漆黒色黒曜石であり、先端、両脚側面を欠損する。

73は漆黒色黒曜石であり、不定形剥片を素材とする挿器である。下縁部に刃部の形成がある。

74は石鏃の未製品か。縦長剥片の基部の周囲に二次調整を施している。

75は古銅輝石安山岩製の石匙である。風化が強く、灰色となる。平面は三角形に近く、つまみ部は入念に整形している。

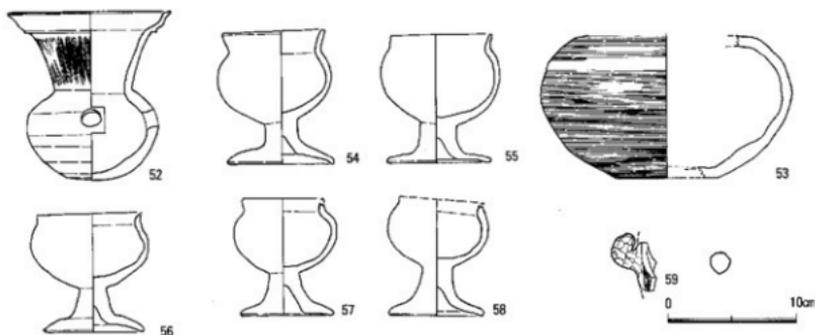


Fig. 39 永浦1号墳出土遺物須恵器・土師器 (1/4)

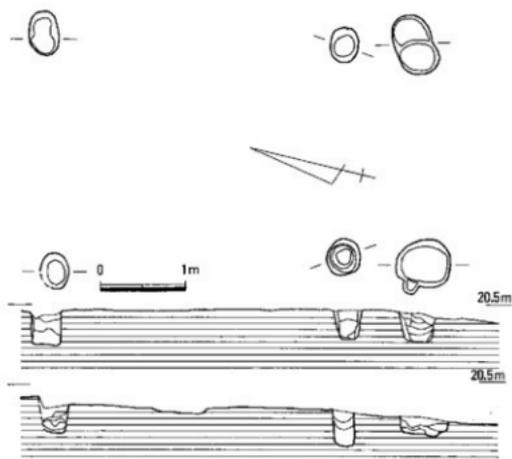


Fig. 40 SB05 (1/60)

76は古銅輝石安山岩製の柳葉形尖頭器であり、風化が強い。基部を新しく欠損するが、推定で長さ9.5cmとなる。

77は変成岩製の打製石斧である。完形品であるが、刃部周辺は潰れ状の剝離が入り、本来はより長いものであったと見られる。軟質の石材を利用し、縁辺部の加工で整形しており、いわゆる「偏平打製石斧」に含まれるものであろう。

78は大型蛤刃石斧の基部である。石材は今山産玄武岩である。古く破損している。遺存する大きさは長さ13cm、幅8.1cm、厚さ約5.5cmであり、本来の大きさは長さ20cm程度であったものと見られる。

79は石錘である。円礫を用い長軸の両端を打ち欠き、製作している。

以上の石器の時期は、三角鏃、石匙、尖頭器が縄文時代早期に比定されよう。また、鋸歯縁鏃は縄文前期から中期前半頃に多く認められるものであり、この範疇に考えておきたい。「偏平打製石斧」は縄文時代後期後半から晩期に多く、那珂川、御笠川流域の福岡平野ではこの石材の利用も多い。した

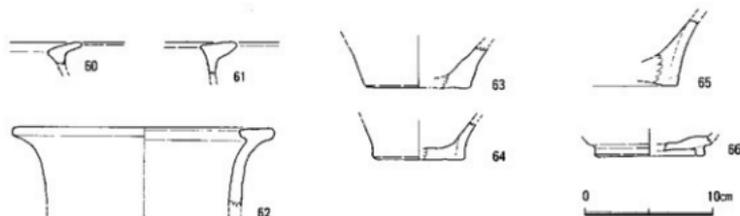


Fig. 41 その他の出土遺物 1 (1/4)

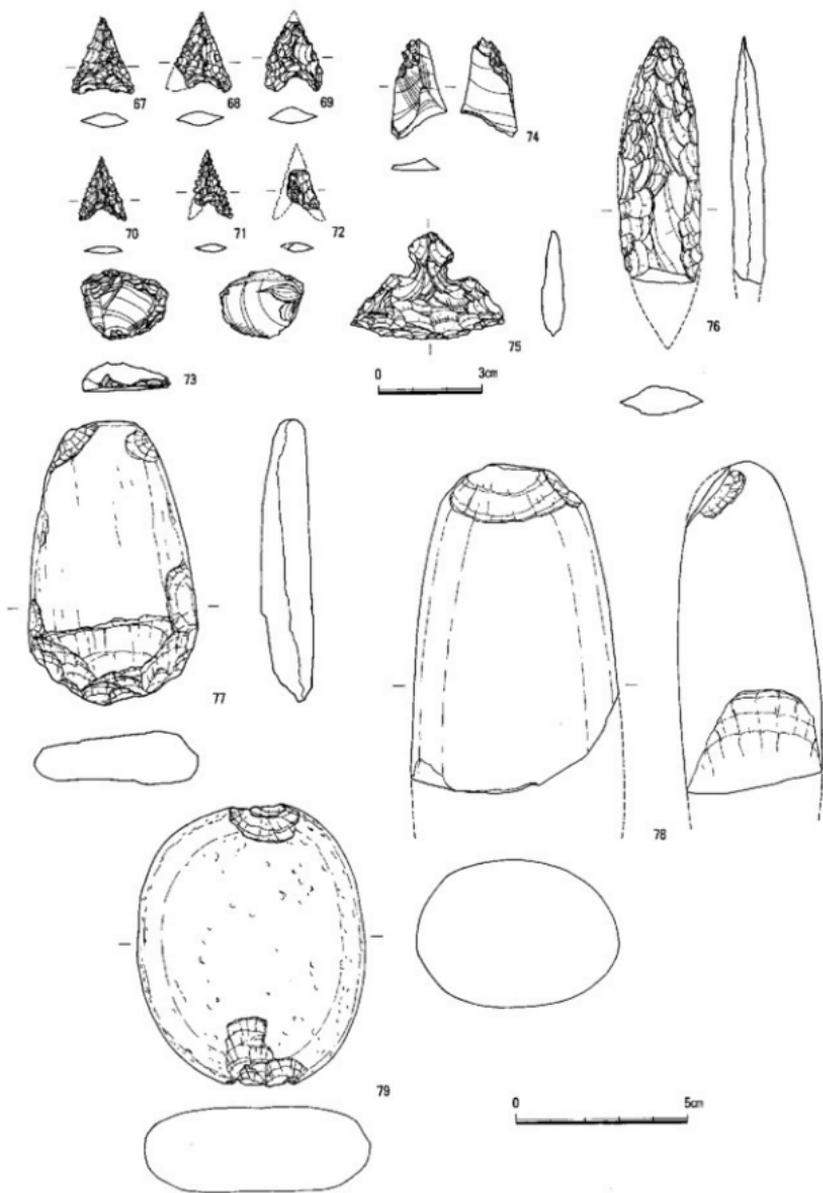


Fig. 42 その他の出土遺物 2 (2/3)

がって、この時期に比定されよう。磨製石斧と石鎌はその特徴から出土した弥生時代土器類と同じ弥生時代中期前葉の所産と考えておきたい。

### 3. 小結

D地区では古墳と掘立柱建物、柱穴などの遺構、さらに各時期の遺物が出土した。

縄文時代は遺物のみであるが、早期、前～中期、後～晩期の三時期を確認した。これらの性格については、後述したい。

本地区で検出した永浦1号墳は保存状態が悪く、墳丘、石室が大きく破壊され、本来の規模を復元することが困難である。ここでは、調査で明かとなった点をまとめ、推定される規模、構造を示しておきたい。

調査の結果、永浦1号墳は前方後円墳の可能性が高い。ただし、墳端を示す周溝や地山整形は北側斜面側にもみ検出されたことから、古墳は均整のとれた左右対象形であるとは考え難い。北側から見える範囲を整形、築造し、南側は大きな掘削を行わなかったと考えられる。したがって墳丘形態も企画性を把握することが困難とみられる。

墳丘規模は北側の地山整形などから取って復元するしかない。周溝内縁を墳端とすると、主軸がおおよそN-65°-Wで、後円部径18～20m、前方部長約12m、墳丘全長約28mという数値となる(Fig. 43)。

主体部は横穴式石室であり、相当の破壊があったが、内法が長さ3.1m、幅1.6～1.9mと復元された。平面は奥壁に向かって広がる古式の形態を取る。石室の壁面、天井、羨道部の構造は不明であるが、削平面より石室床が低いことから、入り口が石室へ向かって下がる形態を取っていたと見られる。

副葬品の遺存は僅かであるが、鉄製武器(弓、鏃)と装身具(玉類)が出土した。このうち弓金具をもつ「飾り弓」が2張りあったことが、後述の比佐氏の検討で明かとなった。

供献品は周溝内や、墳丘から少量出土した。周溝内に埋置された須恵器、土師器は本墳築造初期のものと考えられる。土師器の小型台付き壺を用いた儀礼も、類例が少なく、小規模墳ではみられぬものである。

以上のように、本墳は小規模の前方後円墳と復元したが、石室は比較的大きく、副葬品や供献品に他の群小古墳と一定の較差を認めることができる。

本墳の時期は、出土した須恵器が小田富士雄編年のⅢA～ⅢB期、陶邑のTK10～TK43併行期に相当すると見られる。石室形態が古く、初期の供献遺物の須恵器壺を初葬時とみると、この型式幅は初葬と追葬を含めた本墳の経営期間を示していると考えられよう。



Fig. 43 永浦1号墳墳丘復元図 (1/400)

## 第5節 F地区の調査

### 1. 調査概要

F地区は、E地区の北側に隣接する丘陵頂部にある。調査前は、ほぼ平坦な畑地であり、墳丘の痕跡は認められなかった。標高は約19.2mである。丘陵の東側に沿って下和白塩浜から湊集落に抜ける幅2m程の旧道がある。この道路に沿った丘陵斜面に石室石材を利用したと見られる石積が造られていた。道路は明治年間には利用されている。また、この一帯の農家の方に古墳や石積について言い伝



Fig.44 F地区全体図 (1/300)

えなどを聞き取ることはできなかった。

調査は丘陵上の畑地耕作土を重機で除去し、その後、手作業で遺構検出と調査を行った。遺構は墓壇と周溝の一部のみである。ほかに近世以降の畑地耕作にともなう溝、井戸などや、径1~2mの木根の抜き跡が列状に現れた。これは三苫一帯において玄界灘からの防風対策として、地形境界に沿って樹木を植える場合が多く、このF地区も丘陵頂部で風が強いためにこうした植樹があったものと見られた。遺構検出面は三紀層の岩盤が露出し、相当の削平があったと見られた。F地区の調査面積は1,803㎡であった。

## 2. 永浦2号墳の調査

### 1. 周溝

試掘トレンチで周溝の痕跡と見られる落ち込みを南北2カ所で確認した。何れも北側斜面から発し、数mで終息している。北側の溝SD01は、幅2.1m、深さ0.05mを測り、南側の溝SD02は遺構検出段階でほとんど床面に達し、幅2.0mのシミ状の平面を認めるだけとなった。削平面南側で、東西方向の溝(SD03)を確認した。溝は幅0.8~0.5m、深さ0.1mを測り、溝内からは、須恵器片や近世陶磁器片が出土したことから、畑地削平以前の耕作地にもなう区画溝であろうと推定された。

### 2. 墳丘

調査の結果、本古墳の墳丘は全く遺存していない。墳丘を復元する手がかりはないが、墓壇中心から先の周溝内辺まで9~10m、外周まで11~12mを測る。したがって、本古墳の主体部を囲む墳丘は、周溝内辺を墳端とすると径18m前後と推定される。また、耕作土を除去した後に現れた樹木の抜き跡列は、北側でSD01を切り、延長線に沿っており、削平以前の古墳の墳形を反映しているものと見られた。

### 3. 墓壇・石室

墓壇・石室は、畑地削平面中央で検出した。削平面は標高約19.0~18.6mである。墓壇は隅丸長方形を呈し、長さ4.20m、幅2.80mを測る。短辺の東側に幅0.5m、長さ0.4mの突出した掘り方がある。また、西側にも同様の突出がある。墓壇の主軸はN-69°-Eである。墓壇底は標高約18.8mでほぼ平坦

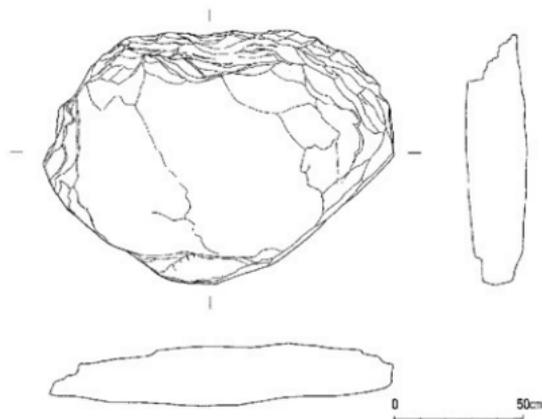


Fig. 45 永浦2号墳奥壁に利用されたとみられる転石 (1/20)

である。石室基底部の設置に合わせて四周に溝を巡らしている。この溝は西側で途切れていて、開口方向を示している。短辺である北東辺と南東辺の両端が一段深く掘られ、それぞれ奥壁と両軸石の設置に伴う掘り方とみられた。ただし、奥壁側は大きく破壊している。これは奥壁石材を抜き取るためのものと見られる。掘り方の最深部に抜いた石のスタンプが残されていた。石室は破壊され、全ての石材は抜き取られていた。基底には数個の根締め石が一部避難、一部原位置に残されていた。また、E地区東側斜面の石積みから奥壁

石材と見られる玄武岩質の板石を確認した。この板石は周囲を敲打により整形したものである (Fig. 45)。石材の一長辺の平面、断面形状と、北東側の奥壁抜き取り跡のスタンプの断面形が一致することから、この石材が本古墳の奥壁であったことを確認した。遺存する基底石の抜き跡と根締め石から復元すると、本石室は右側壁が3個、左側壁が4個の基底石で構成されていたと考えられる。この復元による石室の規模は、内法が長さ2.8m、奥壁側の幅1.6m、軸石側の幅1.5mと推定される。



Fig. 46 永浦2号墳主体部 (1/40)

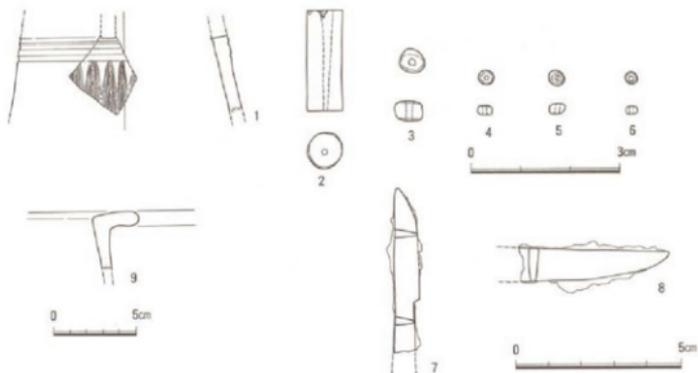


Fig. 47 F地区出土遺物 (1/1・2/3・1/3)

したがって、平面形態は奥壁が僅かに広がる長方形をなす。また、石室の主軸はN-69°-Eを示す。石室床面には径3cm以下の小円礫を主とする敷石が羨道側に遺存していた。奥壁側は全て抜き取られていた。敷石は墓床面に5cm前後の埋土をおこない、整地した後に入れられていた。敷石は雑然と2~3層になり、厚さ2~5cmを測る。

#### 4. 出土遺物 (Fig.47)

石室内床面からは鉄器と玉類が出土した。周溝内などからの遺物の出土はなく、近世溝SD03から須恵器器台片が僅かに出土した。二次的な流込みであろう。鉄器には、鉄鏃と刀子がある。いずれも破片がそれぞれ1点ずつのみであった。7は長茎脇扶片刃鏃の刃部である。8は刀子の破片と考えられる。玉類には、管玉(2)と丸玉(3)、小玉(4~6)がある。管玉は緑色凝灰岩、他はガラス製である。須恵器は器台破片(1)がある。脚台部分であり、長方形透かし、凹線、櫛描き波状文がある。他に弥生時代甕片(9)が出土した。

### 3. 小結

F地区は、後世の削平により遺構の保存が悪い。しかし、1基の古墳を検出した。その復元は困難であるが、周溝、近世溝、木根抜き跡などから、小規模な前方後円墳と推定される(Fig.48)。あえて図上で復元するならば、ほぼ東西主軸で後円部径約18m、前方部長約9m、墳長約26mとなる。古墳の時期は明かでないが、あえて位置づけを試みると、石室が1号墳より古い特徴をもつこと、須恵器器台片が小田編年によるII~III A期頃と見られる。陶器MT15併行期と推定できよう。

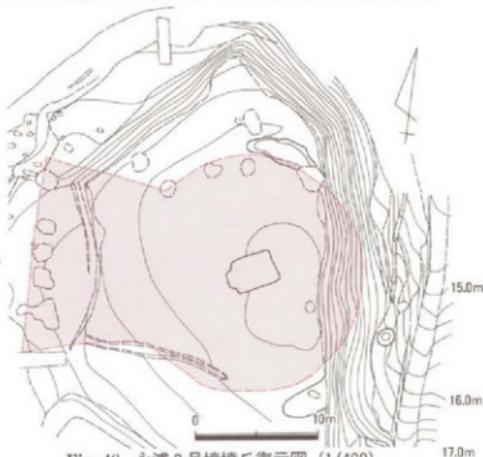


Fig. 48 永浦2号墳墳丘復元図 (1/400)

## 第6節 H地区の調査

### 1. 調査概要

H地区は、「前ノ池」の南東に位置し、池へ連なる2つの谷部分である。谷底は「前の池」のある標高4～5m付近から7～8mまでは緩やかな傾斜であるが、やがて急斜面となり、標高15m付近で再び緩やかとなり、谷底も広がる。この部分が調査範囲であり、標高は15～27mである。ここの南側は現在は住宅地となっているが、1970年の区画整理以前は30～40mの丘陵地帯であった。古地図や写真資料でみると、谷はさらに調査範囲から南に100m弱程伸びていたことが分かる。調査範囲は荒地であったが、近年まで畑と水田が開かれていた。水田は2つの谷のうち西側の谷にのみあり、幅の狭い谷水田である。水分が多く、湿田状をなしている。この谷が周辺では最も湧水が多く、そのために斜

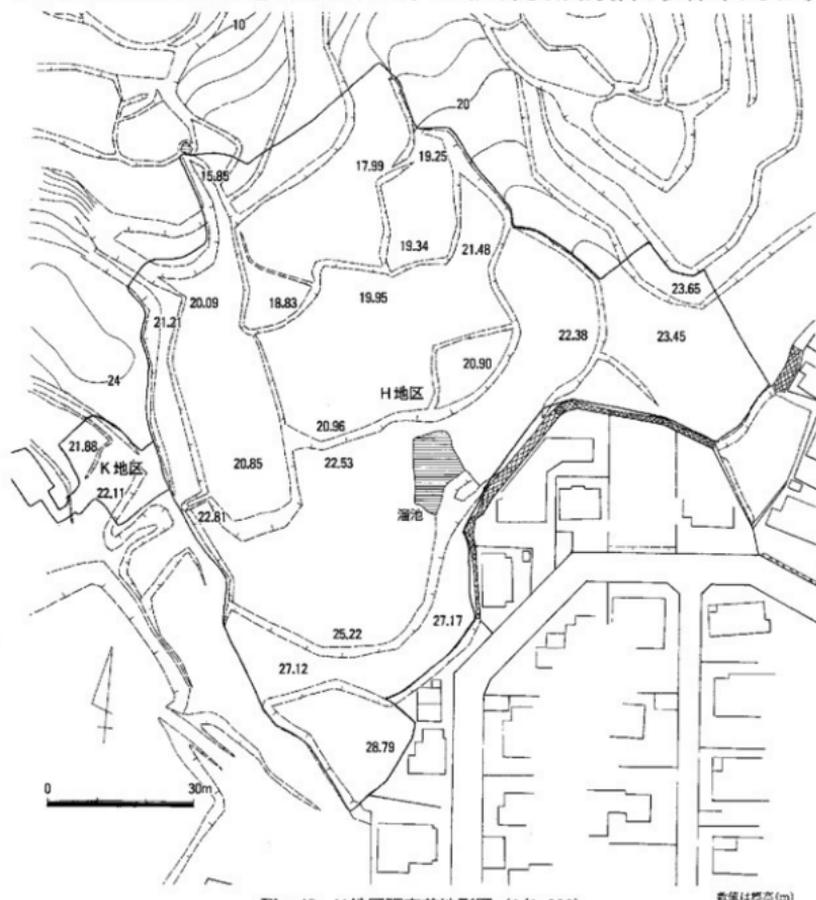


Fig. 49 H地区調査前地形図 (1/1,000)

数値は標高(m)

面の各所に小規模な溜池が設けられている。また、下方の溜池「前ノ池」の水源ともなっている。地元では、この緩やかな谷部を「天河原（あまがわら）」と呼称している。

調査は、試掘成果を基に住居跡や溝などのある東谷部から掘削を始め、西谷部の包含層（後で「溜井」と判断した遺構）のある範囲はその後の掘削とした。表土や、包含層までの厚い埋没土は全て重機で除去することとした。調査を進めていく過程で、湧水の多い西谷部の包含層が明瞭な不整合を示し、谷下方に下がるのではなく、完結した長楕円形の平面形をとることが明かとなった。しかも、こうしたものが調査区内に数基分布していることがわかり、何らかの遺構であろうと見られた。このため、遺構の土層観察と遺構であるかの判断のために人為的掘削面の確認に重点を置き調査を進めた。H地区の調査期間中の福岡は記録的な雨不足であったが、この遺構は連日の排水が必要であった。

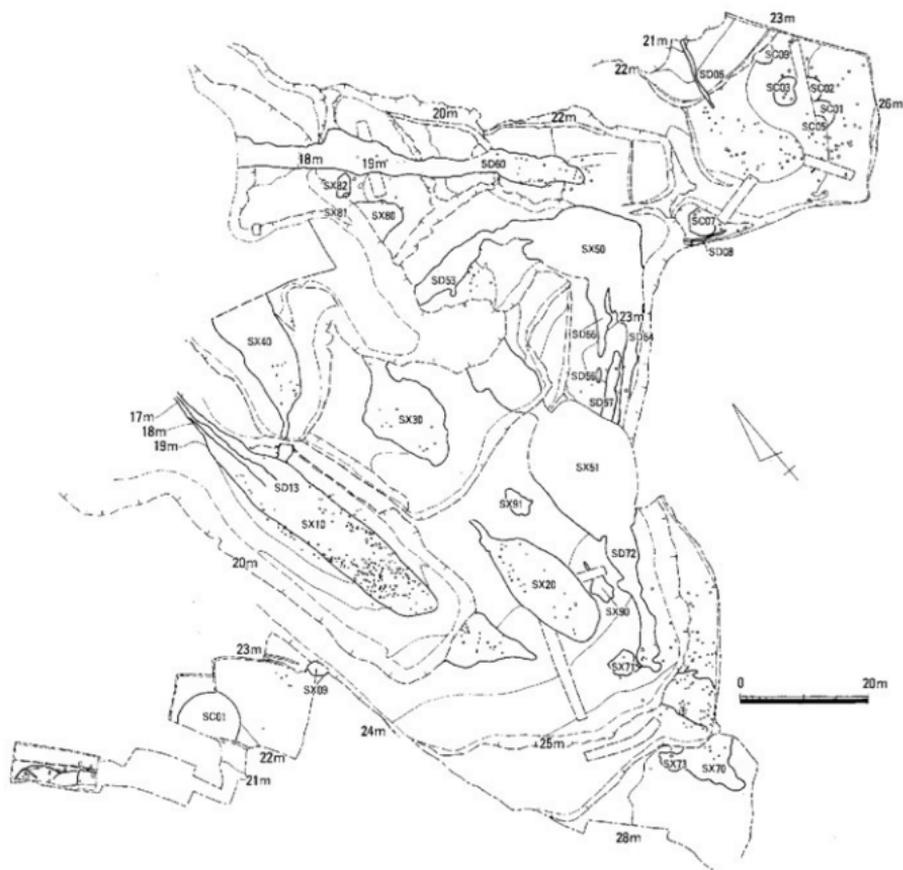


Fig. 50 H・K地区全体図 (1/800)

## 2. 遺構と遺物

H地区で検出した遺構には、竪穴式住居跡7基、溜井9基、土坑、溝、柱穴などがある。住居跡、柱穴などは東谷の谷頭付近に分布し、溜井は西谷に分布している。

### 1) 竪穴式住居跡

#### SC01 (Fig. 52)

調査区の東端に位置している。谷頭の窪地に面する西向きの緩斜面に立地する。標高は約25.4mである。住居は切り合いがあり、西側でSC05が切り、北側で切り合い関係は不明だがSC02と接する。住居は隅丸方形の小型であり、西側の斜面下方は削平により失われている。南北3.7m以上、東西3.2m以上を測る。深さは最大15cmである。床面は平坦であり、中央に焼土、炭化物のある隅丸方形の土坑がある。土坑は0.7×0.8m、深さ0.2mを測る。柱穴は明確でなく、北～西側の外壁に近い位置に径15～20cmの柱穴2を検出したのみである。

住居跡内埋土は、自然流入と見られる腐植土であり、床面よりやや浮いた位置に土器片、石器が出土した。土器には甕底部 (Fig.57-1) と器台 (2) があり、石器には敲打石錘 (3) がある。遺物が少なく明確でないが、土器は須玖Ⅱ式に相当しよう。

#### SC02 (Fig. 53)

SC01の北側に位置し、切り合うと見られるが、境界部分が不明瞭であり、前後関係は不明である。

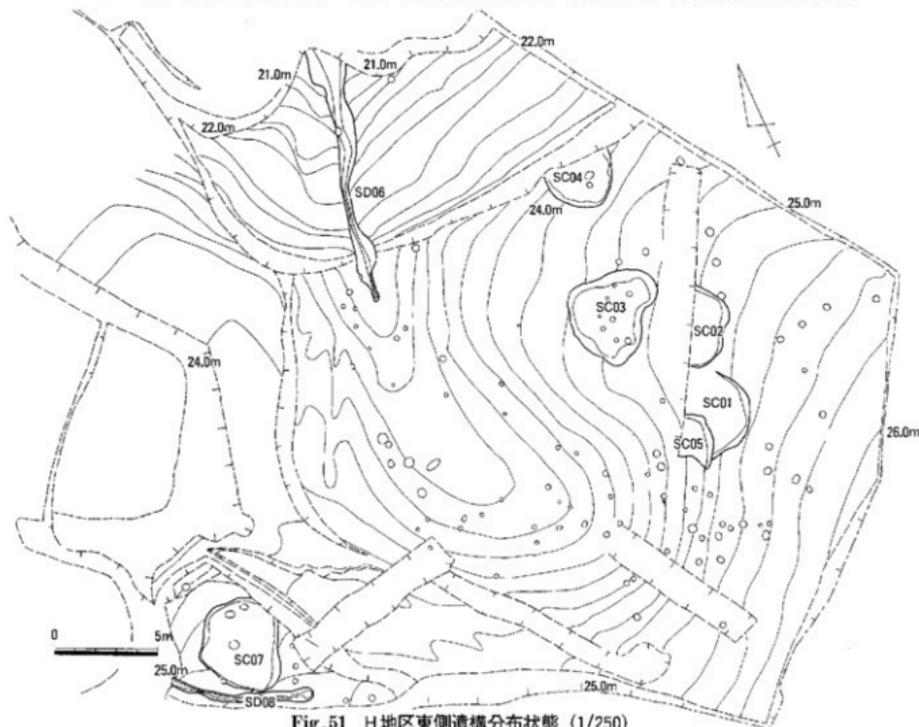


Fig. 51 H地区東側遺構分布状態 (1/250)

平面は隅丸方形を呈し、小型であり、西側の斜面下方は削平により失われている。南北4.0m、東西2.1m以上を測る。深さは最大25cmである。床面はやや凹凸がある。中央穴や柱穴は未検出である。

住居跡内埋土は、自然流入と見られる腐植土であり、北側床面上に土器片と石器が出土した。土器には壺口縁部 (Fig. 57-4)、甕底部 (5) があり、石器には切目石錘 (6) がある。遺物が少ないが、土器は須玖Ⅱ式に相当しよう。

#### SC03 (Fig. 54)

SC02の西側に位置し、切り合いはないが、SC02に近接する側面が避けるようにへこんでいる。平面は一隅を欠いた隅丸方形を呈し、小型である。南北4.3m、東西4.5mを測る。深さは20~30cmである。床面はやや凹凸がある。中央穴は不明である。柱穴は床面で4つ検出した。径20~30cmであるが主柱は不明である。

住居跡内埋土は、自然流入と見られる黒色の腐植土であり、北側覆土中に少量の土器片が出土した。土器片は弥生時代に所属すると見られるが、図化できるものはなく、詳細は不明である。

#### SC04 (Fig. 55)

SC03の北側6mに位置し、畑地の切り通しにより、下側半分を失う。平面は隅丸長方形を呈し、小型である。主軸はN-55°-Wであり、長辺約3.0m、短辺約2.7mを測る。深さは最大20cmである。床面は凹凸がある。中央部の床2カ所に浅い掘り込みをもつ焼土面があり、近接して柱穴2を検出した。

住居跡内埋土は、自然流入と見られる腐植土であり、覆土中に土器片が出土した。土器には壺口縁部 (Fig. 57-7~9) がある。7は跳ね上げ口縁、8は須玖式、9は肩部である。資料が少ないものの、土器は須玖Ⅱ式の範疇に相当しよう。

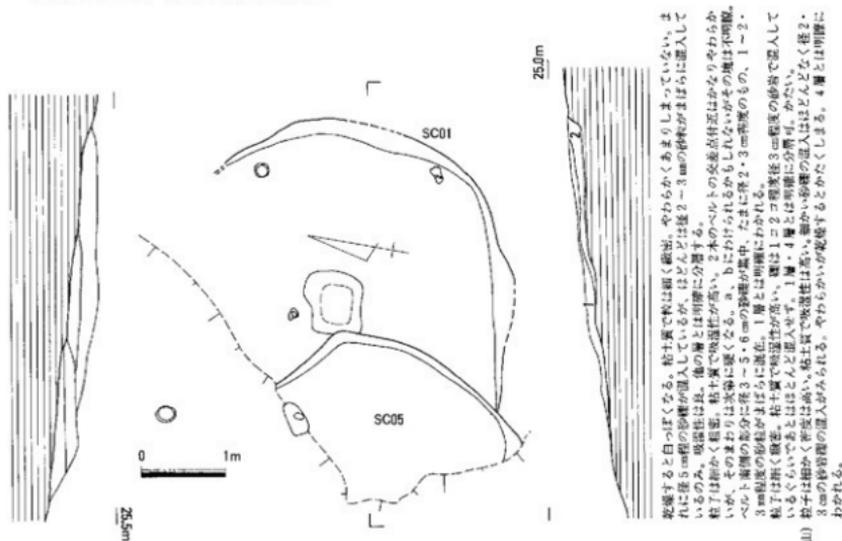


Fig. 52 SC01・05 (1/60)

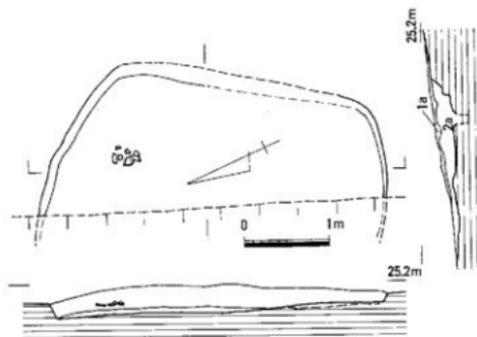
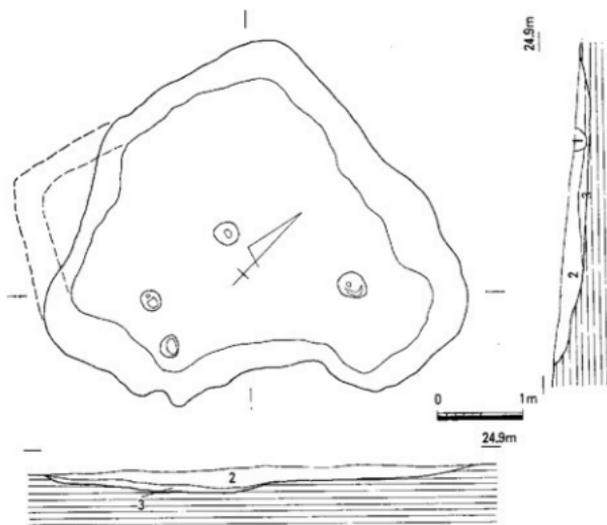


Fig. 53 SC02 (1/60)

- 1a. 暗褐色(硬質・砂質)土  
 粘質はあまりなく程度はこまかい。径3~15cm程度の砂粒を含み、包含物としては土器・土甎を含んでいる。また遠くと黒くなり硬くと白くになる。1層と2層の間に明確に分層できない。
- 1b. 暗褐色(軟質・砂質)土  
 粘質は1a層より色が濃い点以外にたいした差はない。1a層とは明確に分層できない。
- 2a. 褐色(硬質・粘質)土  
 粘質が高く程度はこまかい。径3~15cm程度の砂粒を多く含む。包含物としては層の上位から土器片を含む。2層と3層の間は3つの色が混ざっているが明確に分層できる。
- 2b. 暗褐色(硬質・粘質)土  
 粘質はあまり多くなく、程度はこまかく土は砂粒の多い。2層と3層と明確に分層できる。
3. 明褐色(硬質・粘質)土  
 粘質はあまり多くなく程度はこまかい。器人物はあまり多く1a・2a層と切り合っている。包含物はな
4. 濃褐色(硬質・粘質)土  
 粘質はあまり多くなく程度はこまかい。器人物はあまり多く1a・2a層と切り合っている。包含物はな



1. 黄褐色軟質土 (田畑上層) 擾乱中埋土  
 5m以下の白色地山礫を多く含む。硬くしめる。クラック発達する。下面は凹凸気味。漸次変化する。炭化物を含む。炭土片少量含む。
2. 黒褐色土  
 5~20cm次の地山礫多く含む。全体にやや茶色気味。下面はわりと平坦に地山と分離する。硬くしめる。
3. 黒褐色礫混じり土  
 5~20cm次の地山礫多く含む。全体にやや茶色気味。下面はわりと平坦に地山と分離する。硬くしめる。

Fig. 54 SC03 (1/60)

SC05 (Fig.52)

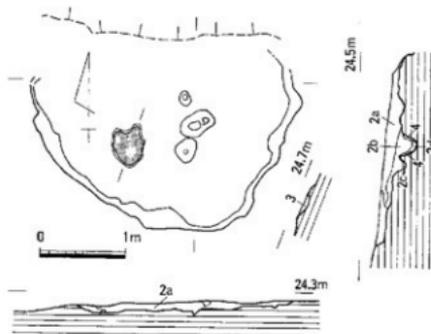
SC01の西側を切る。全体に保存状態は悪く、西側は斜面が急となり、下側半分を失われている。隅丸長方形の隅部を検出した。南北2.7m以上、東西2.0m以上を測る。遺存する深さは最大15cmである。床面は平坦である。

住居跡内埋土は、自然流入と見られる腐植土であり、覆土中に石器が出土した。石器は石鎌 (Fig.57-10) である。石材は古銅輝石安山岩であり、風化が進んでいる。風化や石材、形態から弥生時代のものではなく、縄文時代のものと思われる。

SC07・SD08 (Fig.56)

SC01～SC05とは谷頭の窪地を挟んで対面する西側の位置にあり、北に下がる狭い尾根上であり、緩斜面上に立地する。西側7mで溜井SX50に達する。南側は調査区境界の宅地造成の石垣が迫り、他の三方は後世の造成で削平されている。住居の平面形は不整形円形であり、南北5.0m、東西4.6mを測る。遺存する深さは最大30cmである。住居床面はほぼ平坦であり、床面の数カ所に焼土面や、炭化物の集積が認められた。床面に10数カ所の柱穴が検出されたが、規則性はなく、支柱は不明である。また、床面東側に浅い掘り方があった。住居跡内埋土は、自然流入と見られる腐植土であり、床面よりやや浮いた位置に土器片、石器が出土した。土器には甕口縁～胴部上半 (Fig.58-1～4) と底部 (5～9) がある。口縁部は全て跳ね上げであり、4は口縁下に二条の三角突帯がつく。底部のうち、9は丸底であり、成形も異なる。後出時期の混入かと思われる。石器には切目石鎌 (17)、砂岩製の砥石 (18) がある。

また、住居の南～西側の外側に溝状の遺構SD08を検出した。溝は住居外縁に沿って0.4m離れて並行している。尾根を横切るように設けられ、検出面で幅、深さを測る。住居の南側で途切れ、長さ9.3mを確認した。溝内には甕を伏せた状態で4個体が並べられている。ただし検出段階には胴部上半が



1. 白褐色土 かなり白に近い褐色。粒は小さい。密度は高く硬く詰まっている。径1～2mm、大きいところで5mm程度の粒がところどころに見受けられるが、それほど多く混入はしていない。吸水性はかなり悪い。この層より須器が見つかった。5a層・5b層・5c層に対し、はっきりと層がわけられる。粘性は低い。
- 2a. 黒色土 少し落めの黒色。粒は小さく密度が高い。断面右に行くにつれて径3～5mm程度の砂岩の粒が入ってくる。左端の方は砂岩粒はほとんど混入しておらず、大体ビッドの付近からあらわれてくる。吸水性はかなり悪い。1層と5a層とははっきり分層がわけている。かなりかたくなっている。粘性は低い。
- 2b. 黒色土 2a層に比べ色が少し褐色に近いが後の粒度、粘性、かたさ、吸水性はほとんど同じ。唯一特徴的な違いは2b層の方が径3mm以上の砂岩の混入が多い。断面左側では大きいもので径5mmの大きい砂岩粒子が右側に行くにつれて、径0.5～1cm程度の小さい粒子になる。5a・5c層ともはっきりと分層できる。
- 2c. 黒色土 やや褐色に近い黒色。粒子は細く緻密。かたさ、粘性、吸水性は2b層と混入。下の4c層とは色によって分層可能。4c層とはかたさでははっきり分層できるが2b層とは砂岩の混入でしか分層出来ない。
3. 褐色土 かなり強い赤色が果状に混入している顕著褐色土層。粒子は細かく、緻密。かなりかたくなっている。吸水性はほとんどかわらない。5a層に比べると砂岩粒の混入が若干多い。径1～2mm程度の砂岩粒子がばらばらに入っている。イレギュラー的に径1～1.5cm程度の砂岩粒が混入している。2a層とははっきり分層出来る。
- 5c. 茶褐色粘質土 (地山) 茶色。若干粘土層。粒子は細く緻密。5a層よりはかたいが、2a・2b層よりはかわらない。粘性は5a層程高くない。砂岩粒子がかなり混入している。径1～2mmから径2mm程度のもまでがばらばらに混入している。しかし2b層の中で最も大きい粒子を持つ部分の真下に、5c層の中の比較的大きな粒子が混入しているが径は大きくても1～2cm程度のもの。

Fig.55 SC04 (1/60)

遺存しているのみであった。出土した甕（10～13）は、全て跳上げ口縁であり、13は口縁下に三角突帯がつく。溝内からはこのほかに甕底部（14～16）がある。

このSC07とSD08は、遺構の位置や出土遺物から見て、ほぼ同時期に埋没したと考えられる。

## 2) 竪穴式住居周辺遺構

### 溝SD06 (Fig.51)

東谷の谷底部にあり、南北方向に検出した。谷頭に近い位置を発端とし、約12mを確認した。幅0.3～1.5m、深さ0.1～0.4mを測る。断面形は浅いV～U字形を呈する。覆土は下部でやや砂質となるが、上部は黒色の腐植土である。少量の土器片が出土したが、時期は不明である。

### 包含層SX00

谷頭の窪地中央に形成された遺物包含層である。窪地内は黒色の腐植土が自然堆積し、上下に漸移

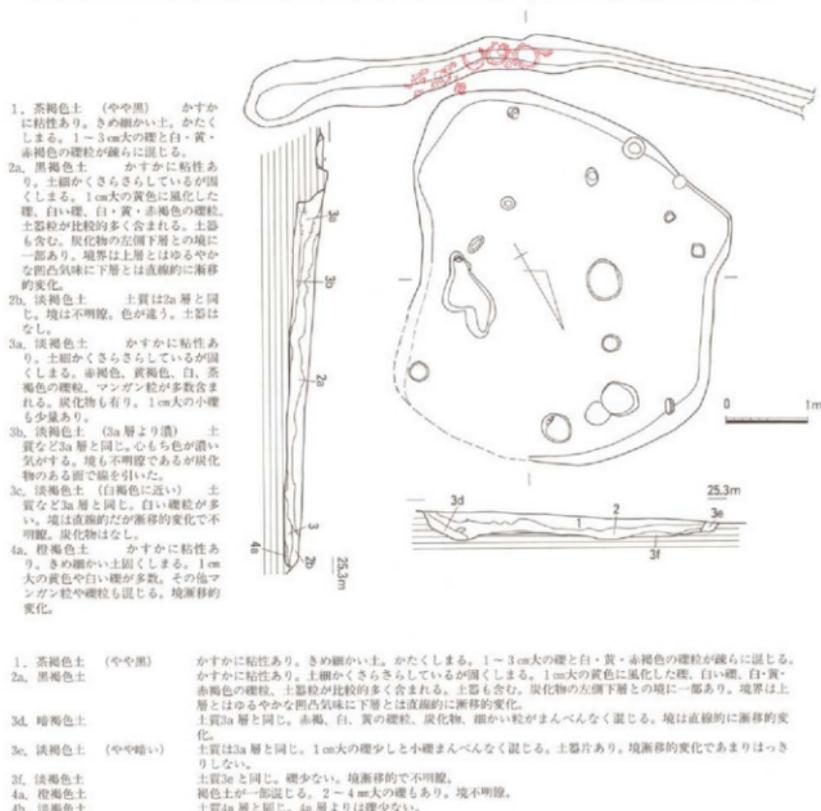


Fig.56 SC07・SD08 (1/60)

する。黒色土を中心に土器片の出土量が多い。遺物は後述する土器溜まり SX09を中心に分布しており、本来一連の遺物と見られる。遺物の多くは弥生時代であるが、少量の縄文時代石器類や、古墳時代以降の須恵器片や鉄鏝も出土した。須恵器片などは上層からの出土である。

土器には甕(Fig.59-1~3、7~9)、壺(4~6、10)、高杯(11、12)がある。須恵器は壺(瓶)(13~15)がある。甕には口縁部を「く」字形に外反させるもの(1)、跳ね上げ口縁で、口縁下に三角突帯をつけるもの(2、3)がある。甕底部は平底で僅かに底面が上がるもの(7、8)、平底で、底部の突出がないもの(9)などがある。壺には、広口(4)、やや下がりが気味の鋤先口縁をもつ広口のもの(5)などがある。高杯は軸部のみであるが、外面にハケ調整を残し、円形透かし孔をもつものがある。これらの弥生時代土器類には多少の時期差があり、中期末葉から後期初頭を中心とし、一部に後期中葉のものを含んでいる。

須恵器は全て壺類であり、破片である。谷部中央に比較的集中して出土した。口縁端部は丸みを持ち、底部も平底となっている。小田富士雄編年によるⅣ~Ⅴ期の範疇に含まれると考えている。その

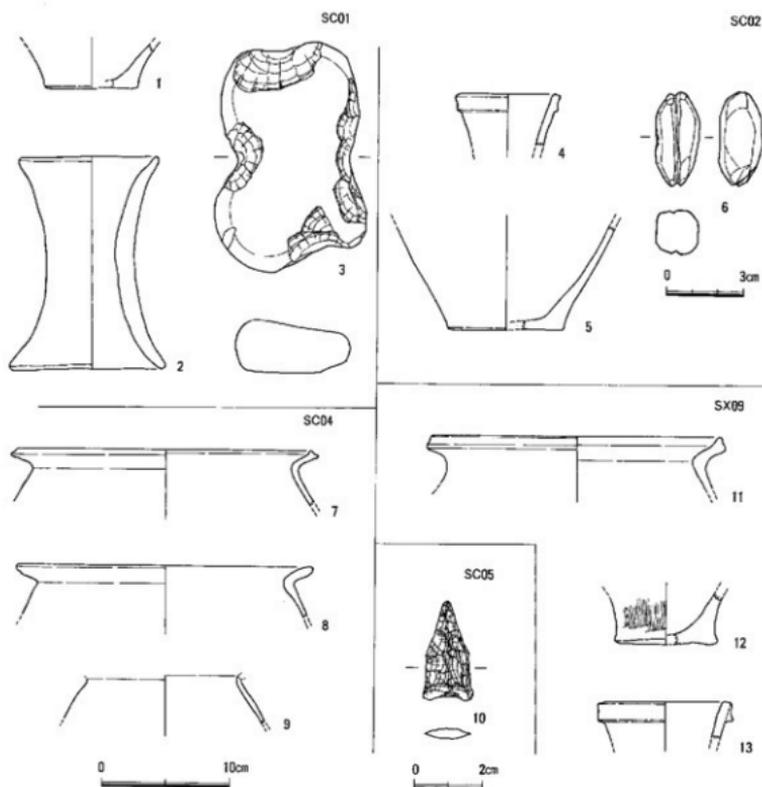


Fig.57 住居跡出土遺物 (1/2・2/3・1/4)

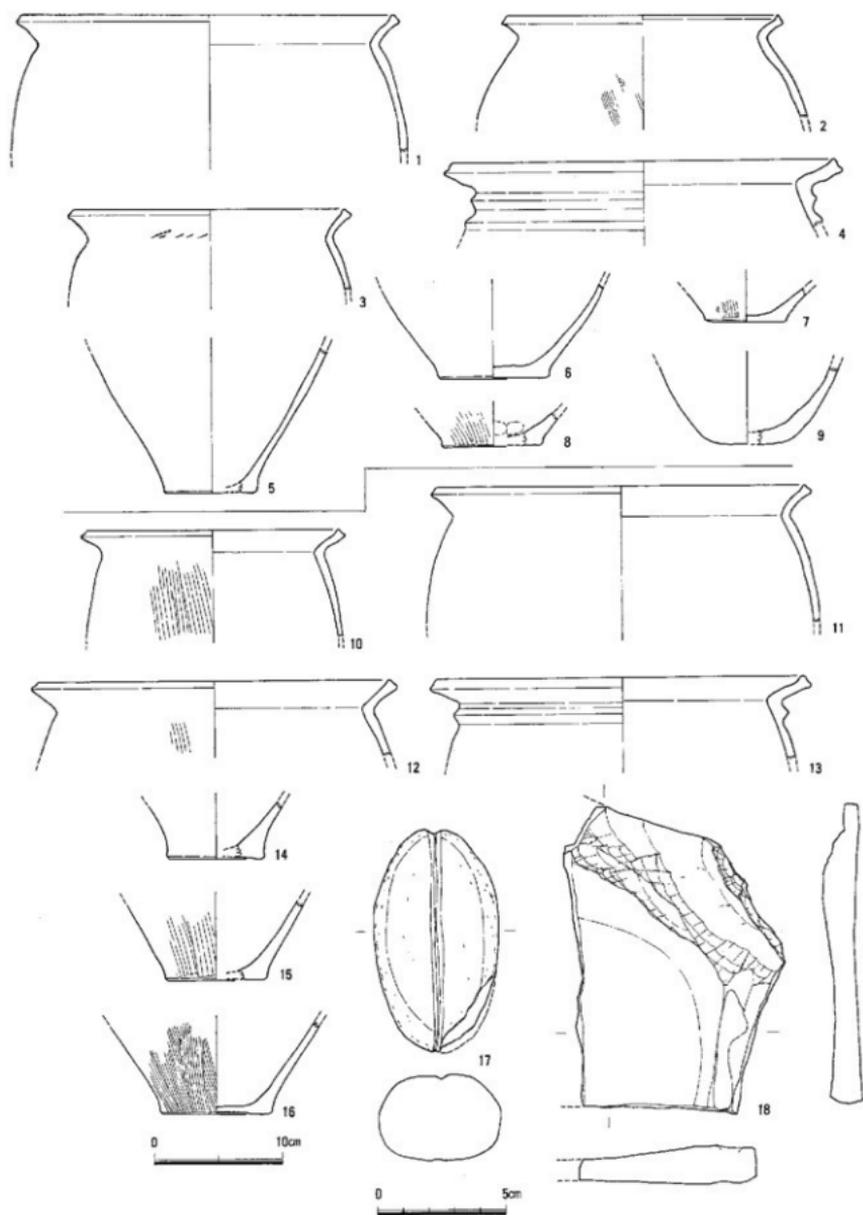


Fig. 58 SC07・SD08出土遺物 (1/2・1/4)

あり方からみて一般的な集落関連遺物とは考え難い。

鉄鍬 (18) は、広根型であり、調査時に破損したが、本来ほぼ完形のものである。

石器には石鍬 (16、17) がある。16は弱透明の黒曜石製の三角鍬である。基部に浅い抉りが入り、先端部から種状剥離が入る。17は風化の強い灰色黒曜石を素材とする。抉りが深く、先端を鋭く尖らしている。何れも縄文時代のもつと見られる。

土器溜り SX09 (PL.17-8)

SC03の西側6mの谷頭の窪地内の位置にあり、包含層中で特に土器小片が密集して検出された地点を「土器溜まり」として取り上げた。しかし、量の割に保存状態が悪く、罔化できたものは少ない。頸口縁部 (Fig.57-11)、底部 (12)、壺口縁部 (13) などがある。頸は跳ね上げ口縁である。

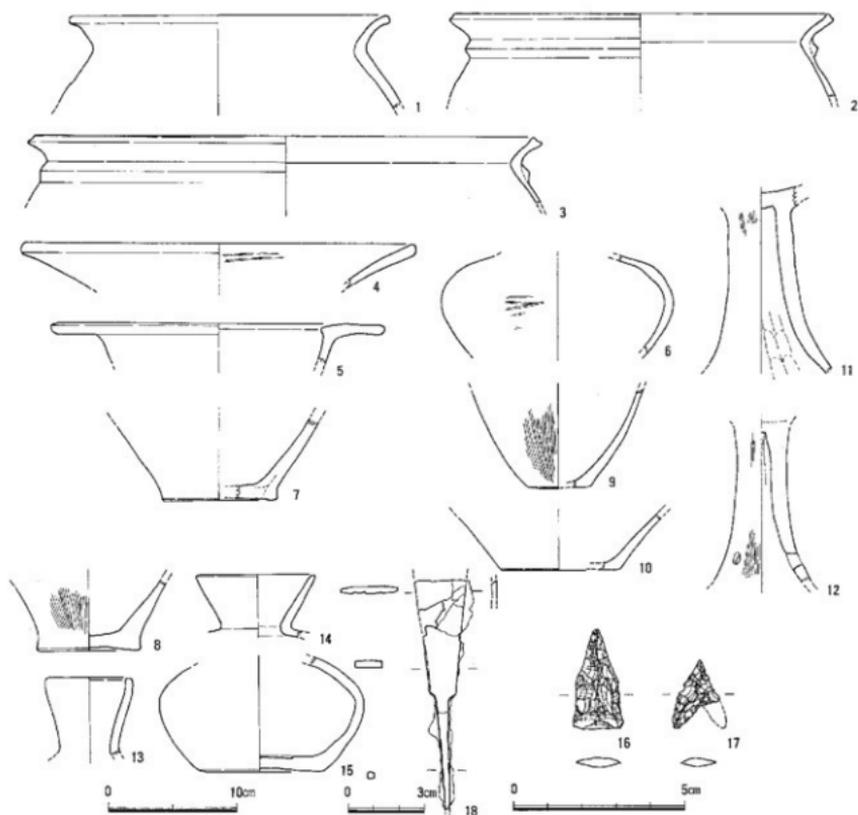


Fig.59 H地区東側包含層出土遺物 (2/3・1/2・1/4)

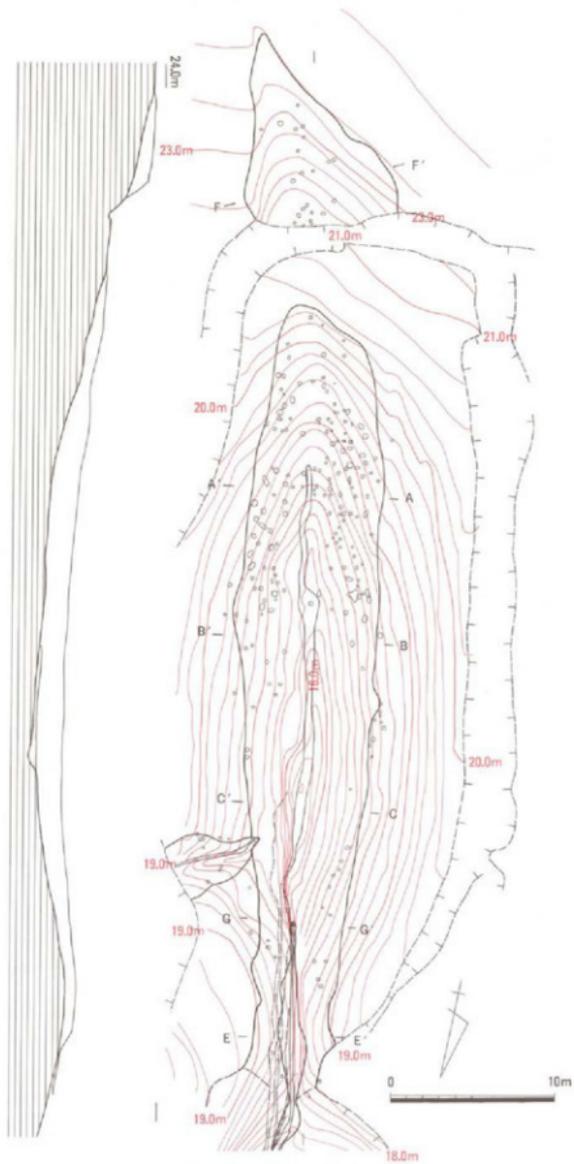
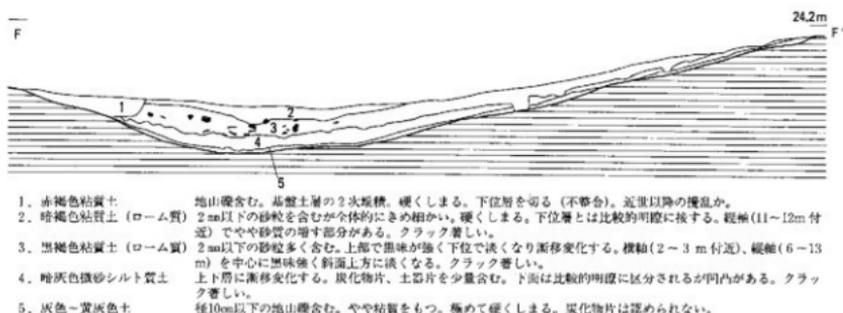


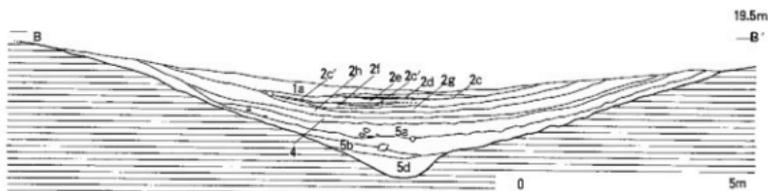
Fig. 60 SX10 (1/300)



1. 赤褐色粘質土 地山礫含む。基礎土層の2次堆積。硬くしめる。下位層を切る(不整合)。近世以降の擾乱か。
2. 暗褐色粘質土(ローム質) 2m以下の砂粒を含むが全体的にきめ細かい。硬くしめる。下位層とは比較的明瞭に接する。縦軸(11-12m付近)でやや砂質の増す部分がある。クラック著しい。
3. 黒褐色粘質土(ローム質) 2m以下の砂粒多く含む。上部で黒味が強く下位で淡くなり漸次変化する。横軸(2-3m付近)、縦軸(6-13m)を中心に黒味強く斜面上方に淡くなる。クラック著しい。
4. 暗灰色微砂シルト質土 上下層に漸次変化する。炭化物片、土器片を少量含む。下面は比較的明瞭に区分されるが凹凸がある。クラック著しい。
5. 灰色-黄灰色土 径10cm以下の地山礫含む。やや粘質をもつ。極めて硬くしめる。炭化物片は認められない。

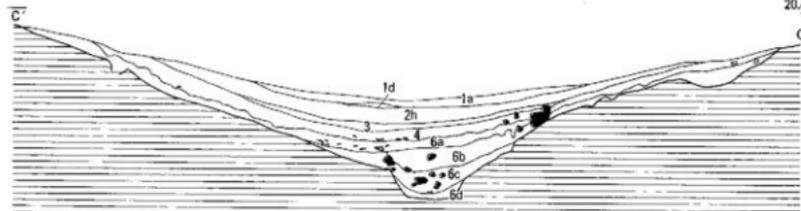


- 2g. 赤褐色粘質土 しまりはよい方だが2h層よりはやや弱い。ごく少量ではあるが20-22m付近には砂粒(径0.5cm以下)を含んでいる。21mより南へは2g層がかなりの厚さで堆積しているが、北へは薄くなり26m付近で消える。1mから11m付近でも21m同様微量の砂粒を含んでいる。2d層との境は不明瞭であるが、2h層との境はかなり明瞭である。北へいくほど上の層との境が不明瞭になる。赤褐色の中にところどころ黒色の土粒を含む。これは上の層でもいえることである。上・下の層との凹凸はみられない。
- 2h. 暗褐色粘土 この包含層の中でかなりしまりがよい。4層ほど黒くはないが暗褐色といえどもかなり黒い。2h層も包含層全体に堆積している。第2群層ではあるがかなり上下の層との境が明瞭である。
3. 暗褐色粘質土 上下層に比べ明るい色調。粘質強い。部分的に砂粒多く、茶色い所もある。上下層に漸次変化する。
4. 暗褐色-黒褐色粘質土 粘質強い。硬くしめる。上下層にやや漸移的变化。砂粒をわずかに含む(黒色有機質気味で埋没土壌か)。層厚の増す部分では黒味強まる。本層下半から土器片多く出すようになる。上半分は少ない。大きな土器片の多量出土は5a層上-中部からである。4層にはその一部が頭を出した状態をみられる。
- 5a. 暗灰色粘質土 上位に階色が増し4層に漸移する。粘質が強く比較的均質。乾くとクラック著しい。マンガング粒多く、炭化物、土器片、糞等上半部に多く含む。下位層とは不明瞭に接する。
- 5b. 暗褐色粘質土 上位に階色が増し4層に漸移する。粘質が強く比較的均質。乾くとクラック著しい。マンガング粒多く、炭化物、土器片、糞等上半部に多く含む。下位層とは比較的明瞭に区分できるが土色はやや漸移気味。粘質強へつとつ。硬くしめる。上位層には漸移。



- 2c. 中暗茶褐色粘質土 17.2-20m付近までは最上部の層となり(包含層断面十層図II)、上面は1-2cm程度の厚みで重機その地による擾乱を受け色相、質共に不定となる。
- 2f. 暗褐色粘質 しまりはよい方である。2e層との境目は割合明瞭であるが2g層との境は不明瞭で、異なる点は2g層がごく微量の砂を含む点があつた位で、ほぼ同時期に堆積したものとと思われる。2fは21m前後で薄く堆積している。
- 2e. 黄褐色砂質泥じり暗褐色土 砂質ブロック(1-2cm大)を多く含む。上・下層には明瞭に接する。
- 5b. 灰褐色粘質土 粘質が強く乾くとクラック著しい。炭化物片、土器片少量含む。下位層とは比較的明瞭。色調にて区分。
- 5c. 暗褐色粘質土 6f層の軟部と4層類組の黒色土の混合層。土器片を含む。傾斜する小ピット内裡上、周囲には明瞭区分。
- 5d. 暗灰色粘質土 粘質が強い。硬くしめる。地山角礫を含む。下部から炭化物片を多く含む。

Fig. 61 SX10横断面土層図 (1/120)



1a. 茶褐色土

最上部の層で表面1~2cm程度は所々に細かい塵塵を受けている(中央赤色砂質土の混じり込みが所々に見られる層としての広がりに欠け分布もランダムであり、土質が周囲の地山の一部の上質と類似していることから系統による擾乱跡と解釈した) 溜非南半分は目視が可能な程度の微細な小礫を含み、やや砂質を呈する。水はけは良好で粘着性は少ない。溜非北半分は層が厚みを増すと共に層中の砂礫は少なくなり、固くしまった。粘着をおびる上質となる。全層中を通して1層には大礫、土器片その他の遺物の混入は確認できないが中央付近に炭化物を含む。層厚は無層理。2a、2b層との境は明確に分層可能。中央部等では2b層の砂質が明確なため、2b層との分層は容易。横軸ベルトを介して中央部等では2bとの境は目視に困難となるが、砂礫の混じり具合と土色のわずかな差から分層した。

1d. 暗赤褐色砂質土

1~2m以下の砂粒多くラミナ状堆積。下層には不明瞭。漸移粘土化。水成層地山礫、砂粒多く含む。上位へ粘質化、暗色化、漸移する。上半分には土器片、炭化物物片多く含む。下位にしたがい明灰化、砂質化進む。

6a. 暗灰色砂質土

厚10cm以下の地山礫(砂岩角礫)を多く含む。硬くしめる。下位にしたがい明るみを増す。炭化物物片を含む。土器片を含む。間断地山とは明確に区分される。

6b. 暗灰色粘質土

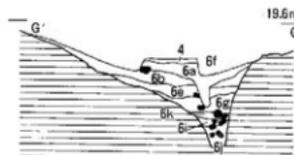
10cm以下の地山礫を含む。硬くしめる。炭化物(木炭片)を多く含む。部分的に黒色化する。上位層にはやや漸移灰味。下位地山とは明確に区分される。

6c. 暗灰色粘質土

10cm以下の地山礫を含む。硬くしめる。炭化物(木炭片)を多く含む。部分的に黒色化する。上位層にはやや漸移灰味。下位地山とは明確に区分される。

6d. 暗灰色粘質土

10cm以下の地山礫を含む。硬くしめる。炭化物(木炭片)を多く含む。部分的に黒色化する。上位層にはやや漸移灰味。下位地山とは明確に区分される。



6c. 暗灰色粘質土

マングン粒多量に含む。全体に黒色化進む。さらに横位の

浸層2~3cm単位に区分できそう。上下層とは不明瞭区分。

6d. 暗灰色粘質土

上部の灰色粘土を下部に灰色砂質土に区分可。

6e. 暗褐色粘質土

マングン粒多く含む。上下層よりやや暗い色調。

6f. 暗褐色粘質土

上下層より幾分明るい色調。粘土化進む。上位層に明瞭。

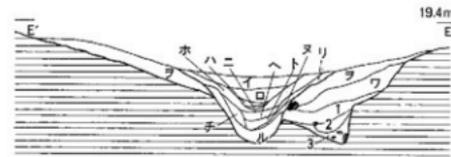
6g. 暗褐色粘質土

マングン粒多い。硬くしめる。上下層とは明確に区分され

る。

6h. 暗褐色粘質土

粘質強く水分含む。砂粒含む。



1. 茶褐色粘質土

硬くしめる。3cm大の礫を含む。炭化物物片少量あり。上下不明瞭。漸移灰味。乾くとクラック入り。

2. 暗赤色粘質土

硬くしめる。3~5cmの礫を含む。炭化物物片少量あり。乾くとクラック入り。

3. 赤褐色粘質土(地山)

硬くしめる。灰色粘土を部分的に含む。マングンわずかに形成。下面は明瞭フラット。

4. 黄褐色砂質土

3cm以下の砂粒多量を含む。5cm以下の地山礫を少量含む。細砂、細砂のラミナ状となる。5ユニット以上炭化物物片、焼土片を多く含む。

ロ. 黄褐色砂質土

上位層と同様の構造。色調がやや暗い。

ハ. 黄褐色粘質土

きめ細かい質でよくしめる。上下に明瞭(水成層)

ニ. 暗褐色粘質土

鉄分を多く含む赤黄する。1~2cmの砂粒多く含む。明瞭(硬層となる)。総土層の5c層。

ヘ. 暗褐色粘質土

砂粒を少量含むが全体的に粘質強い(きめ細かい)。硬くしめる。炭化物物片含む。下位層には明瞭に区分。

ト. 暗褐色粘質土

上位層より暗色強い。粘質も増す。

チ. 暗褐色粘質土

ややグライ気味の粘土層。灰白色細砂互層を2~3枚はさむ。水成層。硬くしめる。

リ. 暗褐色粘質土

土層に類似するか。グライ化していない。硬くしめる。土層との境は不明瞭。

ヌ. 暗褐色粘質土

砂質やや多い。硬くしめる。上下層とは明確に区分。

ル. 暗褐色粘質土

砂粒多く含む。硬くしめる。下層とは明瞭に区分される。

レ. 暗褐色粘質土

ややグライ気味。1cm以下の砂礫層を3~4枚はさむ(水成層)。斜面上方では暗色化。

ワ. 暗褐色粘質土

炭化物物片、土器片を含む。3cm以下の砂粒、地山礫を多く含む。全体によごれている。下位にはやや漸移灰味。

カ. 暗褐色粘質土

10cm以下の地山礫を多く含む。砂質多い。硬くしめる。

Fig. 62 SX10 · SD11 · 12横断面土層図 (1/120)

### 3) 濠井

#### SX10 (Fig.60~63)

H地区の西側端にあり、北に開く谷頭にあたる。調査以前は周囲より1~3m低い長楕円形の畑地であり(Fig.49)、中央部がやや凹み水分の多い地表をなしていた。畑地の地表は標高20~21mを測り、谷底の傾斜に対してより平坦に畑地の造成をしてある。

なお、試掘調査によって、この畑地の中央部、地表より約2m下に黒色の埋没土壌があり、多くの遺物を含んでいることが分かっていたことから、その上部、地表下約1.5mまでを表土除去の延長で重機により掘り上げた。すでに遺構は造成のために周囲の基盤が露出する深さまで削平され、相当の破壊を受けていることが明かであったが、この重機による掘り下げによって、さらに遺構上部の埋土と、遺構壁面を一部露出させてしまい、その部分での記録を充分とることが不可能となってしまった。

遺構の平面形は南北に主軸をとる長楕円を呈する。削平面における検出時点での遺構の範囲は南北約41m、東西約10mを測る。この部分を「本体部」とする。

調査は、遺構内の堆積状態を観察する目的で横断面土層ベルトを10mおきに3本設けた。ベルトは南からA-A'断面、B-B'断面、C-C'断面と呼ぶ。また、中央の縦断面土層ベルトを1本設けた。

その後、C-C'断面より北側で溝状の遺構を検出したため、さらに2本の横断面土層ベルトを設け、南からD-D'断面、E-E'断面とした。この溝状遺構の部分を「取水部」とする。

また、南側の一段高い畑地では、この遺構の延長とみられる落ち込みを検出した。検出面は標高23~24mである。ここにも横断面土層ベルトを設け、F-F'断面とした。この部分を「先端部」とする。

その後、北側の溝状遺構の下位に石組遺構が現れたためにこの部分の横断面土層ベルトを設け、G-G'断面とした。

さて、遺構は削平のために本来の形状は不明である。遺構検出段階での規模は相当の削平を受けており、当初の規模を示していないことは明かである。以下では、遺構の形態と規模を知るために、細部の検討を進める。

まず、本体部は断面が浅いV字形であり壁面が平滑である。中央底面には、主軸方向に断面逆台形の溝状の掘り方があり一段下がっている。底面はB-B'断面付近の標高16.37mを最深部とし、南北両側に次第に

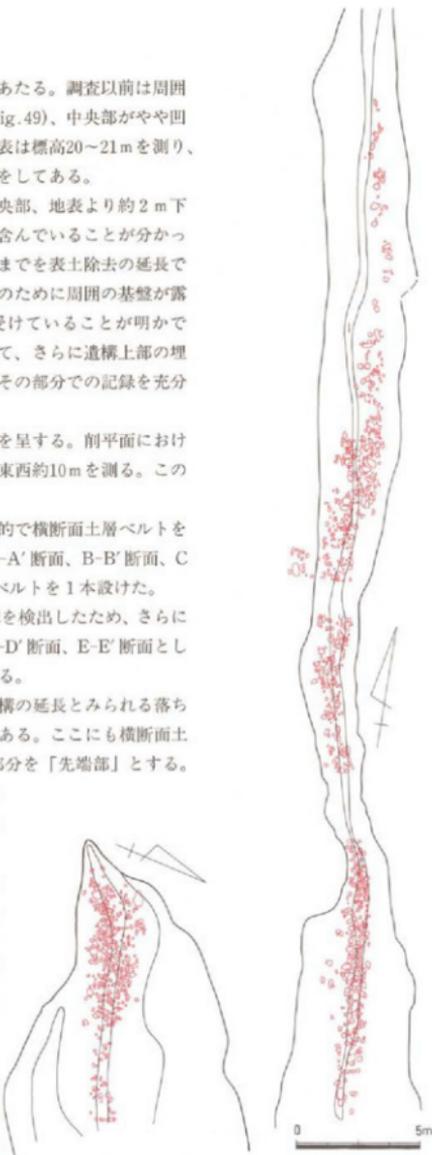


Fig. 63 SD11・12・13 (1/80)

高くなる。北側には底面の溝の延長が幅を狭めながら続き、D-D'、E-E' 断面付近の地峡部を通る。この溝 (SD12) は E-E' 断面から北へ 8 m の位置まで確認された。D-D' 断面での SD12 は、断面 V 字形となる。この溝は C-C' 断面付近から溝底部に配石があり、G-G' 断面付近から、配石を覆う埋め土が認められる。溝底の最も高い位置は E-E' 付近であり、標高 17.926 m を測る。これは本体部分の最深部から約 1.6 m 高い位置となる。また、この SD12 埋土を切り溝 SD11 が設けられる。この SD11 は、本体部埋土第 4 層群を切る断面 V 字形のものである。幅は 0.2~1.9 m、深さは 0.1~0.9 m である。G-G' 断面付近を起点に北側調査区端まで約 15 m が確認された。SD11 の底面最高所は D-D' 断面付近にあり、標高約 17.94 m を測る。SD11 の埋土観察では 2 回以上の掘り直しが認められ、下部に数回の薄砂層が形成されている。また、C-C' 断面と D-D' 断面の中間地点の東側壁面に、本体部分から東へ延びる溝 (SD13) がある。溝は東側壁面標高 17.7 m 付近を発端とし、長さ 5.5 m で削平によって失われている。本来は、その延長上にある溜井 SX30 に接続していたと見られる。SD13 は幅 2.8 m、深さ 0.6 m を測る。この溝底には配石があり、上部は 4 層群の腐植土壌が見られる。

このように本体部は基盤層を掘り下げ、周囲四方より低い掘り方を設けている。北側には 2 本、東側に 1 本の溝が付設されている。SD12 は、本体部と同時に掘削され、配石後埋められている。配石間には水成粘土が形成、付着しており、埋没時点には帯水状態にあったと見られる。SD11 は、本体部が 0.6~0.8 m 以上埋まり、腐植土壌が形成された後に掘られている。これには水流の痕跡がある。SD13 の形成時期は不明であるが、4 層群に覆われていることから SD11 以降、SD12 以前に設けられている。

次に各部での土層断面をみよう。

A-A' 断面では、地層が観察できる部位での幅 7.7 m、深さ 1.3 m を測る。断面形は浅い V 字形であり、東壁が約 24°、西壁が約 16° の傾斜である。また、中央付近には主軸方向に幅約 2 m、深さ 0.3 m 程の溝状の落ちがある。最深部の標高は 17.9 m である。覆土と壁面は明瞭に区分される。なお、壁面に多くの柱痕がある。層ごとに数回の掘り面があり、壁面に対し直角に掘り込まれているものが多い。

B-B' 断面では、幅 8.2 m、深さ 1.6 m を測る。断面形は浅い V 字形であり、東壁が約 18°、西壁が約 22° の傾斜である。また、中央付近には主軸方向に幅 1.4 m、深さ 0.3 m の断面逆台形の溝がある。最深部の標高は 17.05 m である。覆土と壁面の境界は明瞭であり、基盤層である第三紀層とは不整合関係を示す。基盤層は硬いが、壁面は平滑な掘削面を見せる。底部で湧水の多い礫層に達している。

C-C' 断面では、幅 8.9 m、深さ 2.0 m を測る。断面形は浅い V 字形であり、両壁ともに約 21° の傾斜である。また、中央付近には主軸方向に幅 1.4 m、深さ 0.6 m の断面逆台形の溝がある。最深部の標高は 16.5 m である。壁面の検出は容易であり、覆土とも明瞭に区分される。

次に取水部の E-E' 断面では 2 つの溝の切り合がある。上部の溝 (SD11) は断面が V 字形を呈し、幅 1.9 m、深さ 0.8 m を測る。1 回の掘り直しがあつた。下部の SD12 は幅 5.0 m、深さ 1.2 m を測り、壁面は東側が約 41°、西側が約 20° を測る。東壁は凹凸があり、壁面も不整形である。覆土の下半部は地山の新鮮な二次堆積であり、埋め土と見られる。上部には 4 層群対応の腐植土壌が形成されている。この腐植土壌は下面が不明瞭、漸移し、本体部とは異なり陸成の形成と見られる。

最後に先端部の F-F' 断面は、検出面で幅 9.3 m、深さ 1.3 m を測る。断面は浅い U 字形であり、底に溝状の掘り込みはない。東壁 18°、西壁 14° の傾斜である。床面や埋土の各層の境界はやや不明瞭、凹凸があり、漸移変化がみられる。

さて、本遺構の壁面には多くの柱穴を検出した。断面観察と柱穴内覆土から相当の時期差のあるものと見られた。また、図で示すように遺構主軸に沿って並ぶもの、横断するものなどがある。半裁し観察した結果、先端の尖るものが多く、柱穴ではなく、軌跡とみられる。したがって、この「溜井」

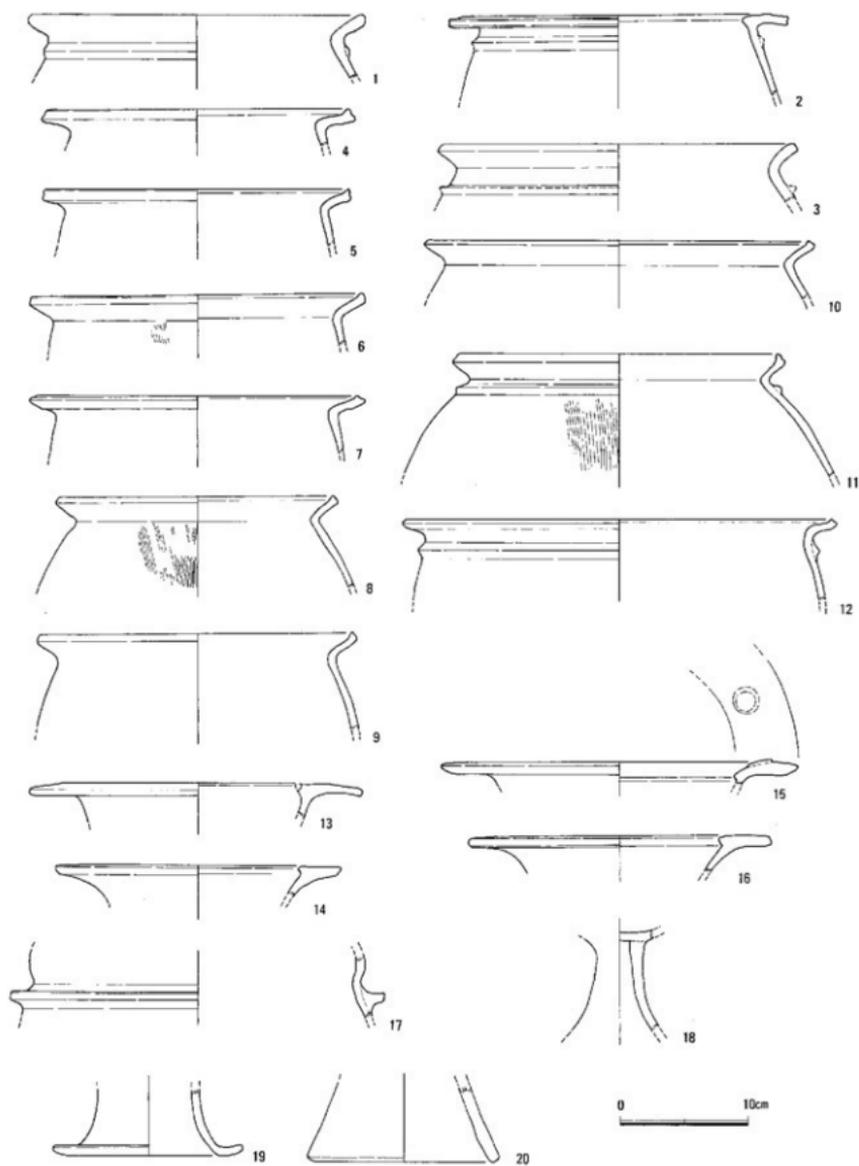


Fig. 64 SX10出土遺物 1 (3層)(1/4)

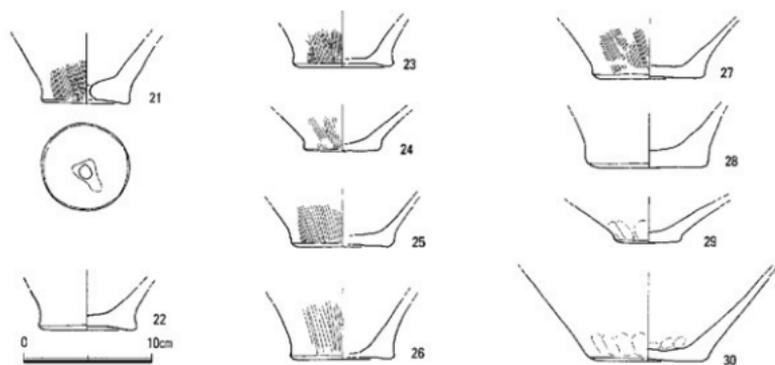


Fig. 65 SX10出土遺物 2 (3層)(1/4)

に伴う何らかの施設と考えられる。

なお、本遺構の先端部から取水部までの総長は約70mを測る。

本遺構の堆積状態は6層群に大別できる。1、2層は本体部中央にみられ、シルト、砂層、腐植土の互層である。3層は暗褐色粘質土、4層は黒色腐植土であり、遺構全体にみられる。5層は暗灰色粘質土であり、遺構南半部に堆積する。6層は暗灰色砂質土であり、本体部北半に堆積する。

6層が本遺構の最下部の堆積であり、SD12やその中の配石遺構を覆う。

出土遺物には、土器類、石器類がある。遺構床面からの出土はなく、遺構内に散乱出土した。土器は風化が強く、接合や表面観察ができないものが多い。まず層ごとに土器類を報告する。

### 3層出土土器 (Fig. 64,65)

3層からの出土遺物は比較的少ない。30点の土器を図化できた。土器には甕(1~12、21~28)、壺(13~16、29,30)、瓢形(17)、高杯(18、19)、器台(20)などがある。

甕には須玖式系のもの(1~3)、跳ね上げ口縁系のもの(4~12)がある。底部は薄く仕上げられ、僅かに上げ底となる平底がほとんどである。21はやや厚みがあり、焼成後穿孔を施している。

壺は全て鋤先口縁をもつ広口である。底部は平底であり、整形が粗い。

瓢形土器は突帯の付く括れ部の破片である。

高杯は軸部(18)と脚端(19)である。

器台は精製のものであり、脚端部である。

### 4層出土土器 (Fig. 66~70)

4層出土遺物が多い。128点の土器を図化した。土器には甕(31~70、119~149)、壺(71~85、150~158)、壺蓋(86)、鉢(87~90)、高杯(91~102)、器台(103~118)などがある。

甕は須玖式系のもの(31~44、68)、跳ね上げ口縁系のもの(45~67、69、70)がある。底部は全体に薄く仕上げられ、平底あるいは僅かに上げ底となる平底である。119、120には焼成後穿孔がある。

壺には長頸(71)、袋状口縁(72~74)、直口(75)、広口(76)、鋤先口縁をもつ広口(77~85)がある。底部は全体に薄く仕上げられ、平底あるいは僅かに上げ底となる平底である。

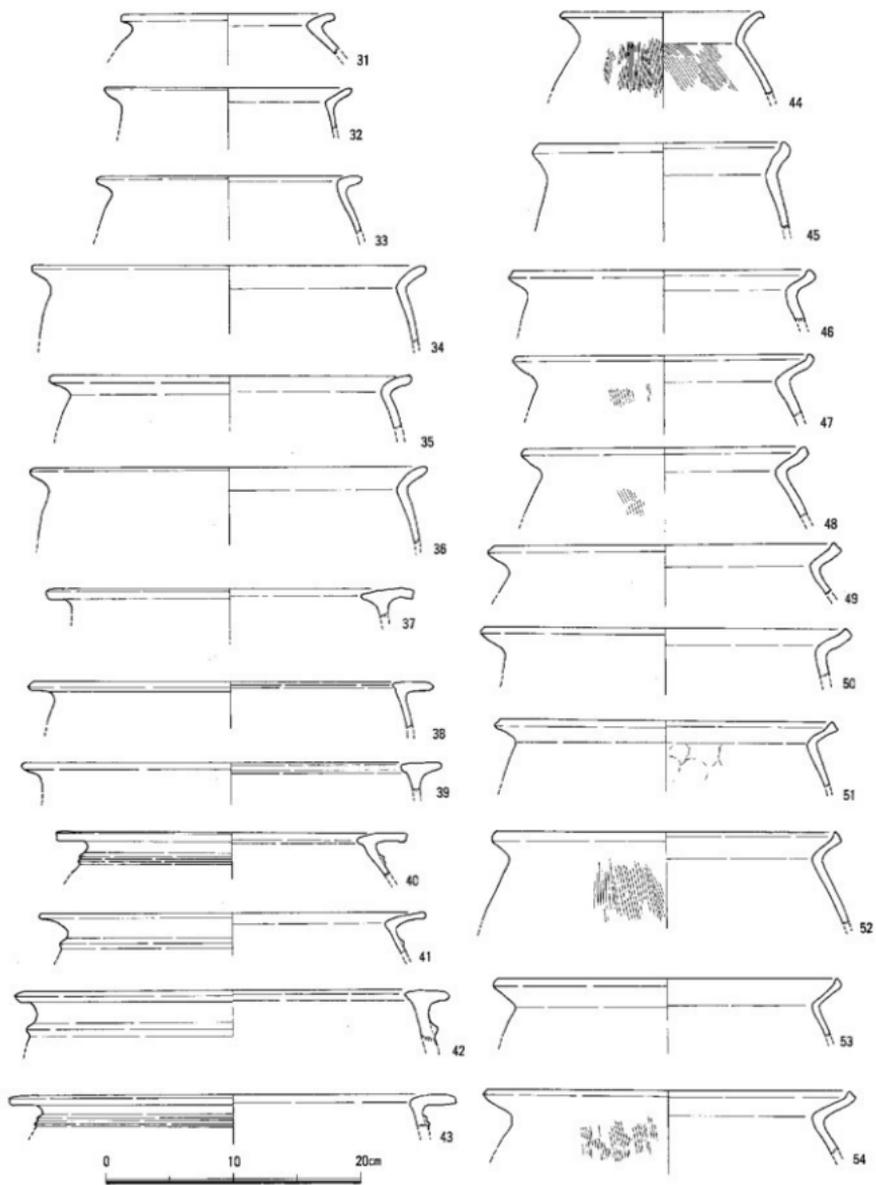


Fig.66 SX10出土遺物3 (4層)(1/4)

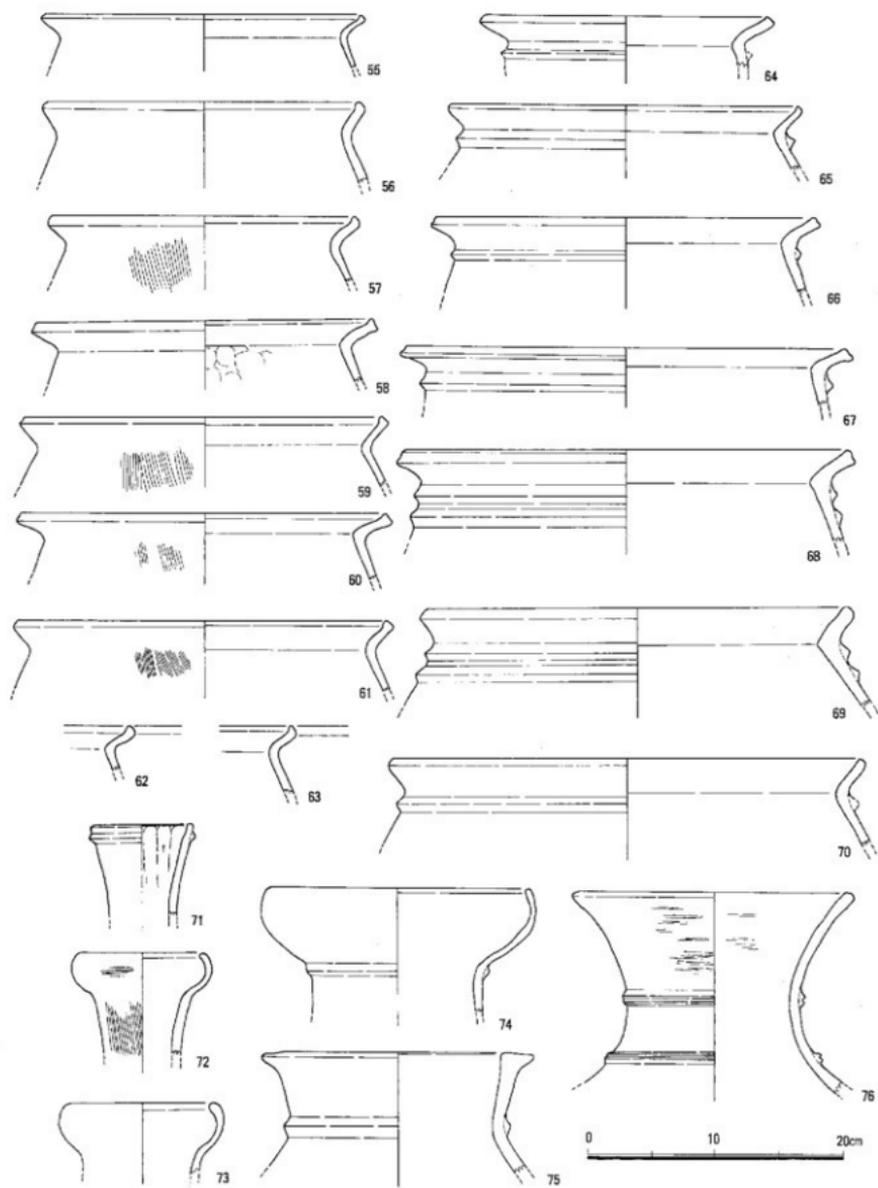


Fig. 67 SX10出土遺物 4 (4層) (1/4)

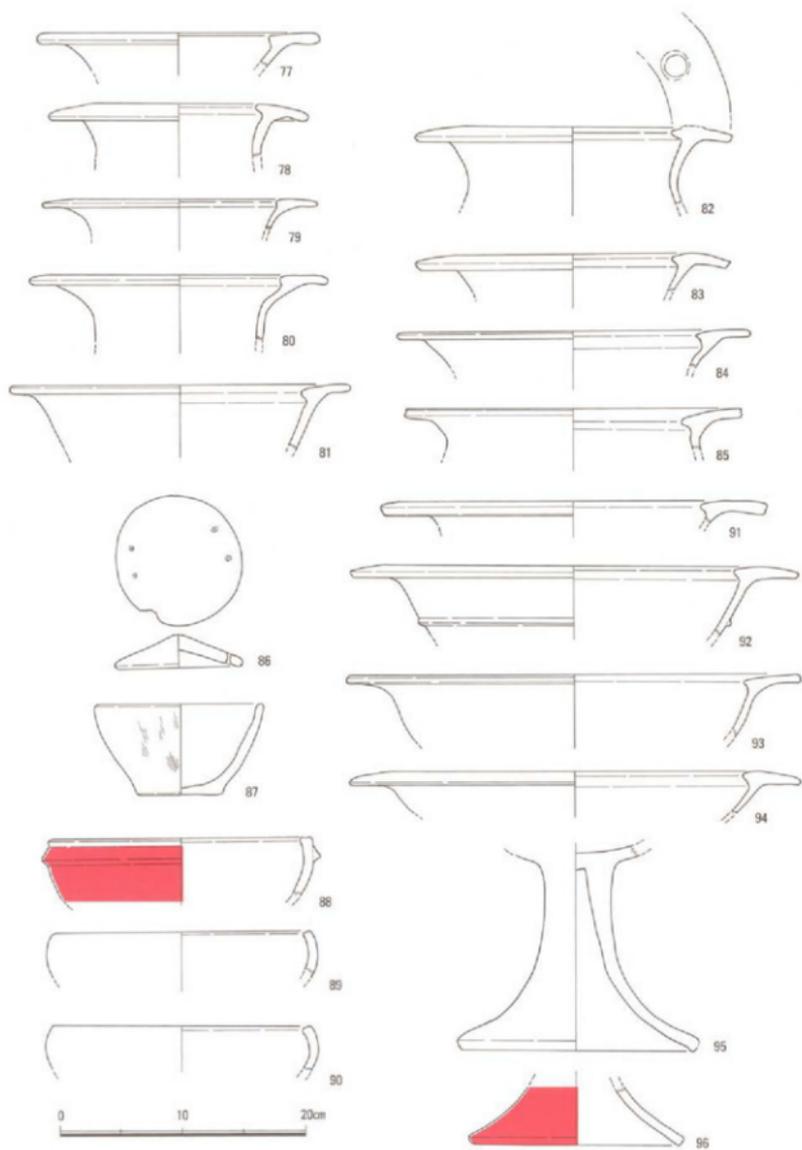


Fig. 68 SX10出土遺物 5 (4層)(1/4)

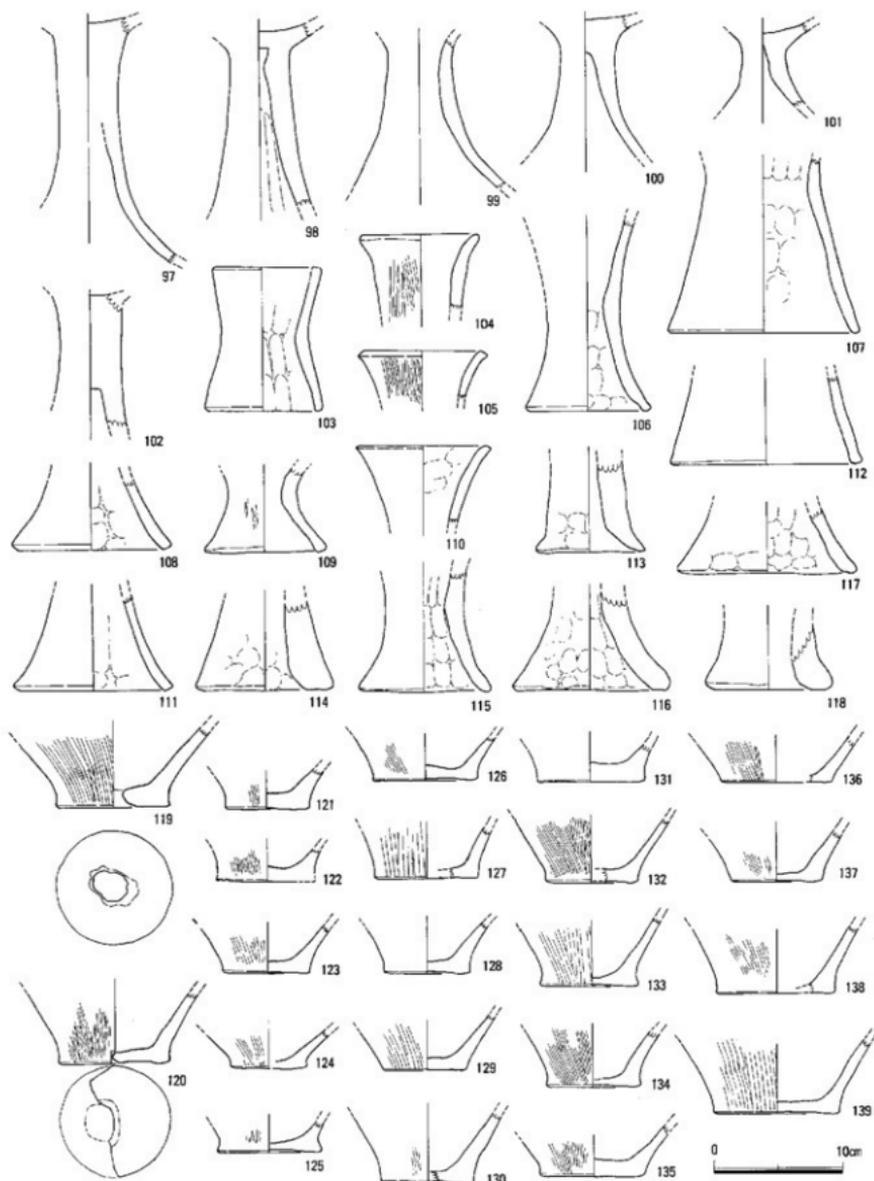


Fig. 69 SX10出土遺物 6 (4層)(1/4)

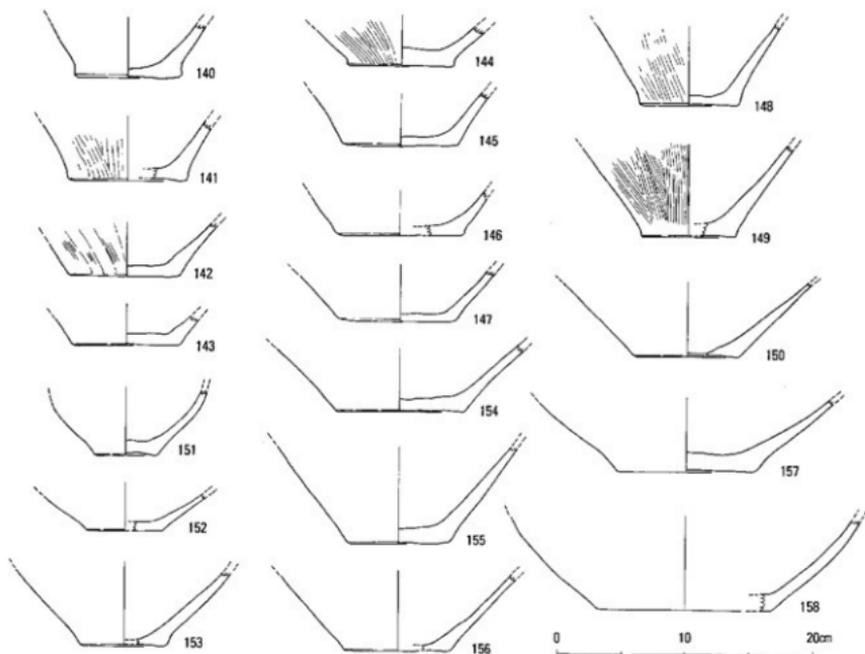


Fig.70 SX10出土遺物7 (4層) (1/4)

壺蓋は径10.5cmの小型であり、端部の2カ所に2つ単位の穿孔がある。

鉢には小型で直線的に口縁が立つもの(87)と口縁が袋状となるもの(88-90)がある。後者には高杯の杯部を含んでいる可能性がある。88は口縁下に三角突帯がつき、外面に赤色顔料が塗布される。

高杯には杯部(91-94)と脚部(95-102)がある。杯部は径30cmを超えるもので、全て鋤先口縁である。脚部には長脚のもの(97、98、102)や、小型のもの(101)を含む。96は外面に赤色顔料が塗布される。

器台には精製のもの(103-112)と、粗製のもの(113-118)がある。

#### 5層出土土器 (Fig.71-79)

本遺構では最も多くの遺物が出土した。224点の土器を図化した。土器には甕(159-184、186-221、223-233、302-357)、蓋(301)、壺(234-258、358-383)、瓢形(259、260)、鉢(261-268)、高杯(269-279)、器台(280-300)がある。

甕は須玖式系のもの(159-173、227、228、232、233)、跳ね上げ口縁系のもの(174-184、186-221、223-226、229-231)がある。底部は薄く仕上げられ、平底あるいは僅かに上げ底となる平底が多いが、329、339-341、347-350はやや厚みのある底部である。353-356は焼成後穿孔がある。また、228、231、232は外面に赤色顔料を塗布する。

蓋はつまみ部のみであり、全体に薄い仕上がりである。

壺には長頸(234-236)、袋状口縁(237-240)、直口(243)、広口(241、242)、鋤先口縁をもつ広口

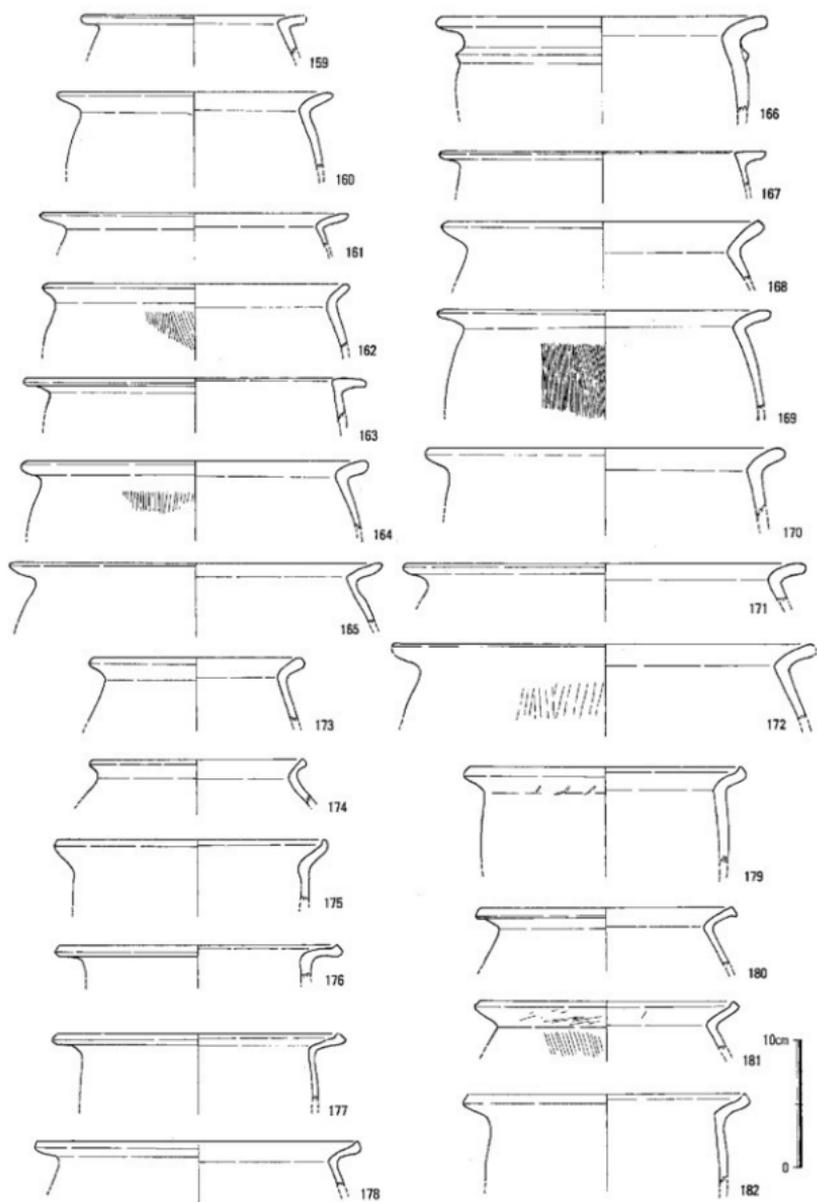


Fig.71 SX10出土遺物 8 (5層)(1/4)

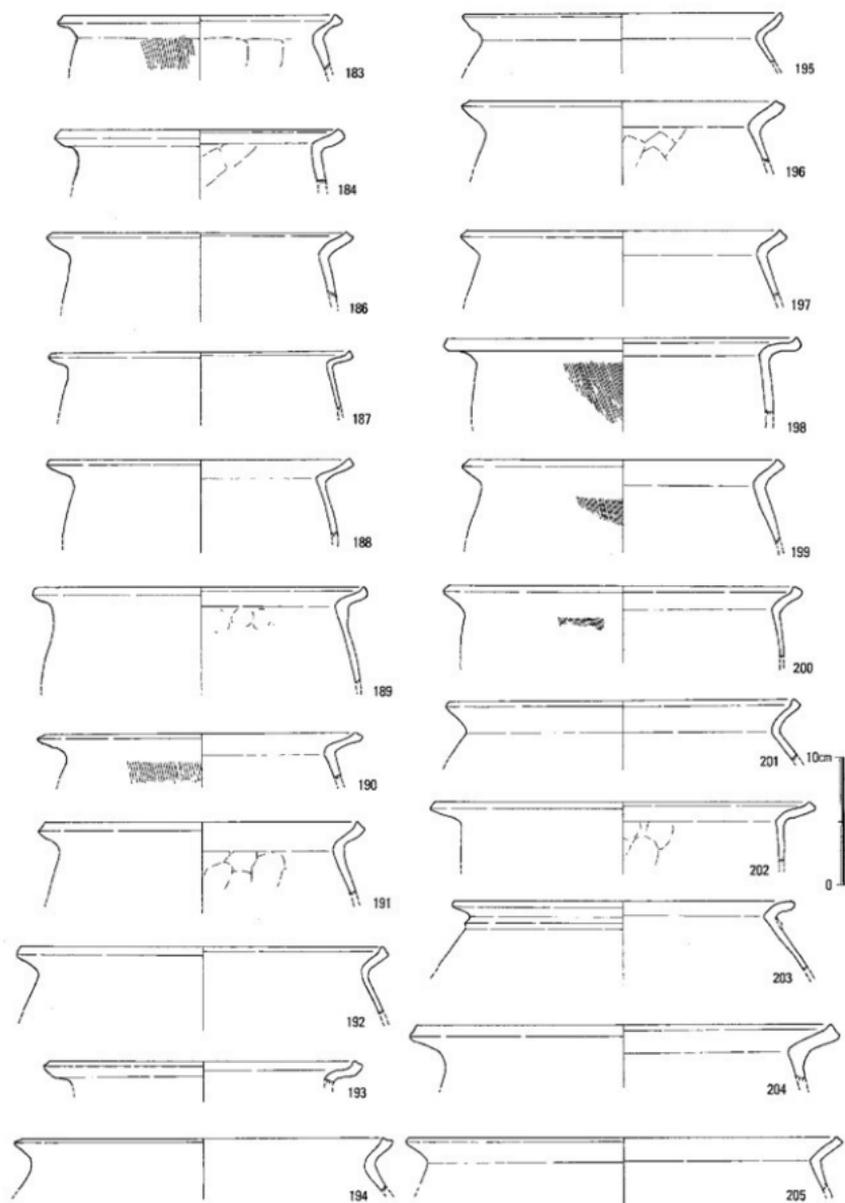


Fig. 72 SX10出土遺物 9 (5層)(1/4)

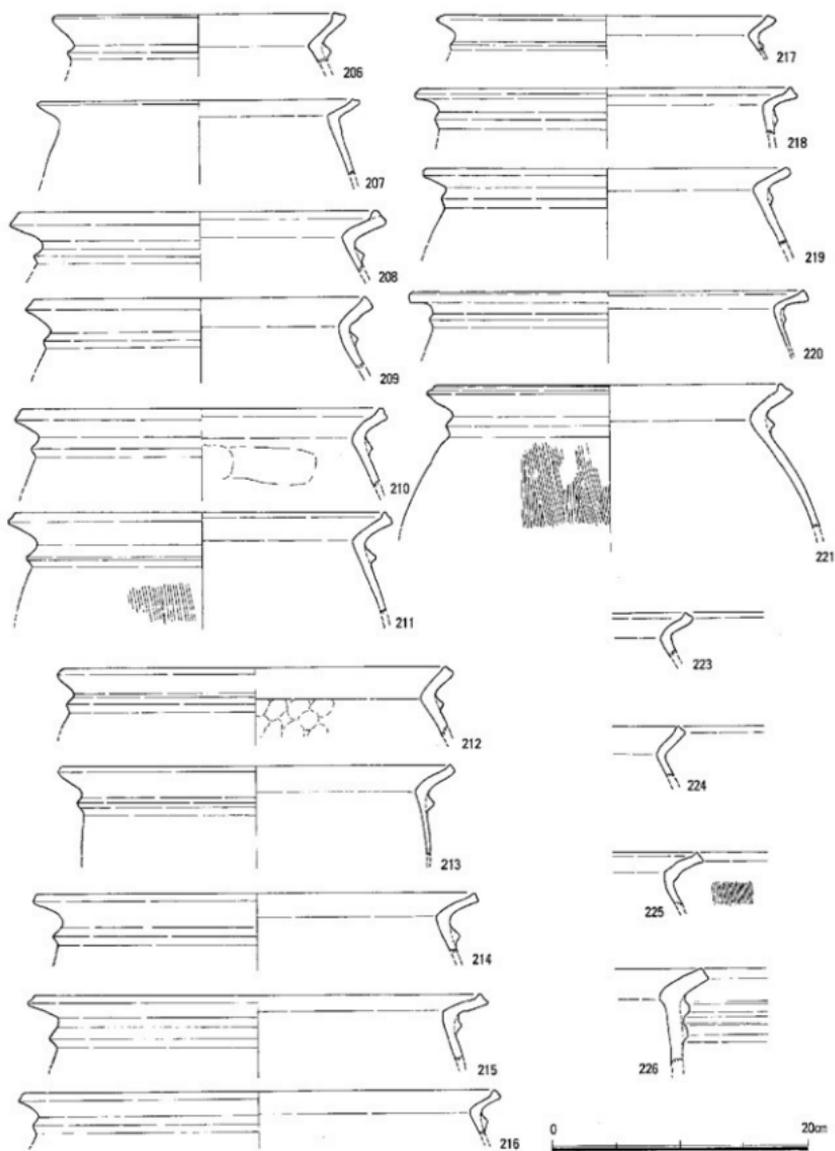


Fig. 73 SX10出土遺物10 (5層)(1/4)

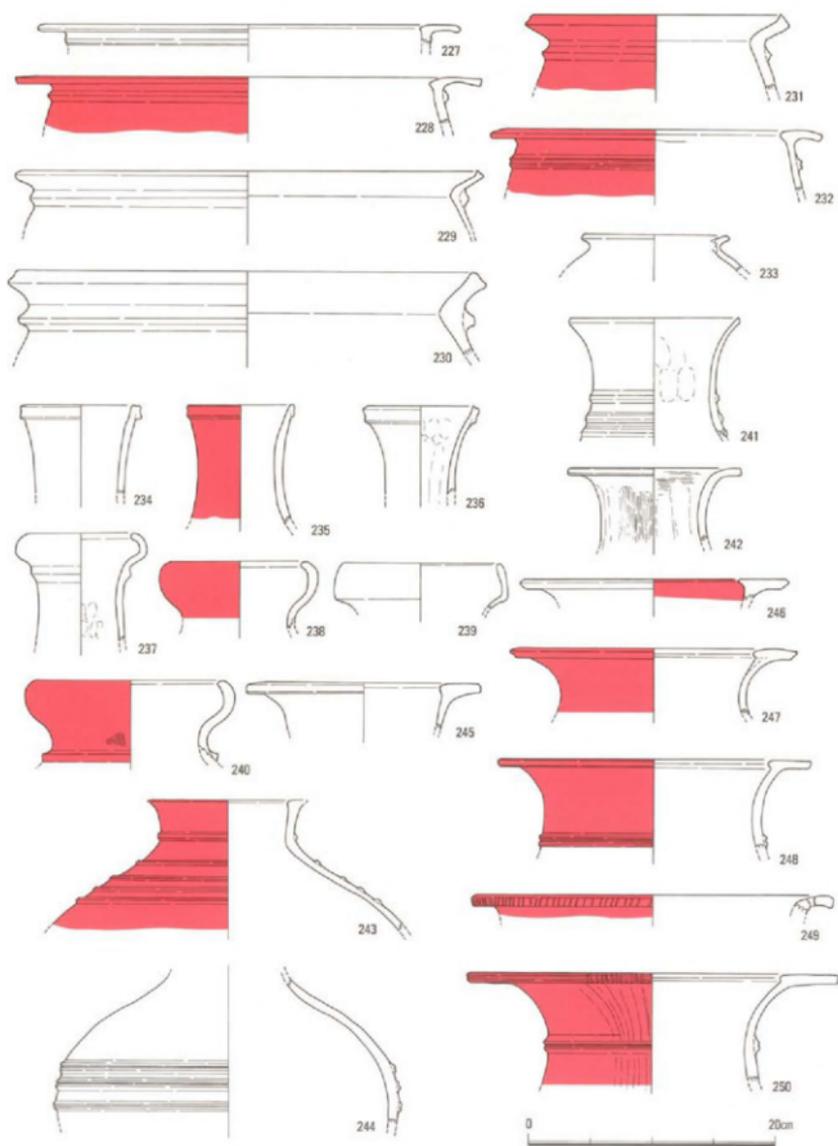


Fig. 74 SX10出土遺物11 (1/4)

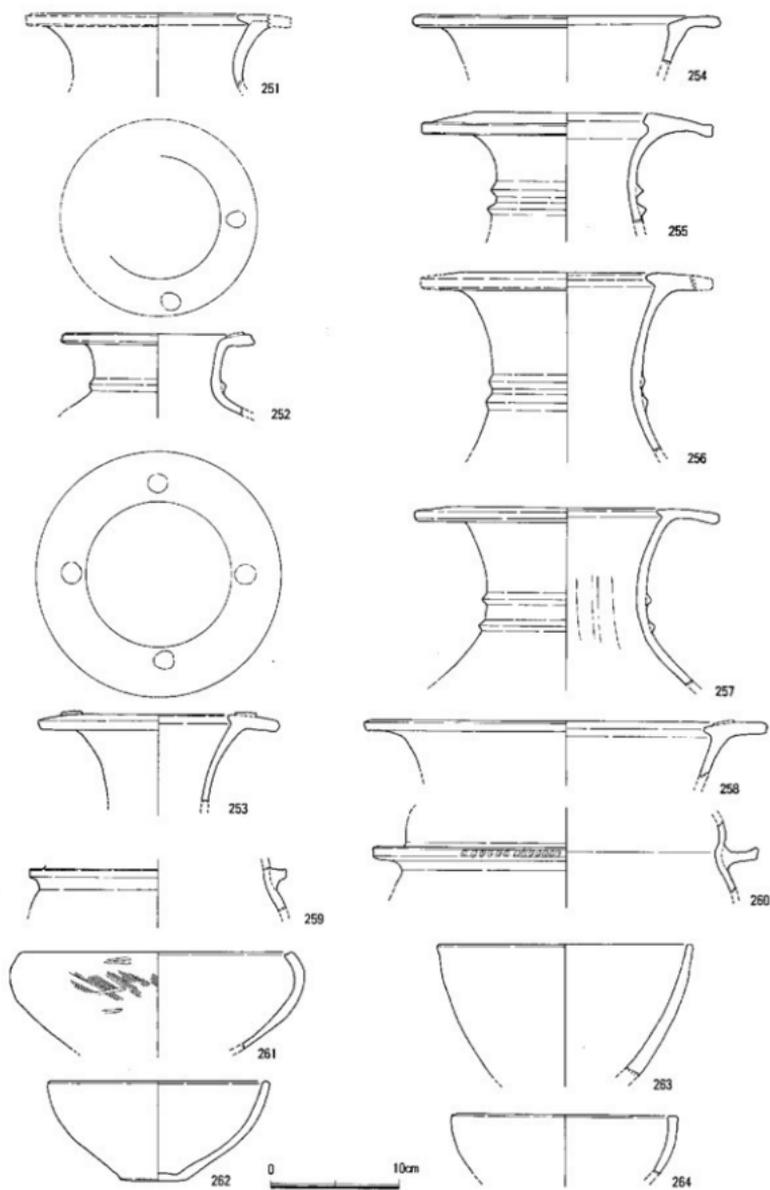


Fig. 75 SX10出土遺物12 (5層) (1/4)

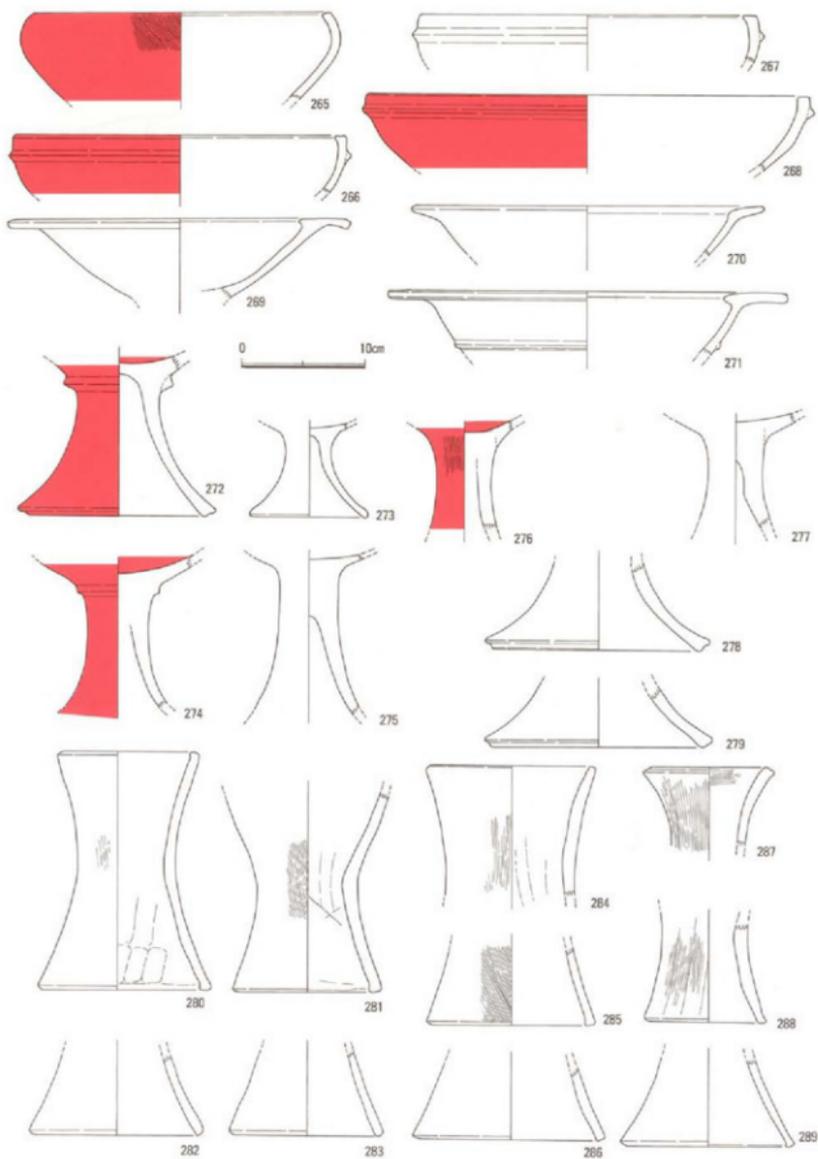


Fig. 76 SX10出土遺物13 (5層) (1/4)

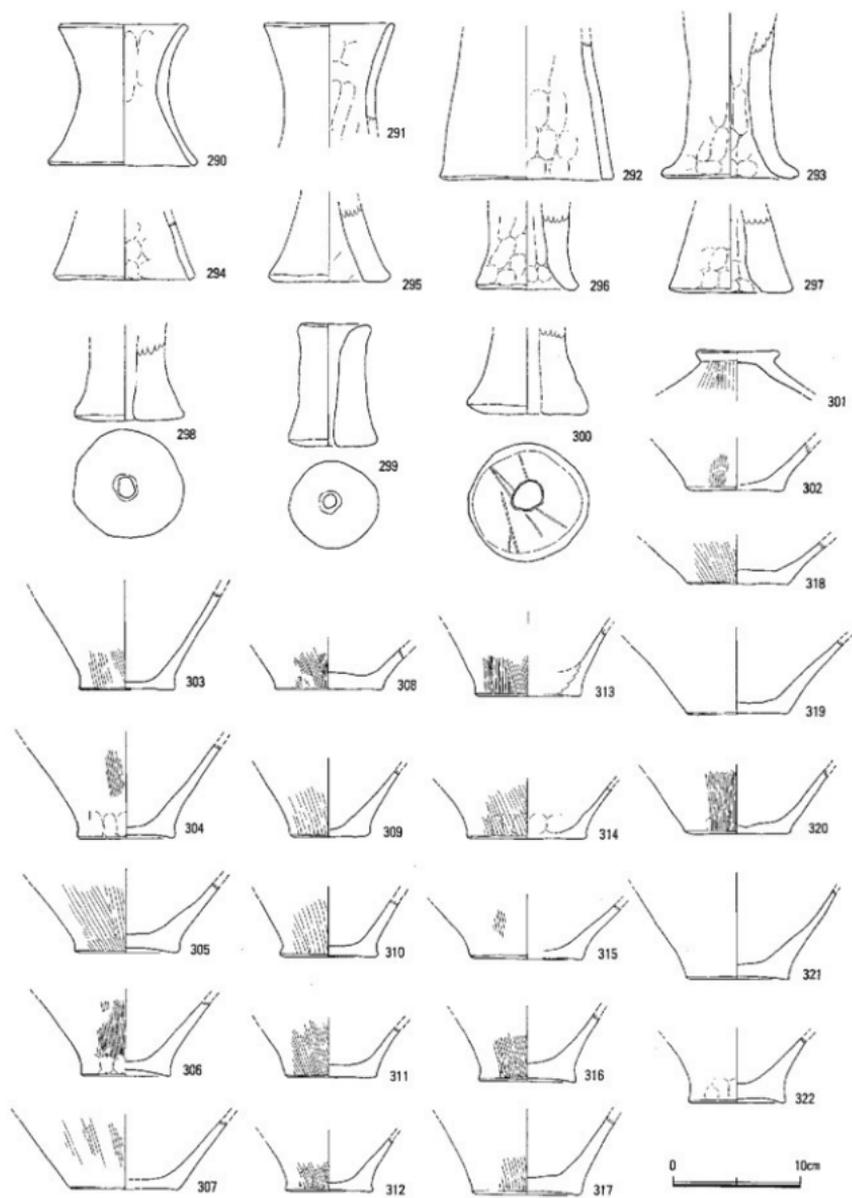


Fig. 77 SX10出土遺物14 (5層) (1/4)

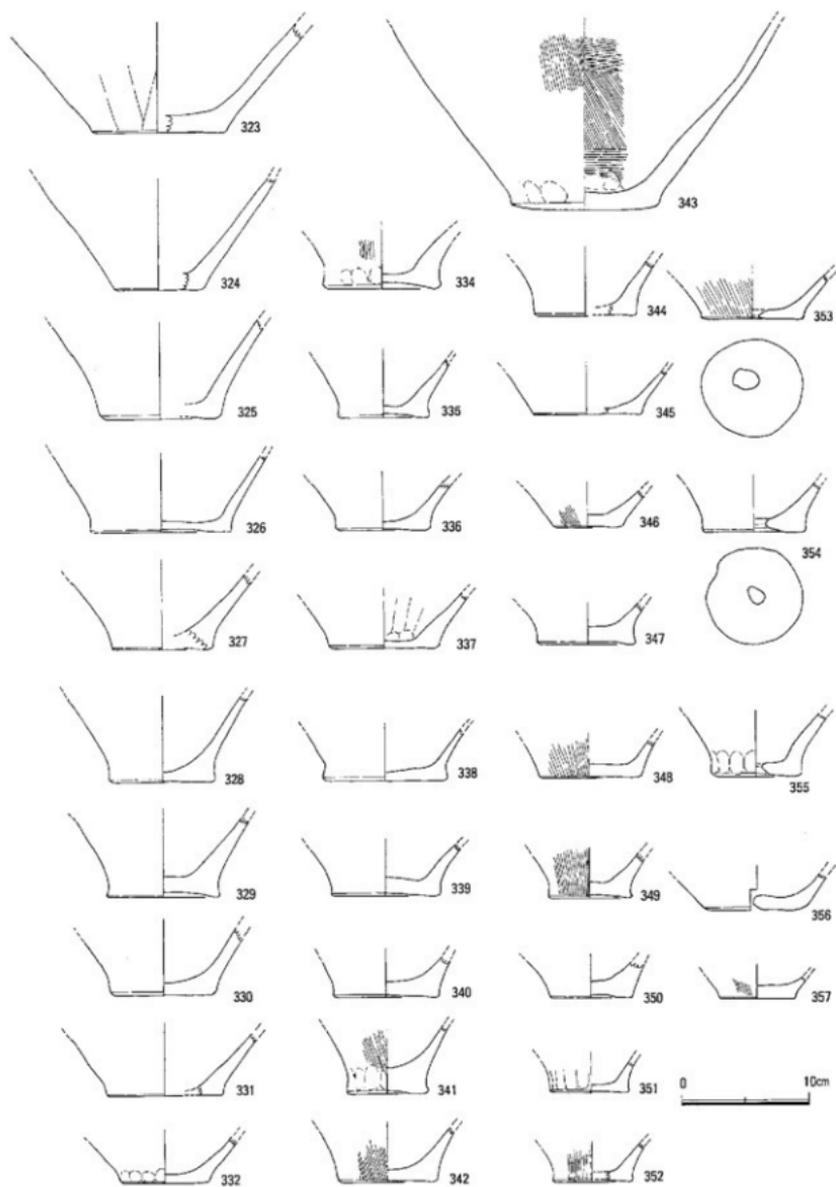


Fig. 78 SX10出土遺物15 (5層)(1/4)

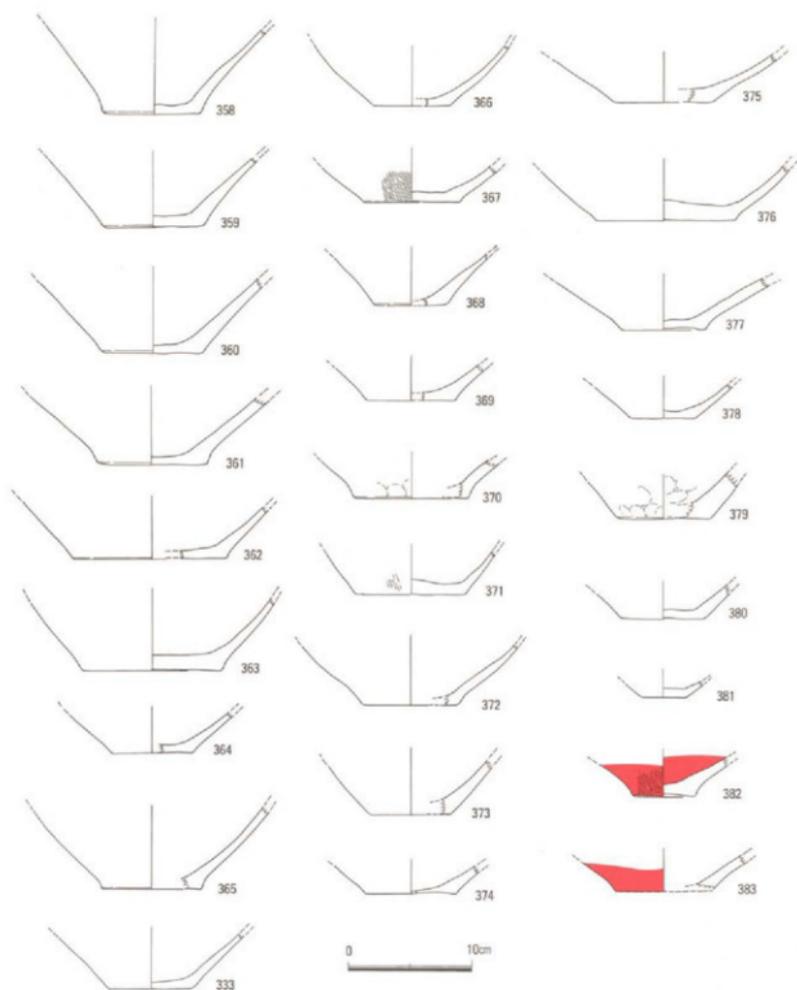


Fig. 79 SX10出土遺物16 (5層) (1/4)

(245～258)がある。赤色顔料の塗布があるのは、長頸(235)、袋状口縁(238、240)、直口(243)、鋤先口縁をもつ広口(246～250)と各形態に及んでいる。底部は全体に薄く仕上げられ、平底あるいは僅かに上げ底となる平底である。なお、245は口縁径が小さく、形態から甕形土器となる可能性がある。

甕形は小型と中型があり、何れも括れ部で確認した。

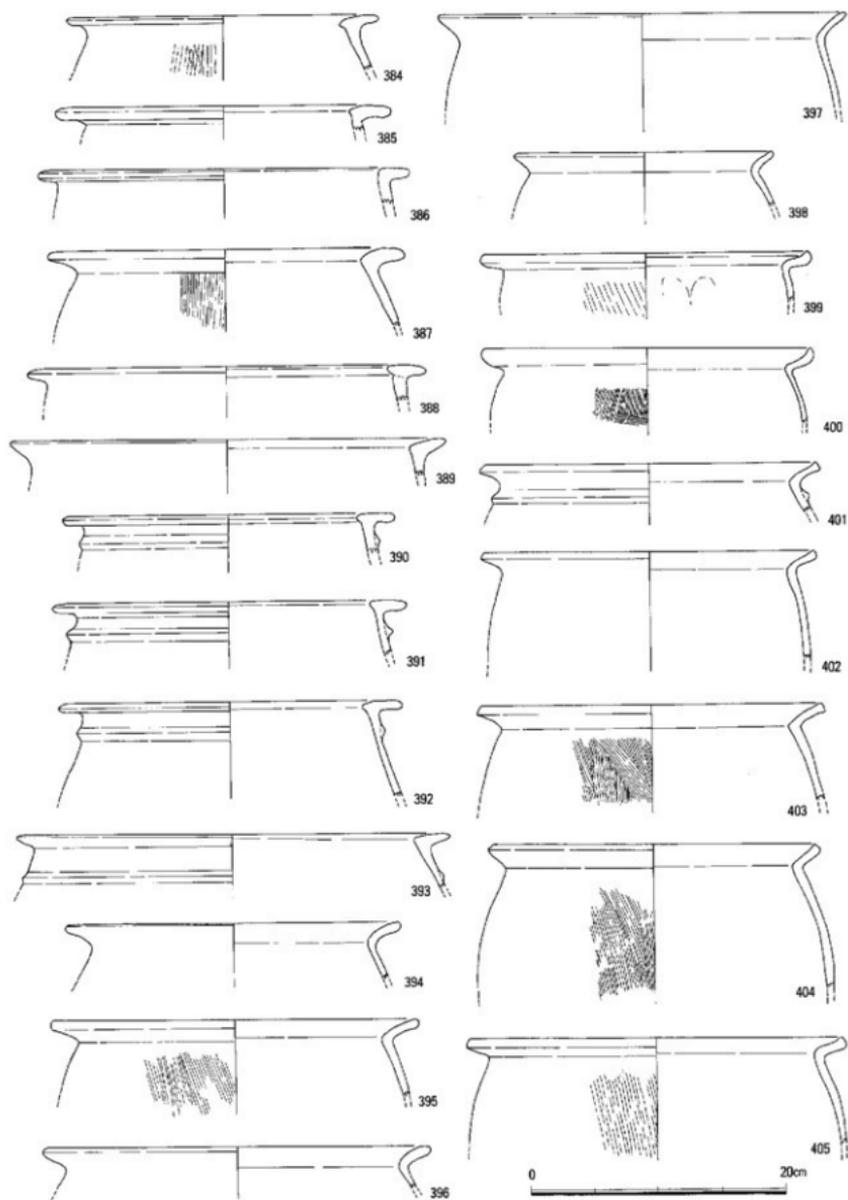


Fig. 80 SX10出土遺物17 (6層)(1/4)

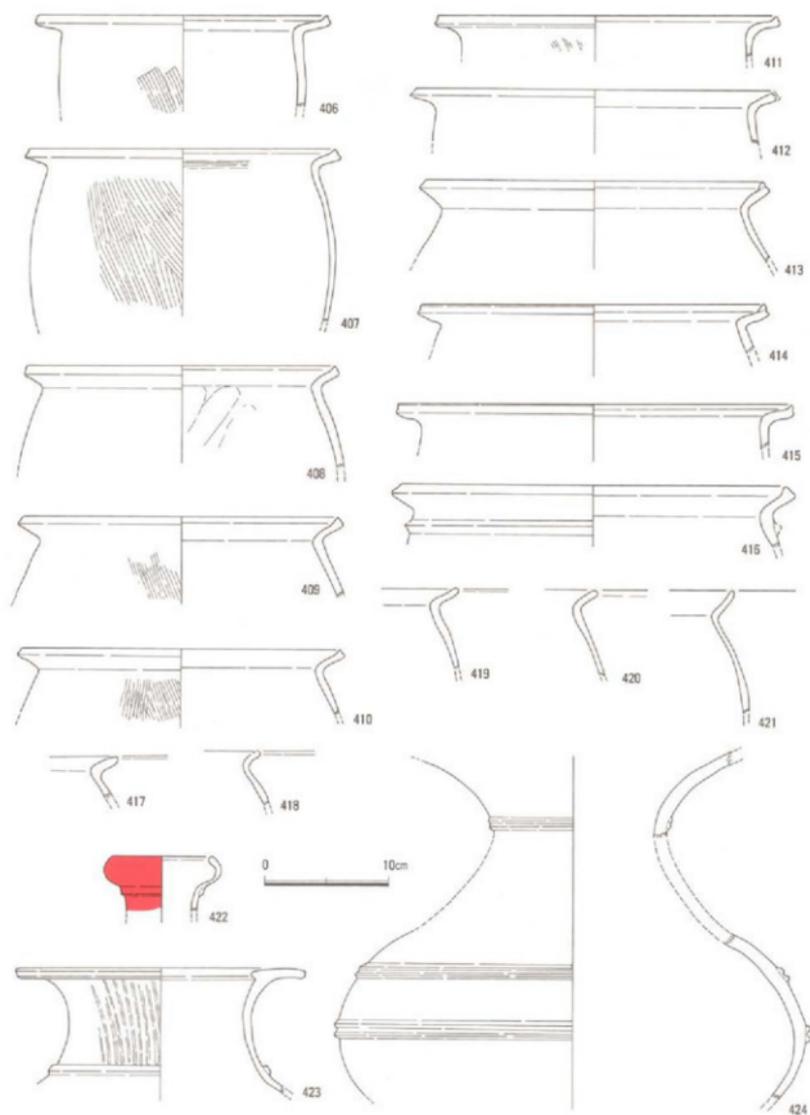


Fig.81 SX10出土遺物18 (6層)(1/4)

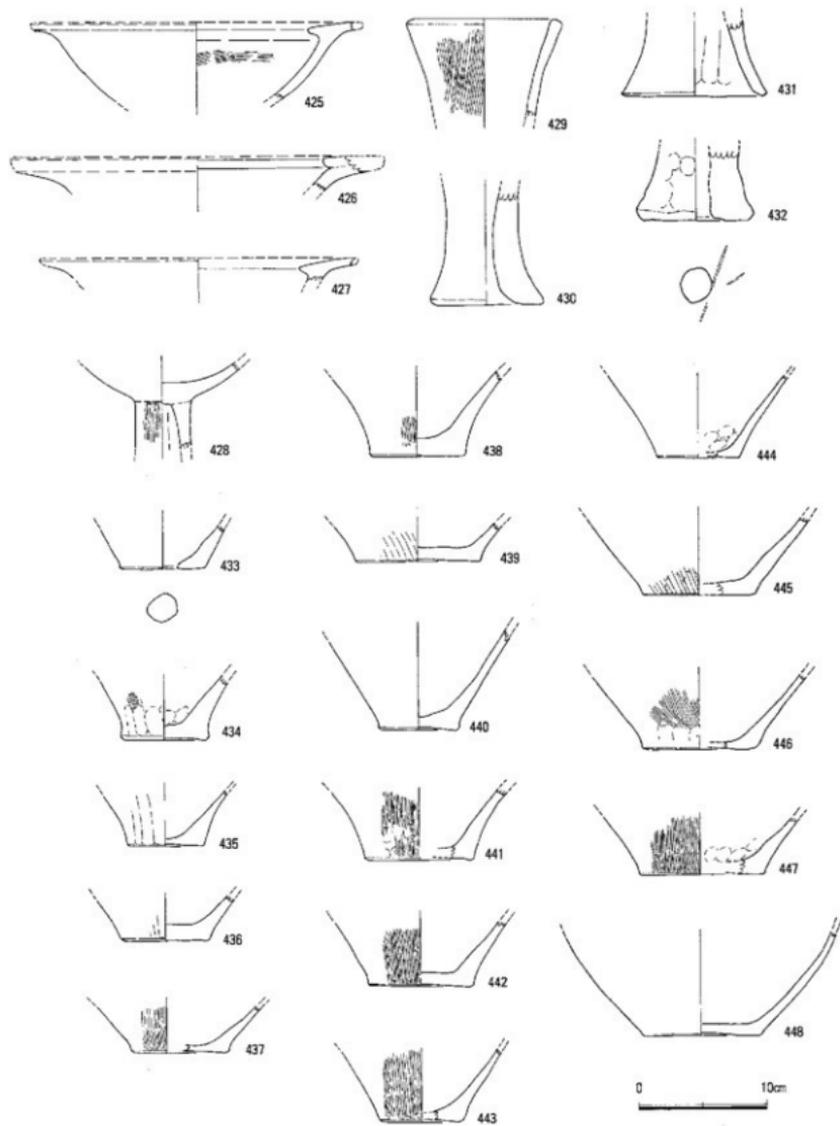


Fig. S2 SX10出土遺物19 (6層)(1/4)

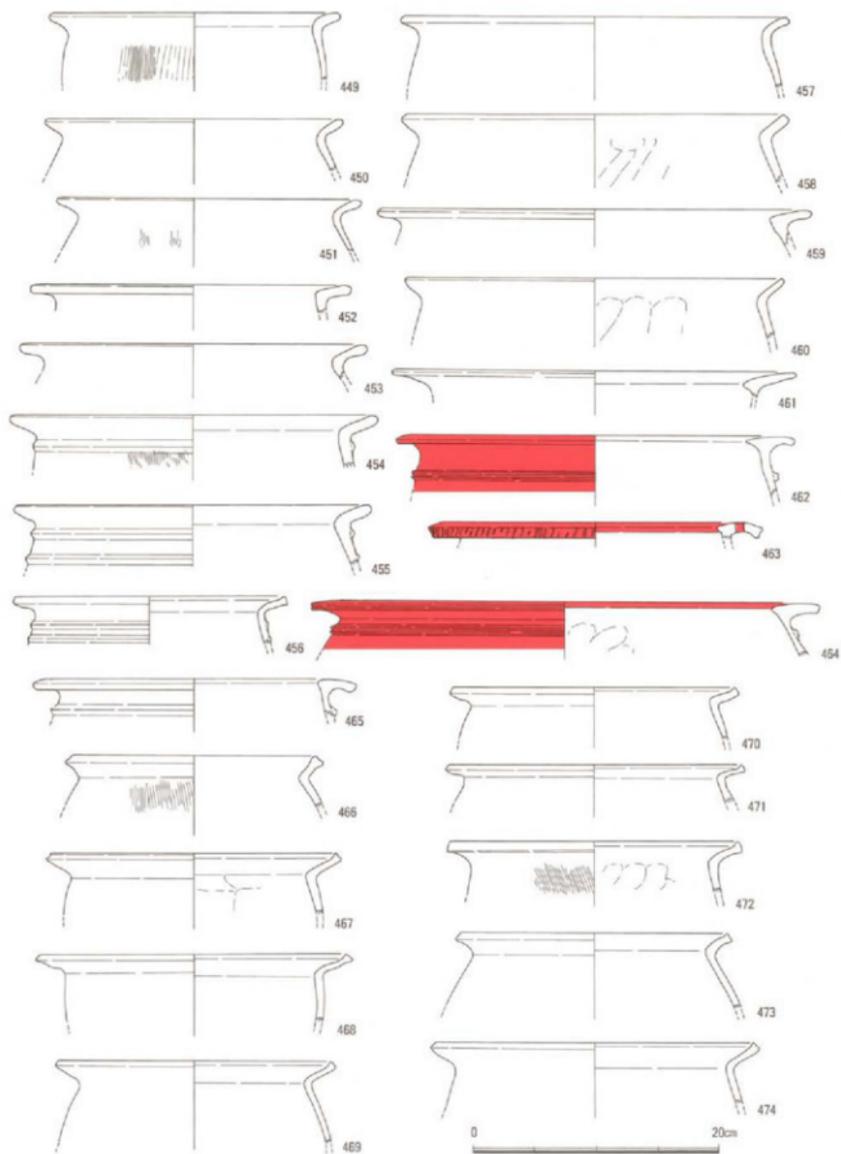


Fig. 83 SX10出土遺物20 (1/4)

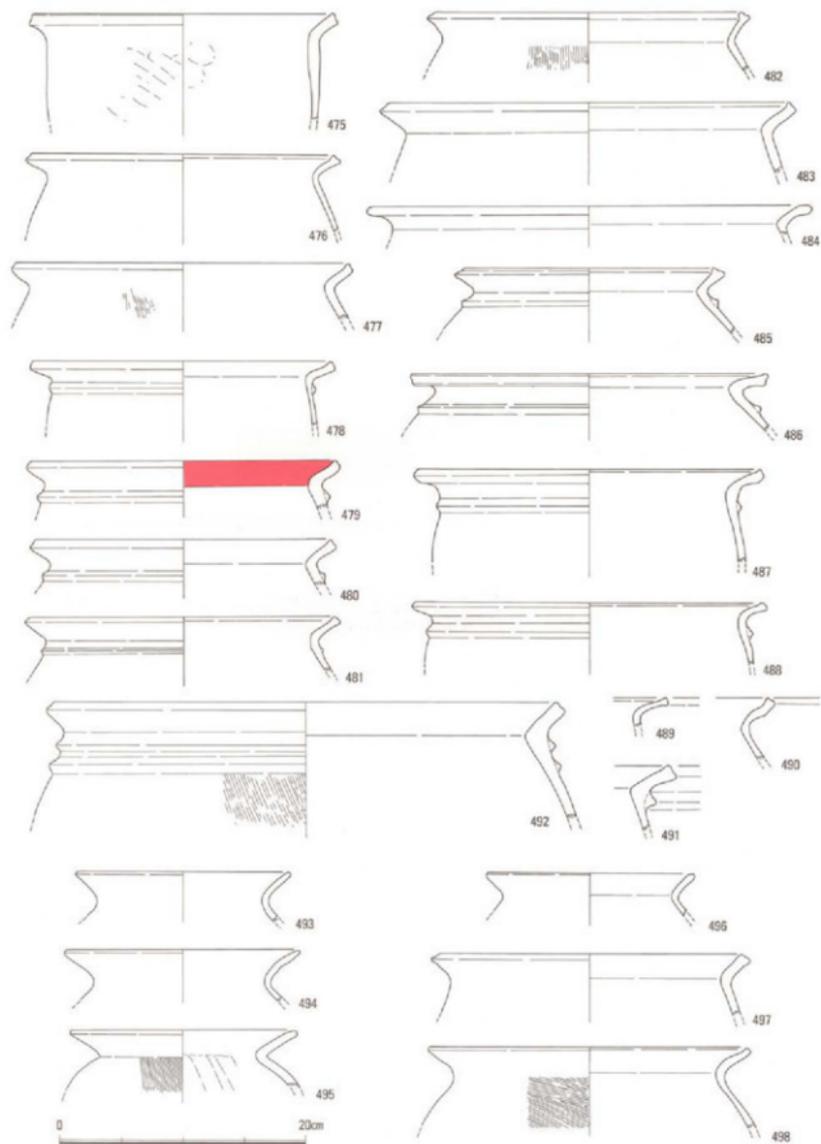


Fig. 84 SX10出土遺物21 (1/4)

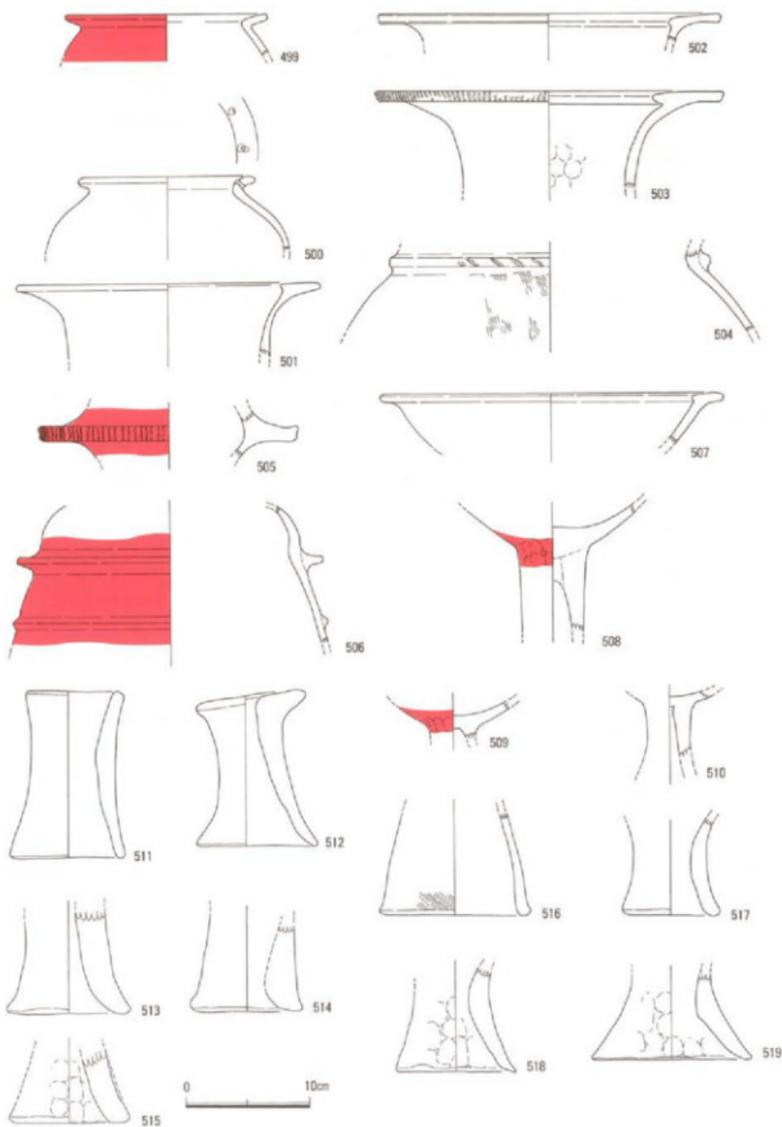


Fig. 85 SX10出土遺物22 (1/4)

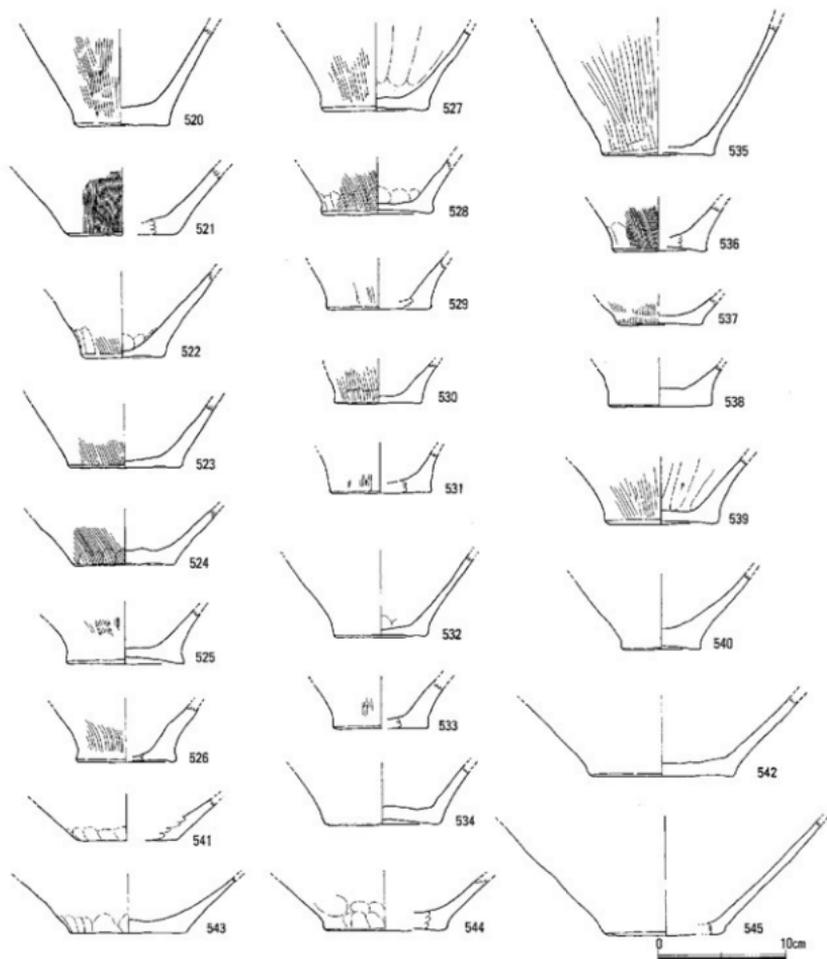


Fig. 86 SX10出土遺物23 (1/4)

鉢には小型で直線的に口縁が立つもの(262, 263)と、口縁が袋状となるもの(261, 264, 268)がある。後者には高杯の杯部を含む可能性がある。268は口縁下に三角突帯がつき、外面に赤色顔料が塗布される。

高杯には杯部(269~271)と脚部(272~279)がある。杯部は径30cm前後のもので、全て鋤先口縁である。脚部には杯部との境に突帯をつけるもの(272, 274)や、小型のもの(273)がある。272, 274, 276は外面と杯部内面に赤色顔料が塗布される。

器台には精製のもの(280~292, 294)と、粗製のもの(293, 295~300)がある。

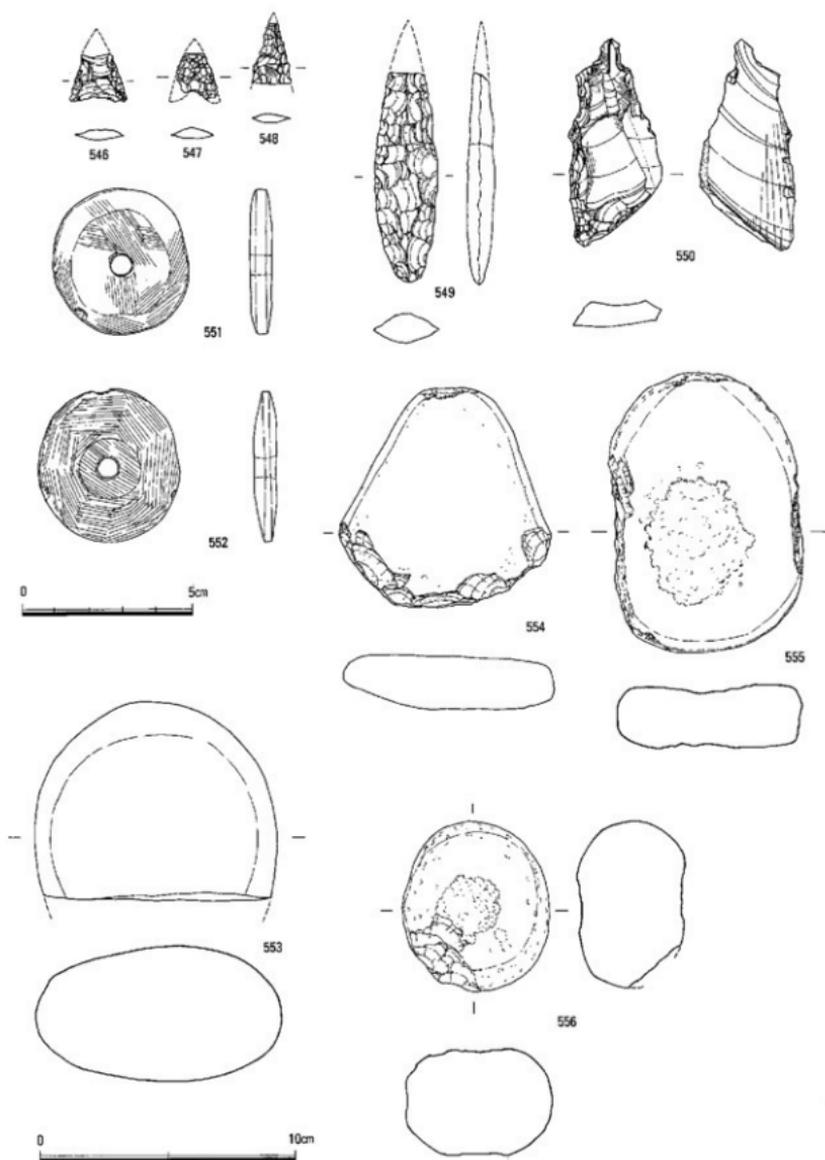


Fig. 87 SX10出土遺物24 (2/3 · 1/2)

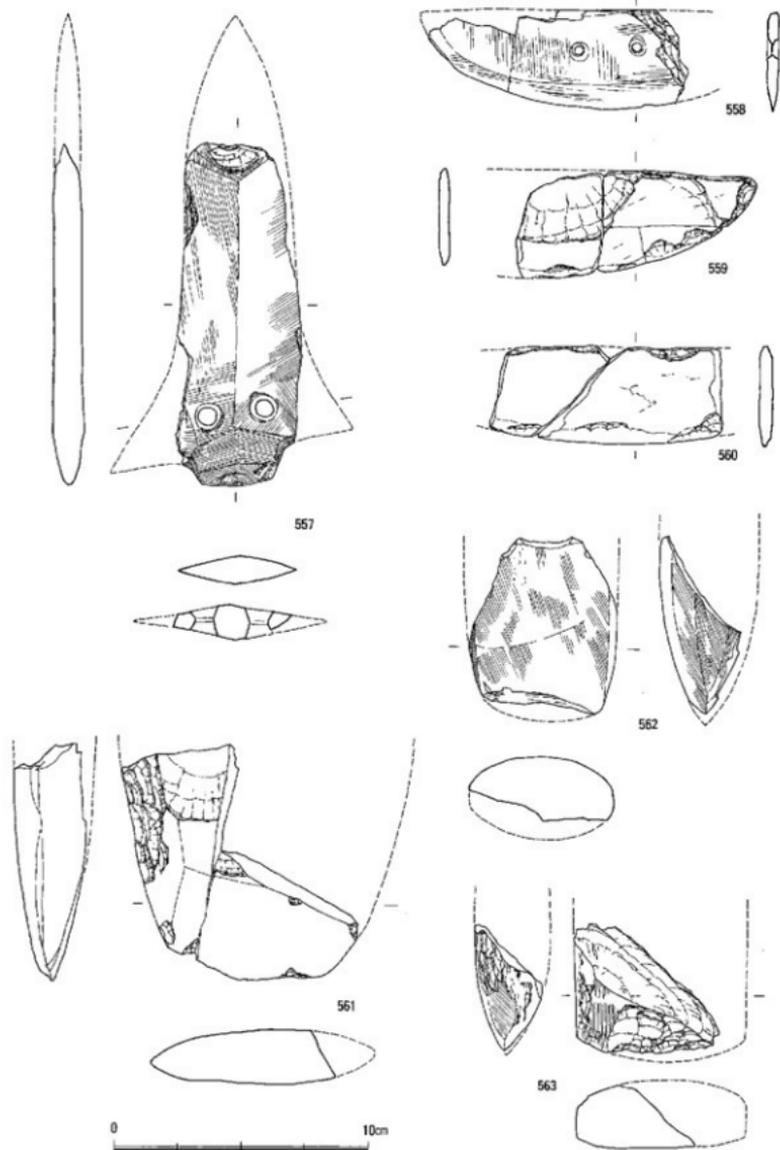


Fig. 88 SX10出土遺物25 (1/2)

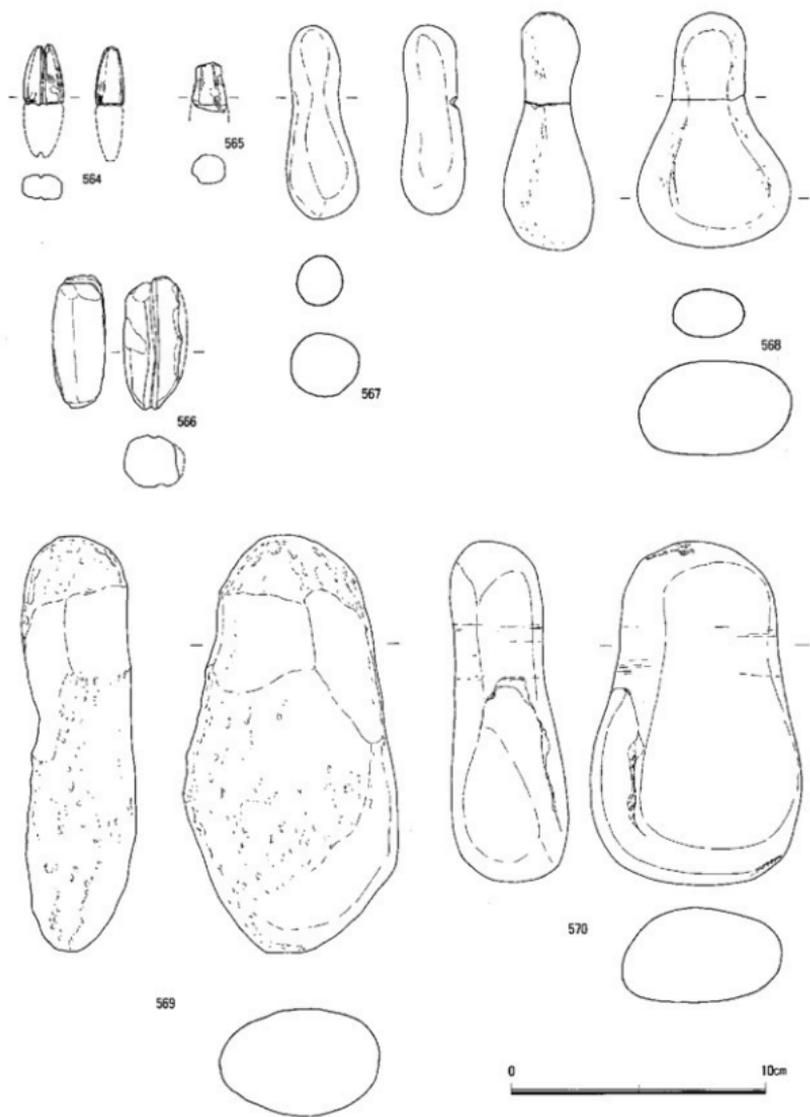


Fig. 89 SX10出土遺物26 (1/2)

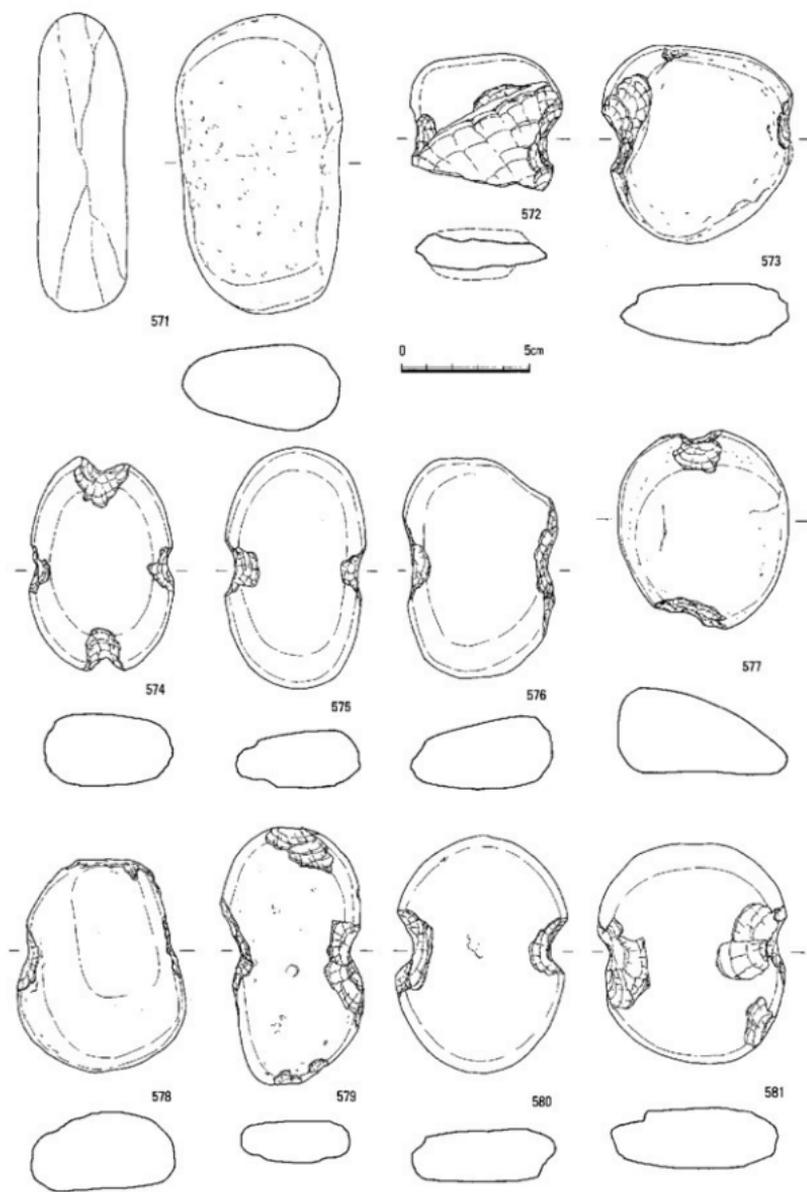


Fig. 90 SX10出土遺物27 (1/2)

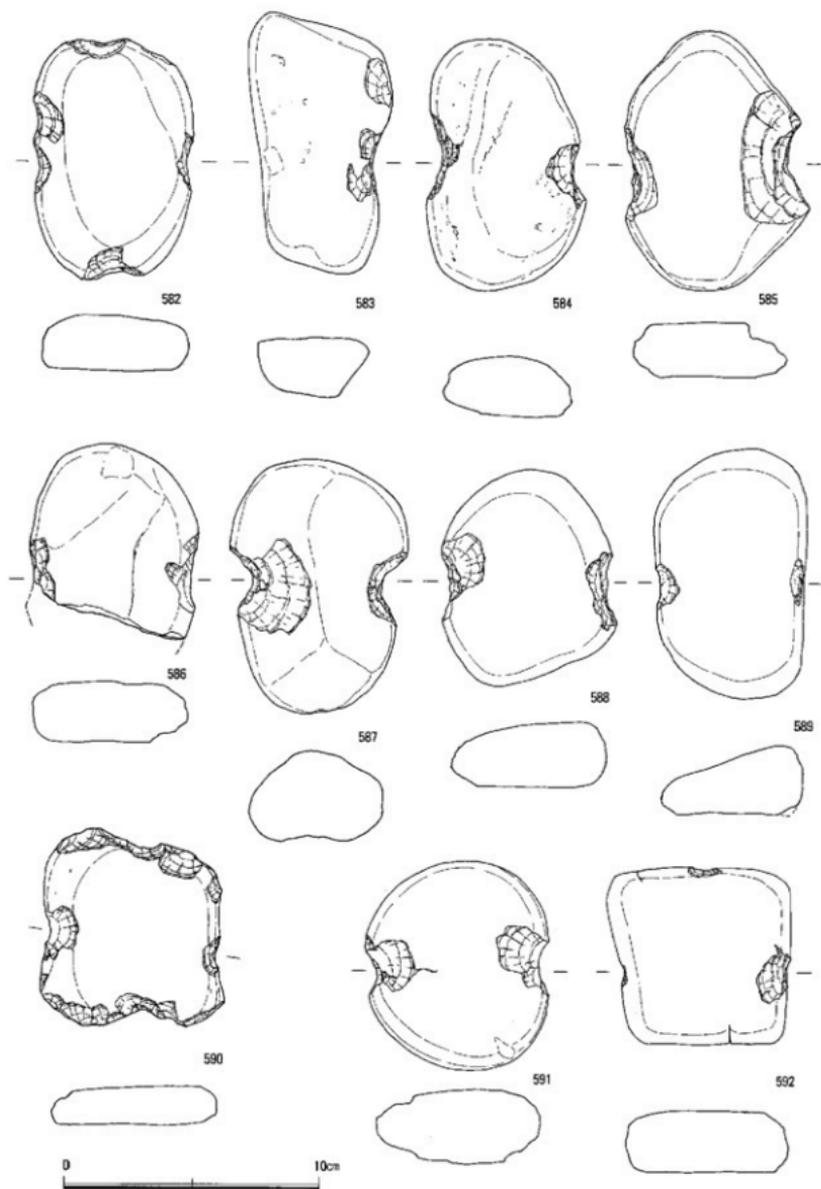


Fig. 91 SX10出土遺物28 (1/2)

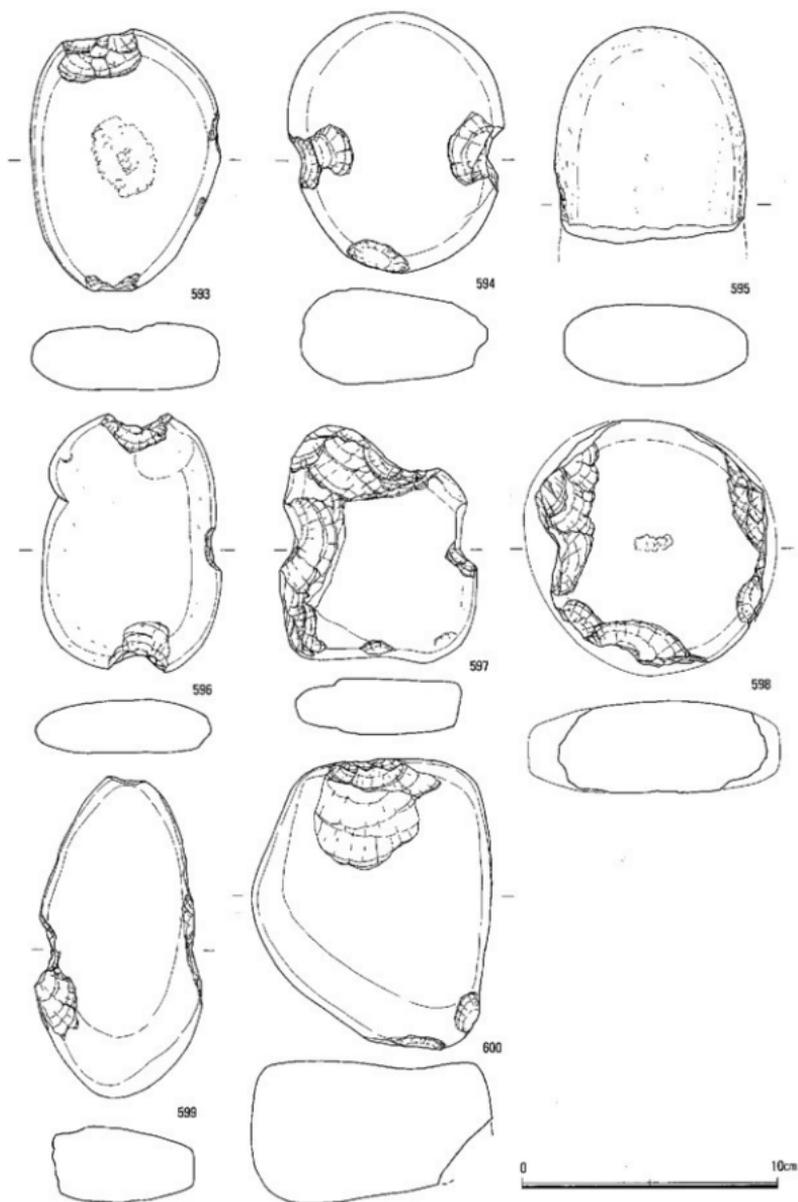


Fig. 92 SX10出土遺物29 (1/2)

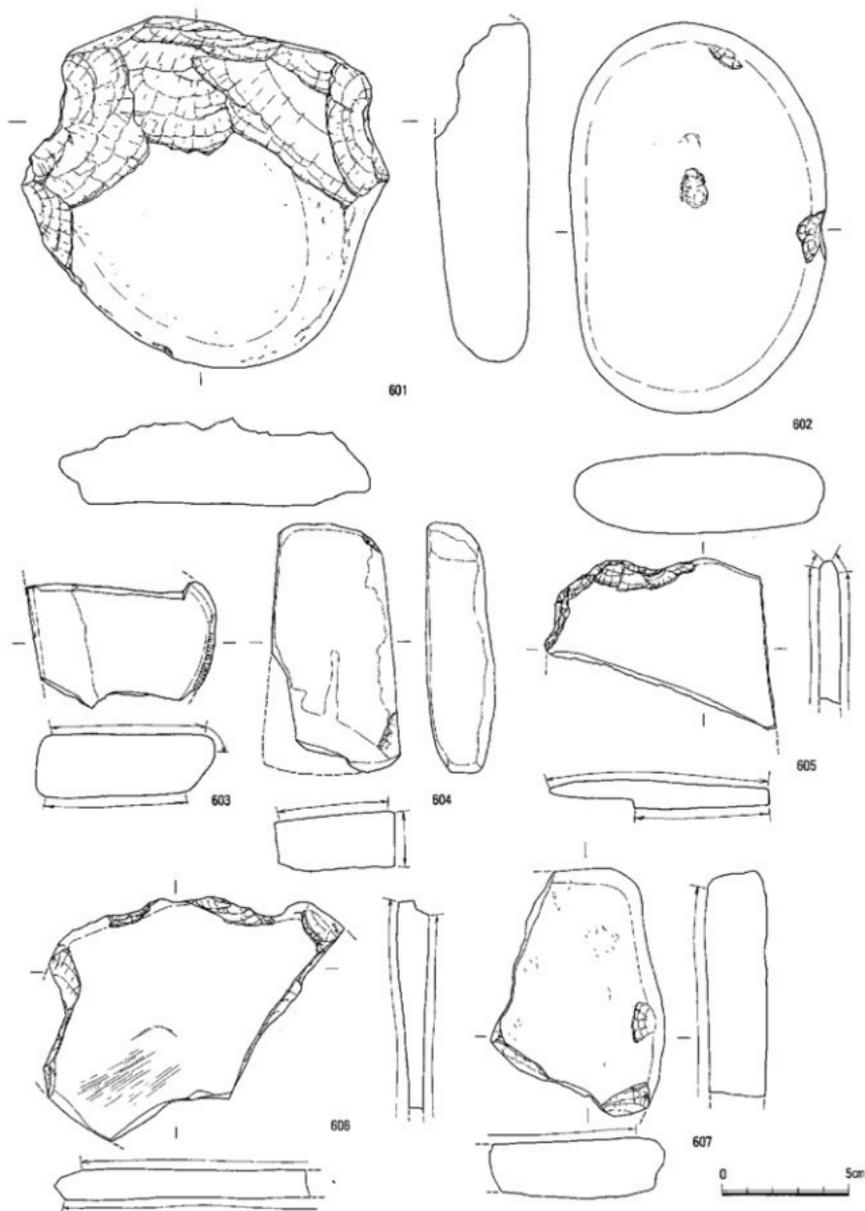


Fig. 93 SX10出土遺物30 (1/2)

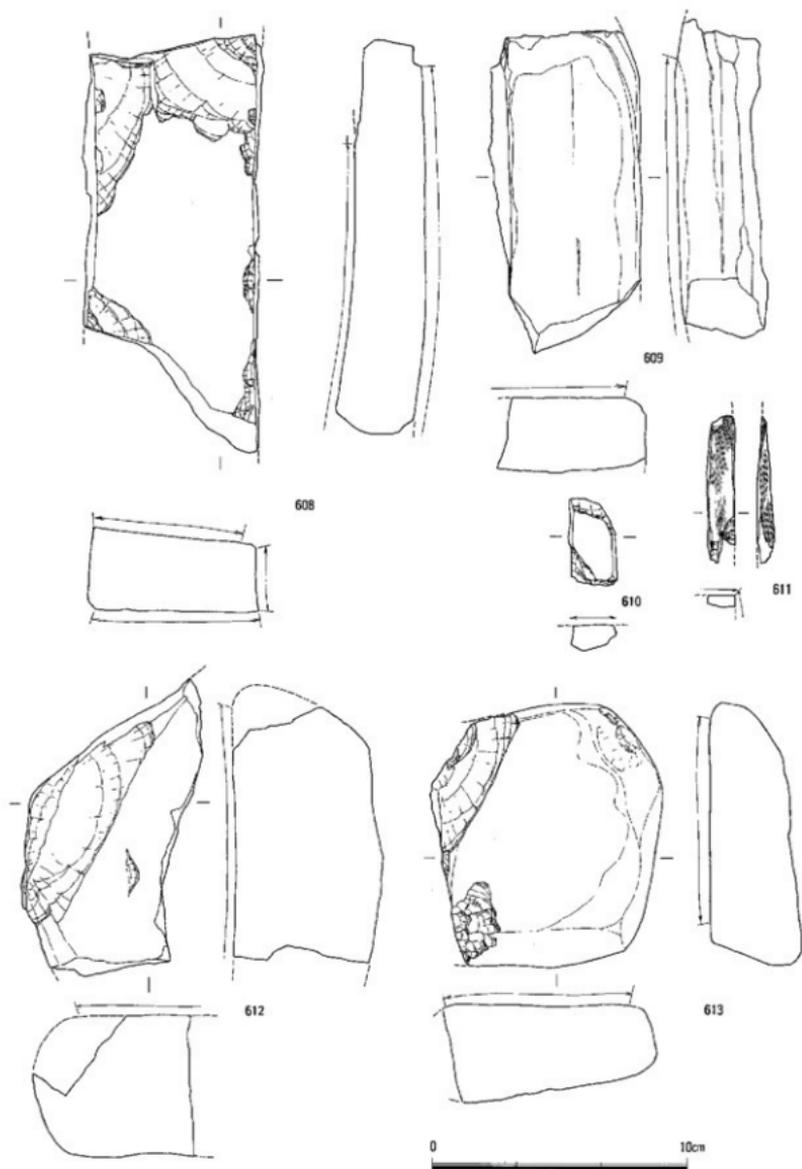


Fig. 94 SX10出土遺物31 (1/2)

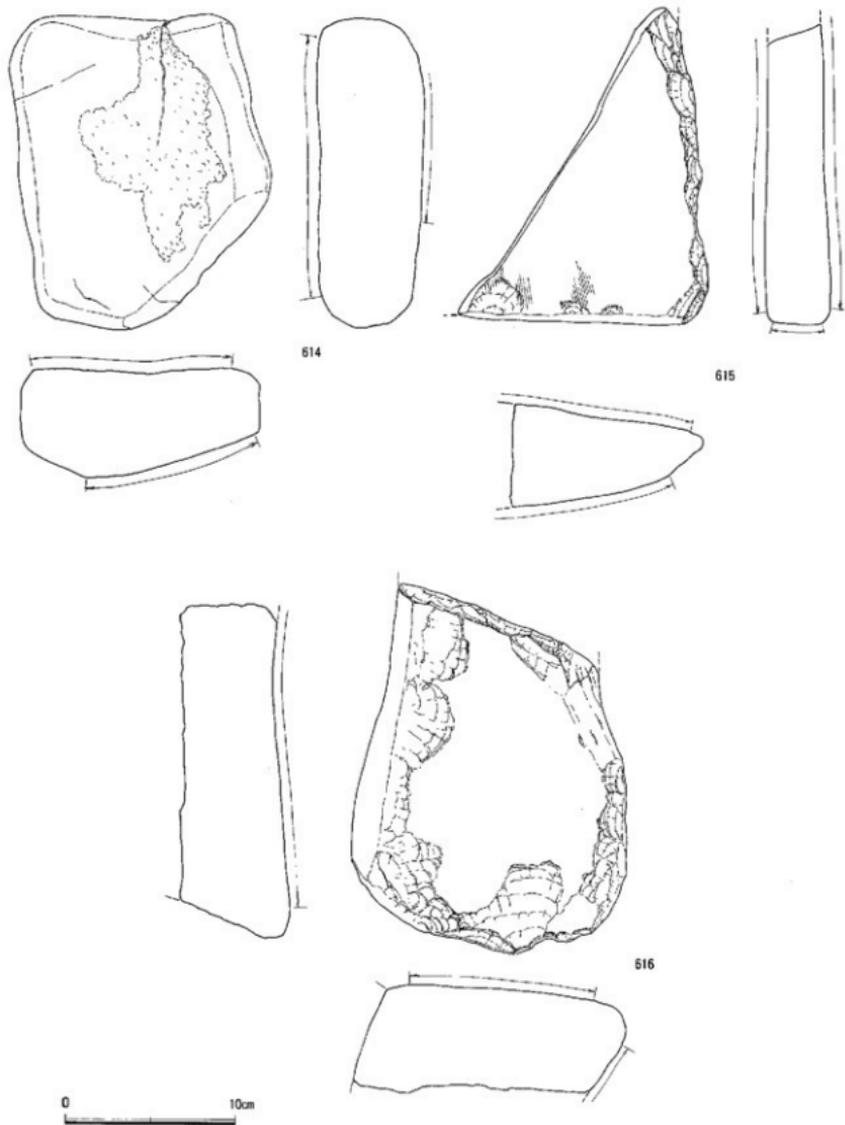


Fig.95 SX10出土遺物32 (1/3)

## 6層出土土器 (Fig.80~82)

本遺構の最下層であり、堆積範囲に対しては多くの遺物が出土した。61点の土器を図化した。土器には甕 (384~421、433~447)、壺 (422~424、448)、高杯 (425~428)、器台 (429~432) がある。

甕は須玖式系のもの (384~398、417)、跳ね上げ口縁系のもの (399~416、418~421) がある。底部は薄く仕上げられ、平底あるいは僅かに上げ底となる平底が多いが、434、436、438、442はやや厚みのある底部である。433は焼成後穿孔がある。

壺には袋状口縁 (422)、広口 (424)、鋤先口縁をもつ広口 (423) がある。422は赤色顔料を塗布する。高杯には杯部 (425~427) と脚部 (428) がある。杯部は径30cm以下のもので、全て鋤先口縁である。器台には精製のもの (429) と、粗製のもの (430~432) がある。

## そのほかの土器 (Fig.83~86)

層位ごとの取り上げが困難であった土器類を報告する。96点を図化した。土器には甕 (449~498、520~540)、壺 (499~504、541~545)、筒形 (505)、甕形 (506)、高杯 (507~510)、器台 (511~519) がある。

甕は須玖式系のもの (449~465)、跳ね上げ口縁系のもの (466~491)、高三溝式以降のもの (493~498) がある。479、462~464は赤色顔料を塗布する。

壺には短頸 (499、500)、鋤先口縁をもつ広口 (501~503) がある。口縁部を失うが複合口縁壺 (504) がある。短頸壺の外面には赤色顔料の塗布がある。

筒形は鈎の部分であり、径21cmを測る。赤色顔料を塗布している。

甕形は肩から胴部上半である。

高杯には杯部 (507) と軸部 (508~510) がある。507は鋤先口縁である。508、509は外面と杯部内面に赤色顔料が塗布される。

器台には精製のもの (516) と、粗製のもの (511~515、517~519) がある。

## 出土石器 (Fig.87~95)

SX10から出土した主な石器69点を図化した。出土層位や地点、石材、重量などは別表を参考とされたい。石器器種には、大別して剥片石器類、礫石器類、石製品がある。剥片石器類には石鎌 (546~548)、尖頭器 (549)、削器 (550) や多くの剥片類がある。礫石器類には磨石 (553)、叩き石 (554)、凹石 (555、556)、石戈 (557)、石包丁 (558~560)、石斧 (561~563)、石錘 (566~602)、砥石 (603~616) がある。石製品には紡錘車 (551、552)、石錘 (564~566) がある。

剥片石器類の多くは縄文時代遺物の混入である。

凹石は多面使用のものが多く、この他に石鎌に転用したもの (593、598) がある。

石戈は現存長13.5cmであり、先端欠損後再研磨を施している。

石包丁、石斧など全て破損品である。石斧には大型 (561) と、小型 (562、563) があるが、全体に薄い。

石錘には小型の有溝 (切目) 石錘 (564~566) と「有頭」石錘 (567~571)、敲打 (礫) 石錘 (572~602) がある。敲打石錘は短軸架けが主体であり、長軸架け (577、600)、両軸利用 (574、582、590、592、593、596~598) もある。

砥石は素材により、荒砥 (609、612~614、616)、中砥 (607、608、615)、細目 (603~605、610、611) がある。また、自然礫をそのまま利用するものが主体であるが、整形を施すもの (604、608) もある。

土器類に大きな時期差はなく、弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式の範疇に含まれる。その中でも6層出土土器はやや古い様相を持っている。本遺構の構築時期は、須玖Ⅱ式の古相と考えられる。

SX20 (Fig. 96~98)

H地区中央部の標高24~22m付近に検出した。上面は畑地造成により相当の削平を受けているが、大きな攪乱はない。平面は楕円形を呈し、ほぼ南北方向に主軸を向ける。南北21m、東西9.6mを測る。周囲の地形は平坦であり、この遺構は平坦地に直接掘り込んでいと考えられる。遺構の横断面は中央のやや窪む逆台形であり、深さは中央で最大2.2mである。壁面は東側25°西側43°の傾斜を測る。なお、遺構の北側には幅1.9~0.7m、深さ0.3~0.1mの溝(SD21)を付設する。遺構の総長は31mである。SD21は真直ぐ斜面下方のSX30に向かうが、途中の畑地造成の段により途切れている。遺構内の覆土は3層群に区分され、下位がシルト質土、中位が黒色腐植土、上位が暗褐色土であり、すべて自然流入土である。中位を中心に遺物が多く出土した。

出土した遺物には、土器類、石器類がある。土器には甕(3~7)、壺(1、2、8~14)、高杯(15~18)、鉢(19)がある。石器には石鏃(20、21)、剥片、浮石(22)、石鏟(23)がある。

竈は「く」字形口縁をもつもの(3)と、跳ね上げ口縁系のもの(4)がある。底部は薄く仕上げられ、平底のもの(6、7)と、僅かに丸底気味のもの(5)がある。

壺は短口縁(1、2)、二重口縁(8)、複合口縁(9~11)がある。底部は稜線はあるが、丸底化し始めている(13、14)。胴部のみの12は、袋状口縁と見られる。

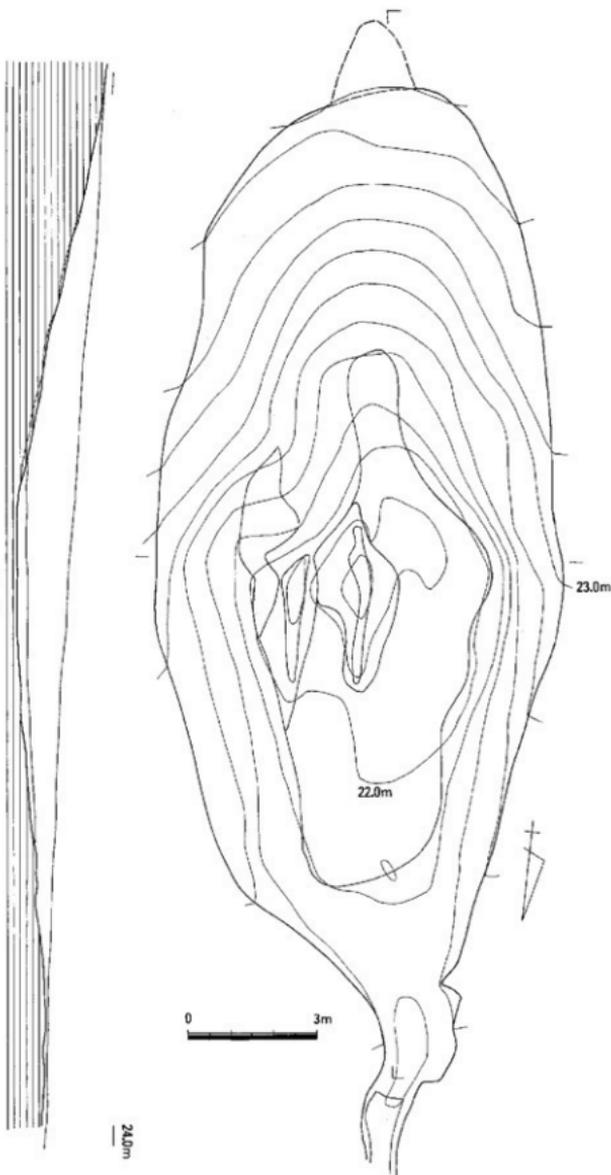
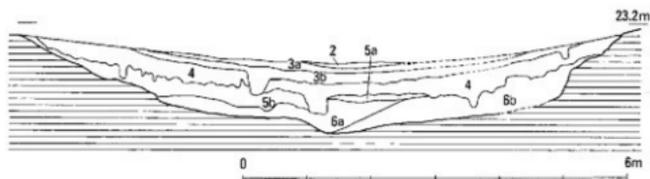


Fig. 96 SX20 (1/120)



2. 暗褐色土 硬く締まる。上・下層よりやや明るい色調をおびる。砂粒の動きによりさらに細分層可。全体的に2-3mm以下の砂粒多く含む。下位層には比較的明確に区分される(流入土か)。
- 3a. 暗-黒褐色土 硬く締まる。2-3mm以下の砂粒を多く含むが、西側では砂粒少なくなる。下位層にはやや漸移気味ではあるが区分は察。
- 3b. 黒色-黒褐色土 硬く締まり粘質をおびる。上・下層にやや漸移変化する。東側では砂粒やや多い。土器片、炭化物片多く含む。
4. 暗灰-灰褐色土 硬く締まる。角礫を多く含む。下位にしたがい砂質をおびるようになる。
- 5a. 暗灰褐色粘質土 径2mm以下の砂粒多く含む。上面凹凸多し。明瞭区分、下面平坦、やや不明瞭。
- 5b. 暗灰色粘質土 径2mm以下の砂粒多い。少量の炭化物片含む。硬く締まる。上下層とは比較的明確に区分される。
- 6a. 暗灰白色粘質土 径3mm以下の砂粒。2cm以下の小礫多く含む。水分多し。下面境界にマンガン沈着あり。
- 6b. 暗灰白色粘質土 全体にマンガンが多量に比着。黒色気味となる。粘土の性状変化し硬く凝結する。

Fig.97 SX20横断面土層図 (1/80)

高杯は、杯部上半が短く外反するもの(16、17)と、その軸部がある。また、鋤先口縁をもつもの(18)もある。

鉢は、口縁部が直線的に立ち上がり、粗製のもの(19)がある。

石鏡は2点出土し、何れも黒曜石製である。三角鏡(20)、銅片鏡(21)がある。これは何れも縄文時代のものであり、混入品と見られる。

以上の遺物のうち土器類は、弥生時代のなかで時期差があり、三群に区分される。まず、4、6、7、18は須玖II式に対応する。3、5、9-11、13-17、19は下大隈式段階、1、2、8は西新町式段階に対応する。遺物量の多さと出土状態からみて本遺構は下大隈式段階に埋没がはじまり、西新町式段階にほぼ埋没したものと見られる。縄文時代や、弥生時代中期の遺物は後の混入品と見られる。

SX30 (Fig.99~102)

SX20の北側、SX10の東側に位置する。H地区中央の標高19.5~20.5m付近に検出した。上面は畑地造成により相当の削平を受けている。平面は卵形を呈し、ほぼ南北方向に主軸を向ける。SX20と同様に北側に溝を付設する。本体部分は南北17m、東西11mを測る。総長は20.1mである。

この遺構は立地からみてSX20と同様に、平坦地を直接掘り込んでいると考えられる。遺構の横断面は逆台形であり、底面は凹凸が著しい。深さは中央で最大1.8mである。最深部の標高は約17.4mである。壁面は途中で角度の変換がある。下半部は東側59°、西側55°の傾斜を測る。上部は両壁ともに25°前後と緩やかとなるが、覆土との整合からみて、人為的な整形ではなく、二次的に壁面の風化流出の結果と見られる。

遺構内の覆土は4層群に区分される。最上部(1・2層)は褐色土であり、上位に中世の遺物を少量含む。上部(3層)は黒色腐植土であり、下位に弥生時代遺物を多く含む。中部(4・5層)は暗灰色粘質土であり、下位に礫、焼土、灰、土器片の集積があり、硬く凝結している。下部(6層)は黄灰色粘質土であり、水分が多い。礫と鉄分の沈着が多い。遺物はほとんど見ない。

なお、北側の溝(SD31)は本体部が次第にすぼまり、連続して掘削されている。幅3.8m、深さ0.7

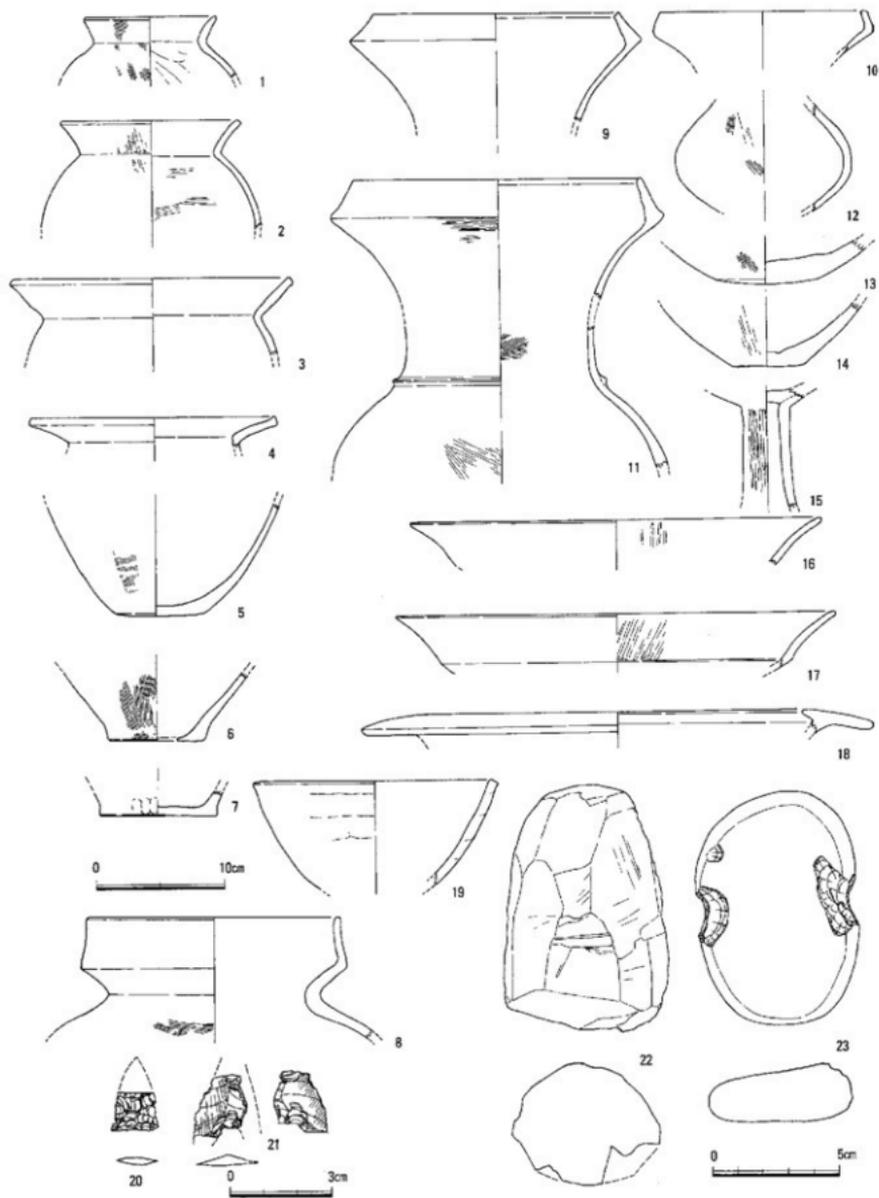


Fig. 98 SX20出土遺物 (1/2・2/3・1/4)

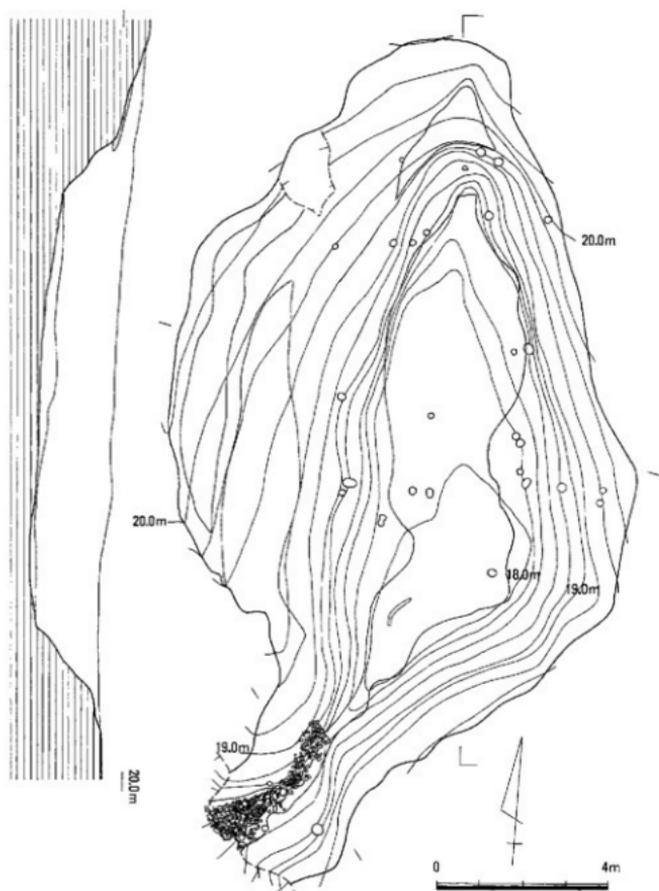
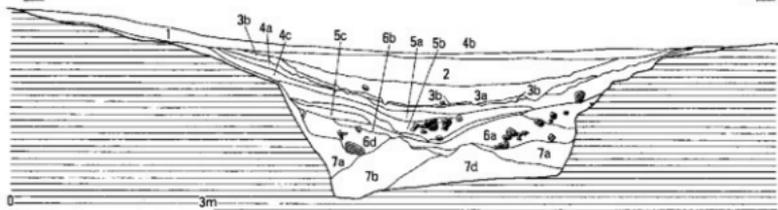


Fig.99 SX30 (1/120)

mを測り、長さはおよそ5mを検出した。SD31の底面は本体部より高まり、最高所で約18.6mを測る。東側に強く曲がり、現代水田の造成面によって切られる。溝底には石組遺構がある。石組は、一辺10cm大の角礫を集積し、埴土で覆っている。幅0.4~0.5m、厚さ0.2~0.3mあり、東側にしたがいの幅と厚みを増す。溝内の覆土は3層群に区分され、上部が黒色腐植土であり、本体部上部層と連続する。中部は暗褐~灰褐色土であり、地山土塊を含む埋め土と見られる。この下位に石組遺構がある。下部は溝底に5cm以下の堆積を見せる茶褐色土である。整地層か。

出土した遺物には土器類、石器類がある。土器には甕(1~8)、壺(9~13)、高杯(14~19)、器台(20)がある。石器には石包丁(21)、砥石(22)がある。

甕には須玖式系のもの(5、6)、跳ね上げ口縁系のもの(1~4)がある。底部は平底のものがある。



1. 褐色弱粘質土 5cm以下の粘土、礫を多く含む。乾くとクラック発生。中庄以降の遺物少量含む。土質あり。2層とは不明瞭。硬くしまる。
2. 暗褐色粘質土 5cm以下の粘土、礫を多く含む。下位にしたがい粘性強まる。下位層とは漸移変化。不明瞭。下位に暗色増す。硬くしまる。
- 3a. 黒褐色粘質土 左右、上下に黒味は弱まる。密度高く硬くしまる。下部部におよび大礫、砂礫を少量含む。下面は凹凸、漸移変化。上層片(卵石)下部に多い。
- 3b. 黒灰色粘質土 3a層の漸移層。上下面共に凹凸著しい。
- 4a. 黄褐色弱粘質土 中や粘質が薄す。上面は凹凸著しい。硬くしまる。下面は平坦。炭化物片、小礫を少量含む。上下層とは明瞭。上面はよこれ地層。2-3cm以下の砂。少量の炭化物片を含む。上面は凹凸あり。下面はややフラット。
- 4b. 灰褐色粘質土 5-7m付近は炭化粘土化する。層全体が黒色気味となる炭化物片が多く含まれる。全体のほとんどまんべんなく分布するが、やや東斜面側に多いが上下層とは明瞭に区分される。
- 5a. 暗黄灰色粘質土 硬くしまる。きめ細かい(細~微砂)砂質土からなる。鉄分の沈着多く全体に黄~茶変する。炭化物片少量含む。下面はやや凹凸気味明瞭区分される。
- 5b. 暗茶色砂質土 硬くしまる。やや微しい砂粒(粗~中粒)からなる。5cm以下の地山礫を少量含む。鉄分多い。マンガン沈着あり。層厚状となる部分あり。水成堆積か。
- 6c. 灰白色粘質土 硬くしまる。上部はやや砂質気味。下部は青色粘土化。炭化物片少量含む。下面は凹凸あり。明瞭区分。
- 6a. 黄~灰色粘質土 硬くしまる。シルト質。マンガン、鉄分沈着著しい。下面はフラット。明瞭区分。
- 6b. 黄褐色粘質土 硬くしまる。中粒約に砂粒を含む。鉄分沈着著しく茶変する。下面はやや凹凸。区分明瞭。
- 6c. 灰白~灰青灰色粘質土 硬くしまる。中粒約(6-7mm)は鉄分少ない。右にしたがひ鉄分多い。上面はマンガン粒。下部は鉄分多い。
- 6d. 灰白色粘質土 硬くしまる。全体にシルト~微砂質土。クラックに沿って鉄分。下面に沿って鉄分沈着。変色する。
- 7a. 青灰色粘土 硬くしまる。べとつく。グライ化。上部は鉄分多く茶変する。
- 7b. 青灰色粘土~黒灰色粘土 凡層硬くなる。べとつく。グライ化。灰褐色土は漸移気味。水許多く含む。泥質化する。
- 7c. 黄褐色粘質土 硬くしまる。5cm以下の地山礫を多く含む。やや砂質。全体に鉄分沈着。下面は不明瞭。漸移する。
- 7d. 灰白色粘質土 5cm以下の地山礫(炭化産物)を含む。これは下部にしたがい増加し、地山(盤に積する)上部は鉄分沈着多い(特に礫の下方)。全体にマンガン粒多い。

Fig. 100 SX30横断面土層図 (1/80)

壺(9、10)は袋状口縁壺である。口縁端が立ち上がり気味となる。底部はやや丸みをもつ平底である。高杯は杯部が短く外反する。

1a. 黒褐色土(クロボク質)

きめ細かい。硬くしまる。5cm以下の地山礫を多く含む。下面は凹凸著しい。漸移気味。

1b. 黒褐色土

硬くしまる。原層はやや漸移気味。比較的明瞭区分。ピット内埋土。

2. 暗褐色土

硬くしまる。5cm以下の地山礫を少量含む。下面は凹凸著しい。層内は漸移あり。マンガン粒少量あり。

3a. 黄褐色土

硬くしまる。3cm以下の地山礫を少量含む。下面はやや凹凸気味。漸移変化。

3b. 茶褐色土

硬くしまる。3cm以下の地山礫を少量含む。下部はやや粘質化、平坦。層内漸移。明瞭区分。

3c. 黄褐色土

硬くしまる。均質。きめ細かい。下面はやや凹凸。明瞭。

4a. 暗灰色粘質土

硬くしまる。全体によこれる。小礫含む。マンガン粒少量形成。下面は明瞭。ブロック状塊を含む。漸移なし。

4b. 灰褐色粘質土

硬くしまる。全体によこれる。小礫含む。マンガン粒少量形成。上面は凹凸あり。ブロック状塊含む。漸移なし。

4c. 暗褐色土

硬くしまる。マンガン集積のため褐色化。本家は砂質を含む灰色粘質土とみられる。鉄分、マンガン比著著しい。上・下断面。明瞭区分。

4d. 灰白色粘質土

硬くしまる。石の周りはマンガン集積。下面は平坦。明瞭区分。

4e. 灰褐色粘土

硬くしまる。地山粘土の2次堆積。上面は明瞭。マンガン粒少量含む。

4f. 暗褐色土

硬くしまる。マンガン集積層。上下面は明瞭。マンガン粒多量。凝結する。

5. 茶灰色粘質土

硬くしまる。径3cm以下の地山礫少量含む。粘土化(上部ほど灰色化)は漸移的。下部はやや色漸移気味。地山とは不整合にて明瞭。

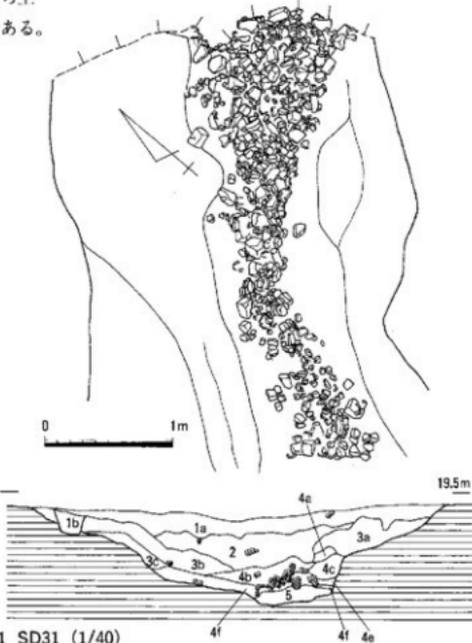


Fig. 101 SD31 (1/40)

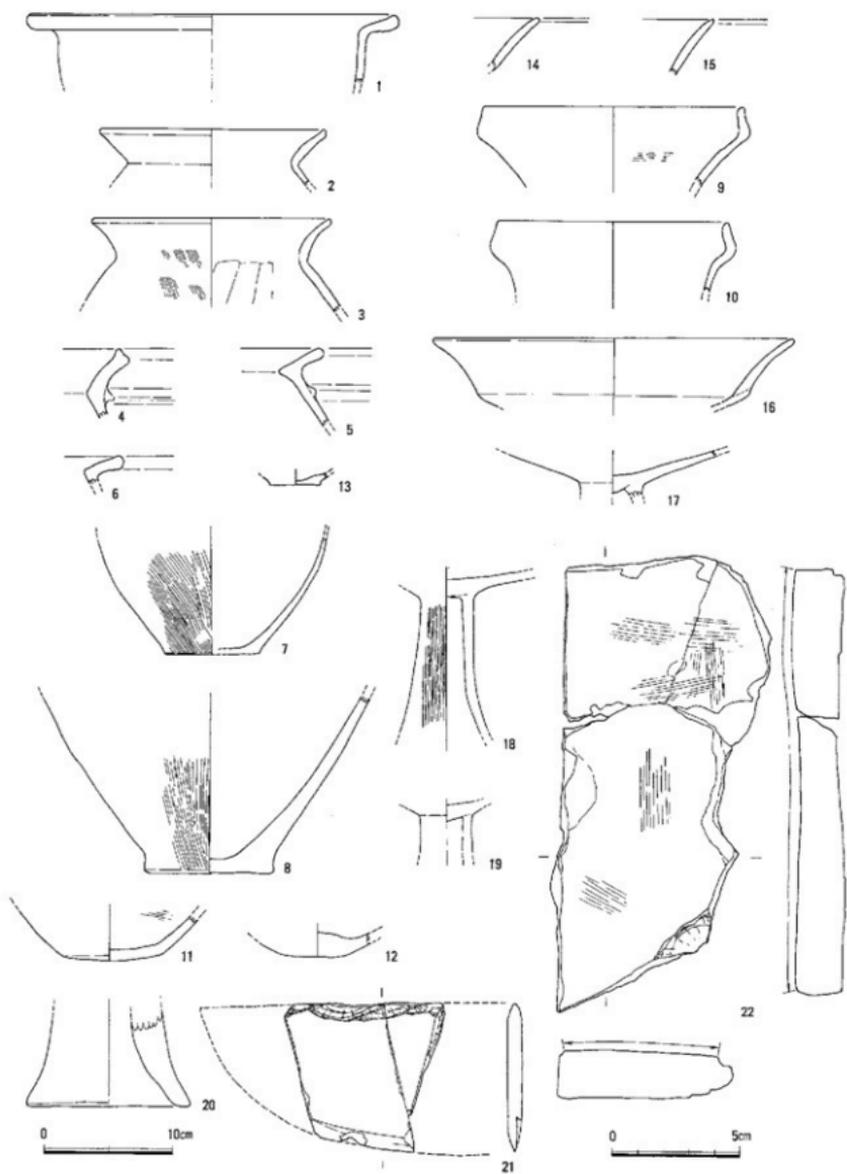


Fig. 102 SX30出土遺物 (1/2・1/4)

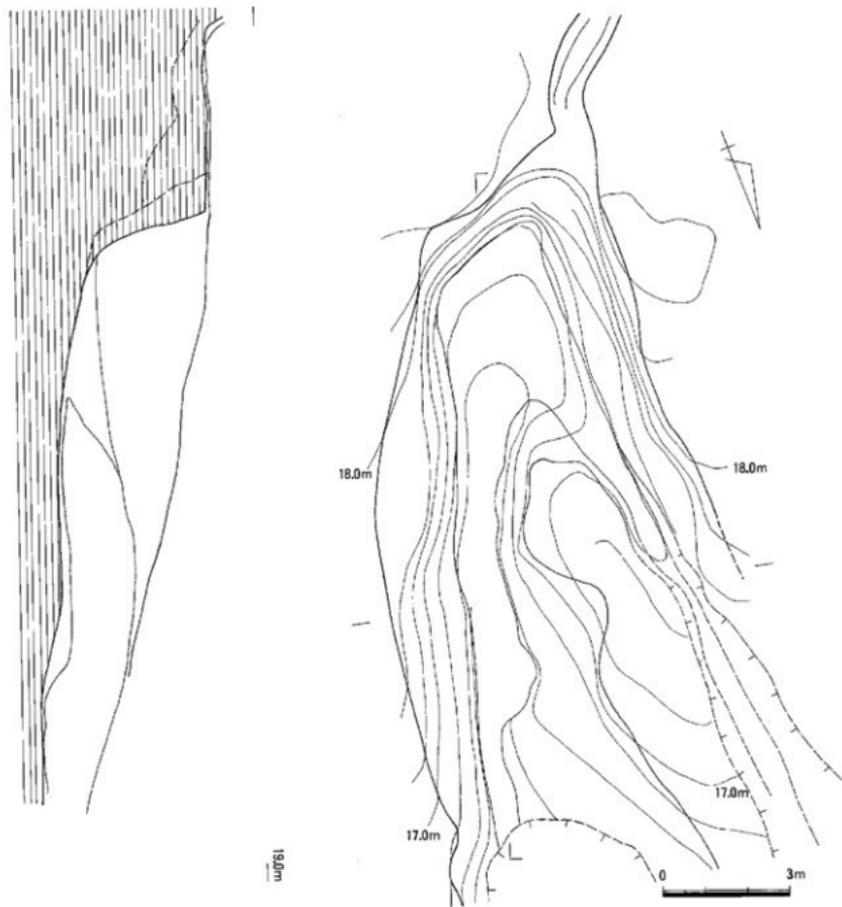


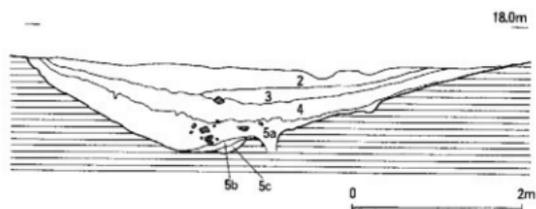
Fig. 103 SX40 (1/120)

SX40 (Fig. 103~105)

SX30の北側、SX10の北東側に位置する。H地区北端に近い標高17.0~18.5m付近に検出した。上面は畑地造成により相当の削平を受けている。また、遺構北側は現代水田の造成により失われている。平面は長楕円形を呈し、南北方向に主軸をとる。SX10からのびる溝 SD13が南側に接続する。本体部分は南北18m以上、東西8mを測る。総長は約21mである。

遺構の横断面は浅いU字形であり、深さは中央で最大1.8mである。最深部の標高は約16.15mである。

遺構内の覆土は3層群に区分される。上部(1~3層)は褐色土である。中部(4層)は黒色腐植土であり、下位に弥生時代遺物を含む。下部(5層)は茶褐色粘質土である。6、7層は地山である。本遺構からの出土遺物は多くはない。土器類と石器類と鉄器がある。土器類には甕(1)と壺(2)があ



- |              |  |
|--------------|--|
| 1. 赤褐色粘質土    | 地山2次堆積、軟質、最近の流入土。  |
| 2. 茶褐色土      | 地山小礫。砂粒を多く含む。炭化物片、硬くしまる。Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 沈着なし。下面とは比較的明瞭に区分 |
| 3. 暗灰色粘質土    | 砂粒多く含む。下面やや凹凸あり。若干遷移気味。硬くしまる。  |
| 4. 暗黒褐色粘質土   | 下層が腐味強く上部にやや淡くなる。砂粒多く含む。下面は凹凸著しく遷移変化する。本層下部に土器片多く出土。                     |
| 5a. 茶褐色粘質土   | 全体に鉄分マンガンを沈着しよごれる。炭化物片多く含む。礫（10cm前後）多く含む。上・下面共に凹凸あり、やや漸移する。              |
| 5b. 茶褐色粘質土   | 全体に鉄分マンガンを沈着しよごれる。白色砂粒多し。  |
| 5c. 明褐色粘質土   | 鉄分が少量沈着。粘質強い。下面とは不明瞭。  |
| 6. 赤褐色～赤褐色粘土 | 硬い、地山。   |

Fig.104 SX40横断面土層図 (1/60)

る。石器には石錘(3~6)、鉄器は不明鉄製品(7)である。甕は底部であり、やや厚みのある平底である。

壺は、やや丸みのある平底であり、内外面にハケ調整を施す。

石錘には、敲打(3、4)、自然石利用のもの(5)、切目(6)がある。

鉄器は長さ3.5cm、幅1.0~1.4cm、厚さを測る。断面は長方形で先端がやや尖る。基部を欠損する。SX50 (Fig.106~112)

SX50は西側谷の東端に位置する。SC07の西側7~8mである。検出面は標高23~20mである。溜井本体部は、現在この谷で最も湧水の多い場所に選地している。概算であるが、調査期間中は一晩に数トンの水量が出水した。遺構は畑地、水田造成により、全体に相当の削平を受けている。本体部の平面は略隅丸長方形を呈し、N-56°-W方向に主軸をとる。本体部は長さ約18m、幅約11m、深さ約2.4mを測る。断面形は浅いV字形であり、両壁共に21~22°の傾斜である。本体部の底は最深部が19.9mを測る。また、底は山寄りの南壁で二又に分かれ、両方共に湧水の多い岩脈に沿っている。

北西側には溝(SD53)が検出された。このSD53は上面が最近の水田造成により削られているために、本来の規模は明かでないが、2つの溝の切り合いがあり、全体で幅1.0~4.1mを測る。最初の溝(SD53a)は断面U字形であり、幅0.4~0.8m、深さ0.5mを測り、蛇行しているが長さ約22mを検出した。このSD53aの中~下位には拳大を主とする礫が多量に分布している。礫間の密度はやや弱く、黒色の腐植土中にあるが、SD12やSD31などと同様の集石遺構か。SD53bは、SD53aを切り並行して設けられている。幅は0.6~0.7mで、深さはやや浅く0.3~0.5mを測る。

また、本体部南隅から3本の溝状遺構が検出された。最も南側の溝(SD54)は小丘陵を越え、西側の谷筋に延びている。溝は断面逆台形であり、幅0.8~1.5m、深さ0.6~1.1mを測る。長さ20.5mを確認した。あと2本の溝はほぼ同じ位置に切り合っている。より新しい溝をSD55a、古い溝をSD55bとする。SD55aは、断面逆台形であり、幅1.4m、深さ0.8~0.6mを測り、西側の小丘陵の尾根付近

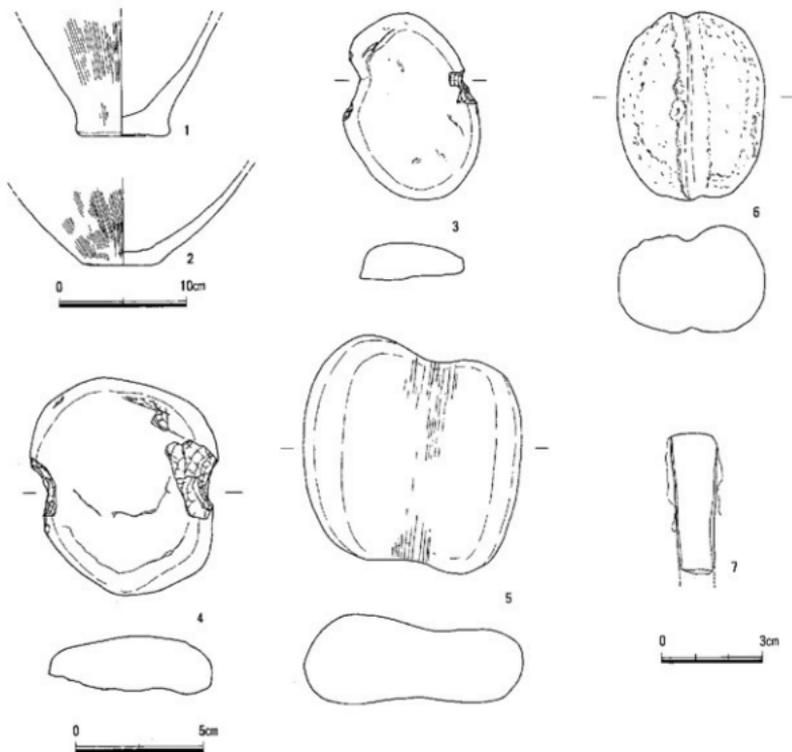


Fig.105 SX40出土遺物 (1/4・1/2・2/3)

で途切れる。長さは12.5mを確認した。SD55bは、断面逆台形であり、幅1.0~1.2m、深さ0.8mを測る。SD55aに切れられ、全体は不明である。また、SD55の延長上で丘陵尾根を越えた位置に、溝状遺構を検出した。これは幅0.6m、深さ0.1m、長さ2.5mを測る。これをSD56とした。

本体部と両端から延びる溝を含めた本遺構の総長は約58mである。

この遺構は立地からみてSX20と同様に、平坦地を直接掘り込んでいると考えられる。遺構の横断面は逆台形であり、底面は凹凸が著しい。深さは中央で最大1.8mである。最深部の標高は約17.4mである。壁面は途中で角度の変換がある。下半部は東側59°、西側55°の傾斜を測る。上部は両壁ともに25°前後と緩やかとなるが、覆土との整合からみて、人為的な整形ではなく、二次的に壁面の風化流出の結果と見られる。

本体部の覆土は4層群に区分される。最上部(1、2層)は灰褐色土であり、上位に近世以降の水田関連の溝、排水用の暗渠を含む。下面は凹凸面となり、不整合に浸食する。中世・近世の遺物を少量含む。上部(3~7層)は暗灰色の砂と粘質土の互層である。下位に水田面とそれを覆う洪水砂がある。水田耕土は7a層であり、その上面が水田面である。水田面上に古墳時代の遺物を多く出土し

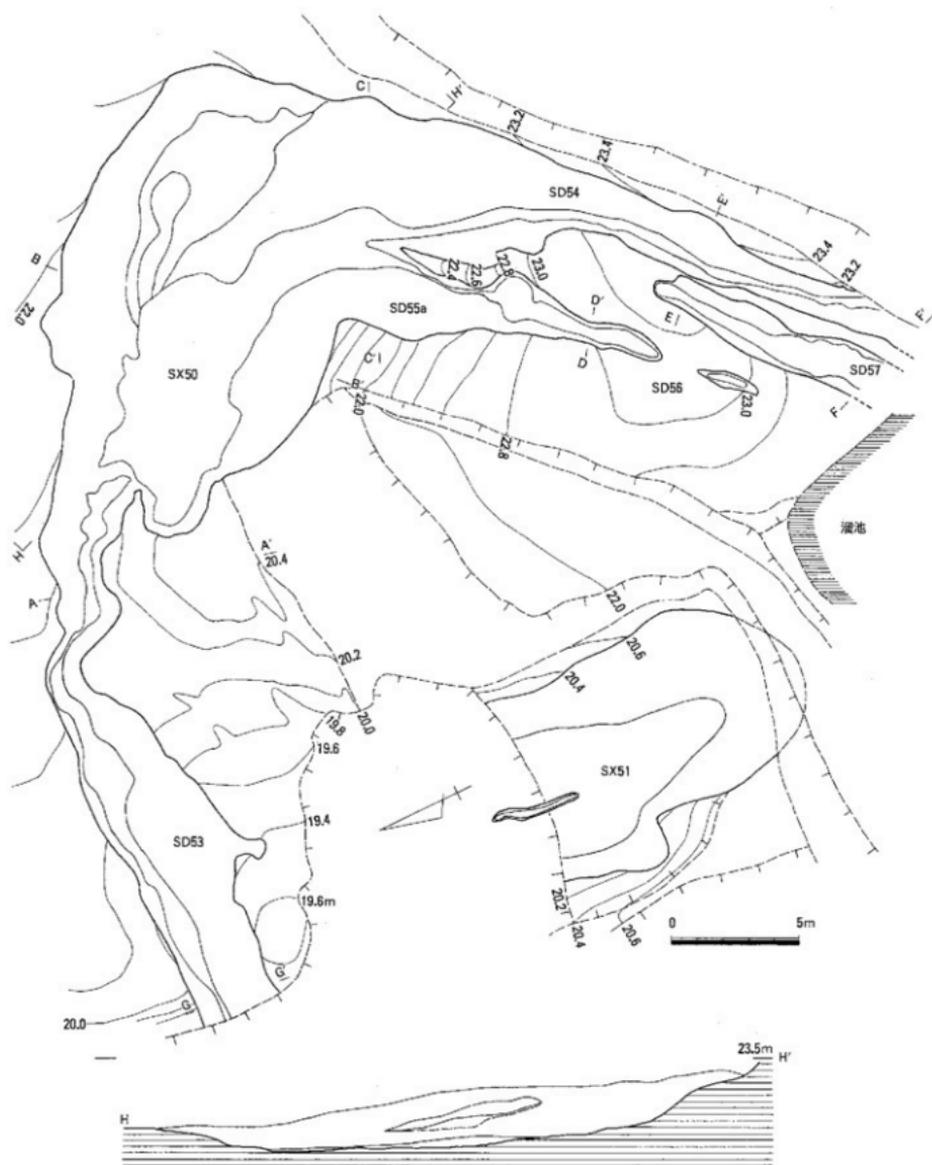
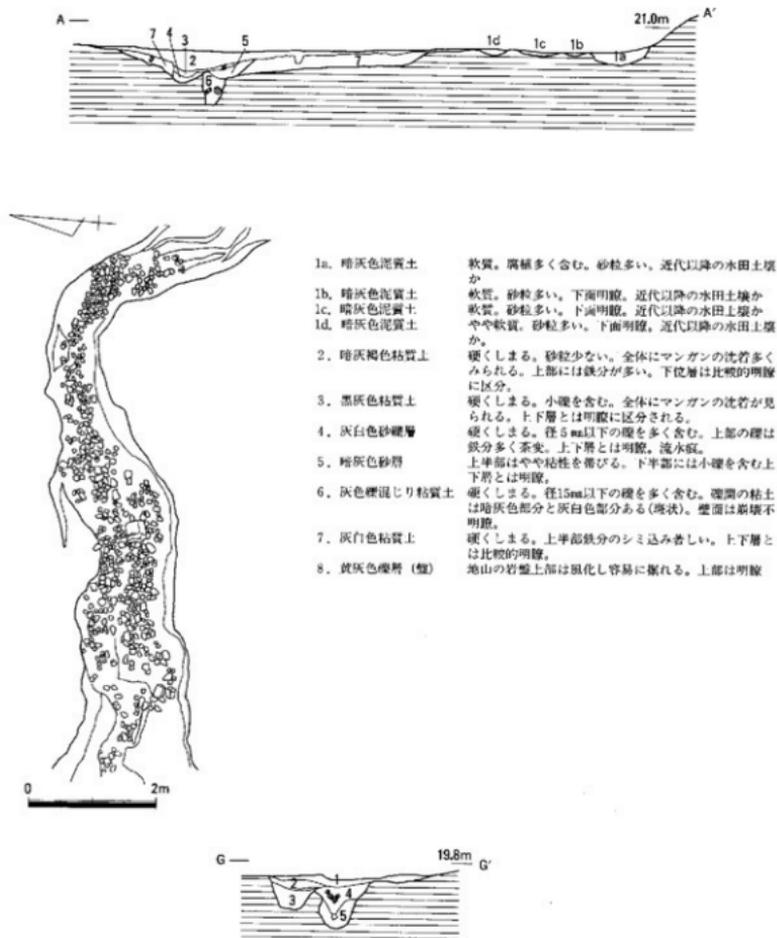


Fig.106 SX50・51, SD52~57 (1/200)

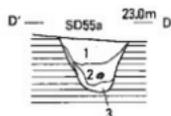




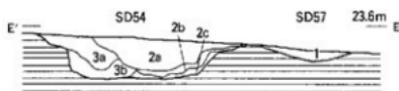
- |  |   |
|--|---|
| <p>1a. 暗灰色泥質土</p> <p>1b. 暗灰色泥質土</p> <p>1c. 暗灰色泥質土</p> <p>1d. 暗灰色泥質土</p> <p>2. 暗灰褐色粘質土</p> <p>3. 黒灰色粘質土</p> <p>4. 灰白色砂礫層</p> <p>5. 暗灰色砂層</p> <p>6. 灰色硬澀じり粘質土</p> <p>7. 灰白色粘質土</p> <p>8. 黄灰色礫層 (盤)</p> | <p>軟質。腐植多く含む。砂粒多い。近代以降の水田土壌か</p> <p>軟質。砂粒多い。下面明瞭。近代以降の水田土壌か</p> <p>軟質。砂粒多い。下面明瞭。近代以降の水田土壌か</p> <p>やや軟質。砂粒多い。下面明瞭。近代以降の水田土壌か。</p> <p>硬くしまる。砂粒少ない。全体にマンガンの沈着多くみられる。上部には鉄分が多い。下位層は比較的明瞭に区分。</p> <p>硬くしまる。小礫を含む。全体にマンガンの沈着が見られる。上下層とは明瞭に区分される。</p> <p>硬くしまる。径5mm以下の礫を多く含む。上部の礫は鉄分多く茶変。上下層とは明瞭。流水痕。</p> <p>上半部はやや粘性を帯びる。下半部には小礫を含む上下層とは明瞭。</p> <p>硬くしまる。径15mm以下の礫を多く含む。礫間の粘土は暗灰色部分と灰白色部分ある(斑状)。礫間は崩壊不明瞭。</p> <p>硬くしまる。上半部鉄分のシミ込み著しい。上下層とは比較的明瞭。</p> <p>地山の岩盤上部は風化し容易に崩れる。上部は明瞭</p> |
|--|---|

- |  |   |
|--|---|
| <p>1. 黒灰色粘質土</p> <p>2. 暗灰色粘質土</p> <p>3. 青灰色粘土</p> <p>4. 暗灰色粘質土</p> <p>5. 青灰色粘土</p> | <p>硬くしまる。3cm以下の地山礫を含む。下面はやや凹凸あり。明瞭区分。たまり状遺構内埋土。</p> <p>硬くしまる。1cm以下の小礫を少量含む。鉄分粘あり。下位に腐植。明瞭。炭化物片含む。たまり状遺構内埋土。</p> <p>炭化物片含む。下位にしたがい青味増す。明瞭区分。たまり状遺構内埋土。</p> <p>硬くしまる。炭化物片分布。鉄分粘あり。10cm以下の角礫を集中的に分布(人為?)。下面はやや不明瞭。</p> <p>硬くしまる。炭化物片少量分布。鉄分粘あり。10cm以下の角礫を少量含む。下位にしたがい青味増す。</p> |
|--|---|

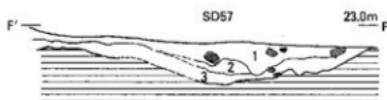
Fig.108 SD53土層断面図 (1/80)



1. 暗茶褐色硬じり土 10cm以下の地山礫を多く含む。硬くしまる。炭化物片少量あり。下面是凹凸不明瞭。漸移変化。
2. 暗茶褐色土 10cm以下の地山礫を少量含む。下位に明色化する。下面凹凸し、明瞭区分。炭化物片少量あり。
3. 黄褐色粘質土 上部はやや硬色強い。炭化物片少量あり。下面是明瞭区分。硬くしまる。



1. 黄褐色粘質土 下位にしたがい明色化。明瞭区分。硬くしまる。
- 2a. 暗茶褐色土 3cm以下の砂粒を多く含む。硬くしまる。マンガン粒多い。炭化物片少量あり。下面凹凸あり。
- 2b. 茶褐色土 3cm以下の砂粒を多く含む。硬くしまる。マンガン粒多い。下面是凹凸著しい。上・下層とは漸移変化。
- 2c. 明茶褐色 3cm以下の砂粒を多く含む。硬くしまる。マンガン粒多い。下面是比較的フラット。明瞭。2a層に類似するが含まれる砂粒がより細かい。炭化物片多い。マンガン粒多い。下面是不明瞭。
- 3a. 暗茶褐色土 3a層より黒味強い(マンガン粒より多い)。炭化物片少量含む。下層とは明瞭区分。
- 3 b. 暗茶褐色土



1. 黒褐色粘質土 硬くしまる。人頭大角礫。5cm以下礫を含む。下面是凹凸あり。漸移変化。炭化物片少量。
2. 暗茶褐色粘質土 硬くしまる。5cm以下礫少量含む。下面やや凹凸する。漸移。不明瞭変化。
3. 茶褐色粘質土 硬くしまる。地山ブロックを含む。下面やや凹凸する。漸移。不明瞭変化。

Fig.109 SD54・55・57土層断面図 (1/80)

た。なお、水田面では東西方向の畦畔と杭列を検出した。中部(8層)は黒色腐植粘質土であり、弥生時代の遺物が多く出土した。下部(9~13層)は暗灰色~黄褐色の砂~粘質土である。上位の9・10層に弥生時代遺物が出土した。

本遺構からは主に本体部から多くの遺物が出土した。遺物は出土層位から二分される。それは中部層から出土した弥生時代の遺物と、上部層から出土した古墳時代の遺物である。

中部層の遺物には土器類、石器類がある。土器には甕(1~18、24~26、28、29)、蓋(19)、壺(20~22、27)、鉢(23)、器台(36)がある。石器には石戈(39)、石鎌(40)、石斧(41)、磨石(42)がある。

甕は、須玖式系もの(1、3、4、16)と、跳ね上げ口縁系もの(5~15、17、18)がある。底部は平底で僅かに上げ底となるものである。

蓋は、つまみ部がやや大きいものである。

壺は、短口縁(20)、鋤上げ口縁をもつ広口(21)がある。底部は平底で径の小さいものである。

石戈は、基部を欠損し、現存の大きさは長さ8.2cm、幅4.6cm、厚さ1.1cmを測る。側面の曲線からみて、本来、全長15cm以下の大きさであったとみられる。ただし、先端部や稜の研磨からみて、先端部の欠損した後に再研磨し、現状の形状に仕上げたとも考えられる。

石鎌は敲打(礫)石鎌である。

石斧は先端部を欠損している。頁岩様の堆積岩製であり、敲打整形のみで、研磨面はない。

磨石は自然礫を使用したものである。

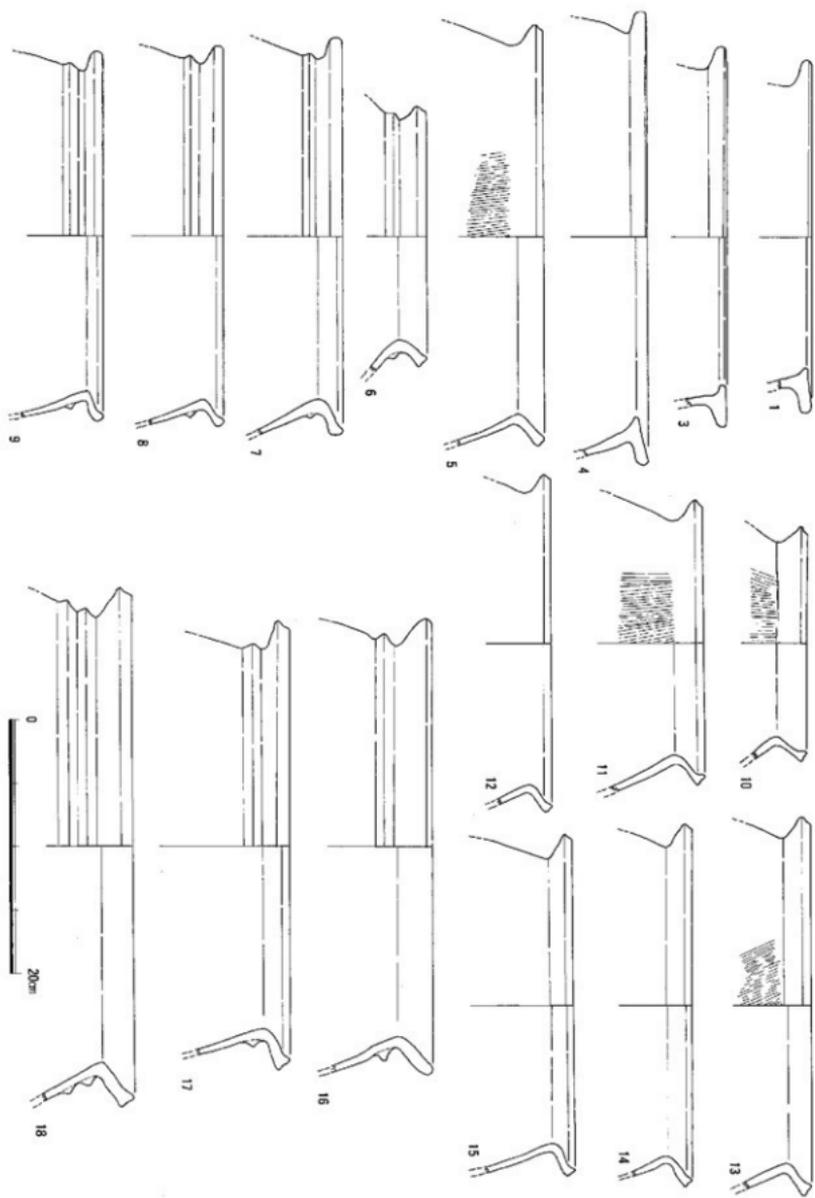


Fig. 110 SX50出土遺物 1 (1/4)

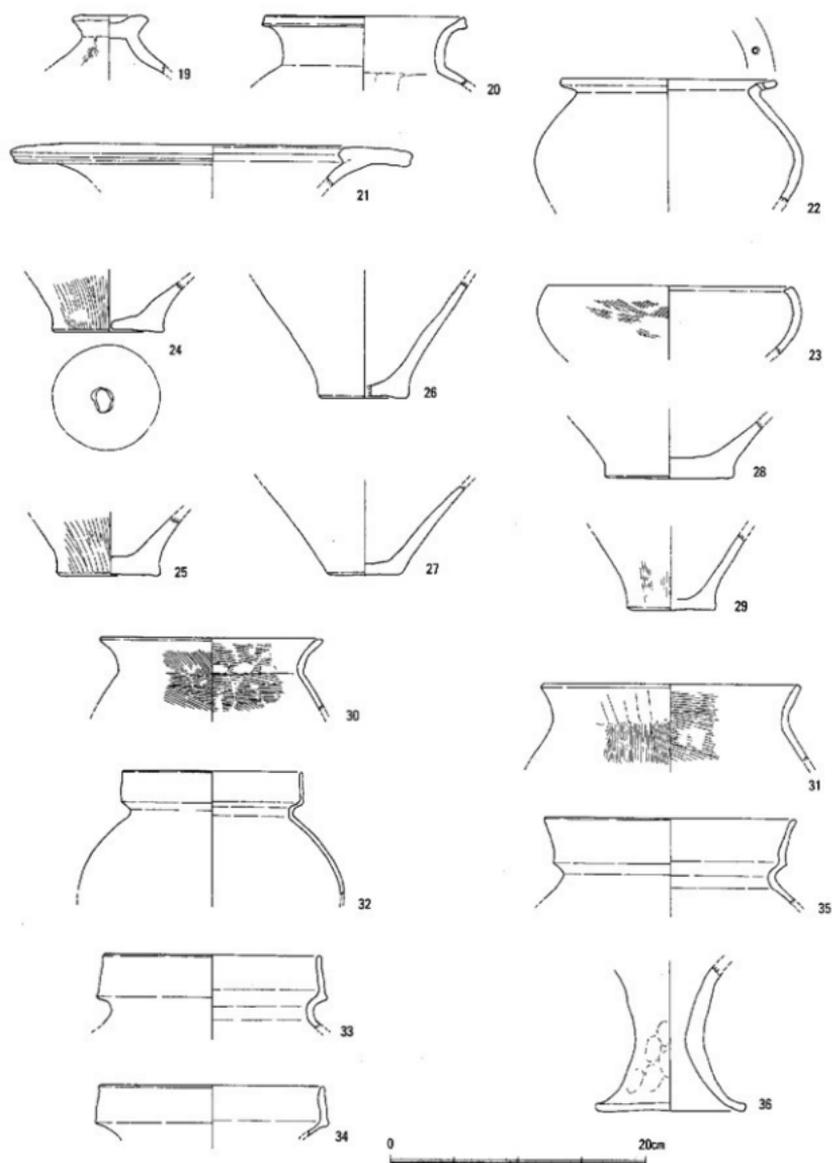


Fig. 111 SX50出土遺物 2 (1/4)

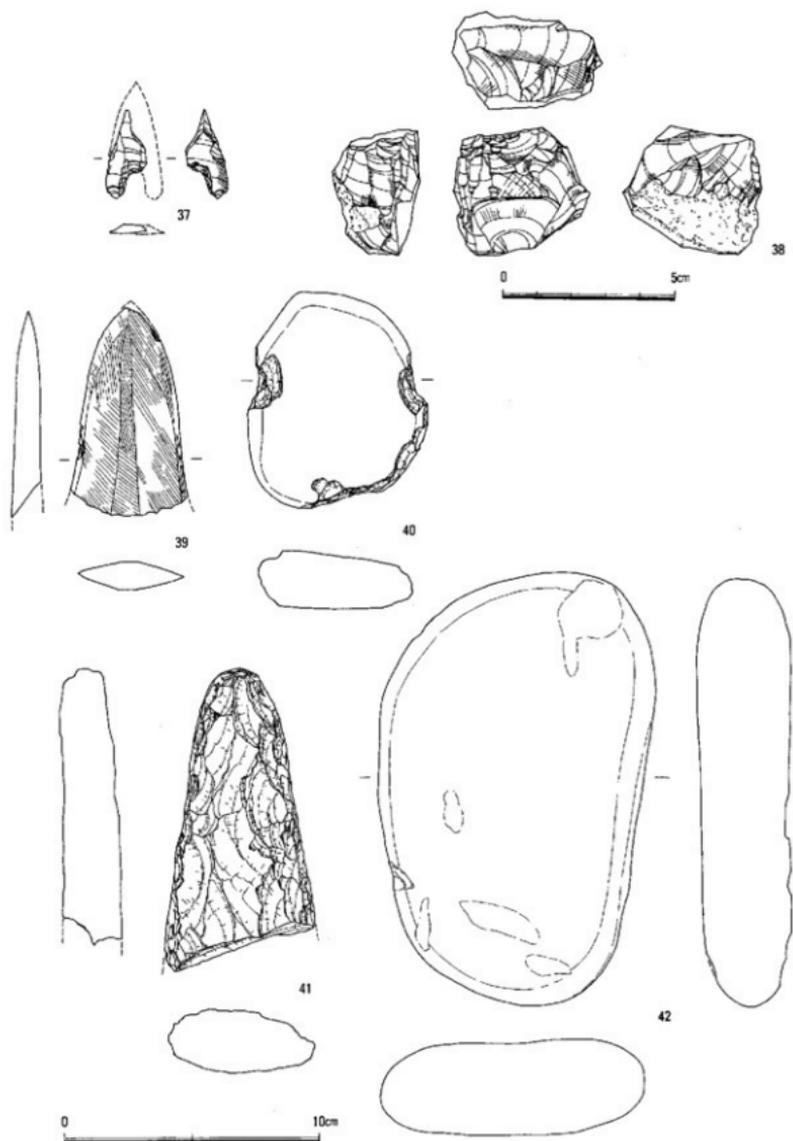


Fig. 112 SX50出土遺物 3 (2/3・1/2)

SX51 (Fig. 113, 114, 116)

SX51はSX30とSX50の中間に位置する。SC07の西側7～8mである。検出面は標高20.5mである。ほぼ南北方向に主軸がある。遺構は南側を現在の溜池の堤防に覆われ、北側を近年の水田造成により破壊されている。本体部の平面は北側に広い卵形を呈する。本体部の現存する長さは約10m、幅約9.5mである。深さは湧水と堤防決壊の恐れがあったために調査不可能であるが、約1.3mと推定される。断面形は浅いU字形であり、西壁が32°、東壁が28°の傾斜である。

北側の中央底では溝状遺構 (SD52) が検出された。このSD52は湧水のために十分な調査ができなかったが、断面U字形を呈し、幅0.3m、深さ0.3mを測り、内部は角礫が充満していた。

この遺構は立地からみて、旧地形の谷部を掘り込んで造られていると考えられる。

本体部の覆土は全体に角礫を多く含み、水分に富んでいる。3層群に区分される。上部 (1～4層) は暗灰色粘質土と灰色砂の互層である。中部 (5層) は黒色腐植粘質土であり、弥生時代の遺物や炭化物が多く出土した。下部 (6～9層) は暗褐色粘質土である。上位に弥生時代遺物が出土した。

本遺構からは弥生時代の遺物が出土した。遺物には土器類がある。土器には壺 (1、2)、高杯 (3) がある。

壺は、西新町式系ものであるが、口唇部が跳ね上げ状となり端面に刻目文を施す。底部は僅かに稜線が残る丸底である。

高杯は、完形品であり、杯部中程から屈曲、外反する。

SX70 (Fig. 113, 114, 115, 117)

SX70はSX51の南側SX20の東側6mに位置する。検出面は標高22～23mである。ほぼ南北方向に主軸がある。遺構は本体部の西側の一部を残して現在の溜池が造られている。したがって、調査は縁辺と関連遺構にとどまった溜池の西側では平面プランが現れた。平面は北側に広い卵形を呈すると復元される。本体部の長さは約15m、幅約11mと推定された。深さは不明である。

南側では多条の溝状遺構が検出された。この溝は切り合い、重複する5条の溝である。溝は大まかに東から西に次第に流路を移している。東側では断面逆台形の溝2条 (SD71 a、e) が切り合い、西側では断面V字形の溝2

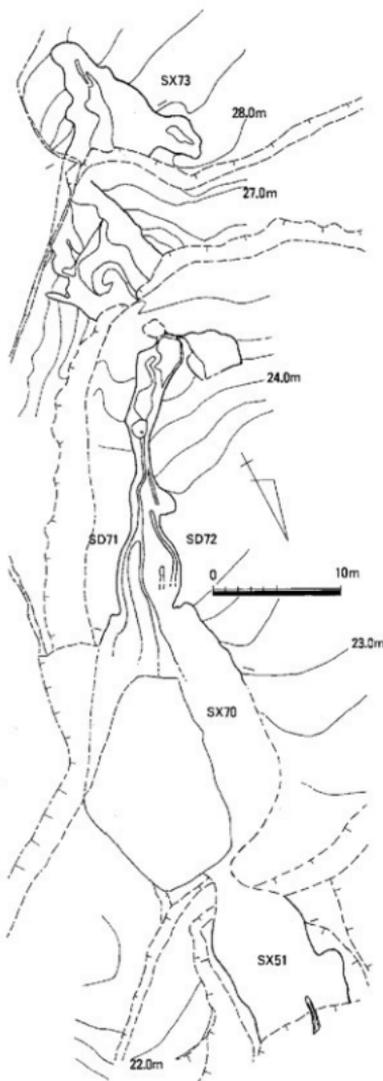
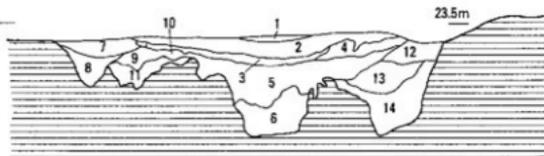
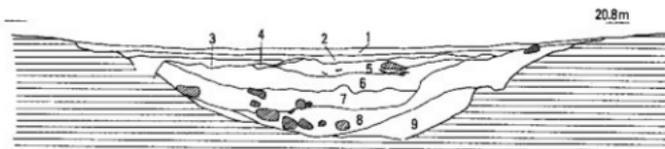


Fig. 113 SX51・70・73, SD71・72 (1/400)



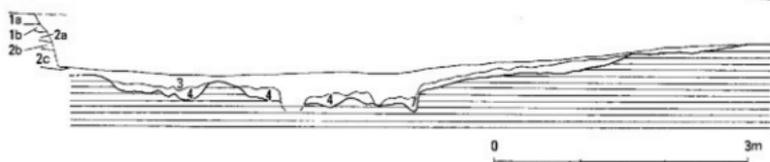
1. 暗赤褐色粘質土 やや硬い。地山土の2次堆積土。ややよこれる。下位層とは明瞭区分。
2. 黒褐色粘質土 硬質。下位にしたがい小礫、砂粒を多く含む。しだいに明るい色調となる。漸移する。下部で主に土器片多く含む。
3. 暗灰～灰褐色粘質土 硬くしまる。小礫を含む。全体に多量の炭化物片を含む。上下層には漸移凹凸、不明瞭。マンガング粒多い。
4. 暗灰色粘質土 硬くしまる。礫少なく均質なシルト状。炭化物片少量含む。上下とは漸移、凹凸。やや明瞭区分。
5. 暗灰色粘質土 硬くしまる。上部に礫、炭化物を少量含む。下半部はやや黄味をおびる。下面は著しい凹凸、黄褐色あり。マンガング粒多量に形成。下面は明瞭。
6. 灰褐色粘質土 硬くしまる。粘質が増す。下半部はやや砂質気味となる。壁面、下面は比較的平坦。マンガング粒多量に形成。下面は明瞭。
7. 茶褐色微混じり土 硬くしまる。径3cm以下の地山礫を多く含む。下位層とは不明瞭に漸移する。マンガング粒含む。
8. 暗赤褐色土 硬くしまる。径3cm以下の地山礫を少量含む。下部にしたがいマンガング粒著多く暗色化する。
9. 茶褐色土 硬くしまる。小礫、砂粒多く含む。下面は凹凸不明瞭。マンガング沈着。
10. 暗赤褐色土 硬くしまる。小礫、砂粒多く含む。上下面凹凸不明瞭。マンガング沈着。やや粘性おびる。
11. 灰褐色弱粘質土 硬くしまる。わずかに小礫を含む。下面は凹凸をなす。明瞭区分。マンガング沈着著しい。
12. 灰色微混じり粘土層 硬くしまる。地山礫(10cm大)を多量に含む。崩落すか。上下面比較的明瞭区分。
13. 黄灰色粘質土 硬くしまる。径3cm以下の地山礫を多く含む。上下面共に明瞭区分。
14. 黄灰色礫まじり粘質土 硬くしまる。径5cm以下を主体とする地山礫を多量に含む。下半部はマンガング沈着をみる。上下壁面共に明瞭区分。
- 15a. 黄褐色粘質土 硬くしまる。砂粒多くマンガング沈着をみる。下面は凹凸気味。不明瞭区分。漸移する。本来地山の2次変化か。
- 15b. 黄褐色粘質土 硬くしまる。マンガングのしみが管状にのびる。上下明瞭区分。
16. 赤褐～黄褐色粘質土 極めて硬くしまる。地山。

0 3m



1. 灰色弱粘質土 やや硬い。3cm以下の小礫を少量含む。鉄分粒多い。下面フラット不整合。極めて明瞭。
2. 暗灰色粘質土 硬い。3cm以下の小礫を多く含む。粗砂含む。下面は凹凸あり。土器片含む。鉄分粒上面に多い。下部マンガング(耕作床土か)。下部層に明瞭区分。
3. 暗赤褐色粘質土 硬くしまる。3cm以下の小礫を少量含む。炭化物片多い。下面はゆるい凹凸あり。比較的明瞭区分。
4. 灰白色砂層 ややしまる。細砂～中砂からなる。流理がみられる。
5. 黒褐色粘質土 硬くしまる。10cm大の地山角礫を多く含む。水分含むとべとつく。土器片、炭化物片多く含む。下面はフラット、明瞭に区分される。
6. 暗褐色粘質土 硬くしまる。5cm以下の地山礫を多く含む。炭化物、土器片少量含む。マンガング粒多く全体に黒色化。2～4m付近は鉄分多し。下面はゆるい凹凸で接し、不明瞭区分。層内は漸移する。
7. 暗赤褐色粘質土 硬くしまる。20cm以下の地山礫を多く含む。礫は西側からの流入か。やや偏り分布する。マンガング沈着多く黒色化する。下面はゆるい凹凸で接し、不明瞭区分。漸移変化は未確認。
8. 茶褐色粘質土 硬くしまる。40cm以下の地山礫を多く含む。礫は西側からの流入か。やや偏り分布する。マンガング沈着多く黒色化する。下面はゆるい凹凸で接し、不明瞭区分。漸移する。
9. 黄褐色粘質土 硬くしまる。10cm以下の地山礫少量含む。マンガング粒あり。下面はややフラット気味。明瞭とは言えない。

Fig. 114 SX51, SD71-72土層断面図 (1/60)



- |               |  |
|---------------|--|
| 1a、暗褐色腐植土     | 軟質。地表部。下位漸移変化。                                   |
| 1b、茶褐色土       | やや硬い。漸移的。  |
| 2a、赤褐色粘質土     | やや硬くしめる。クラック多い。砂礫少量含む。上下フラット。                    |
| 2b、灰褐色        | 砂礫多く炭化物含む。下位に漸移。                                 |
| 2c、赤褐色～暗褐色粘質土 | 下位にしたがい暗色増す。砂礫多く含む。硬くしめる。                        |
| 3、黒色～暗褐色粘質土   | 上下に漸移変化。下面凹凸著しい。砂礫多く含む。硬くしめる。(下面に)上器片、炭化物多い。包含層。 |
| 4、暗褐色粘質土      | 上下に漸移変化。下面凹凸著しい。砂礫多く含む。硬くしめる。                    |
| 5、赤褐色粘質土      | 上層に漸移変化。極めて硬くしめる。密度高い。地山土                        |

Fig. 115 SD71谷頭付近土層断面図 (1/60)

条(SD71b、c)が切り合う。これらの溝は、本体部が次第に窄まり連続的に構築されている。SD71aは、幅1.0～3.2m、深さ1.2mを測る。本体部から長さが約25m谷筋に沿って連なり、標高25m付近で、畑の造成に切られて途切れる。溝の底面は本体部近くでは平坦であるが、上流にしたがい、壁面や、底面が深く抉れている。SD71eは、幅1.2m、深さ0.6mを測り、本体部から数mでSD71aに切られる。SD71bは、幅0.5～1.0m、深さ0.5mを測る。この溝はSD71aと並行しながら、長さ約25mを確認した。SD71cは、幅0.8m、深さ0.5mを測る。SD71bに切られ、長さ6m程が断片的に遺存する。

また、本遺構群の上流部である、谷頭付近には地山上に不整形に広がる落ち込みが多数ある。規則性を認め難いが、途中の造成の段を越えて先の溝群と連続する溝状の落ち込みも認められることから、本来の溝状遺構の先端付近が流水などの自然の浸食作用により、拡大、変形したものと推定される。覆土が下方の溝群と共通し、同じ弥生時代と見られる土器小片が出土することから、同時期の一連の埋没過程があったと見られる。

これらの溝群は立地からみて、旧地形の谷部を掘り込んで造られていると考えられる。残念ながら本体部は溜池のために調査困難である。

溝状遺構を含めた本遺構の総長は約70mと推定される。

南側のSD71とSD72の合流する地点での堆積状態は3層群に区分される。上部は(1層)は暗褐色土である。中部(2層)は黒色腐植土であり、弥生時代の遺物を出土した。下部(3層以下)は暗灰色粘質土である。上位に弥生時代遺物が少量出土した。下位には炭化物が集中出土するところがある。本遺構からは覆土中に遺物が出土した。遺物は決して多くはない。土器類、石器類がある。

土器には甕(Fig.117-1、2、4)、器台(3)がある。

甕は、「く」字形口縁をもち、底部は稜線を持つ丸底気味のもの(1、2)と、平底のもの(4)がある。

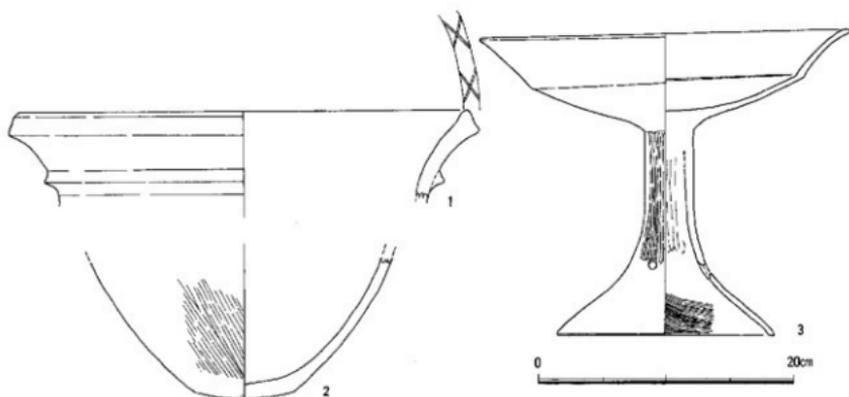


Fig.116 SX51出土遺物 (1/4)

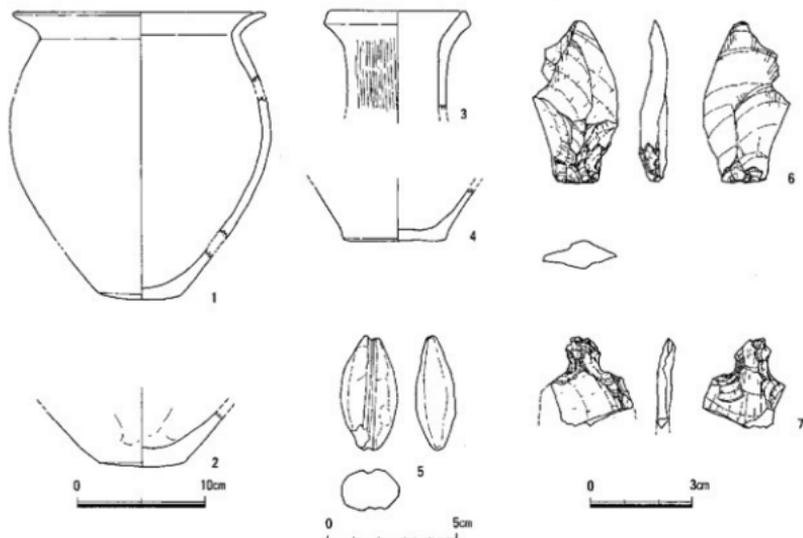


Fig.117 SX70・73, SD71・72出土遺物 (1/2・2/3・1/4)

器台は、上半部であり、端部を跳ね上げ上につまみ上げている。

石器には、切目石鎌(5)とナイフ形石器?(6)、石匙(7)がある。6、7は縄文時代以前のものである。ナイフ形石器としたものは、古銅輝石安山岩製の縦長剥片を素材とし、打面が自然面である。基部に調整がある。旧石器時代の「ナイフ」に類似するが、素材の打面調整がなく、基部調整も僅かで、

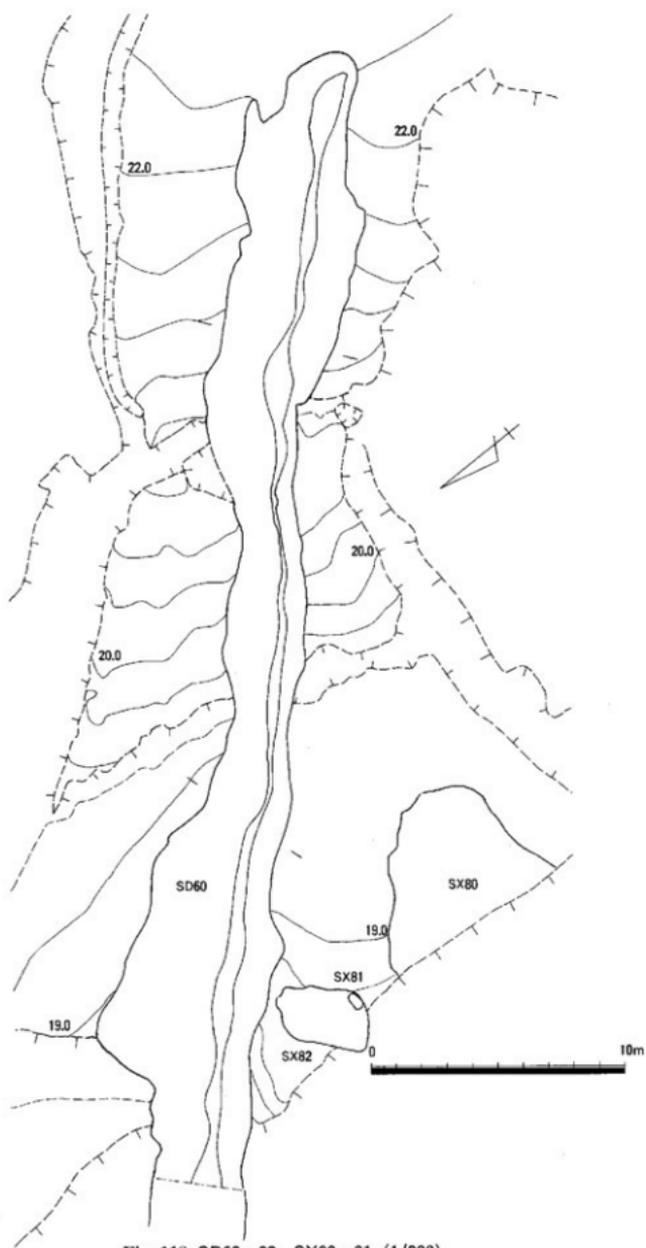
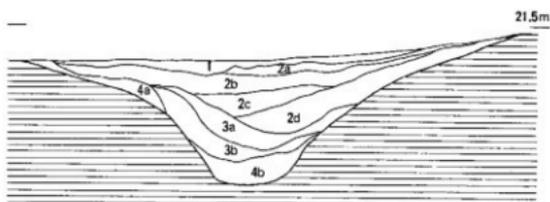
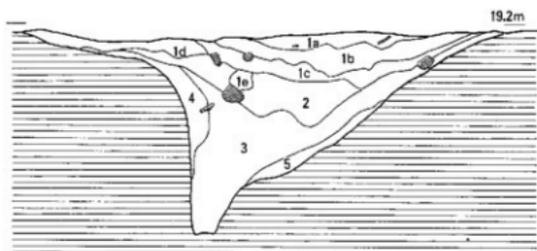


Fig.118 SD60・82, SX80・81 (1/200)



- 1. 黒褐色土
- 2a. 褐色土
- 2b. 褐色土
- 2c. 褐色土
- 2d. 褐色土
- 3a. 褐色土
- 3b. 褐色土
- 4a. 橙褐色土 (にぶい)
- 4b. 橙褐色土 (にぶい)

かすかに粘性あり。しまりよい。1~3cm大の礫混じる。下層との境凹凸気味に漸移的变化。比較的明瞭。  
 かすかに粘性あり。しまりよい。2b層よりやや色が白く明るい。土器、小礫、礫粒混じる。炭化物粒もあり。  
 土質は2a層と同じ。土器、礫粒、炭化物含む。  
 土質は2a層と同じ。大きな礫(10cm大のものも有り)。土器を多く含む。炭化物もあり。  
 2c層と同じだが色が少し明るい。右にいくにしたがって色が明るくなる。2c層よりは土器が少ない。  
 やや粘性あり。固くしまる。一見2層と色も同じだがやや白い。炭化物、小礫、礫粒含む。上層との境漸移的で不明瞭。  
 3a層とはほぼ同じ。大きめの炭化物と大きな礫も含む。下層との境漸移的变化であるが比較的明瞭。  
 やや粘性あり。しまりよい。礫粒まじる。境漸移的变化。下に行く程濃い。  
 土質4a層と同じ。風化した小礫含む。下に行く程色ははっきり。



- 1a. 黒色土
- 1b. 暗褐色土
- 1c. 褐色土
- 1d. 明灰色土
- 1e. 暗褐色土
- 2. 明灰色土
- 3. 赤色粘性土
- 4. 赤色土
- 5. 赤色土

腐植土層。土器片が多く見られる。少量の炭化物を含む。小礫の礫が少量見られる。土のしまりは良く弱い粘性を有す。下位層へ漸移的に変化。  
 小さな土器片が見られる。炭化物は少ないが1a層より多い。小礫の礫が多く見られる。分層面に5cmほどの礫が見られる。上のしまりは硬く(粘性は認められない)。下位層へ漸移的に変化。  
 西側へ行くほど明灰色粘土(2層)との混合が多くなる。炭化物は少ない(1a層のみ)。小礫の礫を散かに含む。土のしまりは良く粘性は認められない。下位層へ漸移的に変化。  
 5層との分層面に炭化物が集中。全体的にはまばらに見られる。礫は見られない。土のしまりは良く粘性は認められない。下位層へ漸移的に変化。  
 動物による攪乱? 3cm前後の礫を含む。炭化物を少量含む。上のしまりは少し弱く粘性は認められない(土にザラザラとする感じあり)。  
 粘性土。3cm前後の礫を少量含む。炭化物を少量含む。土のしまりは弱く粘性を有す。  
 赤色土層(4・5層)と明灰色粘土(2層)との混合層。炭化物は少なくその大半が層西側に分布。土のしまりは弱く強い粘性を有す。下位層へ漸移的に変化。  
 5cm大の礫を多く含む。炭化物は見られない。土のしまりは弱く粘性を有す。  
 層の下部に礫が見られる。炭化物を散かに含む。上のしまりは弱く強い粘性を有す。

Fig. 119 SD60土層断面図 (1/40)

表面の風化も少ない。後世の偶然の類似品の可能性もあり、保留しておきたい。

#### SX80 (Fig.118、124)

SX40の北側、標高19m付近に検出した。水田造成のために上部と本体部のほとんどは削平されている。現存する遺構は本体部の南東端の一部である。規模は現状で長さ6m、幅7.2m、深さ0.7mを測る。埋土は暗灰色粘質土であり、上部の黒色の腐植土は削平により失われていると見られた。

覆土内からの出土遺物は少ない。少量の石器がある。

石器には砥石(2、3)と石戈(4)がある。

砥石は中目(3)と細目(2)があり、何れも整形されたものである。

石戈は基部の無い軟質の石材であり、無基石戈である。先端が潰れており、現存長が12.7cmを測る。

#### SX90 (Fig.125)

SX20とSX70の中間位置に検出した。一部を試掘トレンチで失う。本体部の平面は長楕円形を呈し、ほぼ南北主軸である。長さ約4.9m、幅約2.2m、深さ0.8mを測る。横断面は逆台形であり、床面は平坦である。東西の長辺に長さ0.3mほどの突出がある。なお、この突出部にはそれぞれ隣接するSX20とSD71の対面する位置にも、同様の突出する掘り込みがあり、何らかの関連施設と見られた。また、斜面下方となる北側に幅0.5～0.3m、深さ0.1mの溝状の遺構が付設する。

遺構の総長は7.6mをはかる。

覆土は暗褐色土であり、マンガン粒により、黒色化する。覆土に炭化物片を多く認めたが、遺物の出土はない。

#### SX91 (Fig.125、126)

SX20とSX70の中間位置に検出した。周囲は基盤層が現れ、相当の削平が推定された。本体部の平面は隅丸の菱形を呈し、ほぼ南北主軸をとる。長さ約5.1m、幅約2.4m、深さ0.3mを測る。壁面は緩く立ち上がり、床面には凹凸がある。東辺に長さ0.8m、幅0.3mほどの突出がある。

覆土は上部が黒褐色土であり、土器片、鉄器、炭化物片が少量出土した。下部は地山土を含む褐色土である。

本遺構からの出土遺物は少ない。土器片と鉄器がある。土器片は弥生時代のもものと見られるが、図化は困難である。鉄器には鉄斧(Fig.126)がある。遺構の南端で出土した。

鉄斧は袋状であり、刃部を欠損するが、ほぼ全体を伺える。長さ8.3cm、刃部幅5.0cm、基部幅3.8cm、基部厚2.2cmを測る。整形は丁寧であり、刃部側面に面取りを施している。

#### 4) そのほかの遺構と遺物

##### SD60 (Fig.118～122)

H地区の北東側にあり、SX50の北側6mの位置にする溝状の遺構である。畑地、水田の造成により3面の造成面に遺構は分布している。溝はおおよそN-40°-Wに向き、直線的に掘られている。溝に沿って東側に丘陵尾根の残丘があり、畑地面の傾斜などから、本来この溝は丘陵尾根の西斜面に尾根と並行して掘られたものとみられる。したがってこの溝は、全体として北に向かって、かなりの傾斜で下がる。検出面は最も南側で22.3m、北側で18.5mを測る。溝の保存状態は良くないが、現状での規模は、幅2.0～6.2m、深さ0.8～1.5mを測る。溝の断面形は南側で逆台形を呈し、北側では底面に浸食溝が入る。溝の壁面は中段までは40～50°の傾斜で直線的に立ち、上部は緩やかに広がる。覆土との連続からみて、上部の広がりとは二次的な浸食によるものと見られる。

遺構内の覆土は大きく二分され、上部は黒色の腐植土であり、多くの遺物が出土した。下部は褐色土であり、硬く締まる。土層の変化は漸移的であり、自然形成土と見られる。

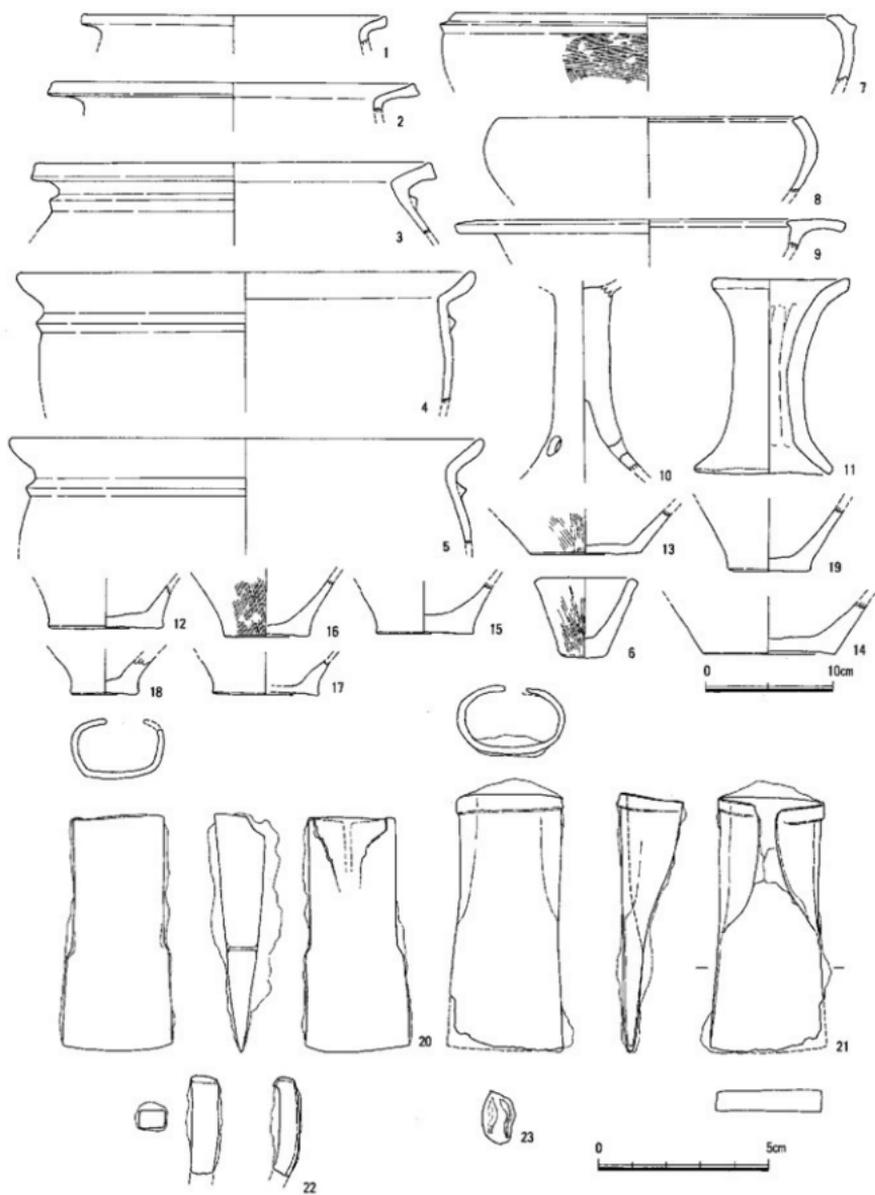


Fig.120 SD60出土遺物1 (2/3・1/4)

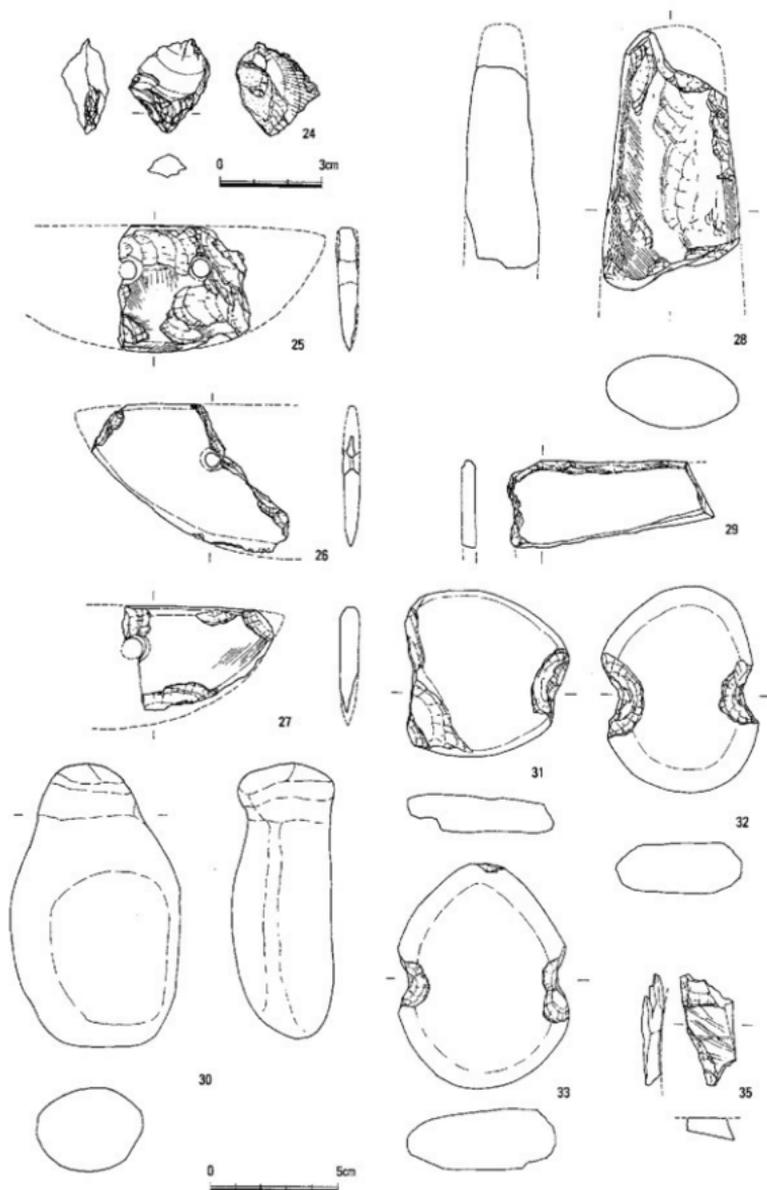


Fig. 121 SD60出土遺物 2 (1/2 · 2/3)

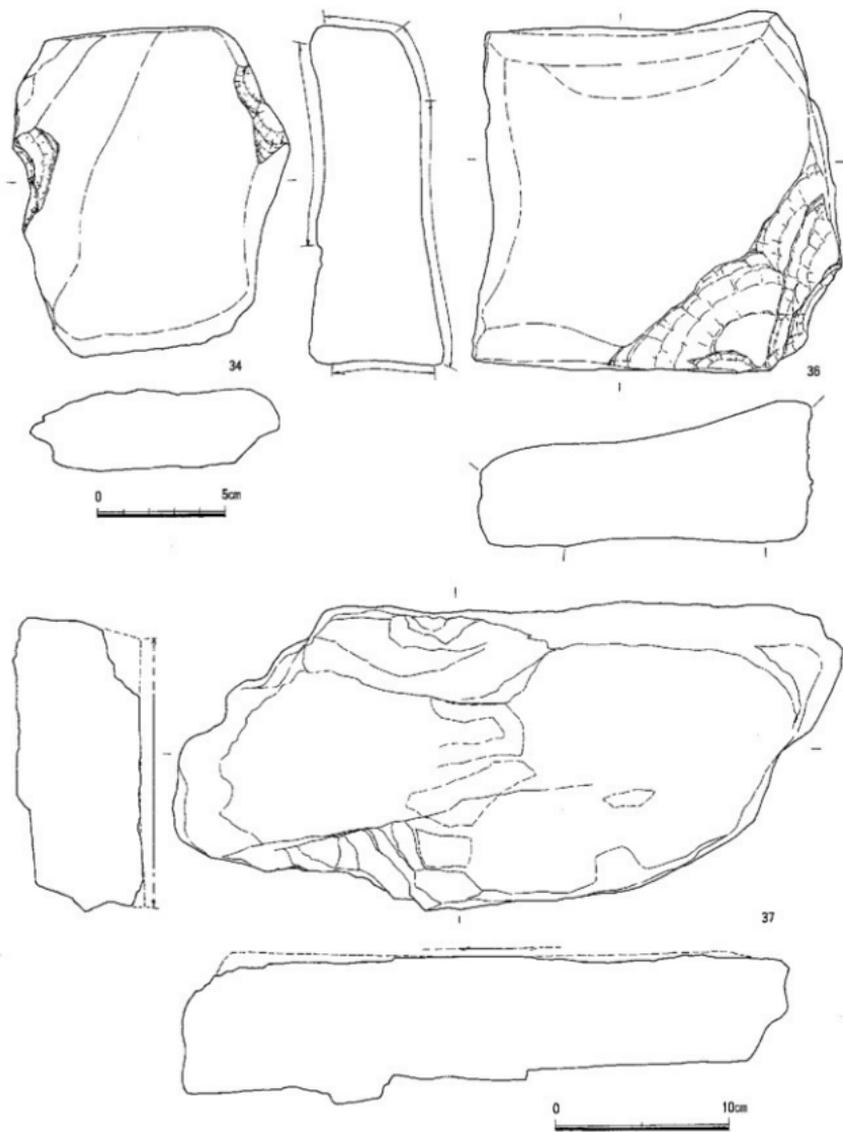
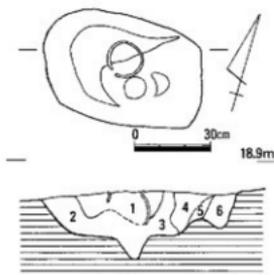


Fig.122 SD60出土遺物3 (1/2・1/3)



1. 暗褐色土 数ミリ大の砂粒が多く炭化物、殻分を含む。土のしまりは弱く粘性は認められない。
2. 黄褐色土 土のしまりは良く弱い粘性を有する。
3. 明褐色土 粒の小さな炭化物を散かに含む。数ミリ大の砂粒を少し含む。土のしまりは良く粘性は認められない。
4. 黄色土 炭化物を少し含む。土のしまりは少し弱く粘性は認められない。
5. 明褐色土 土のしまりは弱く粘性は認められない。
6. 黒色土 土のしまりは良く粘性は認められない。別遺構の可能性あり。

Fig. 123 SX81 (1/20)

遺構内からは多くの遺物が出土した。遺物には土器類、金属器類、石器類がある。

土器類には甕 (1~5、12~19)、鉢 (6~8)、高杯 (9、10)、器台 (11) がある。

金属器類には鉄斧 (20、21)、棒状鉄製品 (22)、不明青銅製品 (23) がある。

石器類には石鏃未製品 (24、35)、石包丁 (25~27、29)、石斧 (28)、石錘 (30~33)、砥石 (34~37) などがある。

甕は、須玖式系もの (4、5) と、跳ね上げ口縁系もの (1~3) がある。底部は平底で僅かに上げ底となるものである。

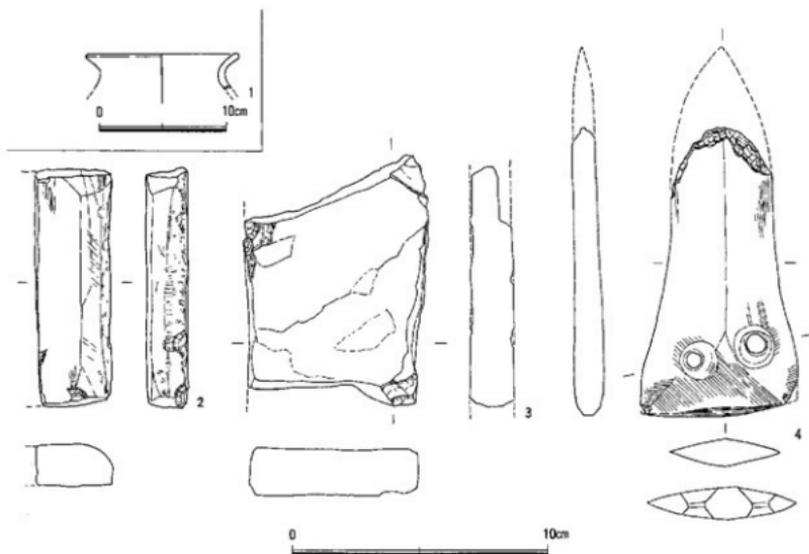


Fig. 124 SX80・81出土遺物 (1/4・1/2)

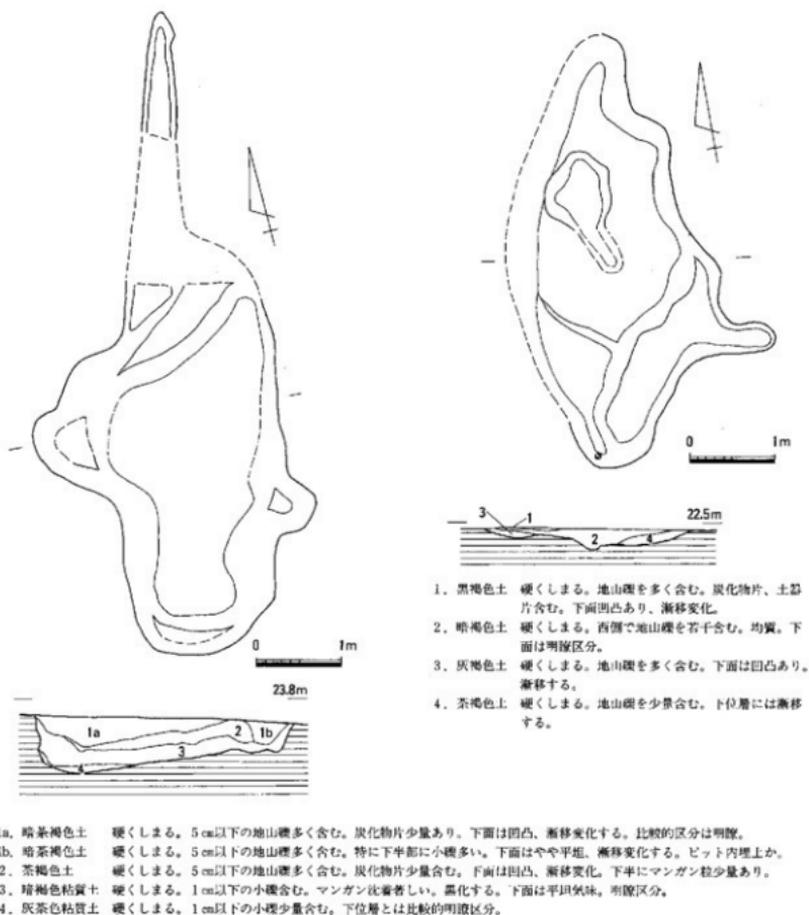


Fig.125 SX90・91 (1/60)

鉄斧は何れも袋状であり、整形は丁寧で、刃部側面に面取りを施している。20は完形であり、長さ6.9cm、刃部幅3.2cm、基部幅2.6cm、基部厚1.7cmを測る。21は刃部を一部欠損するが、ほぼ全体を伺える。基部を折り返している。長さ7.6cm、刃部幅3.4cm、基部幅3.1cm、基部厚2.1cmを測る。

石錘は有頭石錘(30)と、敲打(礫)石錘(31-34)とがある。

石斧は先端部を欠損している。蛇文岩製と見られる。

石包丁の25、26は立岩産とみられる。

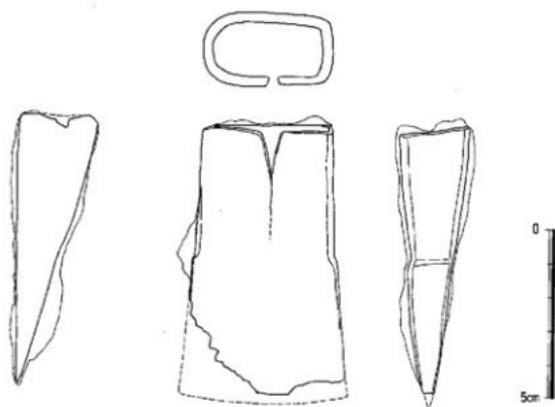


Fig.126 SX91出土遺物 (2/3)

SK81 (Fig.123, 124)

SX80とSD60の間で検出した土壌である。主軸をN-95°-Wにとる楕円形を呈する。規模は長さ1.3m、幅0.8mを測る。底は平坦であるが、中央に小穴がある。埋土は地山類似土である。中央に伏せた甕が出土した。削平により、口縁から肩部までが遺存する。遺構の正確は不明である。

出土した遺物は甕片 (Fig.124-1) である。風化が激しく、保存は良くない。口縁が「く」字形に外反する。

そのほかの遺物

H地区では遺構外や、遺構検出時に多くの遺物が出土した。遺物には土器類、石器類がある。土器には甕 (1, 2)、壺 (3)、器台 (4) がある。石器にはナイフ形石器 (5)、細石刃 (6)、石鎌 (9)、紡錘車 (10)、軽石製品 (11)、石錘 (12)、凹石 (13)、砥石 (14, 15) などがある。

### 3. 小結

H地区についてのまとめは、第4章3節で記したい。

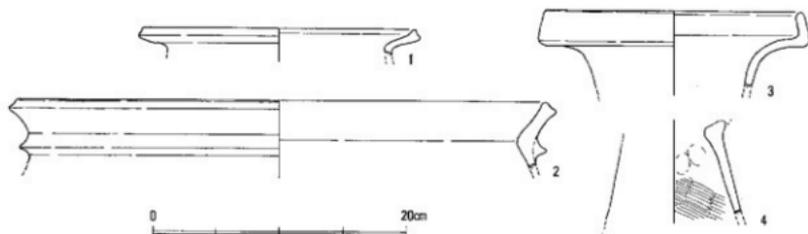


Fig.127 その他の出土遺物 1 (1/4)

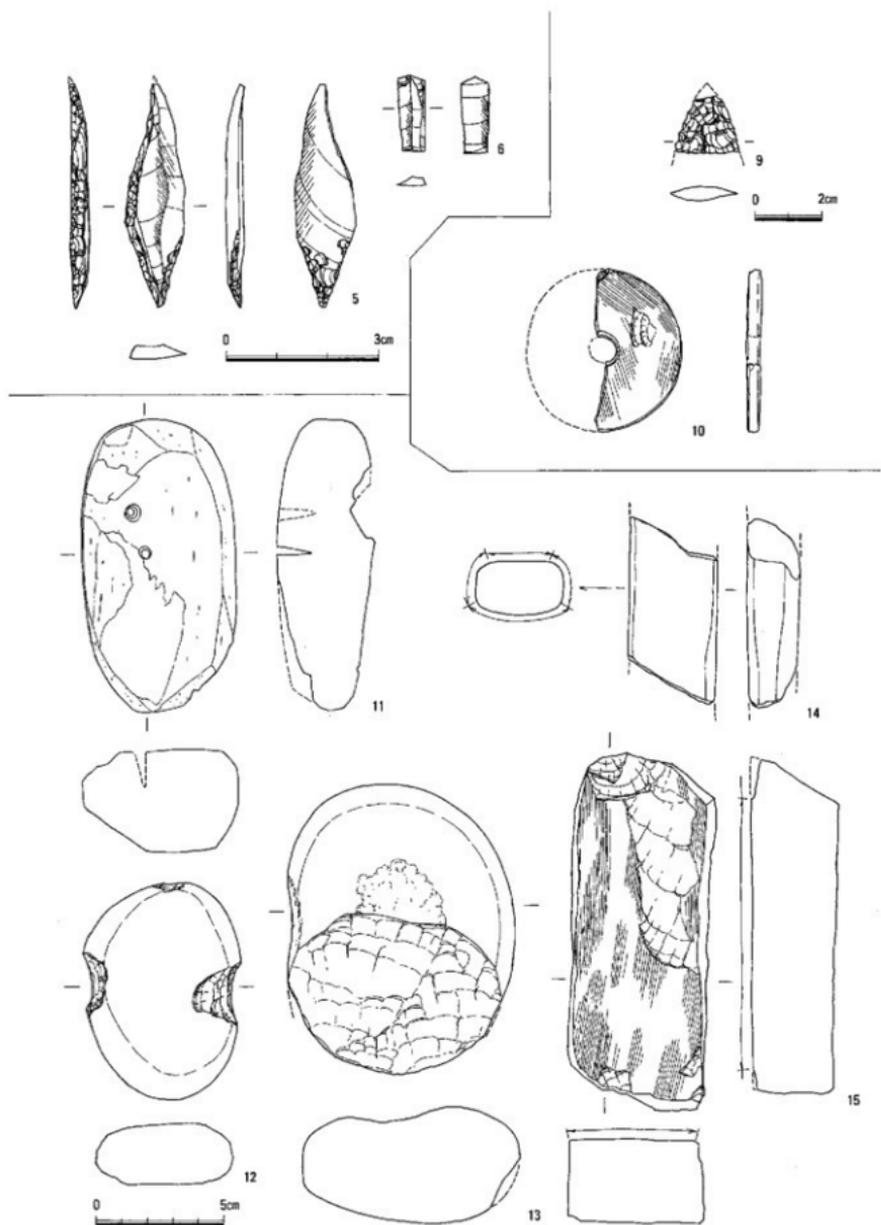


Fig.128 その他の出土遺物 2 (1/1・2/3・1/2)

## 第7節 I地区の調査

### 1. 調査の概要

I地区は、「前ノ池」の東側に位置し、淡集落へ向かって突き出す丘陵上に立地する。この丘陵の西側斜面に遺跡が確認された。斜面の傾斜は丘陵上が緩やかであり、丘陵端部で急となる。ここは畑地造成により、2 m前後の段があり、相当の造成に伴う破壊が予測された。遺跡のある範囲は標高9～18 mである。前ノ池の谷側の現在の水田面積は5.8 mであり、比高差は大きくない。調査はまず、最大4 m以上の厚さがある客土の除去を重機によって行った。その後、遺構検出、調査を人力で行った。

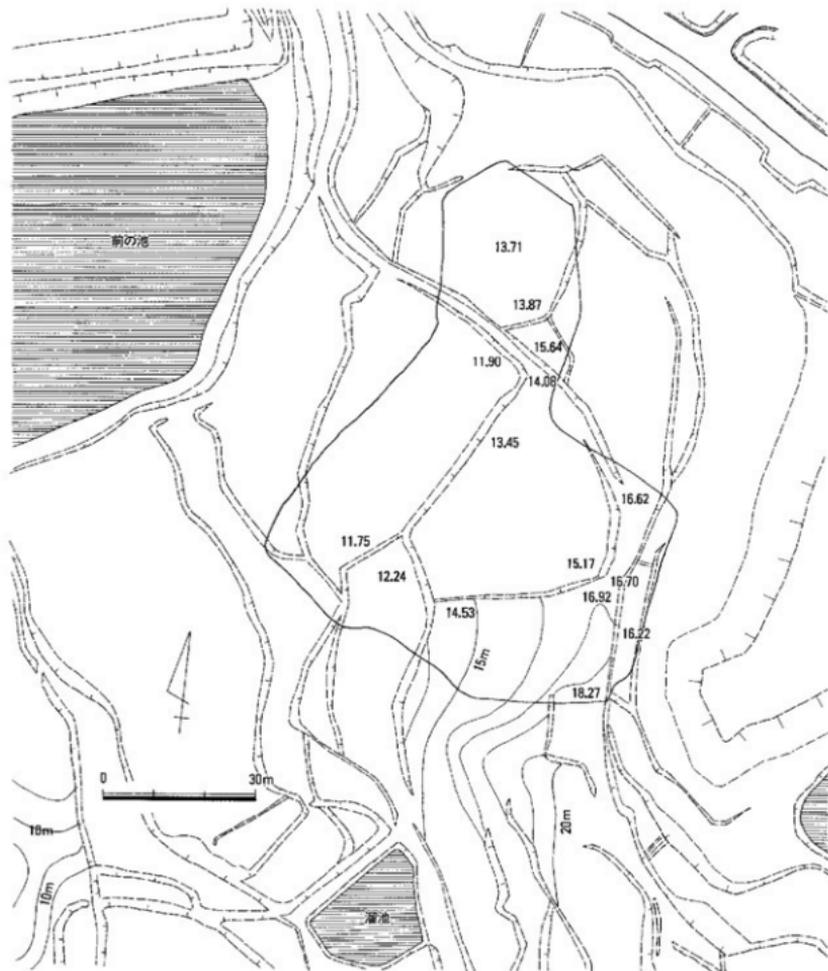


Fig. 129 I地区調査前地形図 (1/1000)



Fig. 130 | 地区全体図 (1/500)

調査の結果、多数の住居などの遺構が検出された。その中で調査区中央の遺構群は、地滑りによる地盤沈下のために遺存していたことが判明した。沈下は Fig. 130 にみるように幅約 50 m の範囲で円形に斜面下方へのズレて発生している。沈下の深度は北側で大きく約 2 m、南側では少なく、地割れが 2 条延びている。このために沈下部分の住居跡などの遺構が、後世の削平から免れたとみられた。住居跡は変形の著しいものが多い。なお、この地滑りは古墳時代後期住居の埋没後に発生しているが、厳密な時期や、要因は明らかにできなかった。

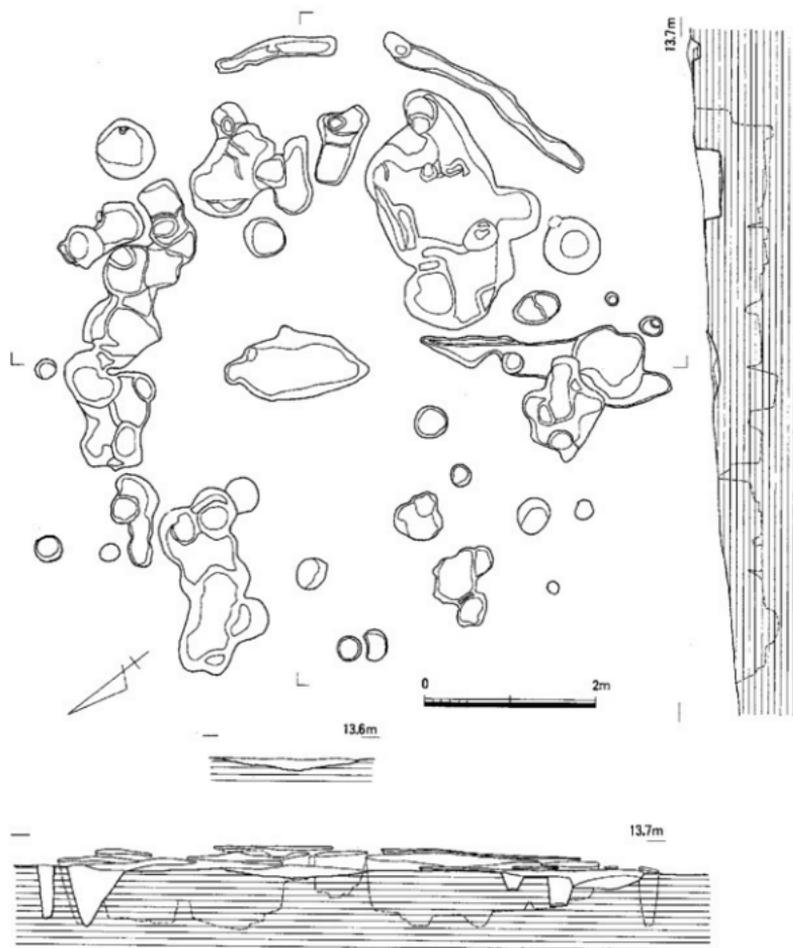


Fig. 131 SC02(1/60)

## 2. 遺構と遺物

### 1) 弥生時代中期の遺構

#### SC02 (Fig. 131~134)

I地区中央で検出した竪穴式住居跡である。北西に下がる緩斜面に立地する。西側をSC01が切っている。検出面の標高は13~13.5mである。東側に壁溝が一部残るが、他は住居壁、床面は全て削平されている。遺存するのは柱穴と中央土壌である。柱穴は重複が激しく、最終的に溝状となる。相当の建て替えが予測された。調査に当たっては柱穴の切り合いと遺物の出土を正確に押さえることを注意した。この結果、この住居跡は大きく3回の住居の拡大(建て替え)と8回に及ぶ柱の立替えをおこなっていることが明かとなった。また、遺物は最後の住居に伴うものだけが採取できた。以下、住居の変遷を概観する。

#### SC02-A段階 (Fig. 132-1)

直径4.5~5.5mの柱穴列を主柱とする住居段階である。主柱数は基本的に7本であり、柱の立替えは外側の向かって螺旋状にずらして立てている。柱は4回の立替えがあり、最後の時点で北西側を1本増やし、8本としている。住居規模は明確でないが、円形住居の主柱と壁は通常1m前後となるものが多いことから、この段階は直径7m前後の住居であったと推定される。ただし、1回の柱建て替えごとに壁の拡大をおこなったものかは不明である。

#### SC02-B段階 (Fig. 132-2)

直径5.5~6.0mの柱穴列を主柱とする住居段階である。住居の中心点は西に50cm程ずれる。主柱は8本である。A段階の柱間位置を利用している。1回の立替えがある。立替えは北東側の3本にのみみられ、やはり螺旋状となる。住居の規模は直径8m程度と見られる。

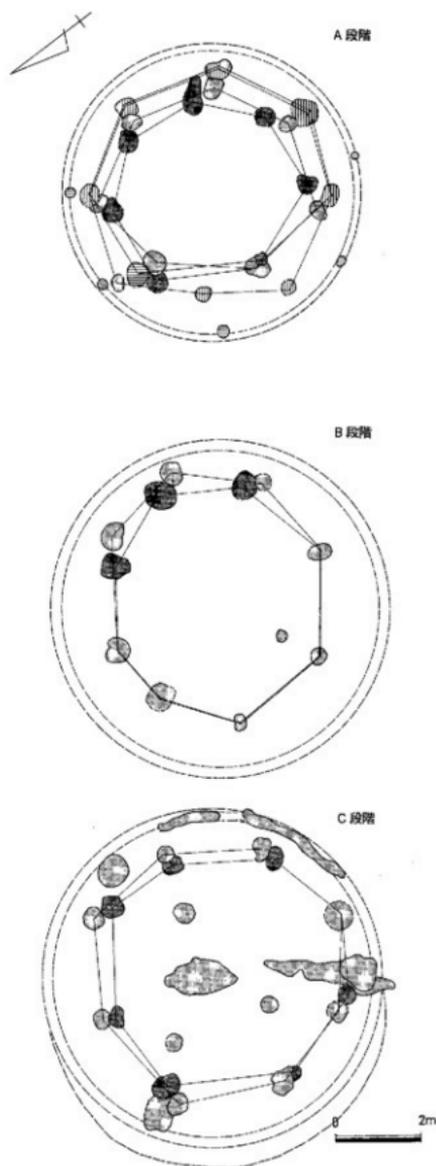


Fig. 132 SC02建替変遷模式図(1/120)

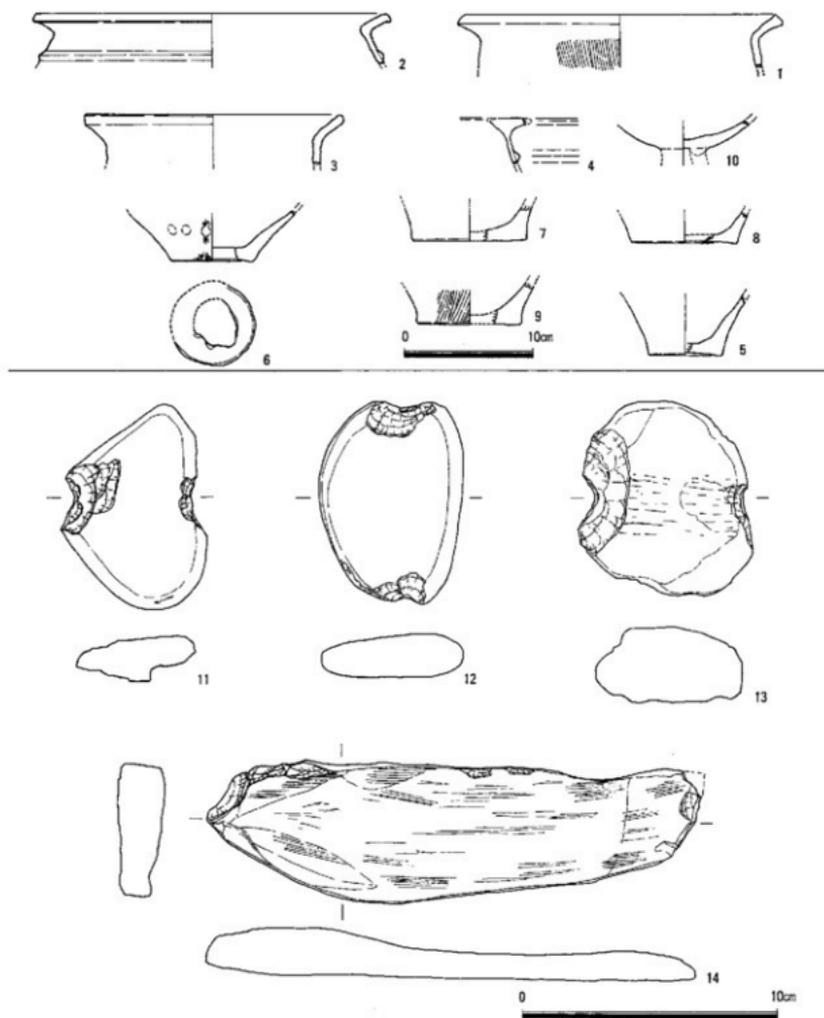


Fig.133 SC02出土遺物 (1/4・1/2)

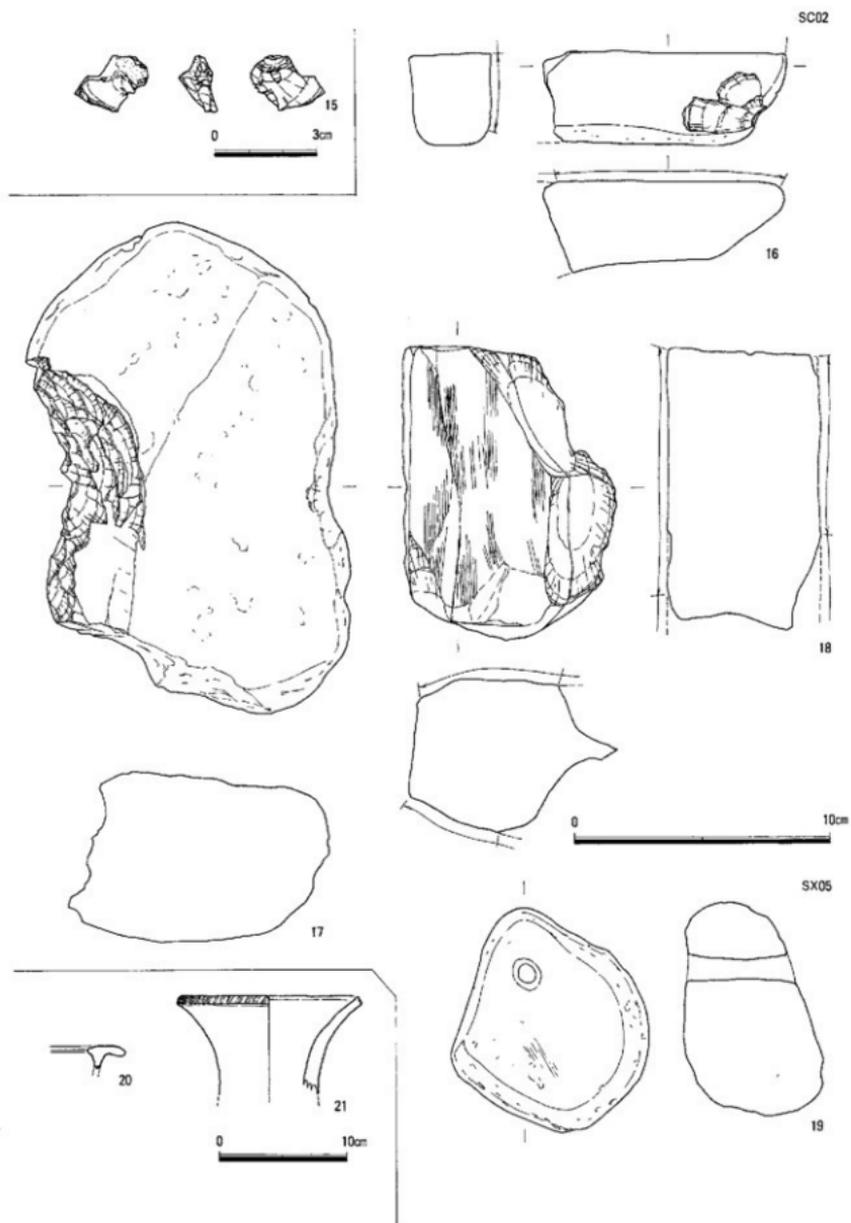


Fig.134 SC02・SX05出土遺物 (1/2・1/4・2/3)

### SC02-C段階 (Fig.132-3)

直径5.5~6.0mの柱穴列を主柱とする住居段階である。住居の中心点は再び東へ60cmほど移動する。この中心点の位置と、柱穴列のラインから、遺存する壁溝と中央穴はこの段階のものと思われる。また、壁溝から南西側に延びる溝状遺構も関連するとみられる。こうしても見るとこの段階の住居床面はそれ以前に対して、深く掘り下げられていたとも考えられる。なお主柱列はやや南北に歪むことから、住居は正円でなく、斜面に沿って僅かな楕円形になっていたと考えられる。これは、B段階の北~西壁を引き継いでいるとみることができよう。柱の立替えは2回である。住居の規模は径8.0~8.4mの円もしくは楕円形と推定される。

本住居跡から出土した遺物は少ないが、C段階の柱穴、壁溝、中央穴から土器類、石器類が出土した。土器には、甕(1~9)と高環(10)がある。石器には緑色片岩剥片(15)、石錘(11~13、17)、砥石(14、16、18)がある。

甕には須玖式系のもの(4)と跳ね上げ口縁系のもの(1~3)がある。底部は平底で僅かに上げ底である。

緑泥片岩は背面に節理面をもつ剥片素材である。不純物が少なく良質な石材である。玉類の材料であろう。

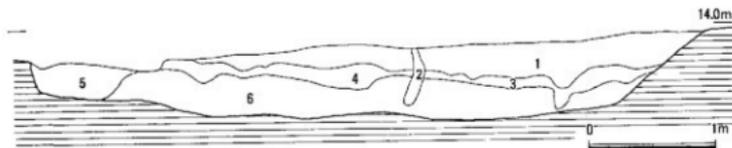
石錘は法量の近似した小型の敲打(礫)石錘3個(11~13)と、中型の1個(17)がある。

砥石のうち14と18は粘板岩を素材とした細目の砥石であり、使い込んでいる。18は熱破砕を起している。16は砂岩自然礫を利用した中目の砥石である。

本住居跡の時期はこの出土遺物からみると、土器は須玖Ⅱ式の範疇に含まれることから、この時期を利用の下限と見ることができよう。8回にもおよぶ柱の立替えは、この住居の存続期間の長さを示していると見られるが、時期幅を示す資料がなく、構築や建て替えの時期の判断は困難である。

### SX05 (Fig.130, 134, 135)

SX02の東側約10mにある。SC04に切られる黒色土が充満した落ち込みを当初、住居跡と判断し調査を進めた。しかし、この部分が、地滑りの断層にあたるのが分かり、相当の地形変化があることが判明した。下部で、遺構壁と推定したものが、断層線を遺構ラインと見誤ったと判明し、床面や柱穴の把握に務めたが、結局住居跡との判断は困難と見た。しかし、覆土の形成や、層位の状況から何らかの遺構である可能性は残り、ここに示した。



- |                  |   |
|------------------|---|
| 1. 暗褐色土          | 径0.5~1.5cmの炭化物多量に含む。径1.5cmの赤褐色ブロック多量に含む。径1.5cmの白色ブロック多量に含む。径0.3cmの白色粒多量に含む。粘性有。しまりあり。                             |
| 2. 明褐色土 (カクランカ?) | 径0.5cmの炭化物少量含む。白色ブロックの細片と暗褐色ブロックの細片まだらにまじる。粘性有。しまりあり。   |
| 3. 明褐色土          | 径0.5~1.0cmの白色ブロックきわめて多量に含む。径0.5~1.0cmの赤褐色ブロックきわめて多量に含む。下位になるほど濃密に。上位になるほど暗褐色に近づく。粘性あり。しまりあり。径1.0cmの炭化物少量含む。3層と同し。 |
| 4. 明褐色土 (3層と対応)  | 径1.0cmの白色ブロック少し含む。白色ブロックの細片、明赤褐色ブロック細片多量に含む。径0.5cmの炭化物少量含む。   |
| 5. 明褐色土          | 径0.8cmの炭化物少量含む。径0.8cmの赤褐色粒子少量含む。キメの細かいシルト層。   |
| 6. 暗褐色土          |   |

Fig.135 SX05土層断面図(1/40)

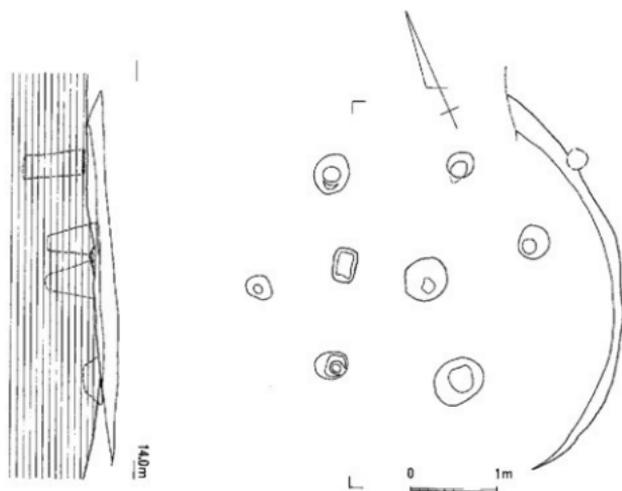


Fig.136 SC09 (1/60)

出土遺物には、土器類 (Fig.134-20、21) と石製品 (19) がある。土器類には甕 (20) と器台 (21) がある。甕は断面T字形を呈する須玖式系である。器台の端部には刻目を施す。

石製品は、軽石を利用した浮石である。円碟状の素材の表裏を平坦に削り、端部に両側から穿孔している。この軽石は入戸火砕流に伴うもので、海岸漂着物を採集利用したものと見られる。

#### SC09 (Fig.136、137)

SC02の北東側4~5mの位置にある円形住居跡である。弥生時代後期の方形住居跡 SC07が重複する。地造成と住居の切り合いにより、柱穴と東側の壁のみが遺存していた。検出面は地盤沈下により北側に下がっている。主柱穴は6本であり、主柱列は東西3.2m、南北2.8mの楕円形となる。中央には長軸の略東西方向に2つの柱穴がある。中央土壌は未検出であるが、「松菊里」型住居の可能性はある。東側に遺存する壁面のプランで復元すると住居の直径は約5.5mとなる。しかし、主柱列とはややズレがあり、やはり、東西方向に長い平面形を呈していたと考えられる。

住居内からの出土遺物は少ないが、柱穴覆土中から少量の遺物が出土した。

遺物には土器片 (1) と土器類 (2、3) がある。土器は中型の甕であり、口縁断面がT字形を呈する須玖式系のものである。

石器は敲打 (磯) 石錘であり、2つは法量が異なる。

SC09

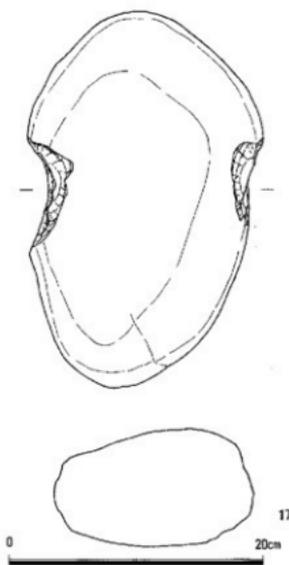
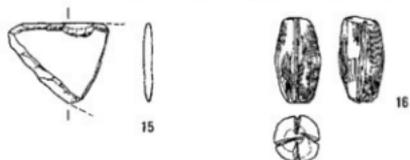
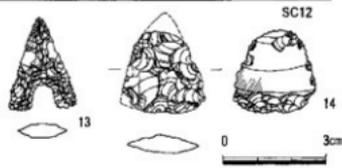
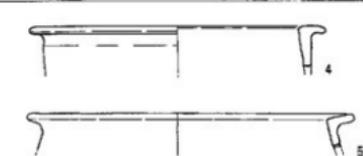
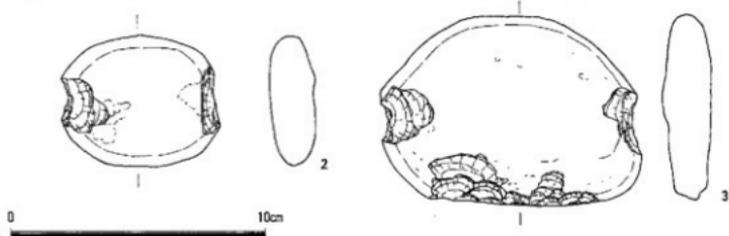
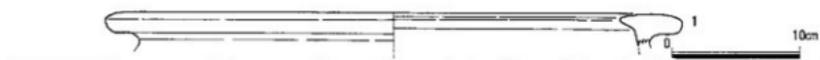


Fig. 137 SC09・12出土遺物 (1/4・1/2・2/3)

SC12 (Fig.137, 138)

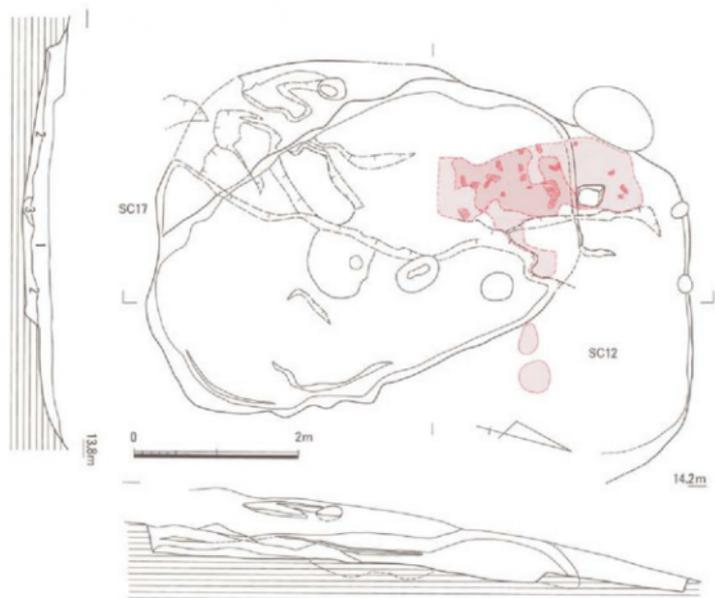
SC09の東側にあり、両者の壁面は近接している。SC17を切り、設けられている。検出地点は地滑りによる地盤沈下部分であり、東側に下がっている。住居の東壁は正断層にかかり、破壊されている。また、住居内にはおおそ南北方向に断層が2条あり、住居床面が階段状となっている。

住居跡の平面形は南北に長い楕円形であるが、北側は直線的な短辺となる。住居の規模は明確でないが、南北約7m、東西約5.5mと復元される。住居床面には北西側を中心に多くの炭化材、炭化物が分布していた。炭化材が床面に近い位置にあり、火災を受けた住居と見られた。

床面の北東側に直径0.4mほどの焼土面がある。住居の中心から離れているが、炉跡と考えられる。なお、本住居では床面を精査したが、柱穴を確認することができなかった。

住居内の覆土からは少量の遺物が出土した。遺物には土器類 (Fig.137-4~12) と石器類 (13~17) がある。土器には甕 (4~7, 9~12)、壺 (8) がある。石器には石鏃 (13, 14)、石包丁 (15)、石錘 (16, 17) がある。

甕、壺は口縁部が逆L字形となる須玖式系のものである。底部は全体にやや厚い平底であり、若干上げ底となる。9は、底が極めて厚く、強い上げ底で他の土器より古い時期のものである。



1. 灰茶褐色砂質土 (赤褐色粒、白粘土粒含む)
2. 灰褐色砂質土 (赤褐色土混じり) 発生中期遺物を含む包含層と同層か?
3. 暗茶褐色砂質土

Fig.138 SC12・17 (1/60)



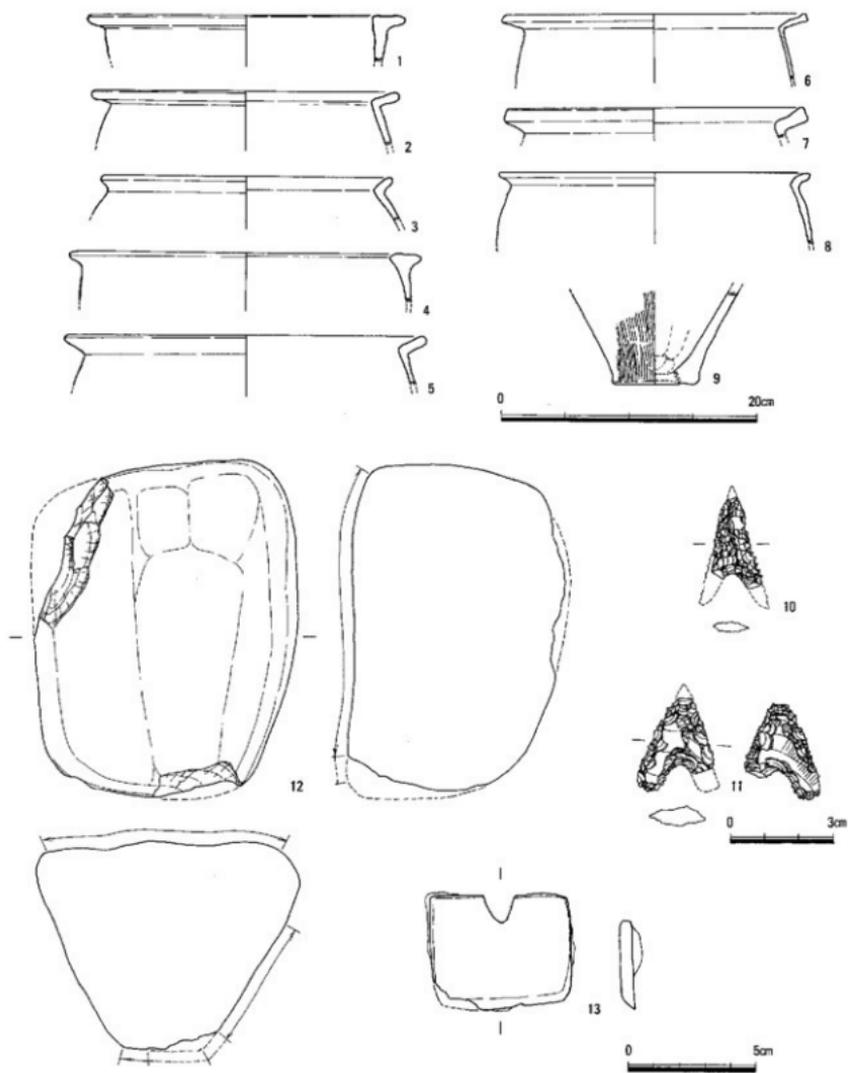


Fig.140 SC14出土遺物 (1/4・1/2・2/3)

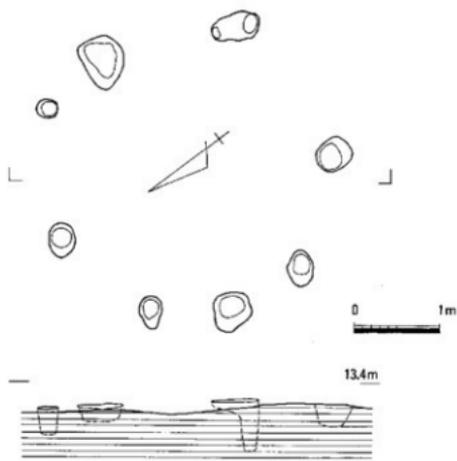


Fig.141 SC18 (1/60)

住居跡の平面形は南北に長い不整形円形である。住居の規模は、南北約5.3m、東西約4.2mを測る。住居床面は沈下にもとめない凹凸が激しく、柱穴は未確認である。床面の中央東側に直径0.8mほどの掘り方があり、中央穴と見られた。

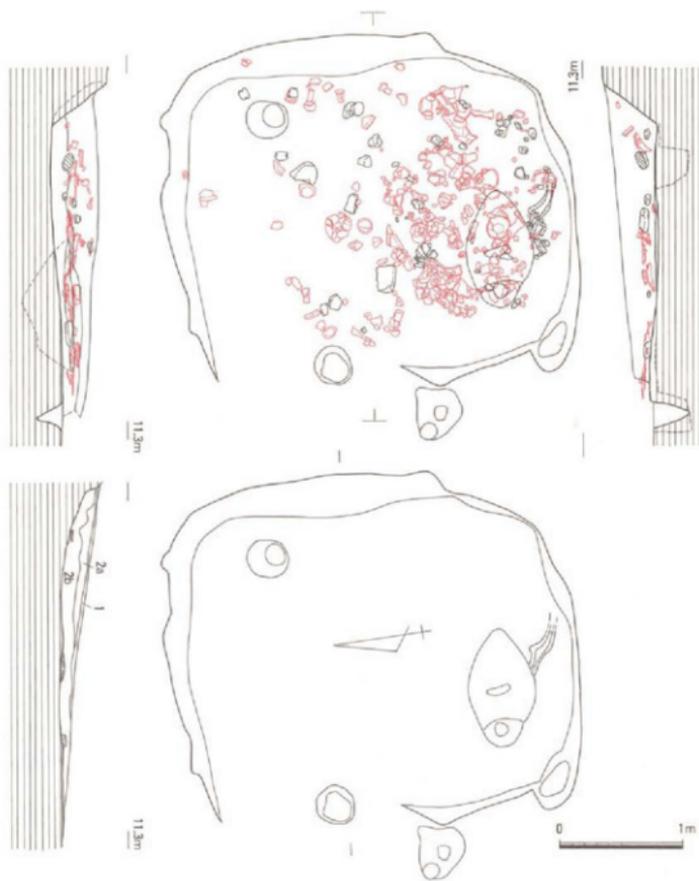
住居内の覆土から遺物は出土しなかった。

本住居跡の時期を推定する資料はないが、SC12出土の古い様相をもつ礎底部は、周辺遺構との関係からみても、本来は本住居に伴う可能性がある。

#### SC18 (Fig.141)

SC02の北側2mの位置にあり、さらに5m北側にSC14がある。削平を受け、柱穴のみが残る円形住居跡である。弥生時代後期の方形住居跡SC06が重複する。検出面の標高は約13mである。東側に下がる緩斜面に立地する。主柱穴は8本であり、主柱列は径3.4mでほぼ円形となる。中央土壌は未検出であり、相当の削平が予測される。この他に床面南側付近に本住居に関連する可能性のある柱穴を検出したが、確実ではない。重複するSC06の北、東壁は、共通し、主柱列から約1.1mの位置にある。SC06はこのSC18の掘り方を拡張、整形して構築したと思われ、こうした点から復元すると住居の直径は約5.6mとなる。

柱穴覆土中などを注意して調査したが、本住居内からの出土遺物はない。



- 1、表土 (暗褐色砂質土) 一番上に薄く堆積する。粒は粗くしまりは悪い。吸湿性高い砂質。炭化物を含む。ごく最近にうすくかぶったものと思われる。
- 2a、暗褐色粘質土 粒は細かくそろいしまりは良い(硬くしまる)。吸湿性は悪い。細かな砂粒。赤褐色地山ブロックの小さな粒を多少まばらに含む。
- 2b、やや明るめの暗褐色粘質土 粒は細かくそろい硬くしまる。吸湿性は悪い。白っぽい砂粒。炭化物を多く含む。赤褐色地山ブロックを多く含む。

Fig.142 SC33 (1/40)

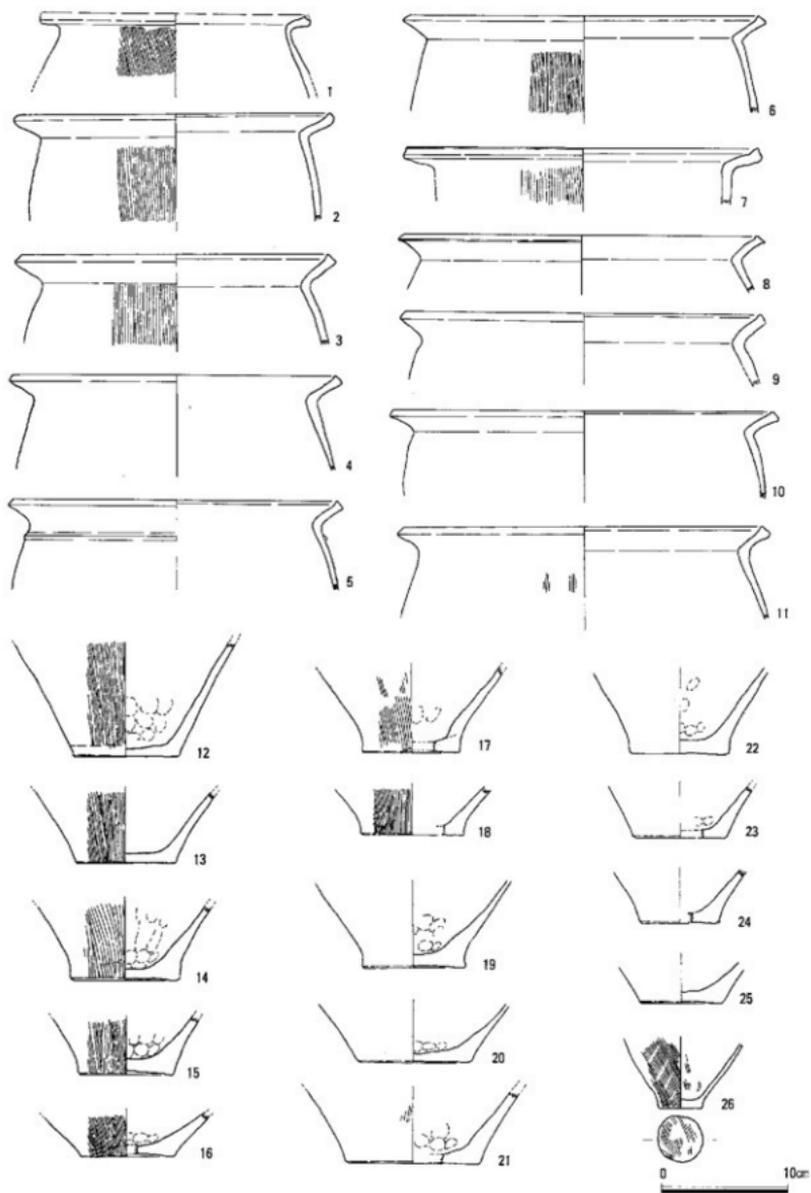


Fig. 143 SC33出土遺物 1 (1/4)

### SC33 (Fig.142-144)

SC02の北側約15mの位置にある小型の隅丸方形住居跡である。住居跡は試掘調査の際に検出していたものであり、試掘トレンチによって北西コーナー部分を欠いてしまった。SC02などより一段下がる造成面にある。検出面は東側から西側に向かう斜面である。検出面は標高約11mである。住居は検出面で南北3.3m、東西2.7mを測り、斜面に直交する主軸である。壁面は斜面に掘削されているために東側が高く0.4m、西側は遺存する部分で約0.1mの高さである。床面での規模は南北3.1m、東西2.5mを測る。床面はほぼ平坦であり、柱穴は壁に近い床面で3カ所、住居外の西側で1個を検出した。しかし、これらの柱穴は径、深さに差異があり、一連の主柱として本住居を構成するかは疑問である。また、壁面の南側に近い床面に土壌がある。この土壌は壁に沿って長く、東西0.95m、南北0.55mの楕円形である。土壌の床面は平坦にならず、中央に向かって下がる。深さは0.4mである。

住居内からは多くの遺物が出土した。遺物は住居内北側に集中し、床面上5-25cmの覆土中に出土した。遺物には土器類(1-47)、石器類(48-51)、玉(52)がある。また、他の遺物と混じって多くの礫、炭化物などが出土した。これらは、東-南側から投棄された状態である。

土器には、甕(1-33)、壺(34-38)、高杯(39-42)、台付無頸壺(43)、器台(44-47)がある。

甕は、跳ね上げ口縁のもの(1-11、27-29)がほとんどであり、須玖式系のもの(30)は1点だけである。前者のうち、1、2、9、27は口唇部に丸みを残すものである。また、27-29には器面に赤色顔料が塗布されている。須玖式系の甕は口唇部が下がり、口縁部下に断面M字形突帯をつけ、赤色顔料を塗布するものである。

壺は、口縁部の断面が逆「L」字形のもの(34)と、鋤先状口縁部のもの(35)、小型の短頸壺(38)がある。34は口縁端はやや下がり、上面に凹形浮文がつく。35は頸部の傾きから高杯杯部の可能性もある。38は口縁部を欠いている。

高杯は、鋤先口縁のものであり、口径は何れも30cm以下である。軸部は比較的長い形態を呈するものである。

台付無頸壺は、口縁径12.5cm、高さ約15cmの胴部に高台が付く高台は欠損している。胴部最大径に2条の断面「M」字形突帯をつける。外面は丁寧な磨きの後、赤色顔料を塗布している。

器台は、精製のもの(44-46)と、粗製のもの(47)がある。

石器には、砥石(48、49)と石錘(50、51)が出土した。

砥石は、自然礫を利用したものである。

石錘は、敲打(礫)石錘であり、2つ共に長軸に架部をもつ。

玉は、管玉であり、一端が欠損する。緑泥片岩製か。南側の土壌内から出土した。

### SC42 (Fig.145、147)

SC02の西側約18mの位置にある小型の隅丸長方形住居跡である。調査区南西側にあり、多数の住居跡が複合遺存する場所にある。本住居跡もSC43に切られている。SC02などより一段下がる造成面にある。検出面は東側から西側に向かう斜面である。検出面は標高9.9mである。住居は検出面で南北3.0m、東西1.8mを測り、斜面に直交する主軸である。平面は歪みがあり、菱形に近い。規模が小さく、住居以外の施設かも知れない。壁面は斜面に掘削されているために東側が高く0.3m、西側は約0.1mの高さである。床面での規模は南北2.5m、東西1.7mを測る。床面はほぼ平坦であり、柱穴は長辺の壁際に近い床面で数個を検出したものの、これに伴うものかは不明である。なお、東側壁面に接する床面に土壌がある。この土壌は壁に沿って長く、東西0.5m、南北0.4mの長方形である。土壌の床面は

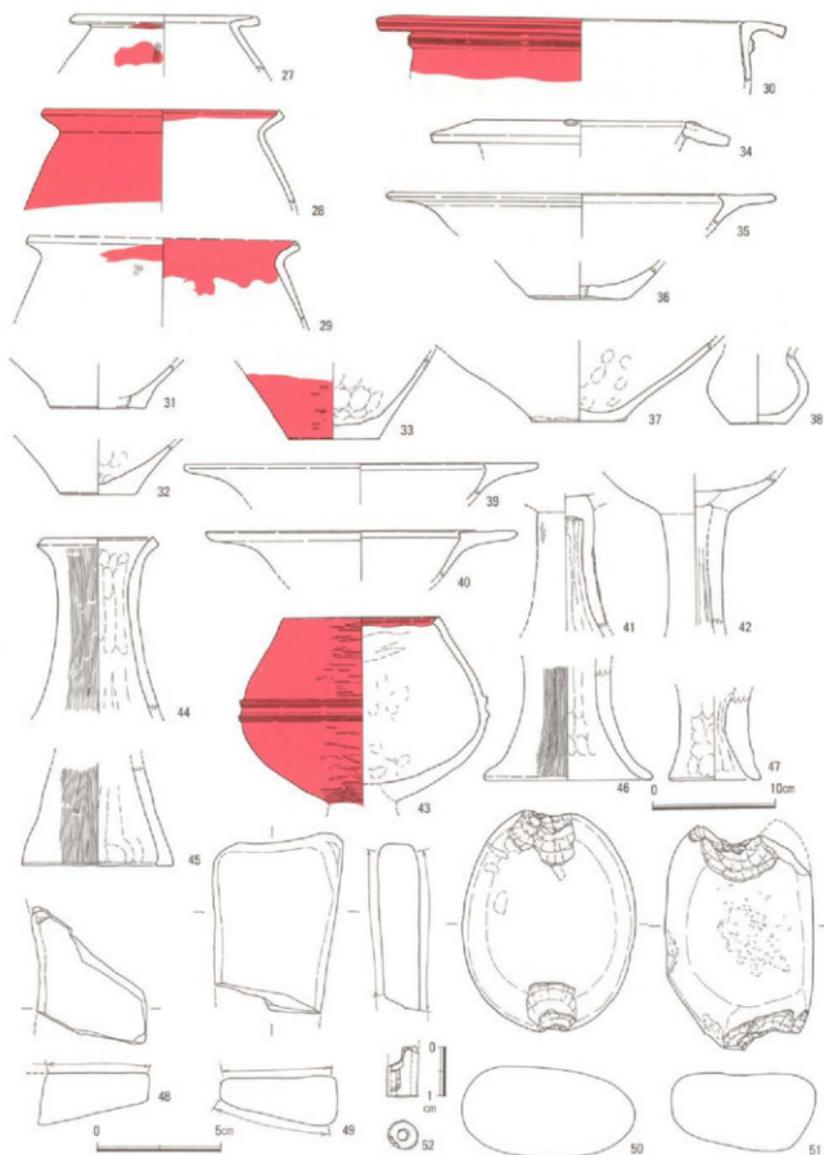


Fig.144 SC33出土遺物 2 (1/4・1/2・1/1)

平坦である。深さは0.1mである。

住居内の覆土は、全体に汚れが目立つ暗褐色土である。

住居内からは少量の遺物が出土した。遺物は覆土中上部にあり、散漫に出土した。

出土遺物には、土器類 (1~5) がある。

土器には甕 (1~4) と器台 (5) がある。

甕には、須玖式系のもの (1~3) と跳ね上げ口縁系のもの (4) がある。

器台は、粗製のものであり、脚端の破片である。

#### SC46 (Fig.146, 147)

SC02の西側約20mの位置にある、小型の隅丸方形住居跡である。調査区南西側にあり、多数の住居跡が複合遺存する場所にある。本住居跡もSC44、45、SD47に切られている。SC02などより一段下がる造成面にある。検出面は東側から西側に向かう斜面である。本遺構の検出面は標高9.9mである。住居は検出面で南北3.0m以上、東西1.3m以上を測る。壁面は斜面に掘削されているために東側が高く0.2m、西側は0.1m以下の高さである。床面は南から西側でやや高まり、不整なあり方を示している。本遺構に関連するとみられる柱穴は、抽出することができなかった。

住居内の覆土は、暗褐色土である。住居内からは少量の遺物が出土した。

出土遺物には、土器片 (6) と石器 (7) がある。

土器は甕底部である。やや厚みをもつ平底である。

石器は砥石片である。粘板岩製の細目である。

1. 暗褐色土 暗茶褐色の斑文あり。若干微細な炭化物を含む。
2. 暗褐色土 暗黄褐色および橙褐色土をブロック状に含む。若干微細な炭化物を含む。若干の土器片を含む。1層と3層の混合層である。
3. 暗黄褐色土 若干微細な炭化物を含む。やや粘性を帯びる。
4. 橙褐色土 粘性を帯びる。黒指人の糞を含む。土器片を含む。1cm未満の炭化物を含む(少量)。暗茶褐色の斑文あり。粘性あり。
5. 暗褐色土
6. 橙褐色土 最も強い粘性を帯びる。

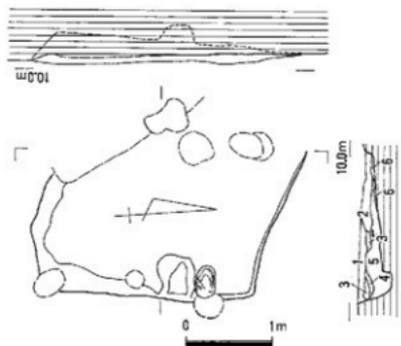


Fig.145 SC42 (1/60)

#### SX48 (Fig.147)

SC46の西側約4mの位置にある包含層である。調査区南西側にあり、多数の住居跡が複合遺存する場所にある。当初は住居跡の可能性を考えたが、調査を進める過程で、明確な遺構とし把握できなかったために、包含層として処理した。ただし、比較的まとまった遺物が出土することや、SC46と同様にSC43に切られることなどから、遺構形成過程を知る上で重要であるので、ここに掲載する。もちろん、調査において何らかの遺構であったものを、把握できなかった可能性もある。包含層の検出面は東側から西側に向かう斜面である。検出面は標高9.6mである。

包含層は、暗褐色粘質土である。

包含層からは多くの遺物が出土した。遺物は覆土中上部にあり、散漫に出土した。

遺物には、土器類 (8~15) と石器類 (16~18) がある。

土器には、甕類 (8~13) と壺類 (14, 15) がある。

甕類はすべて須玖式系のものである。底部は、厚みのある平底であり、底面は上げ底となる。

壺は、何れも底部であり、中型のもの (15) と粗製の小型のもの (14) がある。

石器には、剥片鏃 (16)、敲打石鏃 (17)、石包丁片 (18) がある。

#### SX64 (Fig.147)

調査区の北端に位置している。北側に向かって下がる溝状の遺構である。西側に接する SC62が一部を切る。この溝状遺構は北側の調査区外に延びており、旧地形図に照らし合わせてみると本集落の立地する丘陵頂部にあり、南北に延びる尾根線の先端側から延びてきている。ただし、本遺構周辺も畑地造成によって相当の削平がなされているために、遺構本来の規模は不明である。この溝状の遺構は断面が浅いU字形を呈し、幅約5.2m、深さ0.6mを測る。調査区内で長さ約7mを確認した。延長部分は調査区外となっており、本来の規模、長さは不明である。断面の傾斜が緩やかであり、遺構内覆土は黒色の腐植土である。遺構床面並びに覆土中に柱穴状の掘り方がある。性格は不明である。検出面は標高約13.5mである。

覆土中からの出土遺物は少ない。遺物は覆土上部にあり、少量の土器片がある。

土器片には甕底部 (Fig.147-19) がある。底部は厚みのある平底であり、底面は上げ底となる。

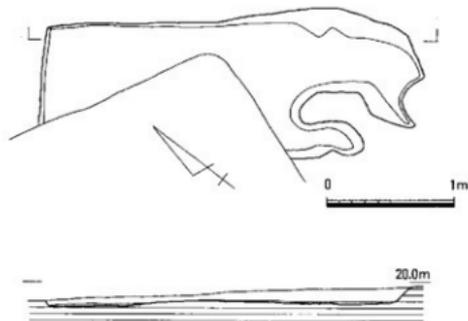
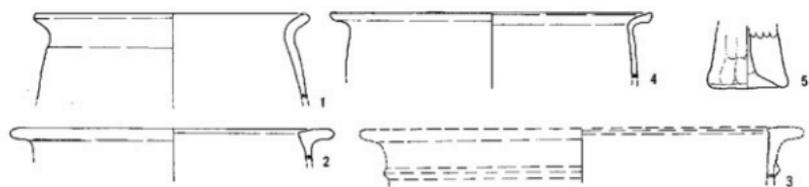


Fig.146 SC46 (1/40)

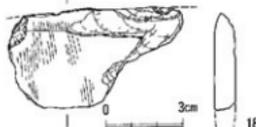
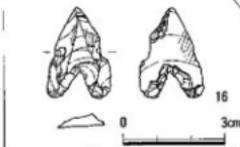
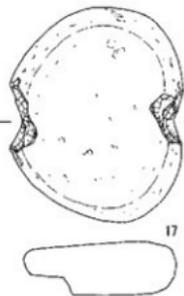
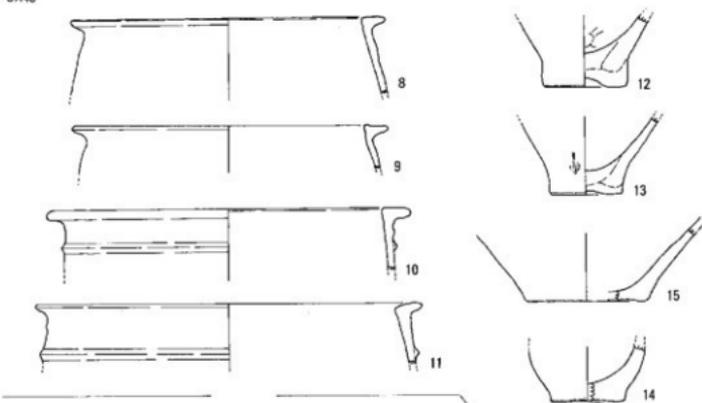
SC42



SC46



SX48



SX64

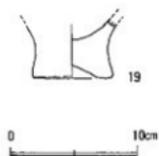


Fig. 147 SC42・46・SX48・64出土遺物 (1/4・2/3・1/2)

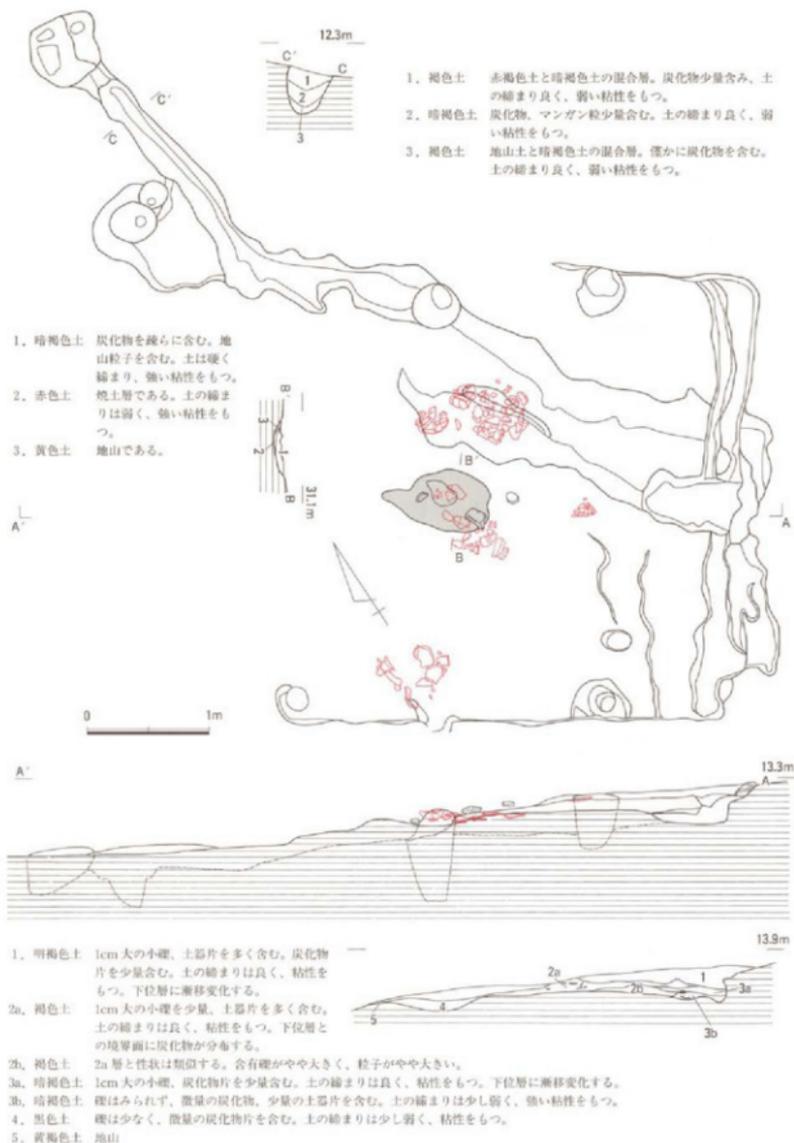


Fig.148 SC01 (1/40)



Fig.149 SC01出土遺物 (1/8・1/4・2/3・1/2)

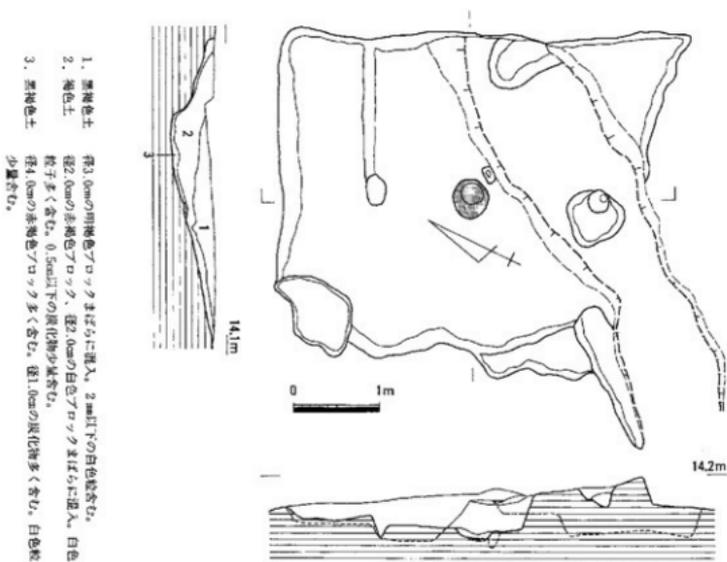


Fig.150 SC04(1/60)

## 2) 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構

### SC01 (Fig.148, 149)

SC02の西側にあり、本住居が切っている。方形住居跡である。検出面は東側から西側に下がる斜面である。検出面は標高約13.2mである。住居は検出面で南北3.7m、東西4.2m以上を測り、斜面に直交する主軸をとる。しかし、この時期の住居形態から見ると、検出された遺構は住居の全体を示すものではなく、二辺にベット状遺構をもつ長方形住居の両ベット部分が削平されたものと見られた。壁面は斜面に掘削されているために東側が残り0.1mの高さを測り、西側は遺存しない。推定されるベットを含めた本住居の復元規模は、南北約7m、東西約5mの長方形住居と考えられよう。東壁には壁溝が巡る。床面はほぼ平坦であり、住居の長軸中央のベット際に2つの主柱穴を検出した。柱間距離は3.0mである。また、この主柱と東壁の中間位置にもそれぞれ1つの柱穴がある。

主柱穴の中間位置には中央土壌があり、焼土、炭化物がみられた。また、東側壁面の中央床面に「壁際土壌」がある。この土壌は壁から突き出し、幅0.25m、長さ0.40mの楕円形であり、深さは0.1mを測る。土壌の床面は平坦である。なお、住居の床面にはこの壁際土壌から北側に向かって溝状の遺構が住居外まで延びる。この溝は幅約0.8～0.2m、深さ約0.2～0.4mを測り、長さ6.5mで円形土壌に連結する。

住居内からは多くの遺物が出土した。遺物は住居内中央に集中し、床面上5～10cmの覆土中に出土した。遺物には土器類 (1～7)、石器類 (8, 9, 11～14)、鉄器 (10) がある。

土器には、甕 (1, 6)、壺 (2, 3, 7)、高杯 (5)、台付鉢 (4) がある。

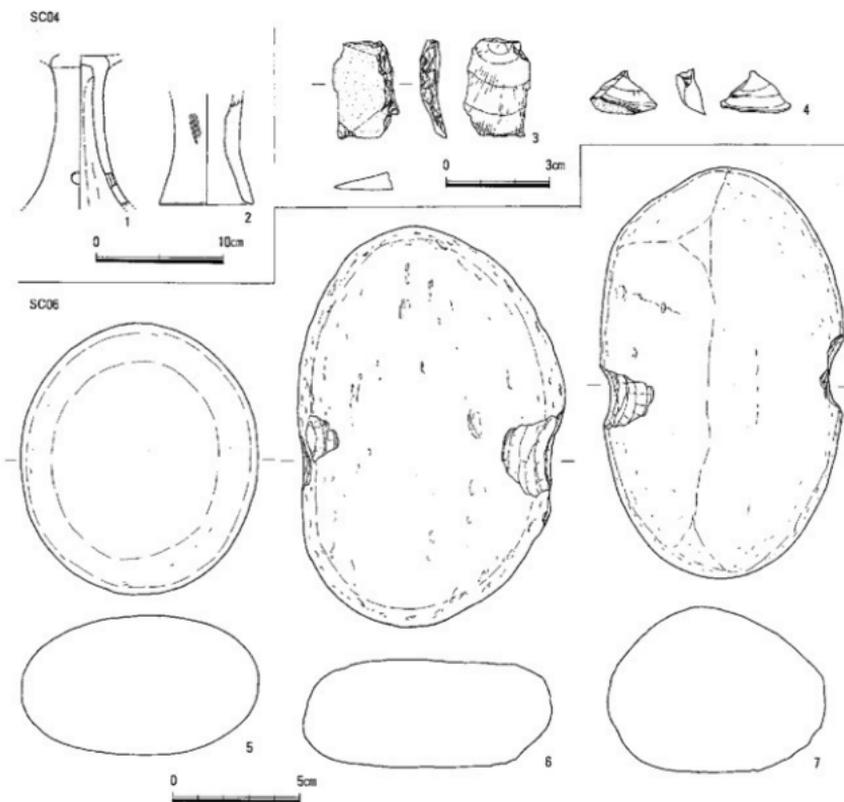


Fig. 151 SC04・06出土遺物 (1/4・2/3・1/2)

石器には、石鏃 (8)、碧玉片 (9)、砥石 (11、12)、石斧 (13)、石錘 (14) がある。  
鉄器には、棒状の不明鉄器がある。

#### SC04 (Fig.150, 151)

SC04の東側約13mにある、方形住居跡である。検出面は標高約14.0mであるが、これが本来の高さとは考え難い。地滑り部分の頂部に位置し、床面は断層により大きく三分割され、さらに地盤沈下により全体に東側に下がっているなど、全体に激しく破壊されている。西側に予測されるベット状遺構付近は断層によって崩壊し、遺構の検出ができなかった。おおまかにはN-25°-Wに長軸を取る二辺にベット状遺構をもつ長方形住居である。住居長辺は6.0m前後、短辺4.0mを測る。住居が複雑に破壊されているために壁面高は不明であるが、残りの良い部分で0.4mを測る。住居の長軸中央のベット際

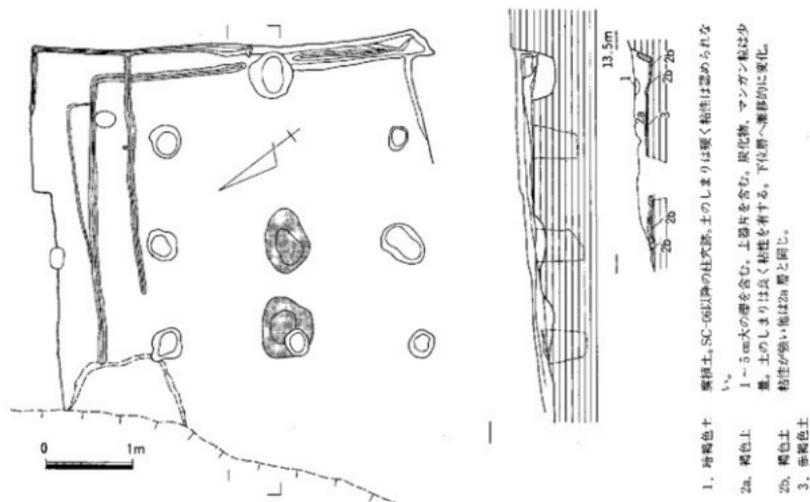


Fig.152 SC06 (1/60)

に2つの主柱穴を検出した。柱間距離は2.7mを測る。主柱のうち南側の柱穴にはこれを切る土層があり、土器の底部が据え置いた状態で出土した。本住居埋没後の遺構と判断し、これをSK10とした。

主柱穴の中間位置には中央土層があり、炭化物片が多くみられた。また、東側壁面の中央床面に「壁際土層」がある。この土層は壁から突き出し、幅0.9m、長さ0.6mの楕円形であり、深さは0.15mを測る。土層の床面は平坦である。

住居内からは少量の遺物が出土した。遺物には土器類 (1、2)、石器類 (3~4) がある。

土器には、高杯 (1)、器台 (2) がある。

石器には、水晶片 (3)、碧玉 (綠色片岩) 片 (4) がある。

#### SC06 (Fig.151~153)

弥生中期の円形住居 SC18に重複する長方形住居跡である。検出面は標高約13.2mである、SC01の北側約6mにあり、住居の主軸や東壁の筋を共通している。削平のために保存状態は悪いが、二辺にベット状遺構をもつ長方形住居である。ただし、南側のベット部は削平により失われている。推定される両ベットを含めた本住居の復元規模は、南北約5.7m、東西約4.6mの長方形住居と考えられる。地盤沈下により全体に北側が下がる。現存する住居部分は長辺は5.4m、短辺4.3mを測る。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.2mを測る。地盤の下がった北側では壁、壁溝の切り合いがあり、2回の建て替えが予測される。断片の遺存のために、住居の復元、建て替えの推移は不明である。最終の住居の北側のベットは盛り上で造られ、幅1.1mを測る。壁際に段のある特異なものである。

主柱はベット際に計6つの柱穴を検出した。これは、埋土からみてすべて同時に利用されたものではなく、当初主軸中央の2本柱であったものが、建て替え後、4本柱になったものと考えられる。柱間距離は当初が3.0m、建て替え後が南北2.7~2.9m、東西2.4mを測る。

主柱穴の中間位置の床面には中央土層が2基あり、焼土、炭化物片が多くみられた。また、東側壁面の中央床面に「壁際土層」がある。この土層は壁から突き出し、幅0.5m、長さ0.55mの楕円形であ

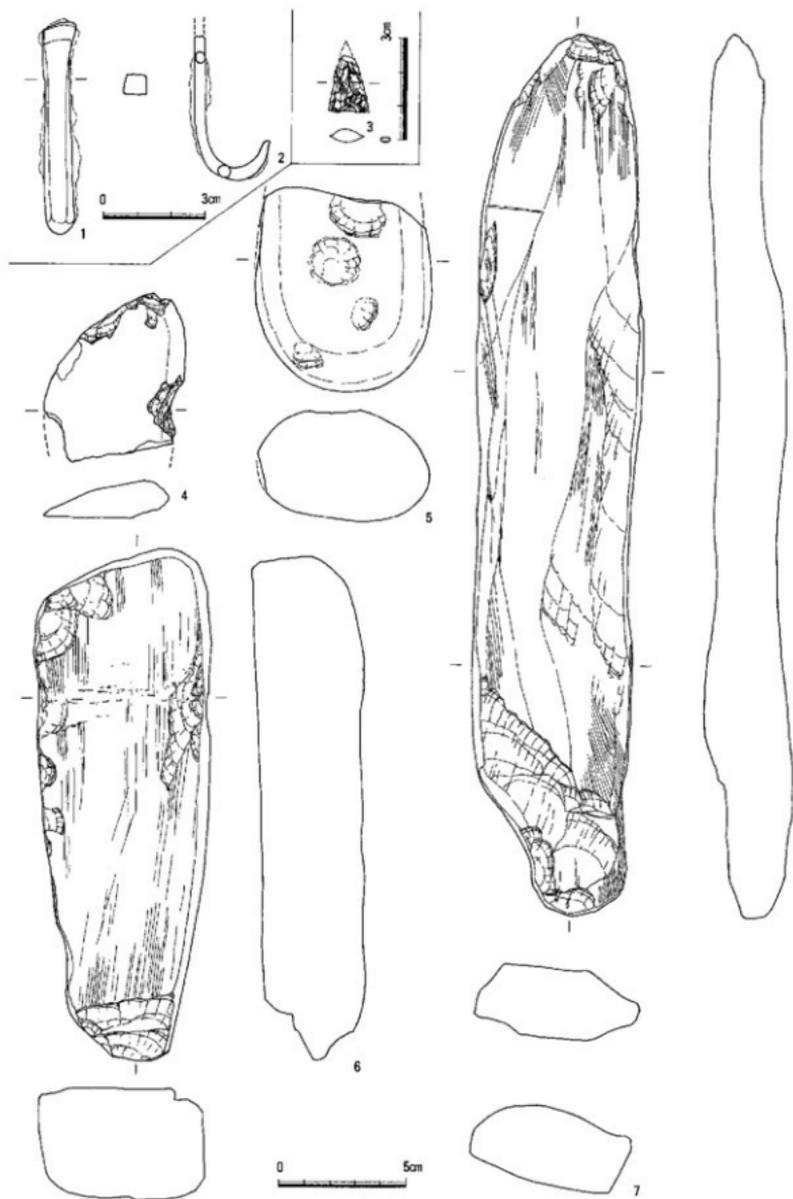


Fig. 153 SC06出土遺物 (2/3・1/2)

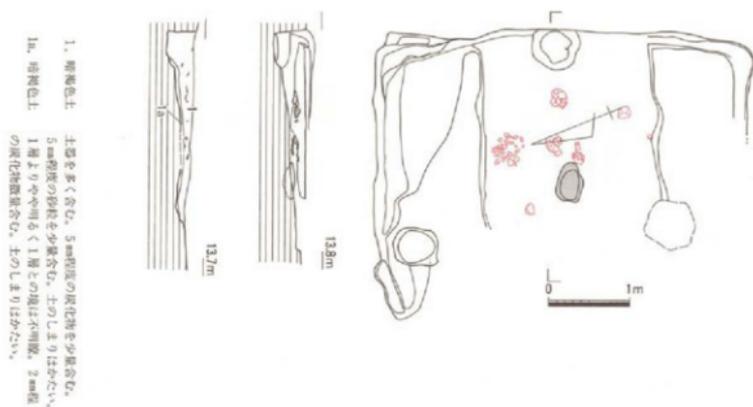


Fig.154 SC07 (1/60)

り、深さは0.3mを測る。土壌の床面は平坦である。

住居内からは少量の遺物が出土した。遺物には、鉄器類 (Fig.153-1、2)、石器類 (Fig.151-5-7、Fig.153-3-7)がある。土器片は少量で図化に耐えるものはない。これらの遺物は床面に近い位置から出土した。

鉄器には、棒状鉄製品 (1)、釣り針 (2)がある。釣り針は基部を欠損し、長さ4.3cm、幅2.2cmを測る。断面は直径0.3cmの円形のものである。

石器には、石鎌 (3)、石錘 (Fig.151-6、7、Fig.153-4)、磨石 (Fig.151-5、Fig.153-5)、砥石 (6、7)がある。石鎌は縄文時代のもので混入品である。6は敲打、緊縛痕があり、砥石としての使用後、石鎌に転用したものと見られる。

#### SC07 (Fig.154、155)

弥生中期の円形住居 SC09に重複する長方形住居跡である。検出面は標高約13.6mである、SC06の東側約2mにあり、同様に主軸を南北に向ける。削平のために保存状態は悪いが、二辺にベット状遺構をもつ長方形住居である。ただし、北側のベット部は地盤沈下により急激に下がり、床面が傾斜している。両ベットを含めた本住居の復元規模は、南北約4.6m、東西約3.5mである。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.2mを測る。北側のベットは幅1.2m、南側のベットは幅0.9mを測る。壁際に壁溝が巡る。段のある特異なものである。主柱は不明である。

住居中央の床面には中央土壌があり、焼土、炭化物片が多くみられた。土壌の規模は幅0.45m、長さ0.35mを測る。

東側壁面の中央床面に「壁際土壌」がある。この土壌は壁から突き出し、幅0.6m、長さ0.45mの楕円形であり、深さは0.15mを測る。土壌の床面は平坦である。また、住居の北西隅に幅約0.5m、長さ1.0mの浅い土壌から水晶、碧玉の碎片が多く出土した。玉類の製作過程での廃棄物と見られた。

住居内からはほかに少量の遺物が出土した。遺物には、土器類 (Fig.155-1-7)、石器類 (8-10)がある。これらの遺物は覆土内にあり、床面上5-15cmの位置から出土した。

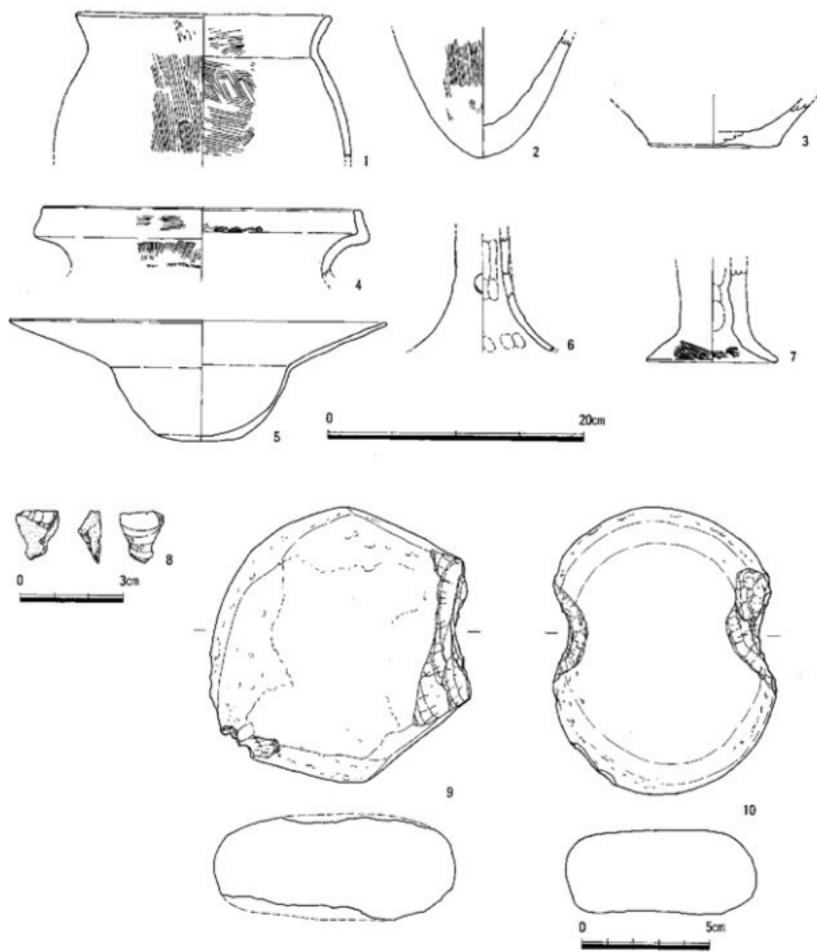


Fig. 155 SC07出土遺物 (1/4・2/3・1/2)

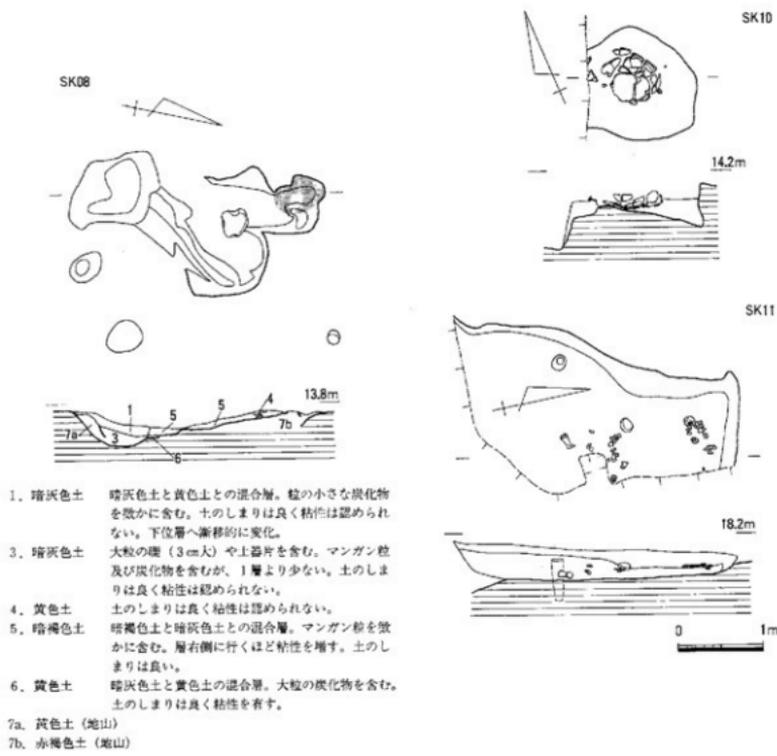


Fig.156 SK08・10・11 (1/60)

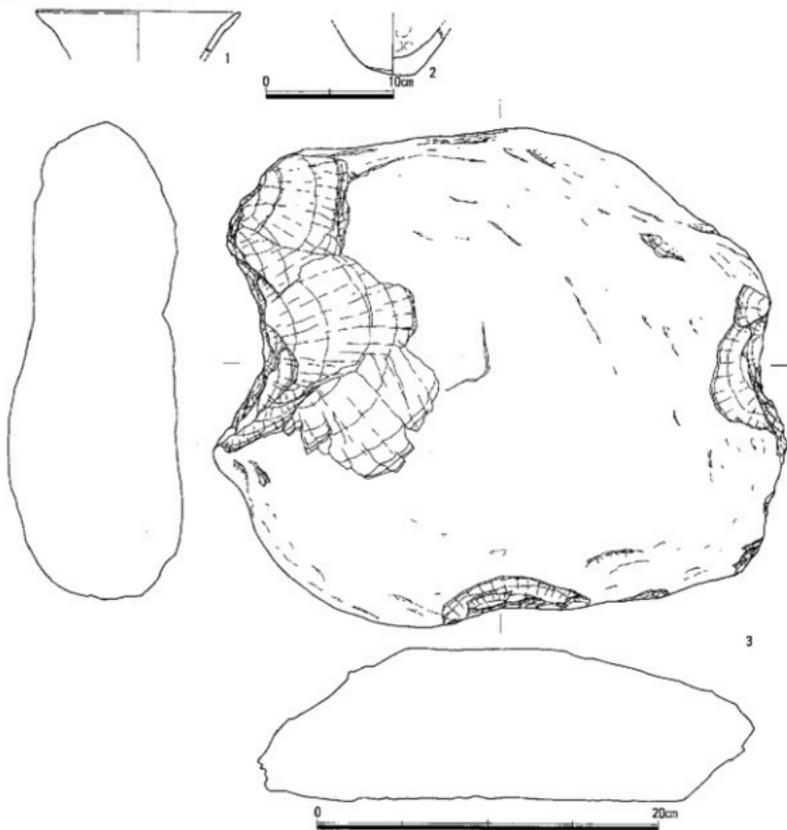
土器には、甕(1-3)、壺(4)、鉢(5)、高杯(6)、器台(7)がある。

甕は、口縁部が断面「く」字形となり、長胴化するもの(1)や、尖底に近い分厚いもの(2)がある。(2)は本地域のものではなく、東九州などからの影響を受けた可能性がある。(3)は中期のもの。石器には、碧玉剥片(8)、石錘(9、10)がある。碧玉や水晶の砕片は小さく、図化していない。

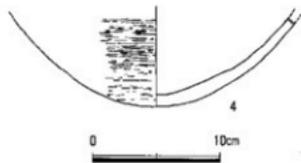
#### SK08 (Fig.156, 157)

SK08は、地滑りによって発生した断層に取り込まれた遺構の断片である。SC01の東側約6mにあり、径2~3m程の平板な落ち込み、土壌、上層から延びる溝状遺構、焼土の見られる土壌、柱穴などが集合している。遺構は断層により分断し、陥没した部分だけが後の削平を免れて遺存したものである。壁などの遺構の規模や形態を示すものはないが、残存する遺構からこれは竪穴式住居であったと判断される。土壌と土壌から延びる溝状遺構は「壁際土壌」と本地域で一般的な「排水溝」状の遺構であり、焼土の見られる土壌は、中央穴と判断される。形態はSC-01に類似したものになろう。住居の復元は至難であるが、壁際土壌と中央穴の間が約2.5mあり、該期で一般的な規模、形態と想定する

SK08



SK10



SK11

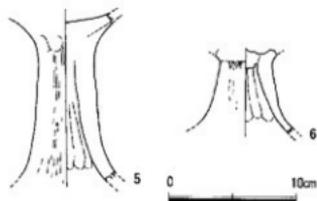


Fig.157 SK08・10・11出土遺物 (1/4・1/3)



Fig.158 SC13 (1/60)

と、短軸（東西）が約5.0m、長軸（南北）が約7mほどの規模と推定される。主柱穴は不明であるが、両土壌に並行して北側に2つの柱穴が検出できた。これからみて、4本柱の可能性がある。

遺構内から少量の遺物が出土した。遺物には土器類と石器がある。

土器には壺？（Fig.157-1）と甕底部（2）がある。甕底部は僅かに稜線を感じる丸底である。

石器には、石錘（3）がある。

石錘は、自然亜円礫を用いた敲打（礫）石錘である。長、短軸ともに挟りをつけている。長さ34cm、幅29cm、厚さ10cm、重さ15.05kgを測る大型のものである。これは、壁際土壌と中央土壌の中間位置の床面に置かれた状態で出土した。

#### SK10 (Fig.156, 157)

竪穴式住居 SC04の主柱のうち南側の柱穴を切る土壌である。埋め甕遺構とみられるが、削平され、土器の底部のみが据え置いた状態で出土した。住居埋没後の遺構と判断した。遺構の東西両側を断層により失っている。遺構は平面楕円形であり、東西約1.5m、南北1.3m、深さ約0.2mを測る。

出土遺物は甕底部（Fig.157-4）であり、丸底である。

#### SK11 (Fig.156, 157)

I地区の南東端に位置する住居状の遺構である。標高17m付近で検出した。遺構は丘陵尾根線より東側にあり、本地区ではこの遺構だけが東向き斜面に立地する。畑地造成により、東、南側を削平され、北西側の隅部のみが遺存している。平面は方形を呈し、現状で南北3.5m、東西1.9mを測る。深さは最大で0.4mを測る。遺構内覆土は黒色の腐植土であり、床面上0.1~0.2m付近に少量の遺物を出土した。

遺物には土器類（Fig.157-5、6）がある。土器は高杯軸部であり、長脚（5）のものと短脚のもの（6）がある。

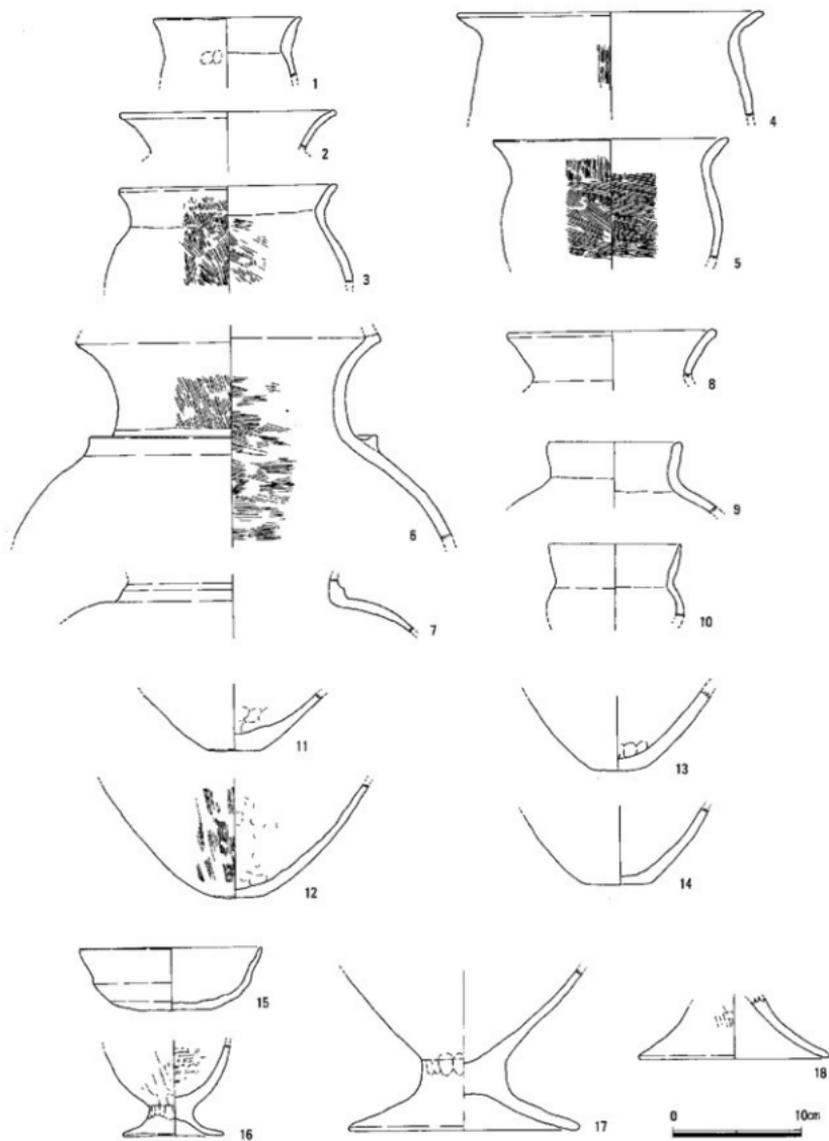


Fig. 159 SC13出土遺物 1 (1/4)

SC13 (Fig.158~161)

I地区の南西端に位置する長方形住居である。標高15m付近で検出した。

SC01の南側約18mにあり、同様に主軸を南北に向ける。住居の周囲は古い畑地造成の跡があるものの、近年は雑木林となり、削平がやや少ない。保存状態は比較的良好。二辺にベット状遺構をもつ長方形住居である。本住居の規模は、南北約5.7m、東西約3.0mである。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.3mを測る。北側のベットは幅1.2m、南側のベットは幅1.0mを測る。壁際に壁溝が巡る。

主柱はベットより内側に計2つの柱穴を検出した。柱間距離は2.3mを測る。

住居中央の床面には中央土壌があり、焼土、炭化物片が多くみられた。土壌の規模は幅0.45m、長さ0.55mを測る。

東側壁面の中央床面に「壁際土壌」がある。この土壌は壁から突き出し、幅0.7m、長さ0.6mの楕円形であり、深さは0.1mを測る。この土壌の南側に接して、東壁から延びる溝状の遺構を床面に検出した。溝は幅0.1~0.2m、深さ0.1mの規模であり、南西側に延びる。

住居内の覆土中からは多くの遺物が出土した。遺物には、土器類(1~24)、石器類(25~30)がある。これらの遺物は覆土内にあり、床面上5~20cmの位置から出土した。

土器には、甕(1、3~5、11~14)、壺(2、6~10)、鉢(15)、台付鉢(16~18)、高杯(19~22)、器台(23)、支脚(24)がある。

甕は、口縁部が断面「く」字形となり、長胴化するものである。底部は底部径が小さく、稜線が不明瞭であり、丸底に近いものである。

壺は、複合口縁壺(6、7)、広口壺(2、8)、直口壺(9)、丸底壺(10)がある。

高杯は、深い杯部をもち、外反する口縁部をもつもの(19)である。

石器には、水晶結晶体(25)、砥石(26)、石鏟(27~30)がある。水晶は他に水晶碎片とともに、廃棄された土器片の間に挟まれて出土した。

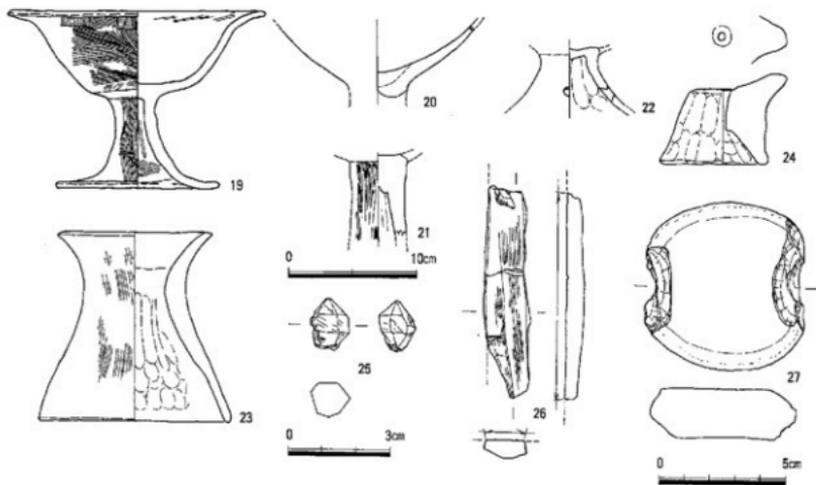


Fig.160 SC13出土遺物 2 (1/4・2/3・1/2)

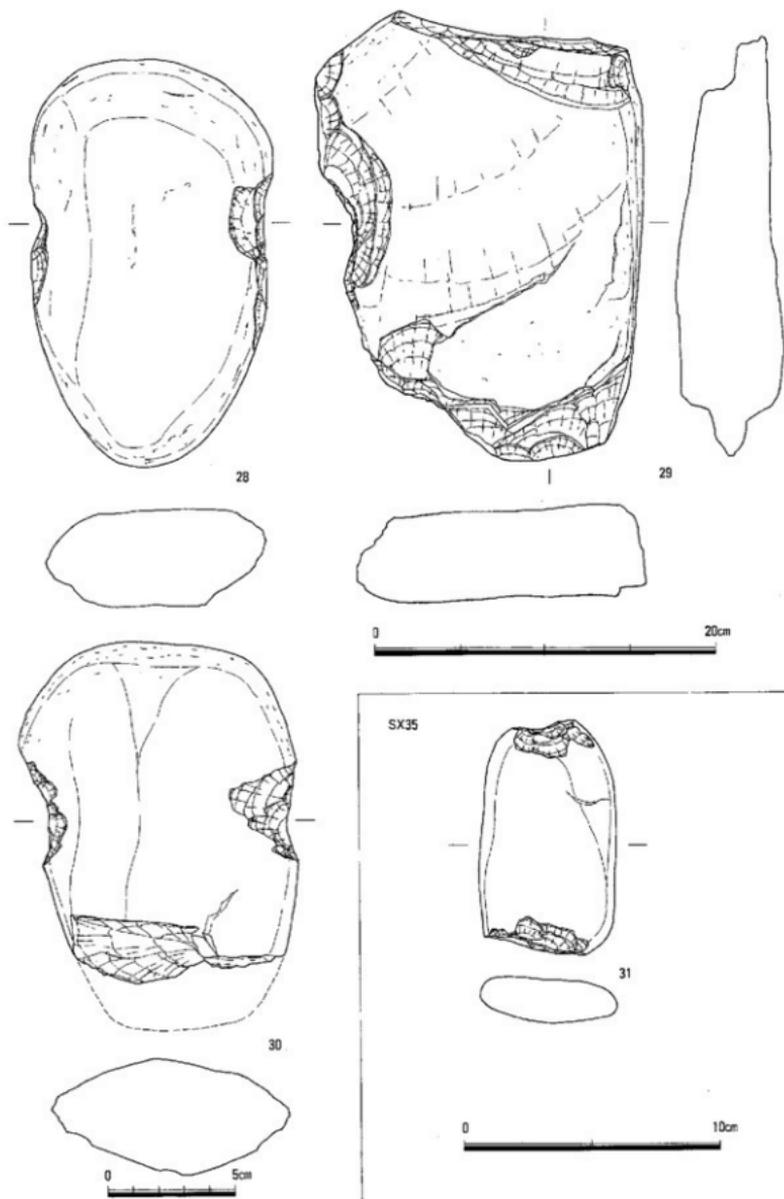


Fig. 161 SC13・SX35出土遺物 (1/2・1/3)

SX34~36 (Fig.161)

調査区中央西よりに検出した溝状の遺構である。検出面の標高は11.1mである。何れも幅0.3~0.4m、深さ0.1mの規模であり、近接し並行している。SX35とSX36は北側で連結している。南北3.5m、東西1.4mの範囲内にある。出土遺物は少ないが、弥生時代後期と見られる土器片がある。遺構の性格は不明である。

出土遺物には、土器片、石器がある。土器片は図化できるものはない。

石器には、SX35から出土した石鎌(Fig.161-31)がある。敲打石鎌であり、長軸に挟りを設けている。

SC38 (Fig.162, 164)

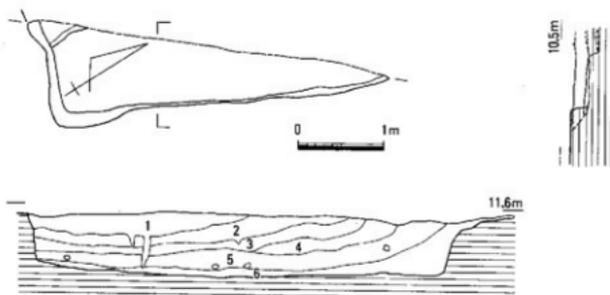
調査区中央西側に検出した。方形住居である。SC01の北西側約17mにあり、主軸を直交する東西方向に向ける。調査区の境界に当たり、住居の一部を調査した。上部は削平があるものの、保存状態は比較的良い。二辺にベット状遺構をもつ長方形住居である。本住居の規模は明確でないが、現状で南北約5.0m、東西約1.7mである。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.6mを測る。東側のベットは幅1.2mを測る。壁際の壁溝は未確認である。

住居内の覆土中からは多くの遺物が出土した。遺物には、土器類(Fig.164-1~5)、石器類(6)がある。土器には、甕(1、3)、壺(2)、台付き鉢(4)、高杯(5)がある。

甕は、口縁部が断面「く」字形となるものである。底部は底部径が小さく、稜線が不明瞭であり、むしろ尖底に近いものである。

壺は、短頸壺(2)がある。

石器には、砥石(6)がある。粘板岩製で穿孔をもつものである。



1. 灰褐色土 少量の土器片、比較的少量の炭化物(最大約2cm)を含む。小さな礫(黄色系)比較的多し。白色粒多し。灰褐色土と客付けたがやや赤みを持つ。比較的粘質でありよくしまっている。
2. 黄褐色土 若干の土器片、若干の炭化物(1cm未満)を含む。小さな礫(黄色系)少量含む。白色粒比較的多し。比較的粘質。
3. 黒褐色土 若干の土器片、比較的少量の炭化物(1cm未満)を含む。若干礫(黄色系)含む。上部に若干白色粒あり。比較的粘質。
4. 暗黄褐色土 1cm未満の礫(黄色系)が少量含まれる。ほとんど粘性を持たない。
5. 暗褐色土 上部に若干の炭化物含む。径10cm程度の礫(黄色系)を比較的多く含む。糸1cm未満の礫(黒色多し)を若干含む。やや粘質。
6. 黄褐色土 1cm未満の礫(黒色)を含む(若干)。ほとんど粘性を持たない。

Fig.162 SC38 (1/60)

SC40 (Fig.163.164)

I地区の西端に位置する隅丸長方形住居である。標高10m付近で検出した。SC01の西側約14mにあり、主軸を南北に向ける。古墳時代後期の住居 SC37が切る。上部は削平されているが、保存状態は比較的良い。本住居の規模は、南北約5.6m、東西約4.7mである。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.15mを測る。

主柱は中央に近い位置に計2つの柱穴を検出した。柱間距離は1.8mを測る。また、住居の四隅に近い位置にそれぞれ4本の柱らしい穴を確認した。この柱間距離は東西2.4~2.6m、南北4.0~4.2mを測る。しかし、両者に軸線のずれがあり、同じ建物を構成するかは断定できない。

2本の主柱に挟まれた住居中央床面には中央土壌があり、焼土、炭化物片がみられた。土壌の規模は幅0.6m、長さ0.75mを測る。

西側壁面の中央床面に「壁際土壌」がある。この土壌は壁から突き出し、幅0.6m、長さ0.45mの楕円形であり、深さは0.1mを測る。床面は平坦であり、中央に小穴がある。

住居内の覆土中からは多くの遺物が出土した。遺物には、鉄器 (Fig.164-7)、土器類 (8~12)、石

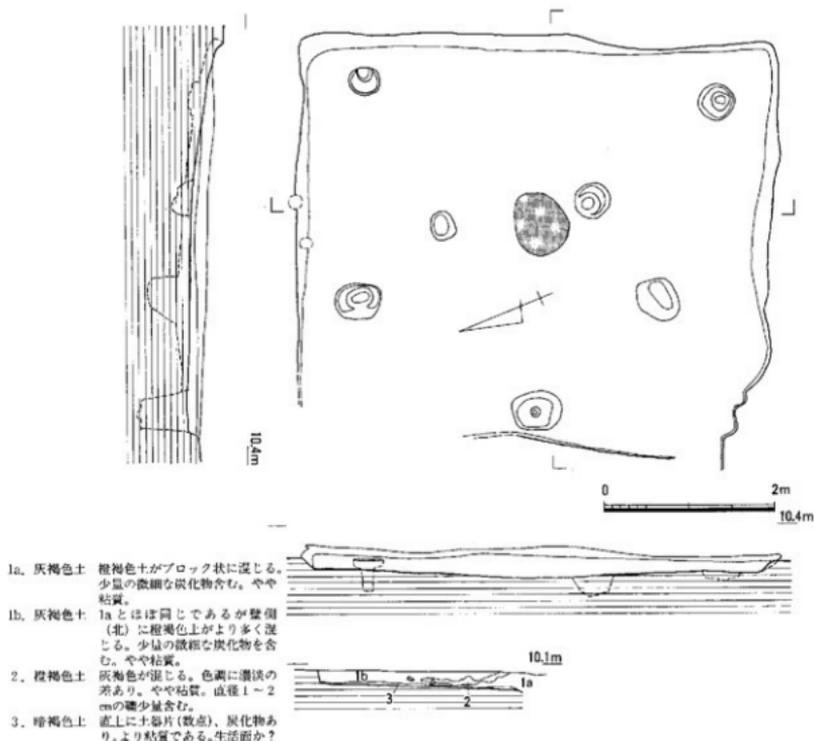
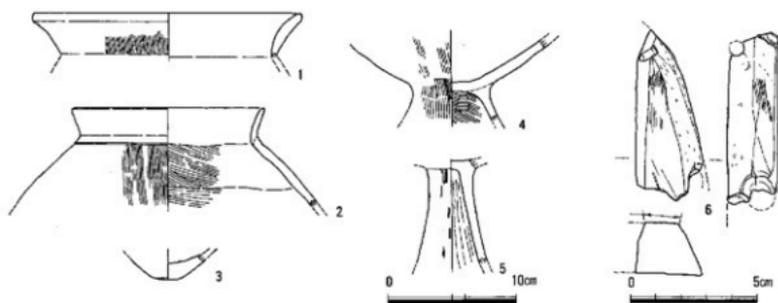


Fig.163 SC40 (1/60)

SC38



SC40

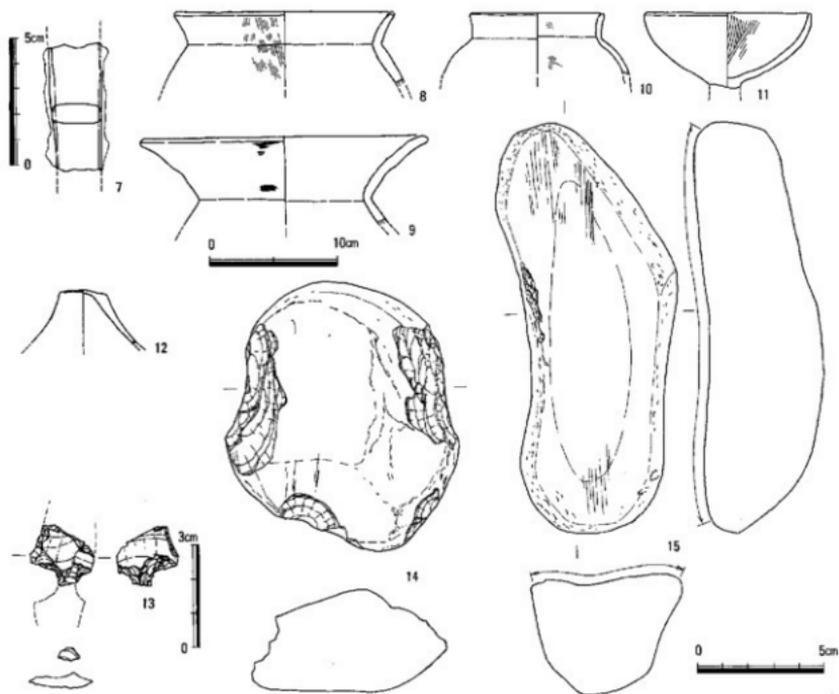
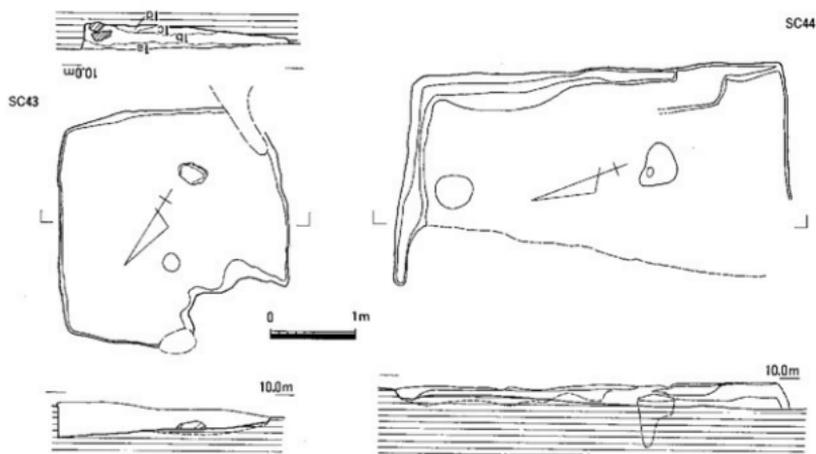


Fig.164 SC38、SC40出土遺物 (1/4・2/3・1/2)



- 1a. 灰褐色土 僅かに炭化物片を含む。マンガン粒形成弱く、粘性弱い。  
 1b. 灰褐色土 少量の土器片と僅かな炭化物片を含む。マンガン粒形成強く、粘性あり。  
 1c. 灰褐色土 黄褐色土を含み、やや明るい色調を帯びる。少量の土器片と僅かな炭化物片を含む。マンガン粒形成弱く、粘性あり。  
 1d. 灰色土 粘性強い。マンガン粒ほとんど形成されない。

Fig.165 SC43・44 (1/60)

器類 (13~15) がある。

土器には、甕 (8)、壺 (9、10)、高杯 (11、12) がある。

甕は、口縁部が断面「く」字形となり、長胴化するものである。底部は底部径が小さく、稜線が不明瞭であり、丸底に近いものである。

高杯は、碗形の杯部をもつもの (11)、小型で開く脚部をもつもの (12) がある。

石器には、つまみ形石器 (13)、石錘 (14)、砥石 (15) がある。つまみ形石器は縄文時代後期~晩期前半のものであり、混入品である。

#### SC43 (Fig.165, 166)

I地区の西端に位置する小型の隅丸方形住居である。標高9.8m付近で検出した。SC40の西側約3mにあり、主軸を南北に対し約40°斜行させる。弥生時代中期の住居 SC42を切り、後期の住居 SC44に切られる。上部は削平されているが、保存状態は比較的良い。本住居の規模は、北西-南東軸約2.8m、東西約2.6mである。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.3mを測る。

床面中央北よりに1つの柱穴を検出したが、支柱かは不明である。

住居中央床面南側には焼土面があり、炭化物片がみられた。焼上面の規模は幅0.4m、長さ0.5mを測る。

住居内の覆土中からは少量の遺物が出土した。遺物には、土器類 (Fig.166-1~4) がある。

土器には、甕 (4)、高杯 (1~3) がある。甕は中期のものであり、混入品である。

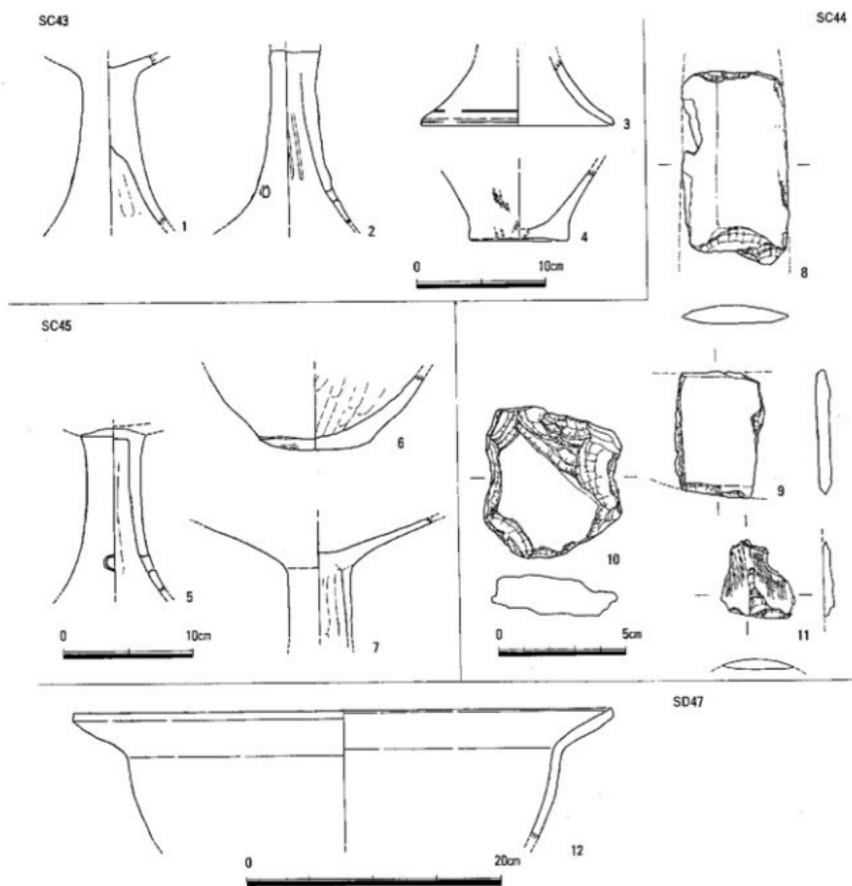


Fig.166 SC43~45、SD47出土遺物 (1/4・1/2)

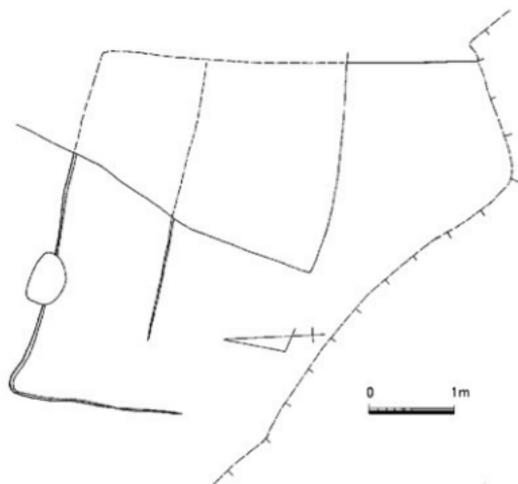


Fig.167 SC45 (1/60)

SC44 (Fig.165, 166)

I地区の西端に位置する隅丸長方形住居である。標高10m付近で検出した。SC01の西側約15mにあり、主軸を南北に向ける。弥生時代中期の住居 SC46、後期の住居 SC45を切る。上部は削平され、保存状態は悪く、南～西側の壁は失われている。本住居の規模は、南北2.8m以上、東西約4.5mを測る。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.1mを測る。東から南壁には壁溝がある。

床面は平坦であり、2つの柱穴を検出したが、主柱かは不明である。

南壁に沿って柱穴があるが、切り合いがあり、本住居に伴うものではない。

「中央土壌」や「壁際土壌」は確認できず、不明である。

住居内の覆土中からは少量の遺物が出土した。遺物には、石器類 (Fig.166-8-11) がある。

石器には、石剣 (8)、石包丁 (9)、石錘 (10) がある。石剣は先端、基部を欠損するものであり、嶺が不明瞭で断面が凸レンズ状となる。

SC45 (Fig.166, 167)

I地区の西端に位置する隅丸長方形住居である。標高9.8m付近で検出した。SC40の南側約7mにあり、主軸を南北に向ける。弥生時代中期の住居 SC46と後期の溝 SD47を切り、同後期の住居 SC44が切れる。上部は削平され、保存状態は悪い。本住居の規模は、南北約3m以上、東西約4.2mである。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.1m以下である。

主柱や中央土壌、壁際土壌などは不明である。

住居内の覆土中からは少量の遺物が出土した。遺物には、土器類 (Fig.166-5-7) がある。

土器には、甕 (5)、高杯 (6, 7) がある。

甕は底部であり、底部の造り出しや絞線がやや不明瞭となり、丸みをもつものである。

高杯は、杯部下半と軸部であり長脚のものである。

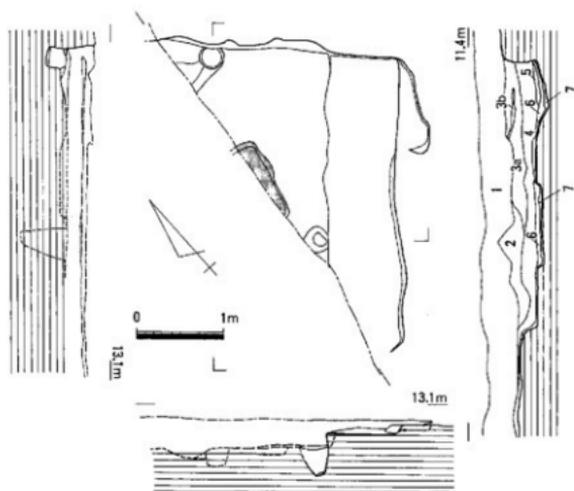


Fig.168 SC61 (1/60)

1. 暗灰色土
  2. 暗褐色土
  - 3a. 暗茶褐色土
  - 3b. 暗褐色土
  4. 暗褐色土
  5. 暗褐色土
  6. 暗褐色土
  7. 暗褐色土
- 1 階地に伴う盛り上り、大穴の溝溝部に多い、砂質、灰褐色の炭化物を少量含む(下部)、土器を少量含む。僅く  
 2 階地は炭化物を少量含む(下部)、土器を少量含む。僅く  
 3a 階地は炭化物を少量含む(下部)、土器を少量含む。僅く  
 3b 階地は炭化物を少量含む(下部)、土器を少量含む。僅く  
 4 階地の間に薄く広がる炭化物を主体とした層である。  
 5 階地の土器片と少量の炭化物片(最大1cm程度)を含む。比較的粘り強い。  
 6 階地の土器片と少量の炭化物片(最大1cm程度)を含む。比較的粘り強い。  
 7 階地の土器片と少量の炭化物片(最大1cm程度)を含む。比較的粘り強い。

#### SD47 (Fig.166)

I 地区の西端に検出した溝状の遺構である。標高9.9m 付近で検出した。弥生時代中期の住居 SC46 を切り、弥生時代後期の住居 SC44、45 が切れる。主軸を南北に向ける。上部は削平され、保存状態は悪い。断面は浅いU字形をなし幅1.2~2.2m、深さ0.2~0.4m を測る。

覆土中からは少量の遺物が出土した。遺物には、土器 (Fig.166-12) がある。

土器は、鉢である。口径42cm を測り、口縁部は「く」字形に外反する。口縁端面は面取りされ、端部は跳ね上げ状となる。

#### SC61 (Fig.168, 170)

I 地区の北西端に位置する方形住居である。標高13m 付近で検出した。調査範囲の境界であり、全体を伺うことはできなかった。SC01の北側約45m にあり、主軸を南東-北西に向ける。住居の周囲は古い畑地造成により削平され、平坦となっている。二辺にベット状遺構をもつとみられる方形住居である。本住居の規模は、推定で長辺約4.3m、東西約4.3m である。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.3m を測る。東側のベットは幅0.7m を測る。壁溝は不明である。

主柱と見られる柱穴は東側ベットの内側に1つの柱穴を検出した。

住居中央の床面に土壌があり、炭化物片が多くみられた。土壌の規模は幅0.2m 以上、長さ1.0m を測る。東側壁面の中央床面に「壁際土壌」がある。この土壌は壁から突き出し、幅0.3m、長さ0.25m の楕円形であり、深さは0.2m を測る。この土壌の北側に接して、落ち込みがあり、溝状の遺構かと見られる。

住居内の覆土中からは少量の遺物が出土した。遺物には、土器類 (Fig.170-1) がある。

土器には、高杯の杯部下半から軸部上位の破片がある。

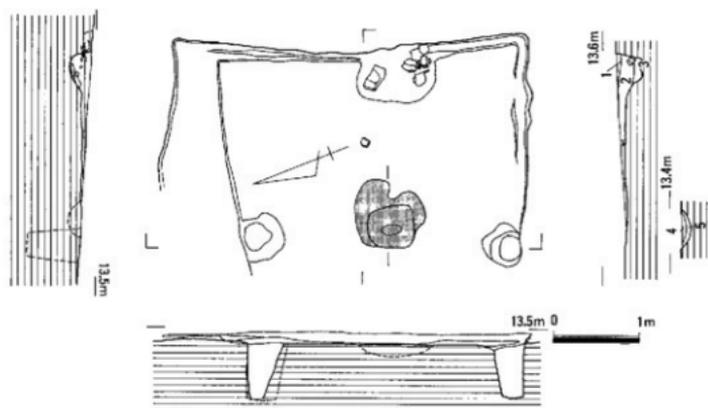


Fig.169 SC62 (1/60)

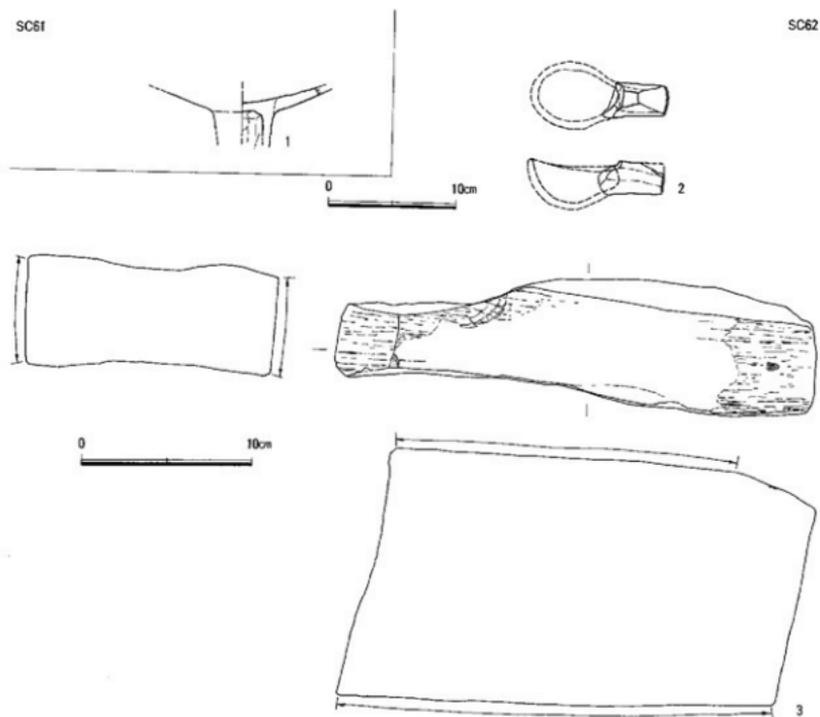


Fig.170 SC61・62出土遺物 (1/4・1/3)

SC62 (Fig.169, 170)

I地区の北端に位置する方形住居である。標高13.4m付近で検出した。弥生時代中期の溝状遺構SD64を切る。SC02の北側約61mにあり、主軸を南北に向ける。住居の周囲は畑地造成により削平されているが、僅かに西側に下がっている。二辺にベット状遺構をもつとみられる長方形住居である。南辺のベット状遺構は失われているが、本住居の規模は、推定で長辺5.0m、東西約4.5mである。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.1mを測る。北側のベットは幅0.5~0.9mを測る。壁溝は東から南辺で確認した。

主柱と見られる柱穴は両ベットの内側に2つの柱穴を検出した。柱間距離は3.0mである。

主柱の柱間位置の住居中央床面に土壌があり、焼土、炭化物片が多くみられた。土壌の規模は幅0.8m、長さ約0.8m、深さ0.1mを測る不整形な平面形である。

また、東側壁面の中央床面に「壁際土壌」がある。この土壌は壁から突き出し、幅1.0m、長さ0.5mの楕円形であり、深さは0.2mを測る。床面には凹凸がある。

住居内の覆土中からは少量の遺物が出土した。遺物には、土製品 (Fig.170-2)、石器 (3) がある。土製品は、匙の軸部である。匙部を欠損するが、丁寧な成形を見せる。

石器は、砥石である。壁際土壌に他の礫と共に投棄されていた。

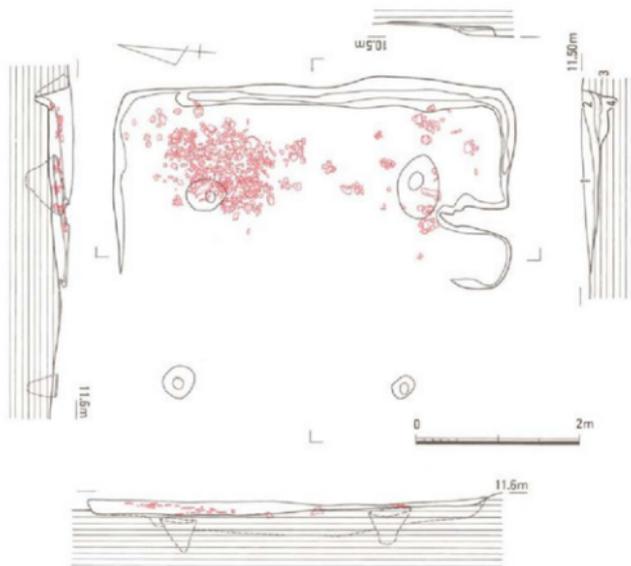


Fig.171 SC32 (1/60)

1. 明褐色粘質土 厚1.0mの白色砂少量含む、厚0.7mの赤褐色砂少量含む。またさらに黄褐色土が混入。しりりあり。粘性あり。
- ※1層と2層の境目に部分的に土砂なまりが形成される。巨礫絶縁二次的に投棄されたもの。
2. 明褐色粘質土 厚0.5mの白色砂少量含む、厚0.3mの赤褐色砂少量含む。炭化物少量含む。しりりあり。粘性あり。
- ※2層は粘土砂なまりの土砂 (灰・産物)・土師器片土の流入土層と考えられる。3層の上には粘土砂なまりの土砂 (灰・産物)・土師器片土の流入土層と推定される。
3. 明褐色粘質土 厚0.3mの白色砂、厚0.5mの赤褐色砂少量含むが、2層に比べれば混入の割合はほとんど低い。
4. 黒褐色土 厚0.2m以下の白色砂子、赤褐色砂子少量含む。炭化物多量を含む。

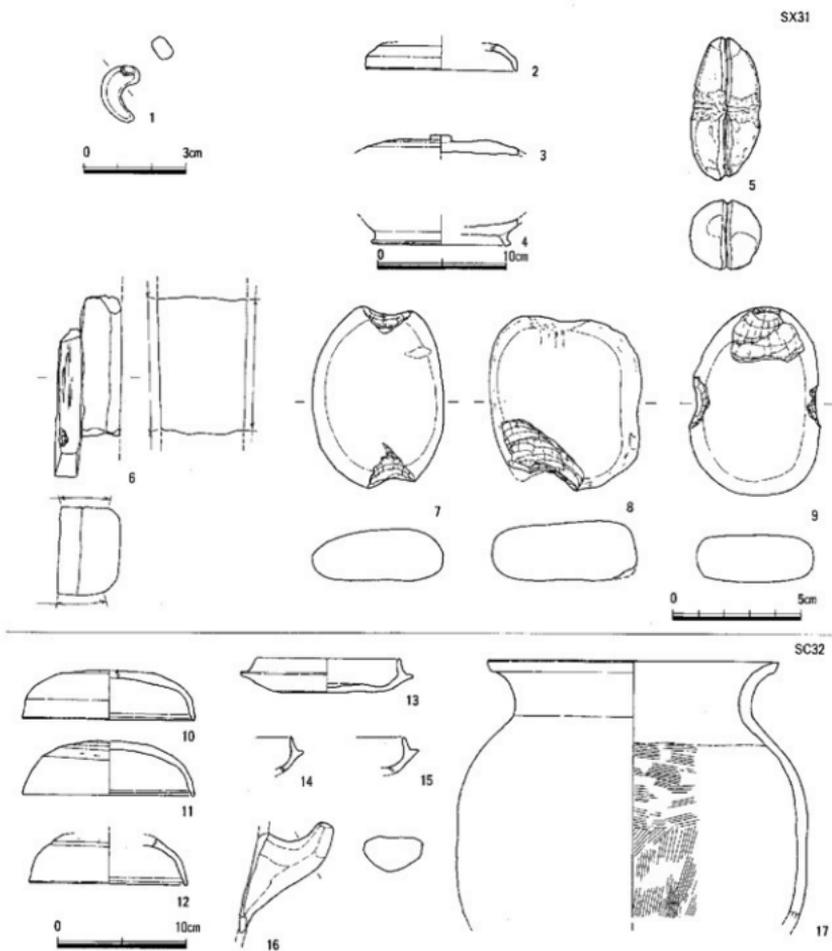


Fig. 172 SX31・SC32出土遺物 (2/3・1/4・1/2)

### 3) 古墳時代後期の遺構

#### SX31 (Fig.172)

I地区西側斜面に形成された包含層の内、SX34～36の西側部分を区別した。これは当初この部分から7世紀後半と見られる須恵器が出土したため、本地区において最新の遺構を想定したことによるものである。しかし、調査進行において、明確な遺構とは成らず、地層の観察からも自然堆積を主とする包含層と判断した。ただし、遺構番号は時期説明のために残しておくものである。

出土した遺物には、玉 (1)、須恵器 (2-4)、石器類 (5-9) がある。

玉は、ガラス製の勾玉である。ほぼ完形品であるが、穿孔はない。表面は風化し、不透明、白色化している。

須恵器には、杯蓋 (2、3)、杯身 (4) がある。陶色 TK48以降に位置付けられるものであろう。

石器には、石錘 (5、7-9)、砥石 (6) がある。石錘は小型の右溝石錘 (5)、敲打 (礫) 石錘 (7-9) がある。

#### SC32 (Fig.171-173)

I地区の中央西よりに位置する方形住居である。標高11.2m付近で検出した。包含層 SX48を切る。地盤沈下のために住居の東側は下がっている。西側は畑地造成により削平されている。南側に竈をもつ方形住居である。住居の西半分は失われているが、4本柱の柱穴は残っている。本住居の規模は、推定で南北4.8m、東西約5.0mである。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.25mを測る。壁溝は東から南辺で確認した。

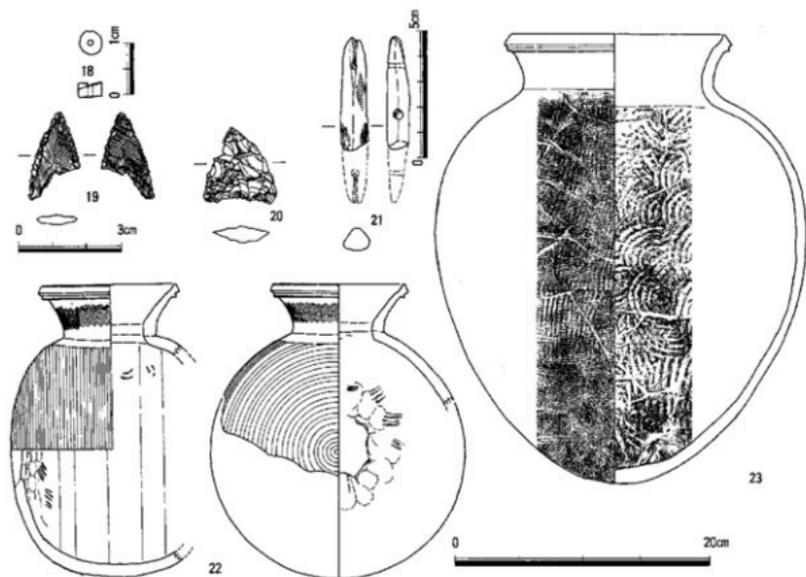


Fig.173 SC32出土遺物 (1/1・2/3・1/2・1/4)

主柱穴は、径0.5～0.3mの掘り方をもち、柱痕は不明だが、底面から径10～15cmの柱が推定された。柱間距離は、南北2.5～2.7m、東西2.3～2.5mであり、正方形にならず、歪んでいる。

東側壁面の南壁の中央に竈がある。上部を削平され、遺存するのは3cm以下である。竈は南壁から地山の削り出しが「コ」字形に突出している。内部の床はやや窪み、中央に径15cmの小穴がある。覆土には焼土、炭化物が多く含まれている。このことから、竈はまず基底部を削り出し、上部を粘土で成形したものと考えられる。

住居内の覆土中からは東側を中心に多量の遺物が出た。遺物には、石製品 (Fig.173-18、21)、石器類 (19、20)、須恵器 (Fig.172-10～15、22、23)、土師器 (16、17) がある。

石製品には、滑石製の臼玉 (18) と石錘 (21) がある。石錘は一端を欠損するが、両端穿孔で、有溝のものである。

石器には、石鏃 (19、20) がある。19は黒曜石製の磨製石鏃、20は三角鏃である。何れも縄文時代早期の所産か。

須恵器には、杯蓋 (10～12)、杯身 (13～15)、提瓶 (22)、甕 (23) がある。蓋杯は蓋径12～13cm、身径11.5cmで、外面の丁寧なヘラケズリ、蓋内面の段を特徴とする。提瓶は口縁部の突帯、大きな頸部、櫛描き波状文などこの器種では古式の特徴をもつ。

土師器には、甕もしくは甔の取手部 (16) と、須恵器甕の特徴をもつもの (17) がある。

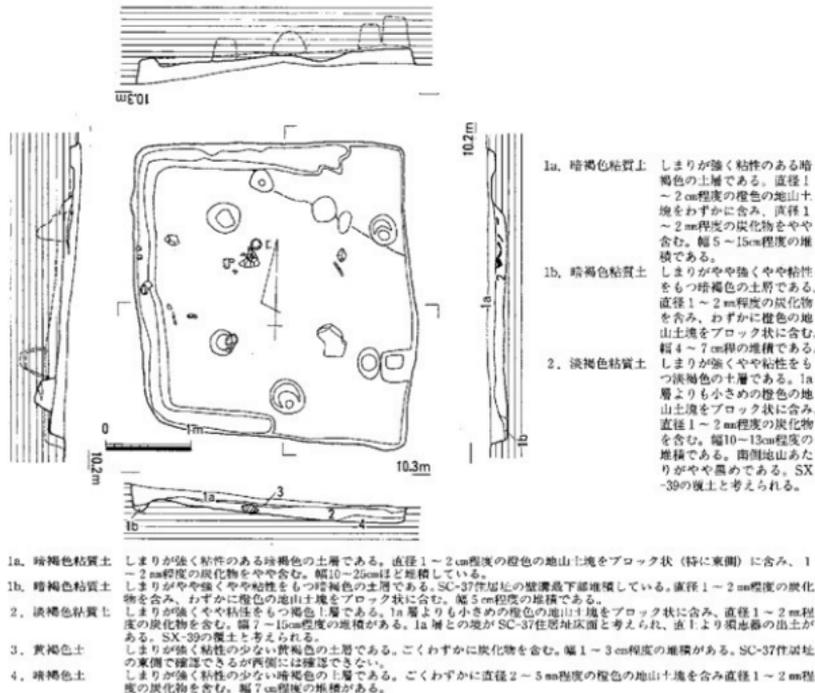


Fig.174 SC37 (1/60)

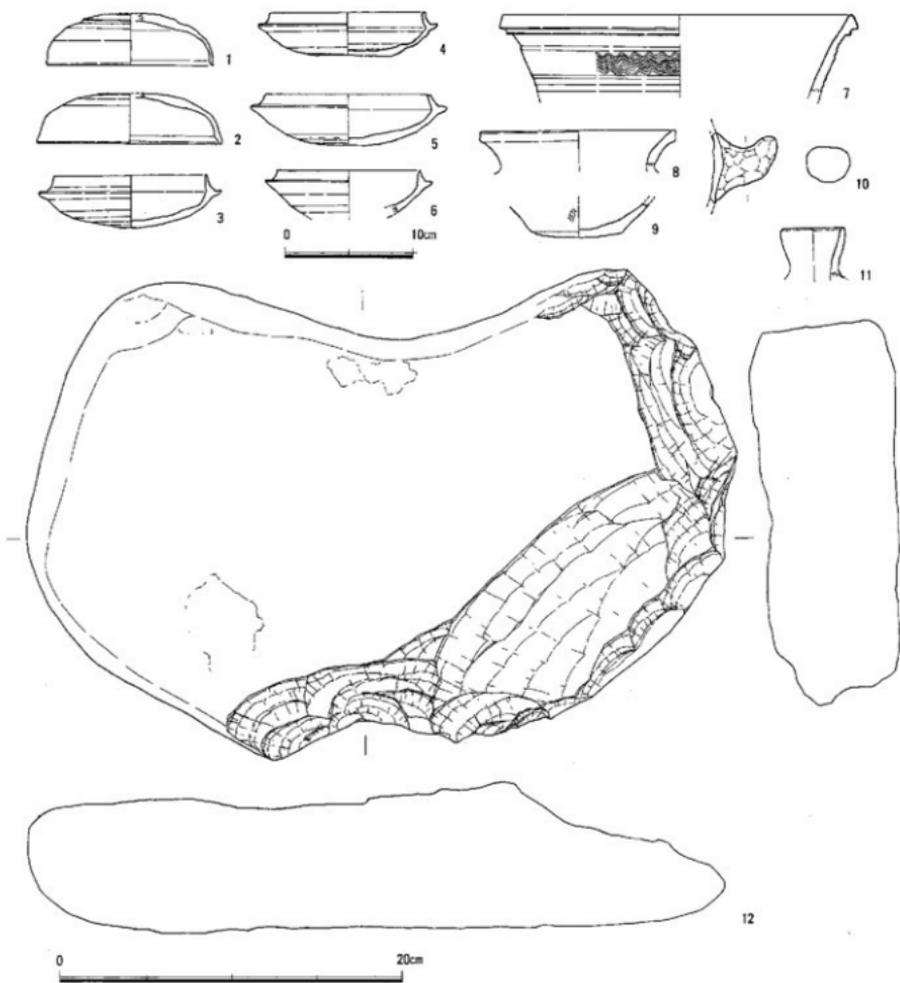


Fig. 175 SC37出土遺物 (1/4・1/3)

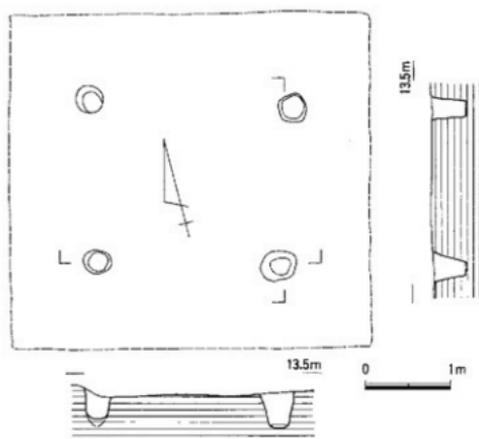


Fig.176 SC63 (1/60)

SC37 (Fig.174, 175)

I地区の南西側に位置する方形住居である。標高11.2m付近で検出した。SC32の西側22mの位置にある。弥生時代後期住居SC40を切る。畑地造成により上部は削平されているが、全体に遠存している。やや小型の方形住居である。本住居の規模は、推定で南北3.6m、東西約3.2mである。壁面高は、残りの良い東壁部分で0.2mを測る。壁溝は住居の東半分に「コ」字形に確認した。

主柱穴は、4本であり、径0.3m前後の振り方をもつ。柱痕は不明だが、底面から径15cm前後の柱が推定された。柱間距離は、南北1.4~1.6m、東西1.8mであり、正方形にならず、やや歪んでいる。

中央北壁よりの床面に土壌がある。これは径0.4mの円形であり、深さ0.3mを測る。

住居内の覆土中からは多くの遺物が出土した。遺物は住居中央を中心に出土した。大型の石錘は北西側の主柱に近い床面に据え置いた状態で出土した。

遺物には、須恵器(Fig.175-1~7, 11)、土師器(8, 10)、石器(12)がある。また、弥生時代土器(9)もある。須恵器には、杯蓋(1・2)、杯身(3~6)、甕(7)、壺(瓶)(11)がある。

蓋杯は蓋径13~15cm、身径11.5~13cmで、外面の丁寧なヘラケズリ、蓋内面の段を特徴とする。

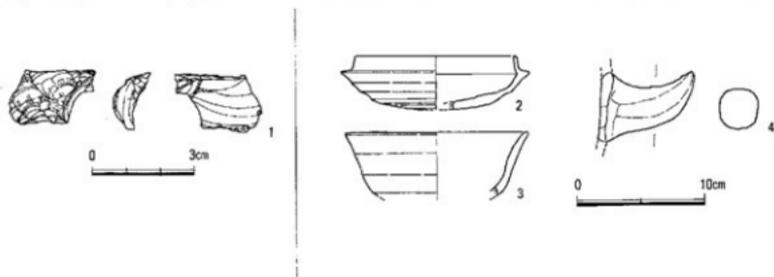


Fig.177 その他の遺構出土遺物 (2/3・1/4)

甕は口縁部の三角突帯、細かな櫛描き波状文などの特徴をもつ。須恵器は特徴から2時期に分かれる。まず、1～5、7はより古い時期に、6、11はより新しい時期に位置付けられる。

土師器には、甕もしくは瓶の取手部(10)と、須恵器甕の特徴をもつもの(8)がある。

石器には、大型の石鎌(12)がある。これは、長さ42cm、幅28cm、厚さ8.5cm、重さ15.93kgを測るものである。

#### SC63 (Fig.176)

I地区の北端に位置する方形住居である。標高13.3m付近で検出した。周囲は畑地造成により削平されている。4本柱の柱穴以外の遺構はすべて失われている。

主柱穴は、径0.4～0.3mの掘り方もち、柱痕からは径10cmの柱が推定された。柱間距離は、南北1.8m、東西2.2～2.3mである。正方形にならず、歪んでいる。

本住居の規模は、南北約3.7m、東西約4.0mと推定している。なお、この推定値でみると、東側に隣接する竪穴式住居SC62を切ることになる。

本住居からは柱穴からも遺物は出土していない。

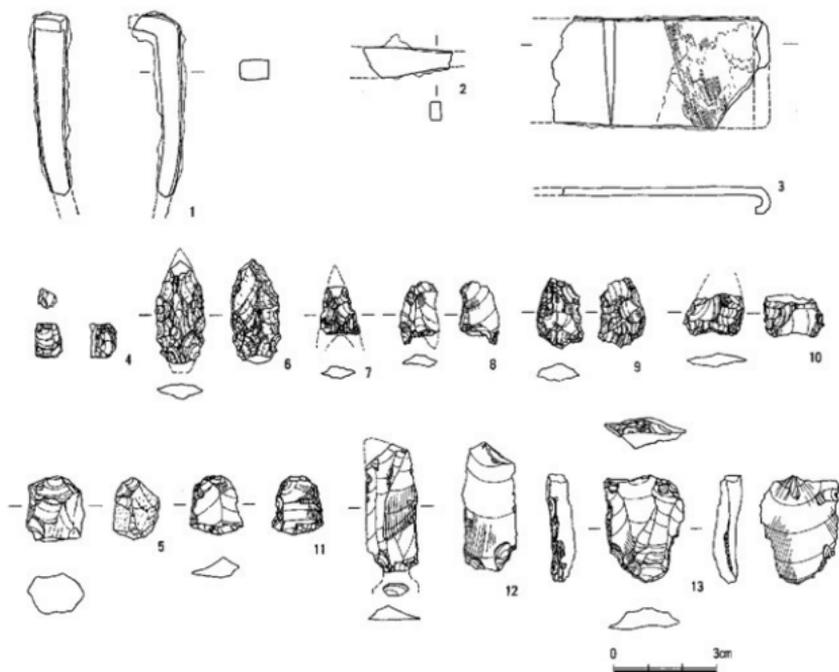


Fig. 178 包含層出土遺物 1 (2/3)

#### その他の遺構出土遺物

I地区では、ここに示した遺構以外に多くの柱穴を検出した。柱穴には柱底の遺存するものもあり、本来建物を構成するものも多いとみられる。しかし、現地での検討で建物を復元することができなかった。柱穴からは少量の遺物を出土する例もあった。ここでは、紙数の関係でその詳細は省きたい。

Fig.177-1は、碧玉剥片である。SC07の北側の柱穴から出土した。

Fig.177-2は、須恵器杯身である。SC37の北側の柱穴から出土した。

Fig.177-3、4はSC37～40の検出時に出土した。3は須恵器杯身、4は土師器の甕か甔の取手部である。

#### 包含層出土遺物

I地区では、各所に遺物包含層が残されていた。また、遺構検出時に多くの遺物を収集した。ここでは、それを一括して報告する。

出土遺物には鉄器類 (Fig.178-1～3)、石製品類 (Fig.178-4、5、180-36～39)、石器類 (Fig.178-6～13、Fig.180-40～184-86)、土器類 (Fig.179-14～29)、須恵器類 (Fig.179-32～35)、土師器類 (Fig.179-30、31) がある。

鉄器には、楔状の鉄製品 (1)、刀子の基部 (2)、鎌の基部 (3) がある。1は断面方形であり、頭部を折曲げてある。先端を欠損する。鎌には柄の装着を示す木質が残されている。柄は刃部に対して110°の傾斜で装着されていたと見られる。

石製品には、玉の未製品 (4、5)、滑石製有孔石製品の小型品 (36)、有溝石錘 (37、38)、紡錘車 (39) がある。玉の未製品の材質は緑色凝灰岩 (4) と水晶 (5) である。石錘は砂岩 (37) と滑石 (38) がある。紡錘車は半欠品であり、滑石製である。

石器には、剥片石器と礫石器がある。剥片石器には石鎌 (6～10)、削器 (11、13)、つまみ形石器 (12) がある。礫石器には、石包丁 (41～44)、磨製石鎌 (45)、石剣未製品 (46)、石斧 (47、48)、有角石器 (49、50)、凹石 (51～53)、叩き石 (54、55)、砥石 (40、56～66)、敲打(礫)石錘 (67～86) がある。

石鎌には有茎鎌 (6)、鋸歯鎌 (7)、剥片鎌 (8)、石鎌未製品 (9、10) がある。削器は寸詰まりの縦長剥片を素材とする。つまみ形石器は削器に転用している。剥片石器は6が古銅輝石安山岩であり、他はすべて黒曜石製である。6、9、10は弥生時代に所属すると考えられる。

石包丁はすべて断片である。石鎌は緻密な砂岩を素材とし、先端と基部を欠損する。石斧は破片であり、玄武岩製である。石剣の未製品は粘板岩製であり、周辺部のみの調整で終わっている。有角石器としたものは玄武岩製であり、剝離調整で1～2箇所の尖頭部を造り出している。40は砥石としたが、粘板岩製で擦り切り痕があり、2カ所に穿孔もみられるものである。石鎌のうち、79は凹石を転用したものである。

土器類には、甕 (14～16、19～23)、壺 (17、18)、高杯 (24、25)、鉢 (27、28)、器台 (26、29) がある。

須恵器類には、提瓶 (32)、杯蓋 (33)、杯身 (34)、高杯 (35) がある。

土師器類には、甕か甔の取手部 (30、31) がある。

### 3、小結

I地区は、弥生時代中期から古墳時代後期に及ぶ集落遺跡である。地滑りなどの地形変化もあって遺構の保存状態は必ずしも良好ではないが、集落の推移や、生産活動に関する遺構、遺物などの資料を豊富に得ることができた。それらについての検討は、第4章3節5において再度ふれたい。

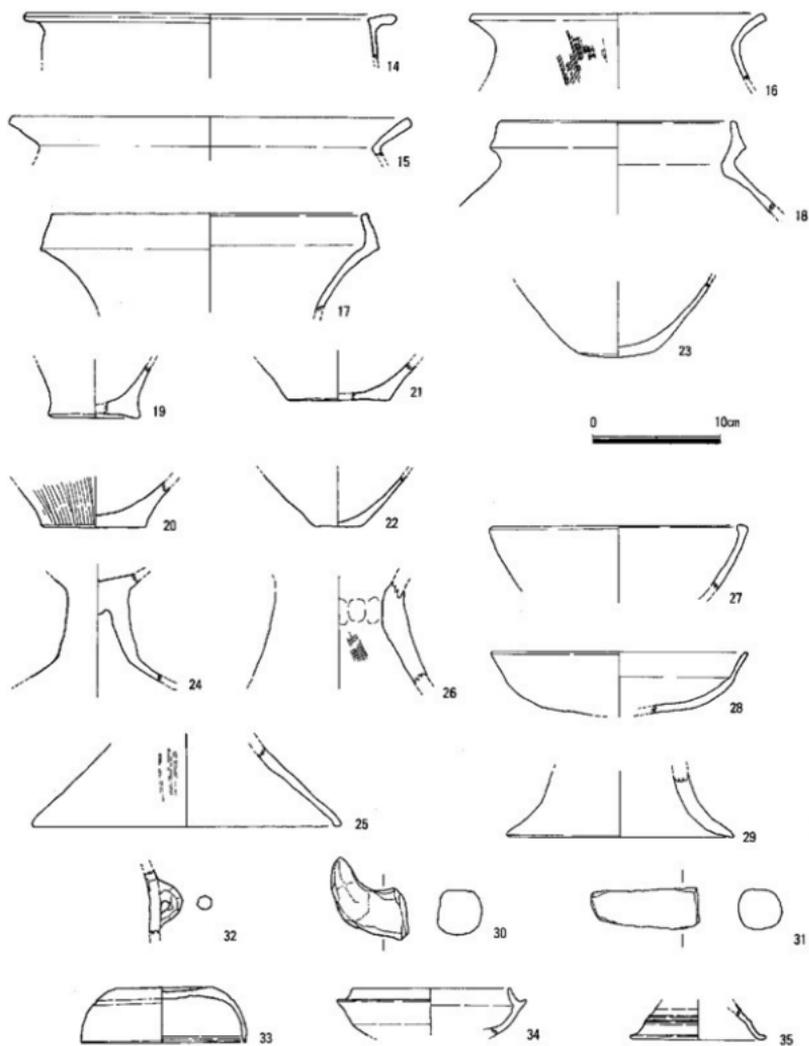


Fig. 179 包含層出土遺物 2 (1/4)

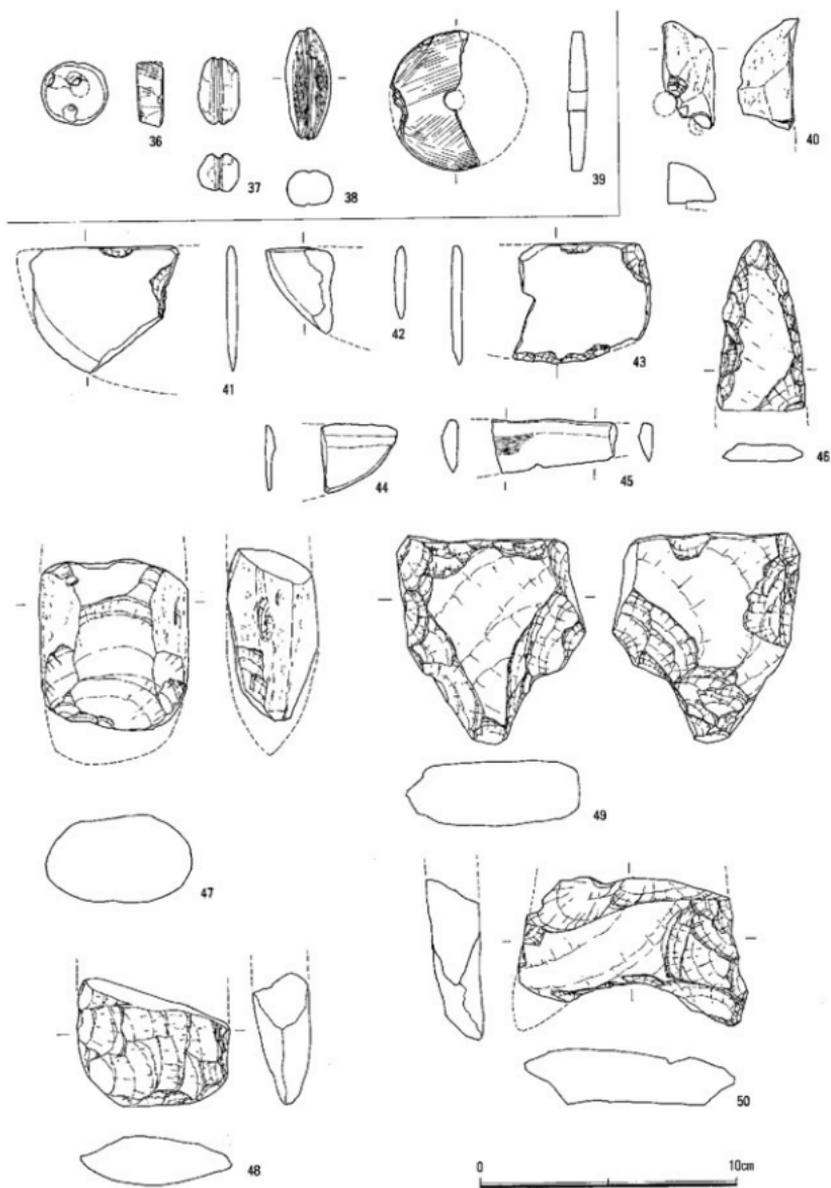


Fig.180 包含層出土遺物3 (1/2)

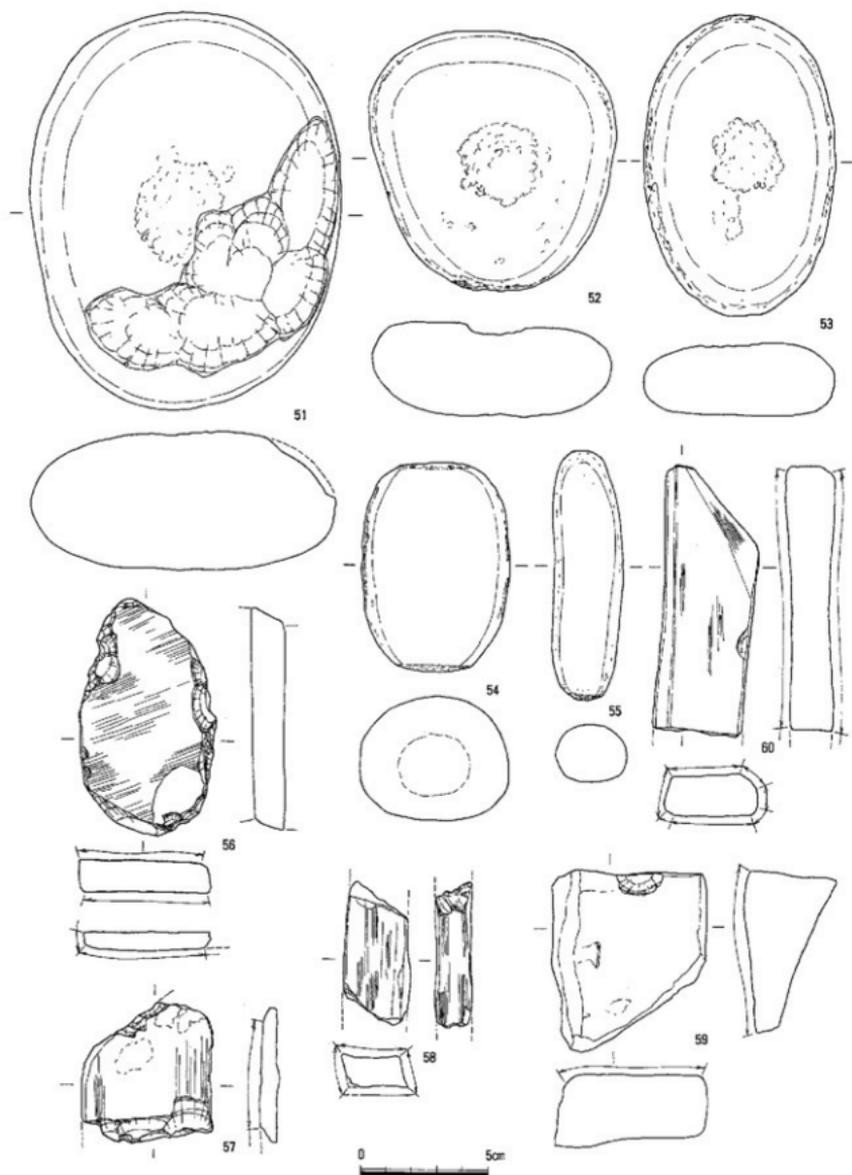


Fig. 181 包含層出土遺物 4 (1/2)

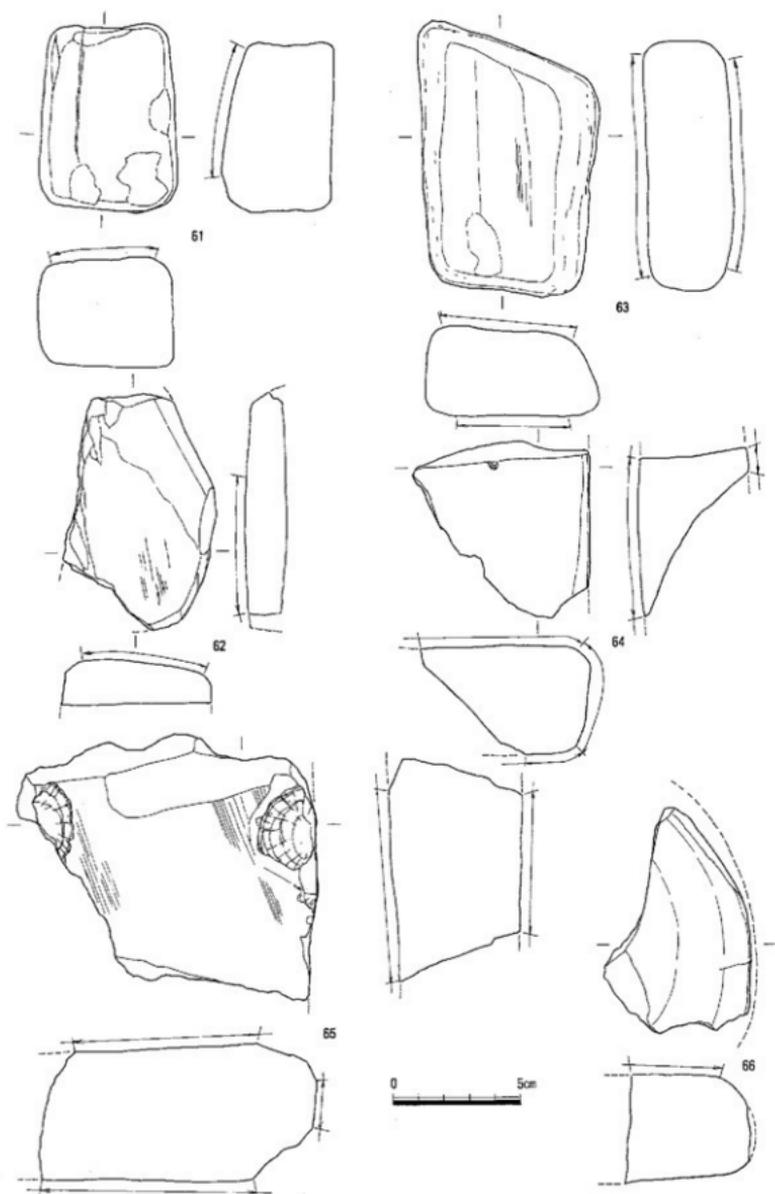


Fig. 182 包含層出土遺物 5 (1/2)

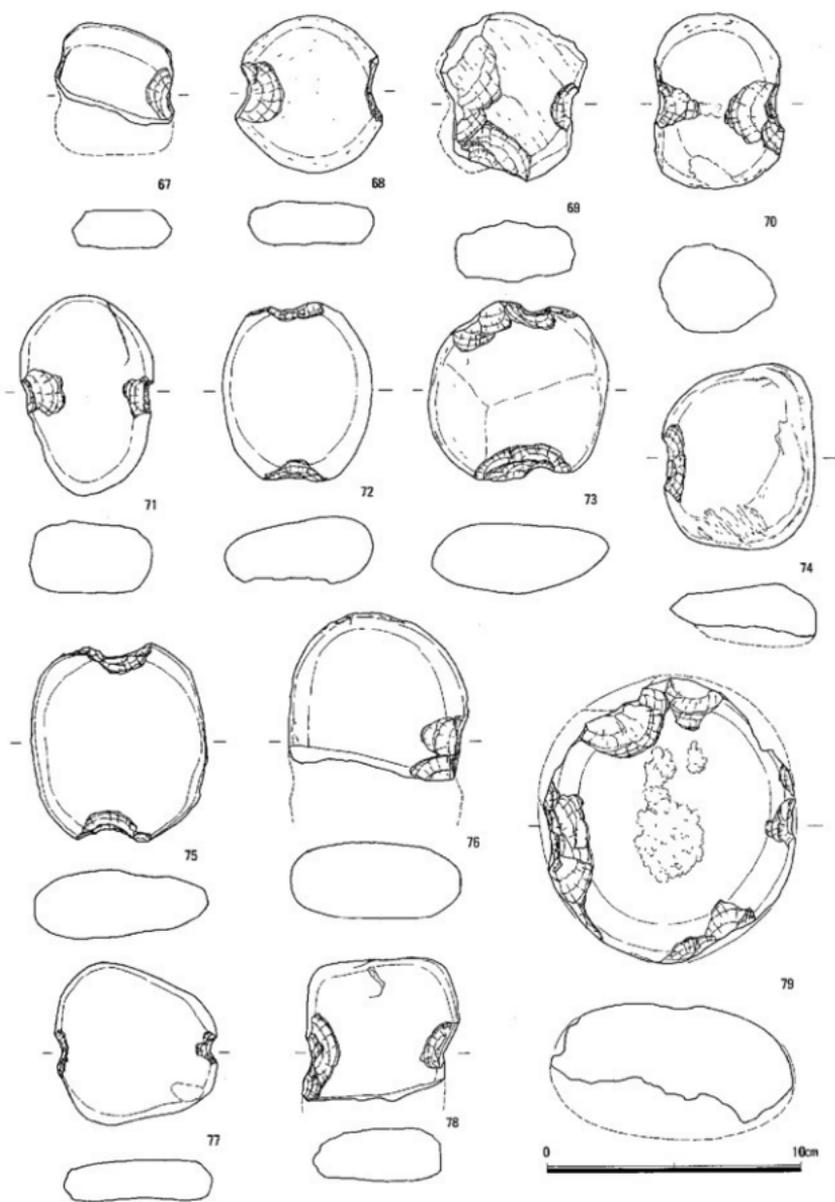


Fig. 183 包含層出土遺物 6 (1/2)

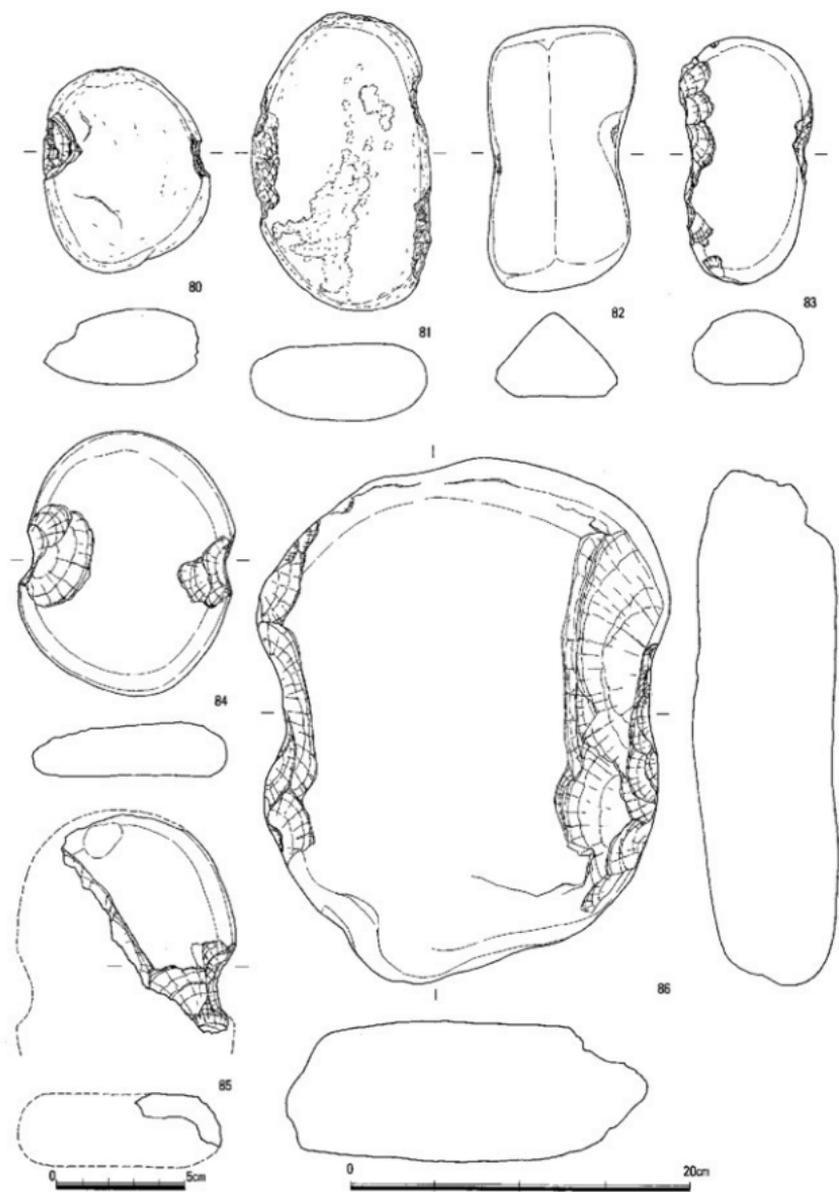


Fig. 184 包含層出土遺物 7 (1/2 · 1/3)

## 第8節 J地区の調査

### 1、調査の概要

J地区は区画整理事業地内の最東端に位置している。ここは周辺の丘陵地の最高所であり、標高42.3mを測る。この丘陵は東西方向に延びており、さらに北側に複数の丘陵尾根が派生している。そのうち最も大きな丘陵の先端部がI地区である。

この丘陵の東側はすぐに柏屋郡新宮町であり、下府遺跡があった場所である。現在は造成され、漢坂団地となっている。調査地点はこの丘陵最高所の北東20~30mの位置にあり、僅かに平坦面が見られる場所である。調査以前は山林であり、所々に古い開墾地と見られる平坦地が認められた。

試掘調査によって、この尾根上に土壌、多量の炭化物が検出されたことから、遺構の存在が判明し、調査を実施することとなった。調査は遺構の検出された地点を中心に遺構の分布範囲を確かめ、発掘調査を行った。調査は標高38.5mの尾根線上から北側斜面、標高32m付近まで約1,200㎡を対象とした。まず、重機により表土部分を除去し、その後人力により、遺構の検出、調査を進めた。

調査の結果、竪穴式住居2、土塼2、柱穴多数、包含層を検出した。

なお、J地区は周囲に障害となる山塊がなく、眺望の良い場所に立地している。特に北側の新宮浜を介して望む玄界灘は眼下に見おろすことができる。しかし、一旦時化ると、海からの強風を直接受ける位置にある。調査期間中に、設置した平板、レベル等の機材も吹き飛ばされることがあった。

### 2、遺構と遺物

SC04 (Fig.186, 189)

狭い尾根線上に造られている円形住居である。検出地点は標高37.8~37.4mであり、北に向かって下がる傾斜地である。東側に下がっている。遺構は東側が削平、流出し、一部床面も削平されている。なお、住居の西側には3m程の平坦面があるが、東側は住居の際からすぐに丘陵斜面となる。

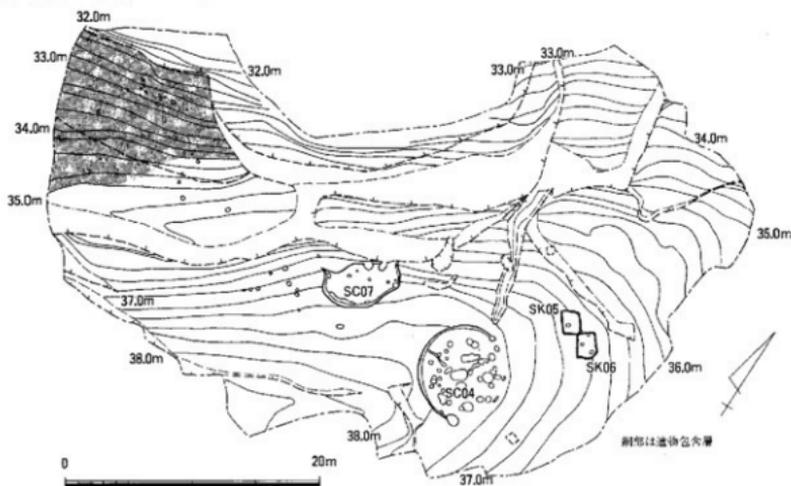


Fig.185 J地区全体図 (1/400)



住居跡の平面は僅かに南北に長い楕円形であり、南北約7.6m、東西約6.9mと復元される。深さは壁溝は東側が途切れているが、断片的な遺存もあり、本来は完周していたと見られる。

主柱は9本であり、1回の建て替えがある。建て替えは新たに柱穴を掘るものと、以前の掘り方を利用するものがある。柱痕跡は明確でないが、北-西側の主柱には炭化した主柱材の一部が残されているものがある。柱の直径は10-15cmを測るものである。

床面のほぼ中央に土壌がある。土壌は隅丸長方形を呈し、東西方向に主軸をとる。土壌の規模は東西1.3m、南北0.9m、深さ0.3mを測る。土壌の埋土中には炭化物等が層状に堆積しており、炉跡と考えられる。なお、この土壌から西側の壁溝に向かって溝1条がある。溝は幅10-15cm、深さ5cm以下であり、中央の土壌とは直接につながらない。

住居床面にはほぼ全面に多くの炭化材、炭化物が分布している。また、住居壁は赤く焼け、焼土化している。焼土は南側壁面が特に著しい。こうした点から、本遺構は火災を受けた住居と見られた。主柱基部の炭化物遺存と合わせてみると、火災による延焼時には北西方向からの強い風が吹いていたと推定される。

住居内の覆土からは僅かに遺物が出土した。遺物には土器 (Fig. 189-1) と石器 (16) がある。土器は甕底部であり、安定した平底である。石器は礫石である。きめ細かい砂岩製であり、周囲を剝離、敲打調整した後、4面を研ぎ面としている。表裏ともによく使用され、窪んでいる。北側壁溝に落ち込んだ状態で出土した。

#### SC07 (Fig. 187, 189)

SC04の西側約5mに位置する竪穴式住居である。丘陵上の平坦面から西側斜面に移る変換点にある。検出地点は標高37.0~36.6mである。遺構は西側が削平、流出し、一部床面も削平されている。

住居跡の平面は斜面にくい込む半月形を呈している。本来は造成面に対応する床面があったと見られる。推定であるが、南北に長い楕円形であったと見られる。住居の規模は南北約6.0m、東西約3.3m以上である。壁溝は東側に断片的に遺存している。

主柱は明確でないが、中央の2本と壁に近い床面に数個の柱穴がある。このうち、中央の2本が主柱と見られる。

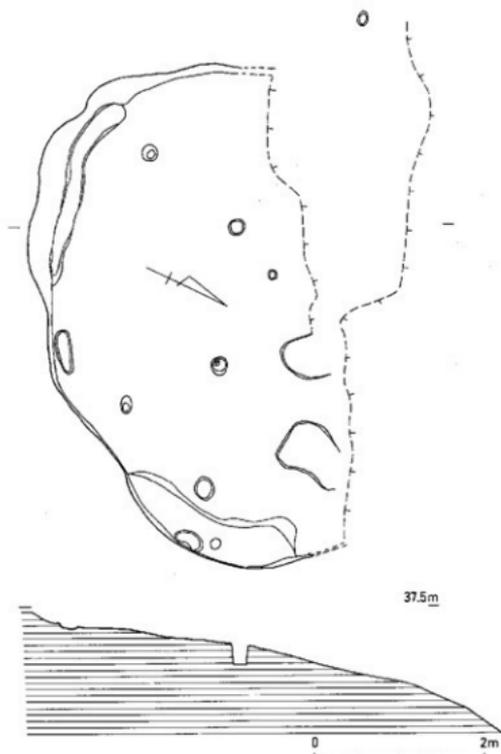
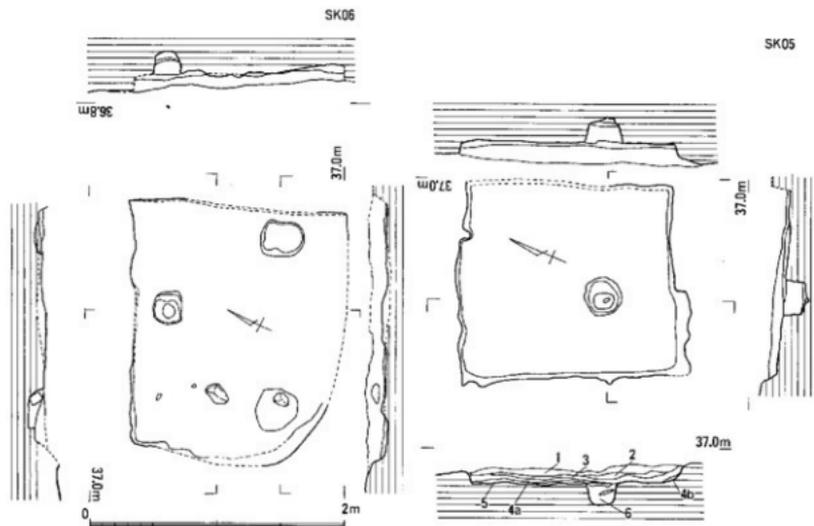


Fig. 187 SC07 (1/60)



1. 暗褐色土 全体的に砂質を含まない細かい粒子で粘性はほとんどなくさらさらしている。図面中央のくぼんだ部分から右側にいくと土の色が黒っぽくなり、特に1-3層を囲んだ部分が特に黒くなる。左側から4a・3・2層と接しているが、色の違いで分けることができる。
2. 暗褐色土 図面右側の2層は1層より明るい色になり、左側にいくにつれ径1cm程度の地山ブロックが少量含まれる。地山ブロックは左側になるほど量が増えているため、左側から流れこんだように見える。1層より粘性があり粒子も細かくそろっている。一部炭化物を含む部分があるがそこは他より黒っぽくなる。上部は1層、下部は3層と接している。
3. 暗褐色土 炭化物を多く含む。特に右側に集中して含む部分があり、左側にいくにつれ徐々に減る。中央に明褐色になる部分が一部あるが、全体的に黒っぽく他の層とかなり明瞭に分かれる。2層よりさらに粘性が強くなり粒子は同じくらい細かい。全体的に地山の色と同じ土が極少量ずつ含まれ、ブロックが含まれる部分もある。
- 4a. 明褐色土 右側から上部を1層と3層に、下部を5層と接し地山に接する。上下層よりかなり明るい色で明瞭に分かれる。地山の色と近いおりそれより少し締くなる程度。粘性が3層よりさらに強くなり粒子もさらに細くなる。3層より柔らかい。
- 4b. 明褐色土 4a層よりやや明るい粘性は弱くなるが、3層よりは粘性が強く粒子は4a層とあまり変わらない。上部が3層下部が地山と接している。
5. 暗灰褐色土 粘土層。全体的にはほぼ同じ色で上部と接する4a層とかなり明瞭に分けることができる。層の左側に地山ブロックを含む部分がある。粘性がかなりあり粒子も細かく4a層より軟質である。
6. 明褐色土 粘質の強いシルト層。しかし3層よりは砂質が強い。少量の炭化物を含む。

Fig.188 SK05・06 (1/40)

そのほかの付帯施設は不明である。建て替えは確認できない。柱痕跡は明確でない。

覆土は、暗褐色土であり、少量の炭化物片がみられた。遺物は少なく、壁溝内から土器片が出土したのみである。

土器片には、壺底部 (Fig.189-2) がある。安定した平底であり、やや厚みがある。

#### SK05 (Fig.188)

SC04の北側4mにある土壌である。尾根線上に位置し、同規模の土壌 SK06の西側に接するように切り合っている。切り合い関係は明確でないが、検出段階ではSK06がSK05を切る状態であった。遺構検出面は標高約37mである。土壌はN-26°Wに主軸を取る長方形を呈し、長さ1.8m、幅1.6m、深さ0.1-0.15mを測る。壁は急角で立ち上がり、床面はほぼ平坦である。床面中央南よりに径約30cm、深さ0.2mの小穴がある。

遺構内覆土は、上部が暗褐色土、下部が明褐色土である。下部からは多くの炭化物が出土した。それは一部床面の小穴にも入っている。土器などの出土遺物はない。

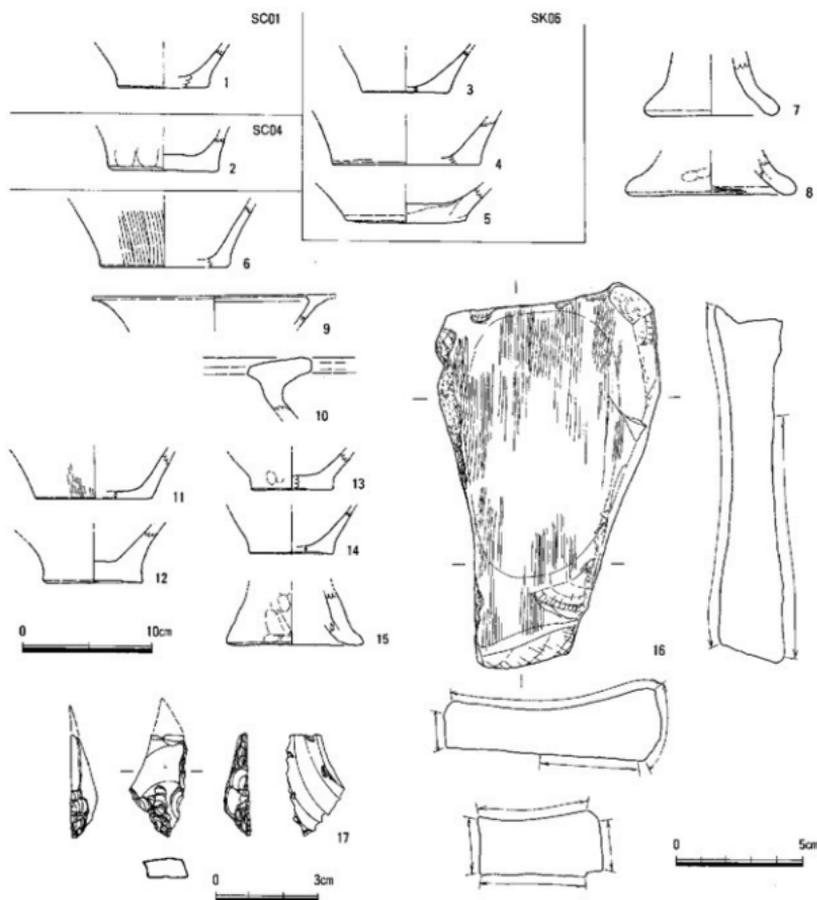


Fig.189 J地区出土遺物 (1/4・2/3・1/2)

SK06 (Fig.188, 189)

SC04の北側5mにある土壌である。尾根線上に位置し、同規模の土壌 SK05の東側に接するように切り合っている。切り合い関係は明確でないが、検出段階では本遺構がSK05を切る状態であると判断した。遺構検出面は標高約37mである。土壌はN-67°-Eに主軸を取る長方形を呈し、長さ2.05m、幅1.7m、深さ0.1~0.2mを測る。壁は急角で立ち上がり、床面はほぼ平坦である。床面に3つの小穴が検出された。小穴は南側に2、北側に1が配列し、何れも径約30~40cm、深さ0.15~0.2mを測る。

遺構内覆土は、上部が暗褐色土、下部が明褐色土である。

上部から土器片 (Fig.189-3~5) が出土した。

土器片は甕底部 (3、4) と壺底部 (5) がある。甕底部は、平底で底の薄いものである。壺底部は、やや厚みがあり、僅かに丸底気味となるものである。

その他の遺構と遺物

J地区では、この他に SC07から西側の斜面に沿って20前後の柱穴とみられる遺構を検出した。しかし、その性格は判断できなかった。柱穴は斜面に沿って散漫に分布し、特に規則性を伺わせるものはなかった。柱穴は多くが、径0.1~0.2m、深さは0.1~0.3m程度である。覆土も多くが共通し、暗褐色土である。これらの柱穴の時期は明確ではないが、土器片の出土したものがある。SC07の南西側約2mの柱穴からは、器台片 (Fig.189-8)、SC07の南西28mの柱穴からは、甕底部 (6) と器台脚部 (7) が出土した。これらは、J地区の他の遺構と近い時期のものである。

また、西側斜面の標高32~34m付近に黒色の腐植土の堆積があり、土器片などの遺物が含まれていた。

その位置からみてJ地区の集落に関連する包含層であると見られた。集落の時期を検討する必要から調査を進めた。包含層は急斜面に形成され、厚さ0.2m以下の堆積を見せた。出土遺物も分層できるものではなく、一括で扱う。

包含層出土遺物は、すべて土器類である。土器には壺 (Fig.189-9)、甕 (10~14)、器台 (15) がある。壺は鋤先口縁をもつ広口壺である。甕は断面「T」字形口縁をもつ大型のもの (10) や、底部 (11~14) がある。底部はすべて平底であるが、底部が薄く仕上げられ、接地部から直線的に胴部が立ち上がるもの (11、14) と、底部に厚みがあり、接地部から垂直に立ち上がり、さらに胴部に広がるもの (12、13) がある。

〈表面採集資料〉

なお、J地区の周辺において、ナイフ形石器を採集しているので報告する。採集地点はSC04の北西約90mの地点であり、標高は約19mである。J地区の西側斜面の裾部にあたる地点である。ナイフ形石器は石材が黒曜石であり、先端部を欠損するものである。横長剥片を素材とし、二側面にプランティングを施している。背面基部には平坦剥離がみられるが、素材の厚みを除去するためのものと見られた。

### 3、小結

ここでは、本地区の時期区分と土器型式での位置づけをおこなわない。

遺跡の性格に関わる詳細な検討は第4章3節3で別途ふれる。

遺構は住居、土壌共に2基あるが、どれも埋没状況や切り合いからみて同時期に存在したとは考え難い。出土遺物は僅かであり、遺物の型式差も僅かなために判断は至難である。主に甕の底部でみた差異を根拠とし、あえて位置つけるなら、竪穴住居 SC07と土壌 SK05がやや古く (I期)、竪穴住居 SC04と土壌 SK06がやや新しい時期 (II期) に位置づけられよう。こうした遺物の差は包含層出土遺物にも認められ、傍証となろう。

さて、この二時期は土器型式ではどう位置付けられるかを検討する必要がある。この地域で須玖式系土器群と共存する「跳ね上げ口縁」系土器群は口縁部や、底部により古い特徴を残す傾向がある。このために先の判断も型式差を年代差として一律に扱えない要素である。しかし、数少ない口縁部の特徴に Fig.189-9の壺口縁と、同-10の甕口縁には明かな時期差を認めることができる。また、第4章でふれるが本地区I期の段階には、なお「跳ね上げ口縁」系土器群は少ない。こうした点からみて、I期は須玖II式の古段階、II期は須玖II式の新段階に位置付けられよう。

## 第9節 K地区の調査

### 1、調査の概要

K地区は永浦池の東側50～100mの範囲である。H地区とD地区の中間位置にあり、丘陵南斜面に位置する。周辺は畑地造成によって2m前後の段差がある畑地となっている。調査対象地はこのうち標高17～22mの範囲である。遺跡のある場所は永浦池のある谷に面する南斜面である。この谷のうち永浦池より上流側は近年、産業廃棄物廃棄場として埋め立てられている。この廃棄物は、東側から運び込まれ、K地区のすぐ南側まで迫っている。谷部では最厚で15m近い堆積となっている。このために遺跡の広がりや、周辺の地形、環境を知る手がかりはこの下に埋没していると見られた。

この地区は事前の試掘調査によって初めて遺跡の存在が明らかとなった。そのために、

発掘調査は、試掘調査で遺構が検出された地点を中心に任意に設定することとした。まず、重機により、表土を掘削した。遺構は畑の段により分断され、高い部分で大型の竪穴式住居を検出した(a区)、また、低いところで小型の住居群を検出した(b区)。次いで人力によって遺構検出、調査を進めた。

調査の結果、弥生時代中期の竪穴式住居7、土塼1、柱穴を多数検出した。

### 2、遺構と遺物

#### SC01

丘陵尾根に近い西向きの緩斜面に立地する円形住居である。検出地点は標高22.0～22.3mである。遺構は西側が削平し失われている。また、住居跡は南北2面の畑に跨っている。そのため、検出面は0.4～0.5mの段差がある。このように、本住居は保存状態が良好とは言えない。

住居跡の平面は円形であり、現状で南北約10.0m、東西7.5m以上を測る。深さは保存の良い東側で

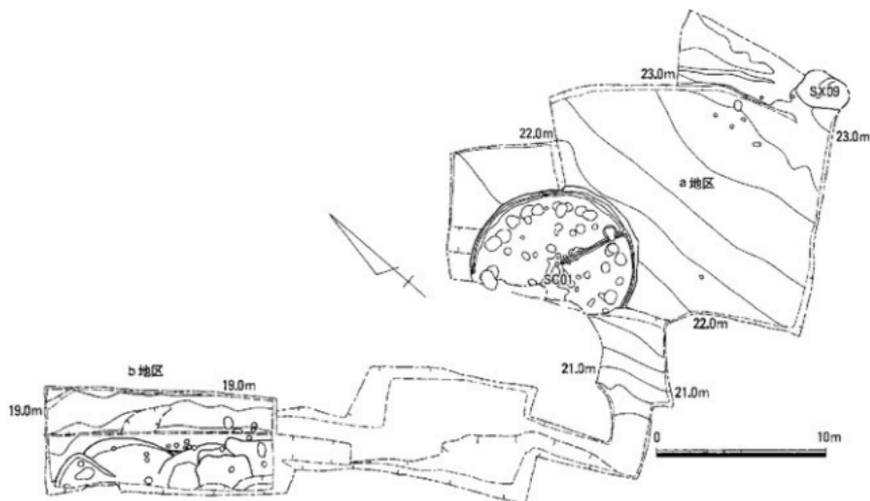


Fig.190 K地区全体図 (1/300)

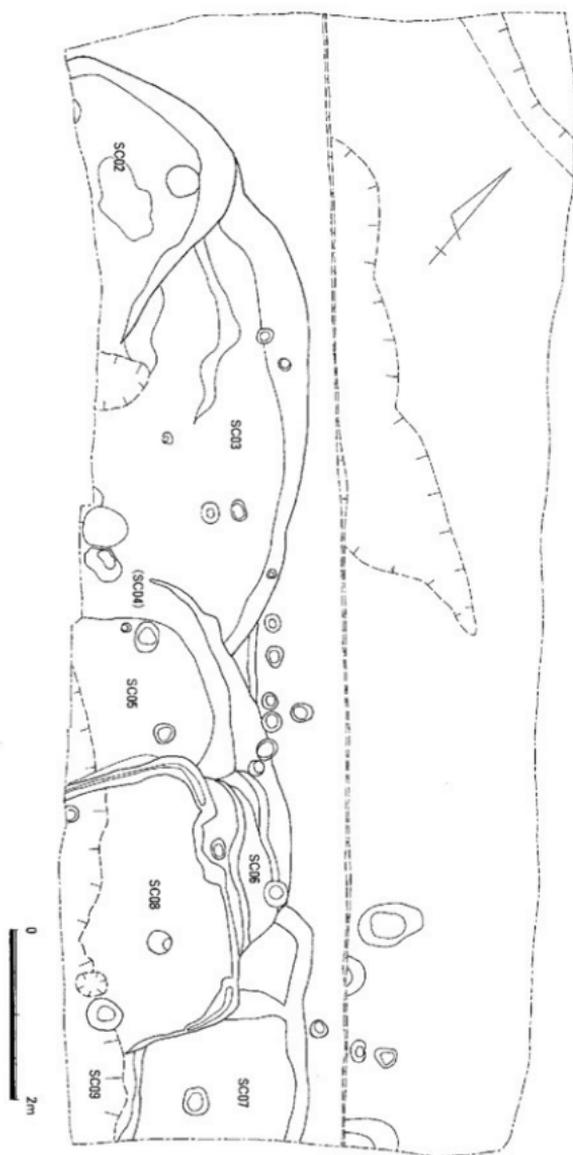


Fig.191 SC02~09 (1/60)

0.6mを測る。壁溝は遺存する部分では全域にあるところから、本来は完周していたと見られる。

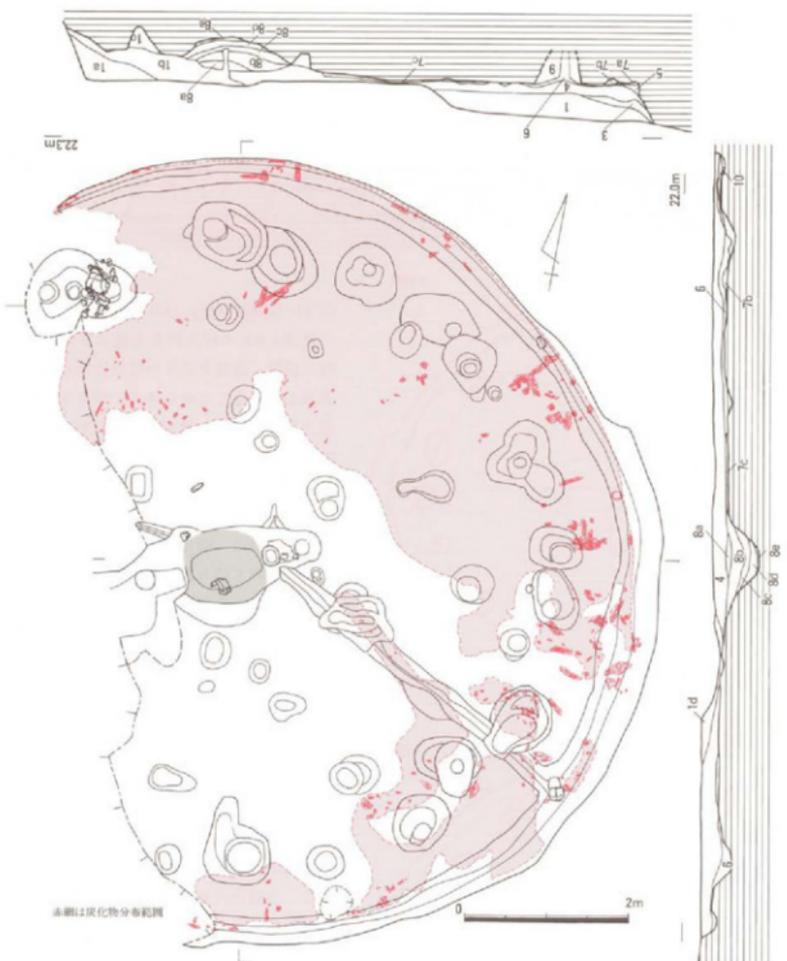
この住居跡は大きく1回の住居の拡大と5回に及ぶ柱の立替をおこなっていることが明かとなった。

主柱は、新旧二群の柱掘り方が認められる。最初の掘り方をA段階、二度目をB段階とする。

SC01-A段階 (Fig.193) 直径7.4mの柱穴列を主柱とする。遺存する主柱が9本あり、中心からみて210°の範囲にあることから復元して、本来は14本柱であったと考えられる。柱の掘り方は楕円形であり、長辺が0.6~1.0m、短辺が0.5~0.7mを測る。

柱掘り方内には2つの柱痕跡があり、1本は掘り方床面に痕跡が残されていた。これは、同じ掘り方を利用し、柱を立替えたものと見られた。

なお、住居規模も最後の壁溝以前に古い壁溝の痕跡がみられる (Fig.A-A'断面) ことから、異なるとみられた。床面の削平のためか、平面的には検出できなかったが、これから復元するとA期の住居は直径9.5mと復元される。



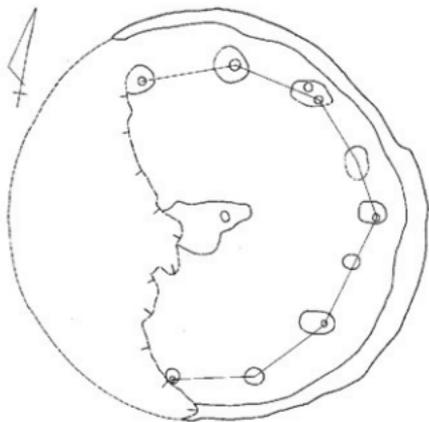
- 1a. 茶褐色腐植土  
 1b. 黒一暗褐色土  
 1c. 茶褐色土  
 1d. 暗茶褐色土  
 2. 暗茶褐色土  
 3. 赤褐色粘質土  
 4. 赤褐色土  
 5. 赤褐色粘質土  
 6. 黒色炭化物  
 7a. 赤色粘質土  
 7b. 赤色粘質土  
 7c. 暗褐色粘質土  
 7d. 暗褐色礫まじり土  
 7e. 暗褐色礫まじり土  
 8a. 茶褐色土  
 8b. 暗褐色粘質土  
 8c. 茶褐色土  
 8d. 暗褐色粘質土  
 8e. 黒褐色粘質土  
 9. 黒褐色粘質土  
 10. 暗茶褐色土

軟質、無層理、根痕多し、細地粒土、砂質多し。  
 硬くしまる。炭化物、礫多く含む。クラック著しい。下面凹凸、腐植土、漸移あり。  
 やや軟質。地山主体、炭化物含む。生じる可能性あり。  
 やや軟質、無層理、下面凹凸。  
 地山小礫（0.5cm以下）多く含む。炭化物あり。下面やや凹凸あり。硬くしまる。  
 土山礫多い。周辺地山の2次堆積。炭化物片を含む。硬くしまる（地山もどき）。上下層とは明瞭。  
 2層に類似するもより暗色。炭化物片多く含む。2層との境は不明瞭。  
 3層に類似するもより暗色。炭化物片多量に含む。部分層積。上下層とは明瞭に残する。  
 炭化物を主体とし灰、茶褐色粘質土を含む。下面焼土となるP1あり。よくしまり。下面は明瞭土層（4層）とはやや不明瞭。  
 積層に層理状をなす部分あり。硬くしまる。上下明瞭。  
 やや赤色土を含む。硬くしまる。上下明瞭（溝内埋土）  
 上二層。炭化物少量含む。硬くしまる。上下明瞭。地山小礫（5mm前後）  
 上二層。炭化物少量含む。上部からの漸移変化あり。  
 炭化物片を含む。硬くしまる。下位に漸移する。小礫含む。  
 地土。炭化物片を含む。硬くしまる。上下に漸移。地山土を含む。  
 炭化物片。炭化物片少量含む。小礫あり。地土あり。  
 炭化物片。地土多量に含む。焼土あり。やや粘性強し。硬くしまる。  
 灰が主体分。炭化物片少量含む。床面密着。べとつ。上下不明瞭。  
 硬くしまる部分で分層。  
 炭化物片、少砂、礫を含む。硬くしまる。

Fig.192 SC01 (1/60)



A段階



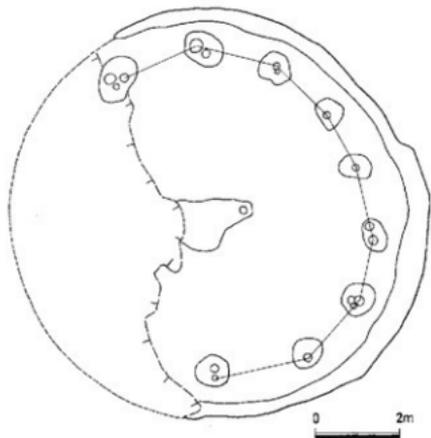
SC01-B段階 (Fig.193)

直径7.8mの柱穴列を主柱とする。主柱の位置、直径あたりの等分比はA期と共通していることからみて、やはり14本柱と復元される。掘り方は楕円形であり、掘り方はA期と同様の規模である。

柱掘り方内には3つの柱痕跡がある。1本以外は掘り方床面に痕跡が残されていた。これは、同じ掘り方を利用し、柱を立替えたものと見られた。柱痕跡は直径が15~20cmを測る。本住居最終段階であり、住居は若干拡大し、直径10.0mとなる。

また、以上の主柱以外に同心円をもつ複数の柱穴がみられた。

B段階



床面のほぼ中央に土壌がある。土壌は長楕円形を呈し、東西方向に主軸をとる。土壌の規模は東西2.4m、南北1.2m、深さ0.5mを測る。土壌の埋土中には炭化物等が層状に堆積しており、炉跡と考えられる。土壌内の東側に2本の柱穴がある。西側は削平のために遺存しないが、本来両側にあったと見られる。

なお、この土壌から南東側の壁溝に向かって溝1条がある。溝は幅20~30cm、深さ5cm以下である。

住居床面にはほぼ全面に多くの炭化材、炭化物が分布している。また、南側の住居壁は赤く焼け、焼土化している。こうした点から、本遺構は火災を受けた住居と見られた。東側の主柱の基部も炭化し遺存しているものがある。

Fig.193 SC01建替変遷模式図 (1/120)

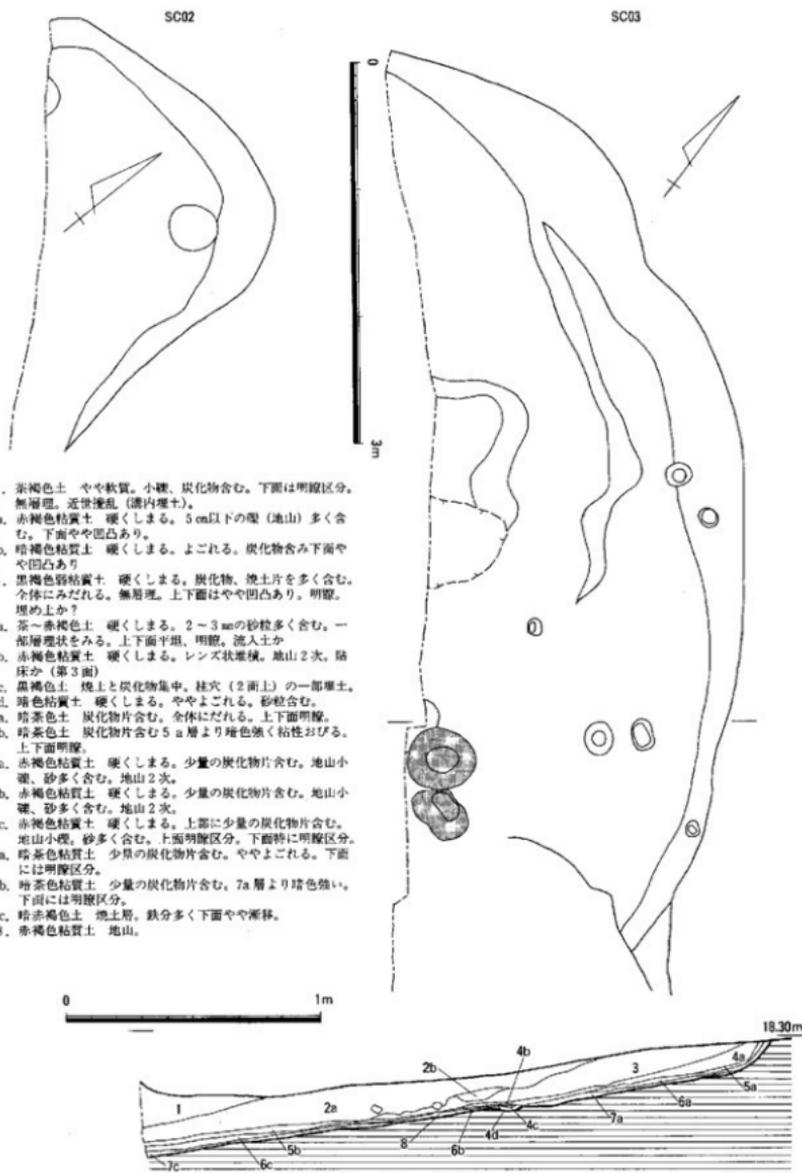
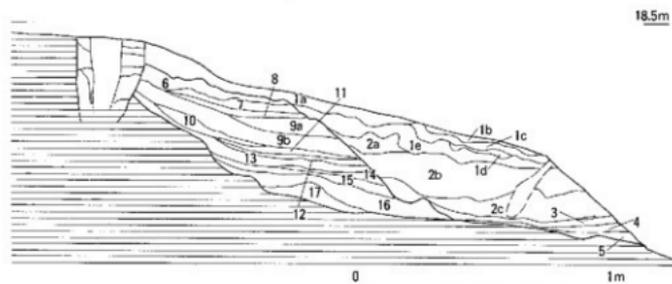
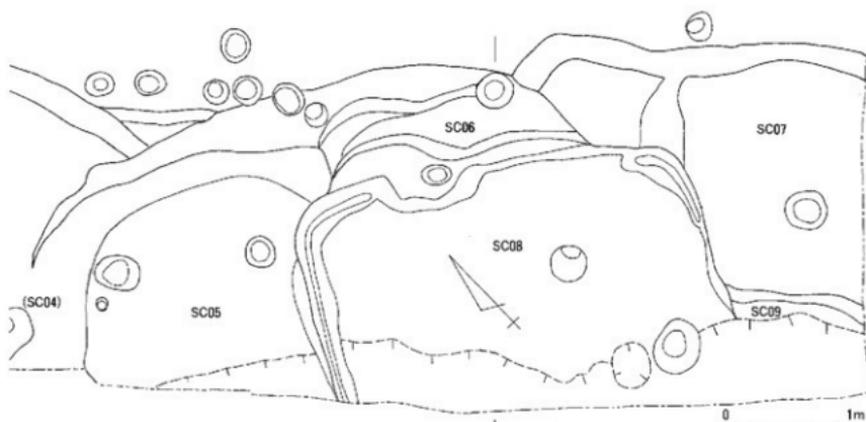


Fig. 194 SC02・03 (1/40・1/20)



- 1a. 茶褐色土
- 1b. 暗～黒褐色土
- 1c. 赤褐色粘質土
- 1d. 黒褐色粘質土
- 1e. 赤～赤褐色土
- 2a. 暗褐色粘質土
- 1b. 暗茶褐色粘質土
- 2c. 褐色粘質土
3. 黒色炭化物混じり粘質土
4. 赤褐色粘土小ブロック
5. 暗褐色粘質土
6. 暗褐色粘質土
7. 暗茶褐色粘質土
8. 明茶色土
- 9a. 赤褐色土
- 9b. 赤褐色土
10. 赤褐色土
11. 赤～赤褐色粘質土
12. 暗褐色土
13. 赤褐色粘質土
14. 暗褐色粘質土
15. 赤～茶褐色粘質土
16. 暗褐色粘質土
17. 茶褐色粘質土

砂粒、小礫多く含む。硬くしめる。下面凹凸明瞭。ブロック状土塊含む。  
 やや粘土質。砂粒含む。下面凹凸明瞭。  
 砂粒、小礫多く含む。地山上に類似。2次堆積。ブロック状。  
 砂粒ほとんど含まず。上下面明瞭区分。しめる。  
 小礫、砂粒多く含む。硬くしめる。上下面凹凸明瞭。  
 小礫、砂粒少量含む。ブロック状分布。硬くしめる。上下面凹凸なし。下面はやや不明瞭（掘削時の流入土か）。  
 小礫、砂粒多量に含む。炭化物、焼土片も多い。上下面凹凸なし。下面は不明瞭。上層は上層部分では不明瞭。  
 小礫、砂粒は少ない。均質である。硬くしめる。  
 多量の炭化物（ほとんど木片である）を含む。硬くしめる。  
 径1cm以下の粘土（地山）ブロック集塊層。塊層土は茶褐色粘質土。上下層とは比較的明瞭に接する。貼床。地山ブロックを少量含む。よこれる。炭化物片少量あり。下面とは明瞭。  
 小礫、地山ブロック（1cm以下）を多く含む。上下面は明瞭である。炭化物片少量含む。  
 さらに2層である。上半部は茶褐色粘質土ブロックを含む層（貼床④層の可能性あり）であり、下半部は暗褐色土。本層の上下面とも明瞭区分。炭化物片少量含む。  
 極めて硬くしめる。砂粒、小礫多量に含む。上下面共に平坦。明瞭に区分される（貼床③）。  
 砂粒、小礫多量に含む。硬くしめる。上下面フラット。明瞭区分。  
 砂粒、小礫はやや少ない。炭化物片多く含む。下面とは明瞭に区分。  
 砂粒、小礫多量に含む。硬くしめる。粘土小ブロックを含む。下面は明瞭。上面はやや不明瞭。  
 小礫、粘土ブロック多く含む。硬くしめる（貼床②）。  
 地山小礫。砂粒を含む。硬くしめる。上下面明瞭に接する。炭化物片少量含む。  
 地山粘質土。2次堆積。形状は地山とはほぼ同じ。硬くしめる。南方向にしたがいよこれる（貼床①）。  
 小礫、砂粒少量含む。よくしめる。上・下層とも比較的明瞭に接する。  
 小礫、砂粒少量含む。粘土質のブロック多く含む。硬くしめる。下面やや凹凸あり。明瞭区分（貼床？）。  
 小礫、砂粒少量含む。地山粘土ブロックを散発的に見る点状に分布。炭化物片少量あり。下面は明瞭区分。  
 地山硬く含む。粘質強く硬くしめる。上・下とは極めて明瞭に区分される。

Fig.195 SC04~09 (1/40・1/20)

1. 暗褐色土 小堀の炭化物を少し含む。土のしまりは良く強い粘性を有す。下位層へ漸移的に変化。
2. 黄褐色土 小堀の炭化物を少し含む。土のしまりは良く強い粘性を有す。下位層へ漸移的に変化。
3. 黄褐色土 土のしまりは良く強い粘性を有す。

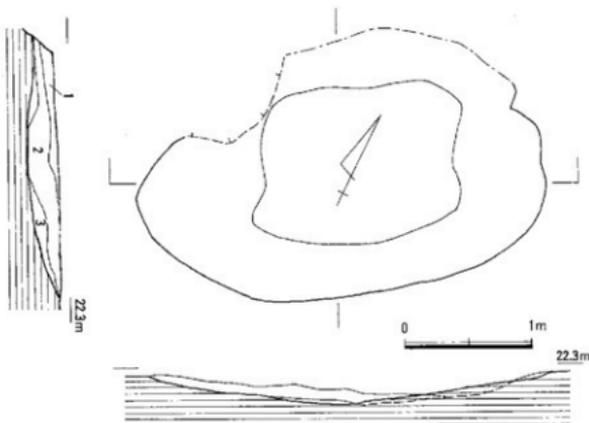


Fig.196 SX09 (1/40)

また、壁際に網代状の炭化物も認められた。

SC01からは多くの遺物が出土した。何れもB段階住居の床面上出土である。

遺物には、土器類 (Fig.197-1~6)、石製品、石器類 (Fig.198~200-1~28) がある。

土器には甕 (1、4~6)、鉢 (2)、壺 (3) がある。甕は口縁部「く」字形で、短部がやや肥厚するものである。鉢は口縁部が袋状となるものである。

石器には石錘 (1、7~28)、叩き石 (2)、石斧 (3)、凹石 (4)、有孔石製品 (5)、砥石 (6) がある。

石錘は有溝石錘 (1) と敲打 (礫) 石錘 (7~28) がある。敲打石錘は中央穴から南東側にかけて出土した。この中には赤変するもの、熱破砕するものもある。床面に比較的集中し、中央穴に落ち込んだ状況であった。このほか、住居の北側柱穴付近に玄武岩大石が据え置かれていた。これは表面が熱破砕により剥落し、多数に分割していた。

#### SC02 (Fig.194)

b 区北端に検出した隅丸方形住居である。西向き斜面にあり、部分検出である。SC03を切る。ほぼ南北に主軸を向ける。東西2.5m以上、南北2.6m以上、深さ0.2mを測る。中央に炭化物片集中がある。

#### SC03 (Fig.194, 197)

b 区北端に検出した楕円形住居である。部分検出であり、SC02が切る。貼り床が1面、焼土面がある。東西2.5m以上、南北6m以上、深さ0.4mを測る。覆土中から土器片 (Fig.197-9, 10) が出土した。土器には壺 (9)、甕 (10) がある。

SC05 (Fig.195)

b区中央に検出した隅丸方形住居である。西向きの斜面にあり、部分検出である。SC06を切り、SC08が切る。東西2.4m以上、南北3.2m以上、深さ0.3mを測る。壁溝、2本の支柱穴がある。

SC06 (Fig.195)

b区中央に検出した隅丸方形住居である。西向きの斜面にあり、部分検出である。SC08の埋没後、斜面に拡張して構築する。SC05が切る。東西2.3m以上、南北2.9m以上、深さ0.3mを測る。4面の貼り床があり、次第に床が高くなる。

SC07 (Fig.195)

b区南端に検出した隅丸方形住居である。西向きの斜面にあり、部分検出である。SC06、08が切る。東西2.7m以上、南北2.0m以上、深さ0.2mを測る。北側にベット状遺構がある。柱穴1がある。覆土中から土器片(11)が出土した。土器は甕底部である。

SC08 (Fig.195)

b区中央に検出した隅丸方形住居である。西向きの斜面にあり、部分検出である。隅部に壁溝がある。SC05、07を切り、SC06が切る。斜面に壇上の削り出しを残す。東西2.0m以上、南北3.2m、深さ0.2mを測る。1面の貼り床がある。覆土中や床面上から土器片(7、8)が出土した。土器は鋤先口縁をもつ広口壺(7)がある。口縁部の上面には円形浮文がつく。また、甕(8)は跳ね上げ口縁をもつものである。

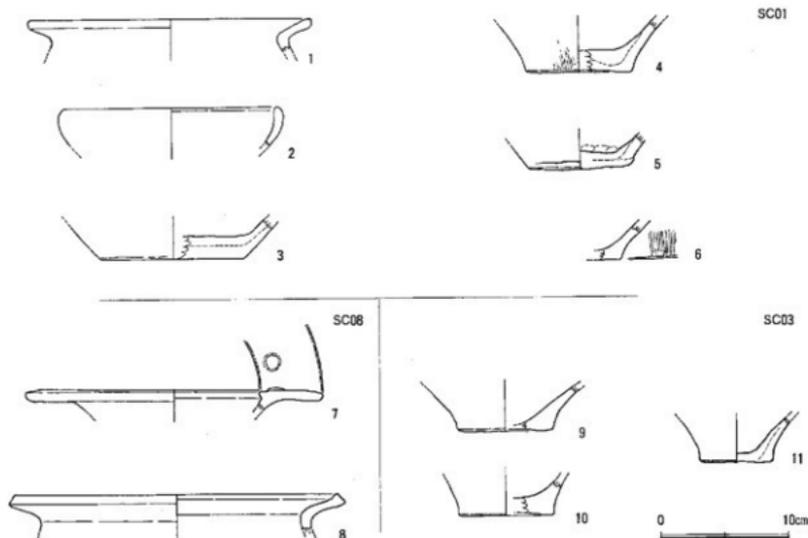


Fig.197 遺構出土遺物 1 (1/4)

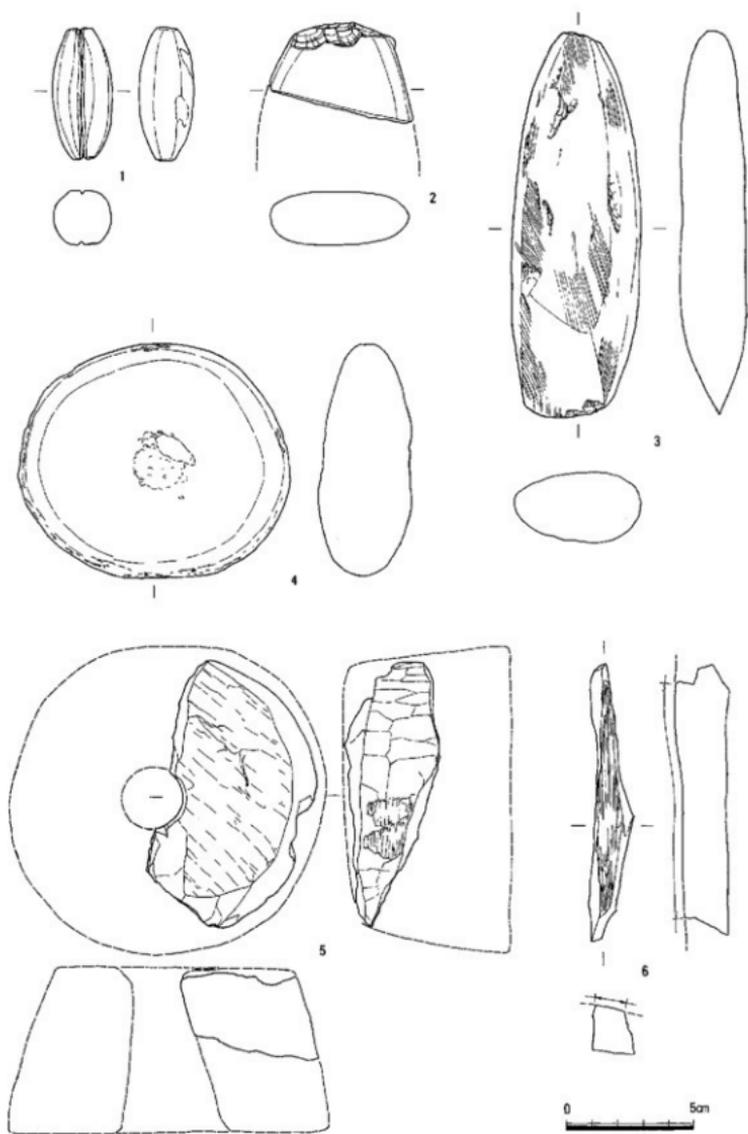


Fig. 198 遺構出土遺物 2 (1/2)

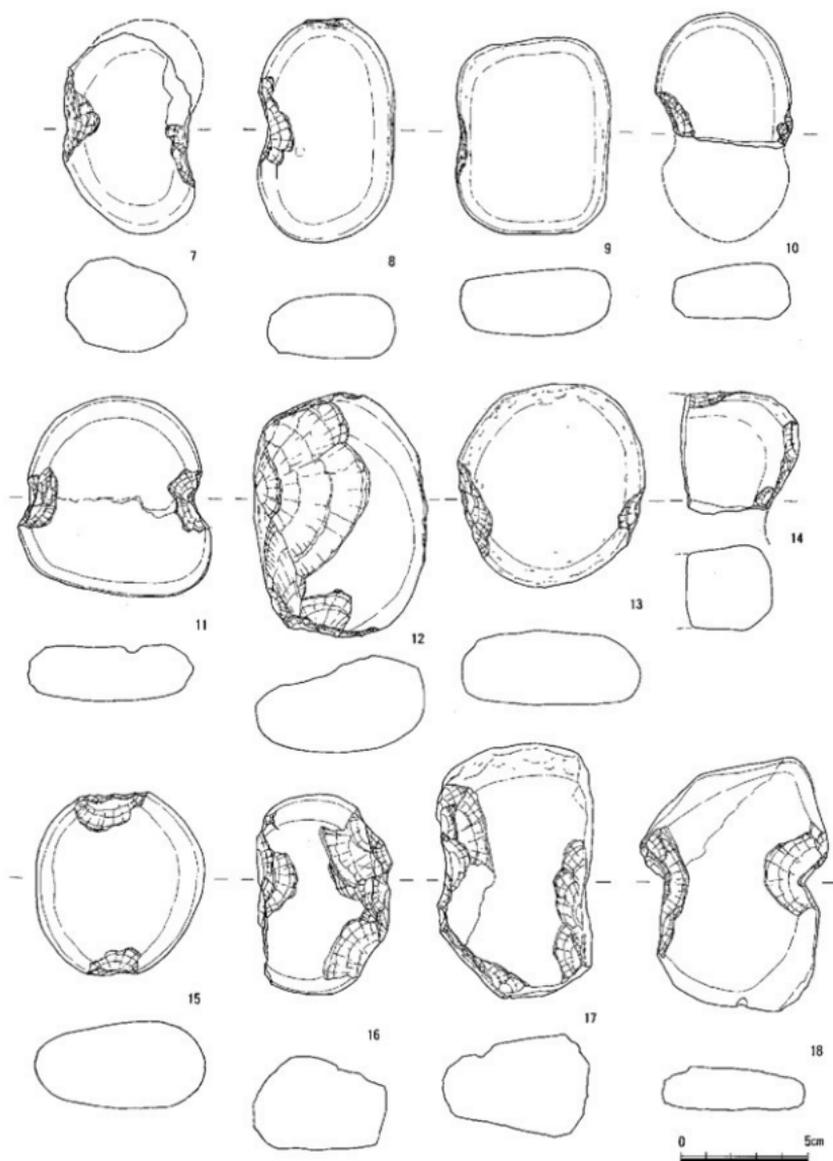


Fig.199 遺構出土遺物 3 (1/2)

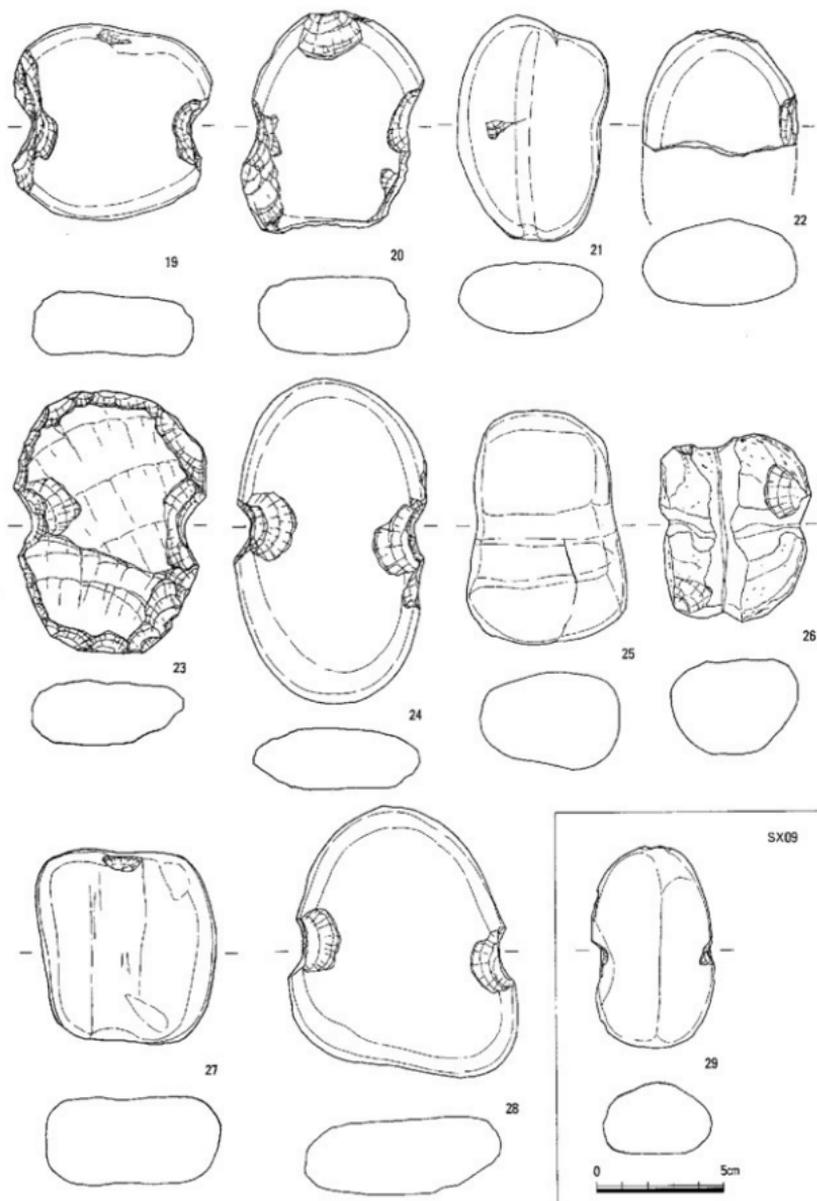


Fig.200 遺構出土遺物 4 (1/2)

SX09 (Fig.196, 200)

SC01の東側13mにある土壌。H地区溜井 SX10の西斜面上になる。N-60°-Eに主軸をとる平面楕円形である。長さ3.2m、幅1.6m、深さ0.2mを測る。性格は不明であるが、石錘 (Fig.200-29) が出土した。

### 3、小結

本地区の調査は対象面積が狭く、旧地形を失うほどの大規模な造成工事や、産業廃棄物処理場の設置など、遺跡の保存状態は悲観的であった。しかし、調査を開始するとa調査区では、周辺地域では最大規模の竪穴式住居が検出され、また、b調査区では、斜面に密集状態で繰り返し建てられた弥生時代の住居群を検出するなど予測以上の成果を得ることができた。

調査では竪穴式住居跡7、土塼1、柱穴多数を検出したのみであるが、遺跡立地や、周辺遺跡の変遷とを合わせてその性格を検討してみたい。

調査した住居は、弥生時代中期後半～末葉に比定されるものであり、丘陵の高い位置に単独で建てられた大型住居 (SC01) と、斜面下方に密集して建てられた小型住居群 (SC02～SC08) に区分される。この両者は出土遺物から、ほぼ同時期に存在したと見られることから、何らかの較差を反映していると思われる。

SC01から出土した生産具は漁労活動に関連するものが多い。この集落に関わる集団はI地区と同様に漁業を生産活動の一つとしていたと見て良からう。

遺跡立地をみると、K地区は、三苦永浦遺跡群では最も内陸部に形成された集落遺跡である。現在の海岸線からちょうど1kmの位置にある。遺跡は周辺のH、I、Jの各地区と異なり、海岸の見えない位置を選地している。これはA地区と同様に三苦川のの上流地域の南向きの斜面に立地するためである。しかし、出土遺物から本遺跡に関わる集団が漁業に深く関与していたと見ることはできよう。それなら、何故集落を生産活動地から遠避けるか。その理由としていくつかの案が考えられる。

1) 集落の季節的移動と見る。これは特に冬場の強風や寒さを避ける意味と考える。

しかし、I地区での集落の継続を見るとこれが、絶対的条件になるとは考えにくい。

2) 集落の分村現象と見る。I地区などの拠点集落から新たな生産地の開発等を背景に新たな小集落を形成したと見るもの。しかし、分村なら、最大級の住居が存在すること、出土した主要な生産具が漁労具であり、この谷間を選地する理由と考えにくいことなどが、疑問点となる。

3) 具体的な生産活動の変化を背景とするものではない。生産活動は旧態のままであり、何らかの理由により、居住空間だけを移したと見るもの。

本地区の性格を理解するこれらの解釈の是非は、周辺の遺跡の動向を検討した上で再度検討したい。

## 第10節 L区の調査

### 1、調査の概要

L地区は、事業地内の南東端にある。周辺は急斜面であるが、戦後この地域で盛んになった「石垣莓」の栽培のために段々畑として造成されている。この地区は試掘調査が困難であったために踏査を行った。その結果、丘陵南斜面の標高35~37m付近に、畑造成を免れ、残丘状となった古墳石室を発見した。古墳は周囲から土取りにより、天井石がずれ落ち、石室裏込めがむき出しとなり、崩落寸前という状態であった。発見した古墳は1基だけであったが、周囲に他の古墳や、関連遺構が予測されることから、周囲約20mの範囲を調査対象とした。調査はまず、現状の地形測量を行った。その後、古墳の周辺部は重機により表土を除去した。古墳は表土部分から人力で調査を進めた。調査に先立ち崩落寸前であった天井石をチェーンブロックを使用し除去した。

調査の結果、古墳1基と焼土塊1を検出し、ほかに遺構は認められなかった。

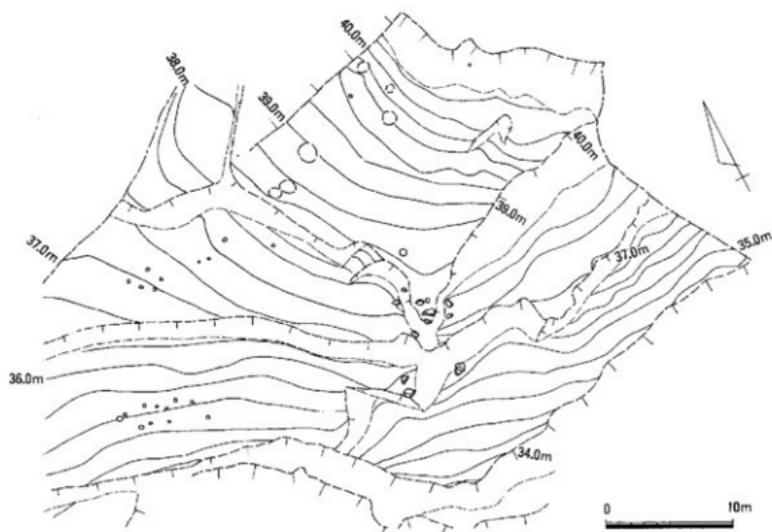


Fig. 201 L地区全体図 (1/400)

## 2、遺構と遺物

### 永浦3号墳 (Fig.201~207)

本古墳は丘陵尾根の平坦部が斜面に変わる地形変換点付近に設けてある。石室は斜面に一致し、南に向けて開口する。地元の農業関係者に尋ねても古墳の存在を知る人は皆無であった。墳丘の破壊も人力により徐々に進められたと見られる。石室は崩壊が進んでいるが、これは土取りにより裏込め土が除去されたためであり、天井石もずれ落ちた状態で壁面に遺存していた。

### 墳丘・周溝 (Fig.202、203)

墳丘と周溝は細地造成にともない削平され、石室の後方の一部を除き残されていない。周溝は石室後方に部分的に遺存し、平面形は墳丘側で円弧を取り、外側で円弧と直線的な線が複合する。周溝の幅は東寄りで4.0m、深さ0.5m、西側で幅2.6m、深さ0.3mを測る。周溝内は4層に区分され、中位に黒色の腐植土が形成されている。周溝底内側の下場線は円弧に寄り、これから復元すると周溝底墳端での直径は約8mとなる。またその場合、古墳の中心は羨門部の中程となる。土層断面の観察では、石室奥壁から約2m後方に周溝底がある。石室の掘り方内の裏込め土がそのまま周溝壁となる状態であ



Fig.202 永浦3号墳墳丘図 (1/100)

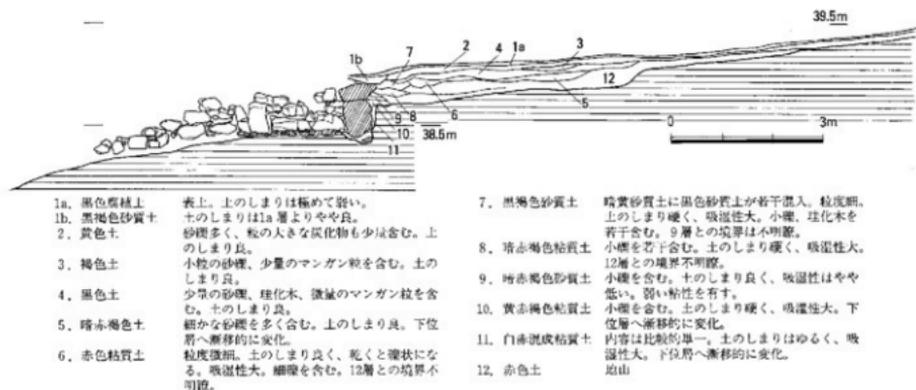


Fig. 203 永浦3号墳丘土層断面図 (1/100)

る。すなわち、石室後方では真込め土がそのまま墳丘盛り土となっている。墳丘側の周溝壁面はやや傾斜角度が急である。

なお、本古墳の墳丘から少量の遺物が出土した。遺物は石室後方の周溝内から須恵器甕片、石室西側の墳丘斜面の攪乱中から須恵器杯類、高杯片が出土した。これらは、何れも二次的な包含状態であり、本来の位置を動いている。

#### 石室 (Fig.204)

石室は、主軸をN-15°-Wにとる横穴式石室である。

墓壇は、石室部分が幅2.6m、長さ2.6m、深さ0.7mであり、更に羨道部分として南側に幅1.7mの掘り方を連結している。床面は標高37.3mで、奥壁より3.8mの位置まで平坦である。墓壇は石室の基底部分設置部分である東、北、西の辺を10cm前後掘り下げ、基底石を設置している。基底石は奥壁と袖石、石室南側隅石を高く設置し、それ以外の部位に高さが半分程度の基底石を設置している。この段差は石積み二段目で解消し、三段目以降は連続した石積みをおこなっている。これより上部は不明であるが、調査以前に除去した天井石の位置からみて、四段目の上に天井石を設置したと見られる。石材は上の段にしたがって小さいものを使用している。石材は周辺に産出する砂岩、礫岩である。

石室の床における平面形態は奥壁にやや広い長方形であり、長さ1.85~1.9m、幅は奥壁側で1.7m、羨門側で1.4mを測る。高さは不明であるが、おおよそ1.0~1.2mと復元される。羨門部は幅0.85m、羨道部は袖石の突出がなく、南に次第に広がる。東壁は羨門から1.6mまで残り、西壁は3.1mまで残る。石室の全長は保存の良い西側壁でみると5.0mを測る。

床面には敷石が設置される。一辺10~20cm大の角礫を用い、掘り方上に直接設置している。石室全面と羨道側0.3mまで敷き詰めている。羨道との境界を示す切石はない。

#### 閉塞 (Fig.205)

閉塞施設は比較的保存状態が良好であった。ただし、前面の東側は東側羨道壁と共に除去されていた。閉塞の位置は羨門から0.3mから2.3mの範囲に設置してある。高さ0.7mが残っていた。閉塞は羨道床の地山面に直接設置されている。まず、一辺30cm前後の角礫を羨道寄りに積み上げ、次に前面を一辺10~20cm程度のより小さな角礫で覆う。最後に礫間や前面を埋め土で覆っている。

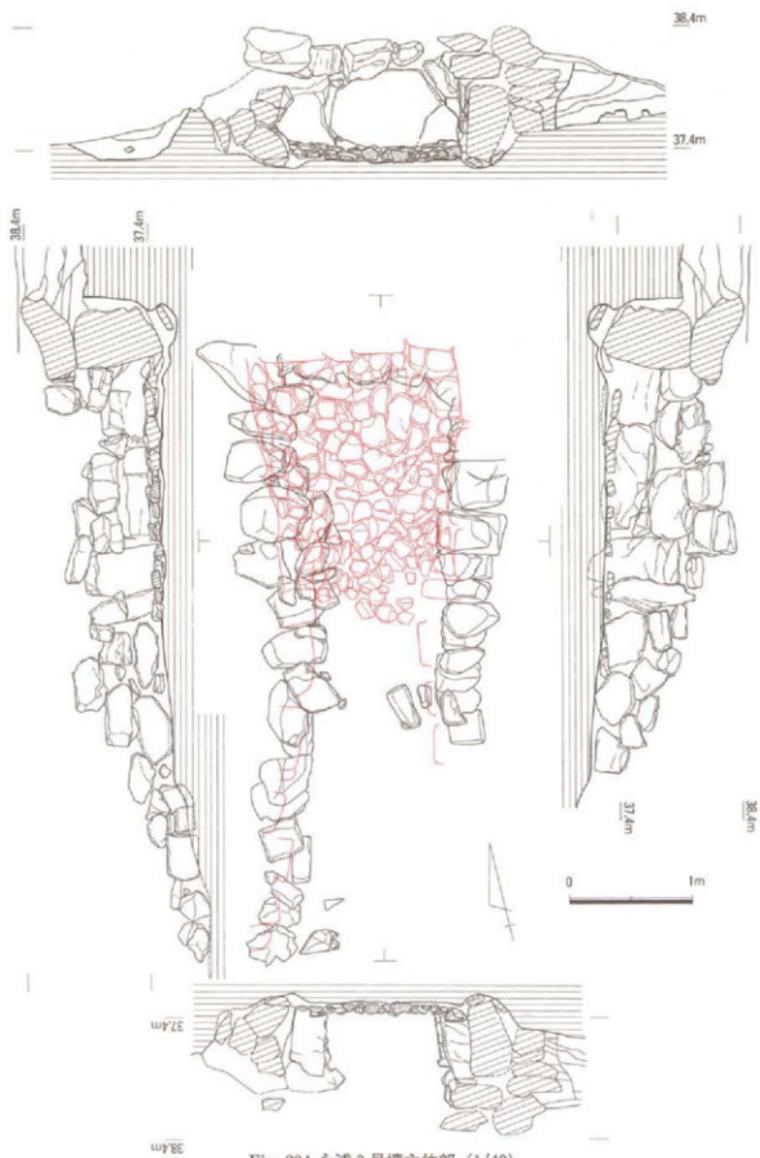


Fig. 204 永浦3号墳主体部 (1/40)

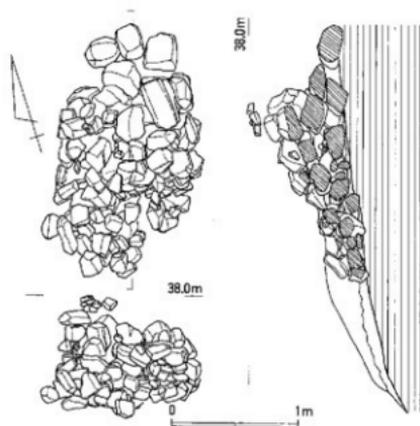


Fig. 205 永浦3号墳閉塞状況 (1/40)



Fig. 206 永浦3号墳石室内遺物出土状況 (1/40)

石室内の遺物出土状況 (Fig. 206)

石室内からは少量の遺物が出土した。石室中央の床面上からは小型高杯1 (Fig. 207-5)、杯身1 (3)、鉄器1 (13) が出土した。高杯は、杯部と脚部が30cm離れて、杯身は石室中央の東寄りに半分の破片が出土した。また、石室の中央西寄りに床面上の埋土が硬化している部分があった。

羨道の東側、閉塞石との間の空間に遺物が出土した。まず袖石に近い位置に広根式の鉄鍬2点 (11、12)、不明の棒状鉄製品 (14、15) が出土した。さらに閉塞石に近い位置に須恵器蓋杯 (1、2、4) がある。杯は重ねられ、受部を下にして置かれていた。

2) その他の遺構 (PL. 42-3)

3号墳の南約15mで検出した焼土壌である。平面楕円形で規模は幅0.65m、長さ0.65m、深さ0.23mを測る。覆土は焼土、炭化物層と地上上の互層である。土器などの遺物の出土はなく、時期は不明である。

### 3、小結

永浦3号墳は、横穴式石室を内部主体とする小円墳である。石室も小型であり、その形態や出土遺物から7世紀後半に造られたものと見られた。石室内で出土した須恵器はTK48に対応し、7世紀後半に、墳丘から出土した須恵器はより新しい特徴をもち、7世紀末から8世紀初頭に位置づけられる。この時期差が、初葬と追葬の差を示すものか、埋葬後の儀礼の幅を示すものかは不明である。

永浦3号墳は博多湾側から深く入り込む谷の最奥部にあり、丘陵南斜面に造られている。横穴式石室をもつ小古墳は通常群集して築造される場合が多く、本古墳の調査に際しては周囲に他の古墳や関連施設が残されていないか充分な注意をおこなった。3号墳の周辺は畑地造成のために斜面の造成が激しく、古墳が破壊された可能性もあったからである。しかし、同じ斜面で、古墳の痕跡などはなんら見出すことができなかった。さらに、L地区の周辺や事業地外までひろげて踏査などを行い探索

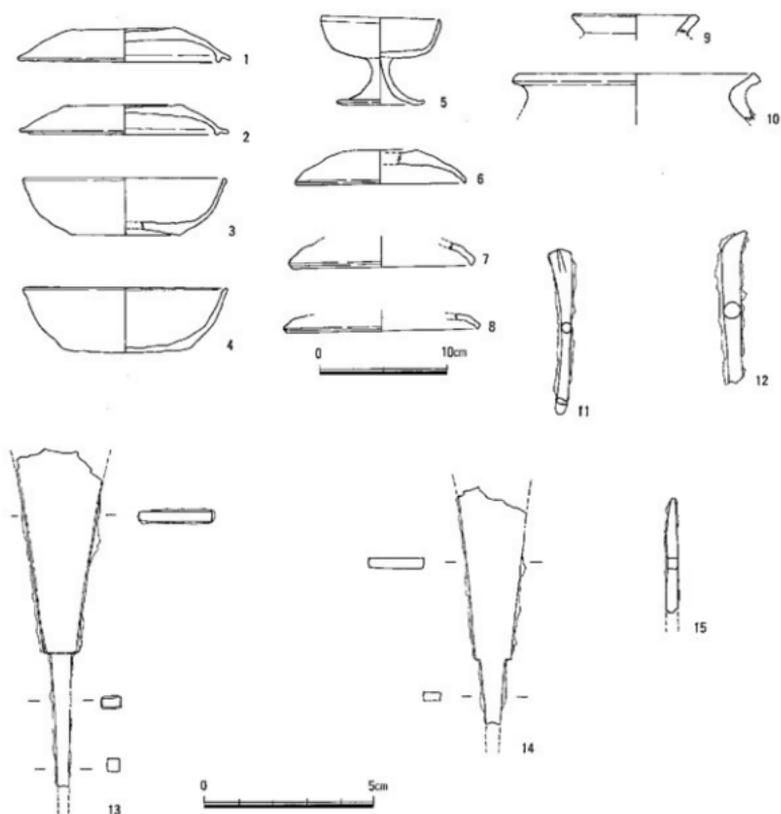


Fig. 207 永浦3号墳出土遺物 (1/4・2/3)

したが、ここでも古墳などの確認はできなかった。

この谷は、古く「四十ヶ浦」と呼ばれている。今回の調査地区より南200m付近までは、1970年の下和白地区の区画整理事業の範囲であった。事業の事前に踏査、発掘調査が行われたが、旧石器～弥生時代の遺跡は確認されたものの、古墳は発見されていない。

また、本古墳は古地形図でみると、本来谷の奥の南斜面であり、東西の両側は丘陵が塞いでいる。前面にはわずかに水の流れる谷川しかないが、こうした立地条件は当該期古墳に見られる重要な要件と説かれている。

こうした点から、本古墳は当初から単独で築成された可能性が強く、古墳の造られた時期が7世紀後半であり、その立地条件を併せて見るなら、一般的な古墳時代後期の群集墳と同列で扱えない性格を有すると考えられる。いわゆる「終末期古墳」に含まれる小古墳である。

## 第4章 調査資料の分析・検討

### 第1節 新宮浜～恋の浦地域の旧石器時代資料について

#### 一 三苫永浦遺跡発見の旧石器時代遺物から一

今次調査の結果、三苫永浦遺跡A地点から少量ではあるが旧石器時代遺物の集中区が見つかり、またH、I、J各地点から数点の当該期資料が出土、採集された。ほぼ同時に調査された三苫遺跡でもナイフ形石器や台形様石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、細石刃、細石刃核、搔器、剥片の出土を見た。両遺跡とも旧石器時代資料の多くは表面採集や弥生時代の遺構の埋土中などからの出土であり、原位置を保っていないものが多く、良好な資料とは言い難い。次に遺跡の立地をみてみると、三苫永浦遺跡と三苫遺跡は立花山より派生する丘陵上に位置する。ただし三苫永浦遺跡A地点の西側は標高がやや低くなり、その辺りを分水嶺として玄海灘に注ぐ湊川の流域と博多湾に注ぐ和白川の流域の2つの水系に分かれ、三苫永浦遺跡は湊川の流域の遺跡となる。三苫遺跡は和白川の流域に属する遺跡であり、三苫永浦遺跡の多くとは異なる水系に立地することとなる。が、三苫遺跡は三苫永浦遺跡とは同一の丘陵上に存在し、両者は一連の遺跡と考えるとさしつかえないだろう。おそらく、この丘陵上には他にもいくつかの当該期遺跡が点在していたであろうと想像される。ところで、本遺跡出土の旧石器資料は、この丘陵上での数少ない本格的調査によって得られた一括資料である。しかし前述したように原位置を保った資料は少なく、石器類の本来の伴関係、時期や石器群の様相は、今回の出土資料からだけでは明らかにし難い。そこで三苫遺跡も含めた周辺部における当該期の調査研究と比較しながら、今回出土した石器群の本来の姿を推定していきたい。

まず、第一にナイフ形石器を主とする石器類が挙げられる。J・H地点のナイフ形石器はいずれも表採であるが、いわゆる「九州型」ナイフ形石器と考えられ、縦長剥片を素材とし定型的であることから後述するA地区SU07一括出土の石器群に先行するものと考えられる。A地区のSU07から一括して出土した粗雑なナイフ形石器と搔器、剥片類は、連続した縦長剥離を主体とする石器群であるが、前者よりも後の時期のものである可能性が高い。しかし、石器の形態的な差によっのみの確定要素の少ない考え方であり、その前後関係の断定はできない。

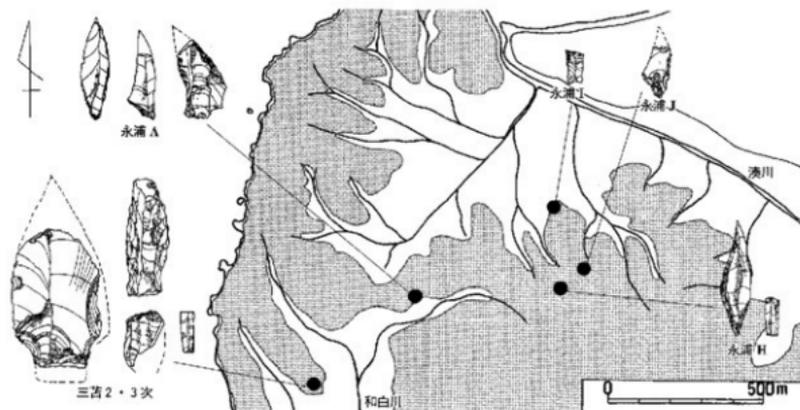


Fig. 208 周辺地形と主な旧石器分布図 (石器は1/2縮尺)

第二に細石刃を主とする石器類が挙げられる。しかし本遺跡では細石刃が二点出土したのみで詳しいことは不明である。三苦遺跡からは、細石刃核が三点出土しており相互の関連が考えられる。

さて、本遺跡や三苦遺跡を含む粕屋郡北部地域は、旧石器時代の遺跡が少ないとされてきた。しかし、この地域に該当する福岡市東区(旧糟屋郡)、粕屋郡古賀町、新宮町でも旧石器時代の遺跡が存在することが平ノ内幸治、松尾健二、高橋慎二各氏の精力的な活動により明らかにされている<sup>(1)</sup>。また宗像郡福岡町からも旧石器資料が検出されている<sup>(2)</sup>。このような状況を見てみると、行政上、福岡市東区、粕屋郡古賀町、新宮町、宗像郡福岡町の玄海灘に面した地域、すなわち海の中道から新宮浜一帯の浦にかけての湊川、花鶴川、西郷川流域には、旧石器時代の遺跡がある程度点在することが分かる。これらの遺跡群が吉留秀敏氏(1983)の「九州島内の遺跡群分布概略図<sup>(3)</sup>」の福岡・筑紫平野の遺跡群に含まれるのか、もしくは玄海灘に面したこの地域で独自の遺跡群を形成するのかがという問題がかうかびあがっている。そこで、この粕屋郡北部の玄海灘に臨む地域の旧石器資料をまとめることで、それに対する検討を加えたい。

この地域の旧石器時代研究の歴史を簡単に振り返ってみると、以前から雁ノ巣砂丘遺跡や高松(夜白)遺跡<sup>(4)</sup>からナイフ形石器などが採集されていた。1970年に和白遺跡群下和白田区よりサヌカイトを素材とする三稜尖頭器が出土したが、弥生時代の包含層の上面からの出土であり、本来的な位置を保っていない<sup>(5)</sup>。1972年には古賀町鹿部・東町遺跡より半舟底細石核が出土したが、これも同様に本来的な出土ではないと考えられる<sup>(6)</sup>。その後も雁ノ巣砂丘遺跡採集の剥片尖頭器<sup>(7)</sup>や佐谷遺跡採集のナイフ形石器<sup>(8)</sup>、シオヤ鼻遺跡採集資料<sup>(9)</sup>などが紹介されてきた。1990年代になって、前述したように古賀町や新宮町の溜池周縁部採集の旧石器資料が精力的に紹介<sup>(10)</sup>され、旧石器時代遺跡が希薄であるとされてきた本地域にも、該当する時代の遺跡がある程度まとまって点在することが明らかになった。また、旧石器時代資料が未確認であった福岡町でも、1995年の手光酒屋遺跡の調査でナイフ形石器などが確認された<sup>(11)</sup>。そして今回の三苦遺跡及び三苦永浦遺跡からの旧石器資料の出土がある。

この地域で出土及び採集されてきた資料の説明と、各遺跡に関する考察を加えたい。なおこの地域に関する資料紹介を以前に平ノ内幸治氏らが行っており<sup>(12)</sup>、ここに紹介する資料のほとんどがその報告に拠っている。それ以外の資料については、随時(註)に記した。1-12は雁ノ巣砂丘遺跡採集の石器である。ナイフ形石器を主とする石器類として、1が幅広の縦長剥片を、2-6が縦長剥片を素材とす

番号	遺跡名	所在地	立地	標高	遺物	文献	保管場所
1	シオヤ鼻	福岡市東区海の中道	丘陵		縦刺、ナイフ	(5)	
2	雁ノ巣砂丘	福岡市東区大字余多	砂丘	20	ナイフ、剥片、台形、細石刃	(7)	宇美町立歴史民俗資料館、個人
3	三苦	福岡市東区三苦			ナイフ、剥片、3P、台形核、スクレイパー、細石刃、核	(8)	
4	三苦永浦A	福岡市東区三苦五丁目	丘陵		ナイフ、縦刺		本誌
5	三苦永浦B	福岡市東区三苦	丘陵		ナイフ、細石刃		本書
6	三苦永浦1	福岡市東区三苦	丘陵		細石刃		本書
7	三苦永浦2	福岡市東区三苦	丘陵		ナイフ		本書
8	下和白田区a地点	福岡市東区下和白	丘陵	36	3P	(5)	福岡市埋蔵文化財センター
9	高松(夜白)	粕屋郡新宮町夜白	丘陵	10-20	縦刺、ナイフ	(4)	
10	太刀洗池	粕屋郡新宮町立花口	池	50	ナイフ、台形、台形核		
11	鹿部・東町	粕屋郡古賀町鹿部字東町			核	(6)	
12	馬場池	粕屋郡古賀町新原	池	35	ナイフ、台形、3P	(8)	個人
13	五毛池	粕屋郡古賀町新原	池		ナイフ	(8)	個人
14	栗池	粕屋郡古賀町新原	池		ナイフ	(8)	個人
15	峠下池	粕屋郡古賀町窪内	池	50	ナイフ、細石刃		個人
16	崎中池	粕屋郡古賀町窪内	池	50	石刃		個人
17	崎上池	粕屋郡古賀町窪内	池	50	石刃		個人
18	佐谷	粕屋郡古賀町千鳥			ナイフ	(8)	個人
19	手光酒屋	宗像郡福岡町手光	丘陵		ナイフ、縦刺	(11)	個人

Tab.2 周辺地域旧石器時代遺跡地名表

るナイフ形石器、7・8が台形石器、9が縦長剥片を素材とする剥片尖頭器、10～12が縦長剥片である。ただし、12に関しては、細石刃の可能性も考えられる。石材は全て黒曜石である。これ以外にも筆者の採集した資料として、黒曜石を素材とする、いわゆる「巽谷型」ナイフ形石器や細石刃がある。これらについては別途発表予定であり、詳細はそこで述べるとする。現在のところ雁ノ巣砂丘遺跡では細石刃核は確認されてない。13・14はシオヤ鼻遺跡採集の石器である。13は使用痕を有する縦長剥片、14は横長剥片を素材とするナイフ形石器である<sup>(13)</sup>。ただし14は、実見したわけではないが、台形石器の可能性も考えられる。石材は13が古銅輝石安山岩、14が黒曜石である。これら2遺跡に関しては、付近で地質調査が行われ、興味深い結果がでてるので少し触れてみたい。まず雁ノ巣砂丘遺跡は奈多砂層（更新世に形成された、いわゆる古砂丘砂層）の上を覆う海の中道砂層（完新世に形成された、いわゆる新砂丘砂層）中より遺物が発見されている。本来は奈多砂層中に含まれていた石器群が遊離した結果であると考えられる。シオヤ鼻遺跡は古第三紀層（基盤岩）が露出しており、その表層の風化土壌の中から遺物が採集されている。ところで奈多漁港改修の際に奈多砂層中の土壌化した部分（古土壌）の一つの直上部に15cmないし20cmの泥炭層が露出し、おびただしい丸太状の樹木片が見つかった。この樹木片の年代がC<sup>14</sup>年代測定法により分かっており、23840±880y. B.P. という結果になっている。また同層の最上部の古土壌中には始良Tn火山灰(AT)を含んでいることも分かっている<sup>(14)</sup>。これらの事実は、雁ノ巣砂丘遺跡採集石器群の年代への一つの手がかりになると考えられる。また当時の環境は、丘陵もしくは山の尾根筋であったと想像される。

次に15～17が高松（夜臼）遺跡採集の石器である。15が使用痕を有する縦長剥片、16は縦長剥片、17は不定形の縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。石材は全て黒曜石である。遺跡のあった丘陵は、旧石器時代に関する十分な調査を経ずに削平されてしまっており<sup>(15)</sup>、石器群の詳細は不明であるが、ナイフ形石器を主とする石器群の存在が考えられる。18は下和白遺跡Ⅲ区a地点出土の三稜尖頭器である。石材はサマカイトである。これはトレンチ調査により弥生時代の包含層の上面から見つ

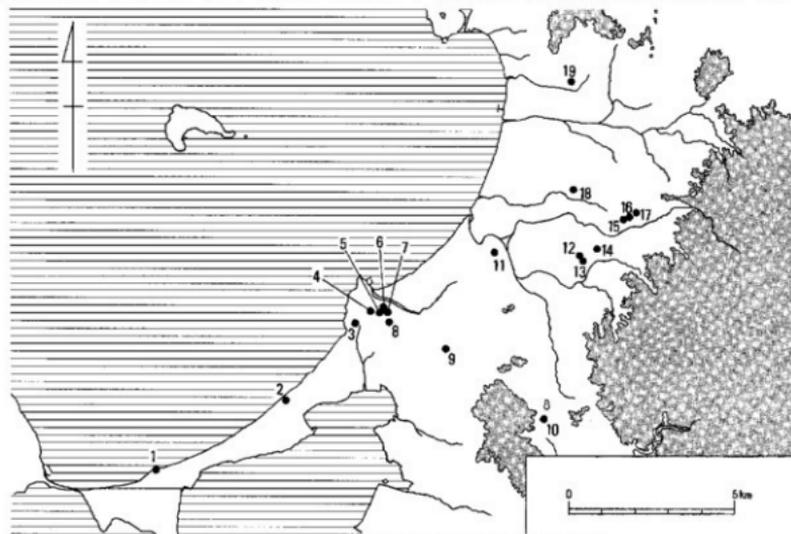
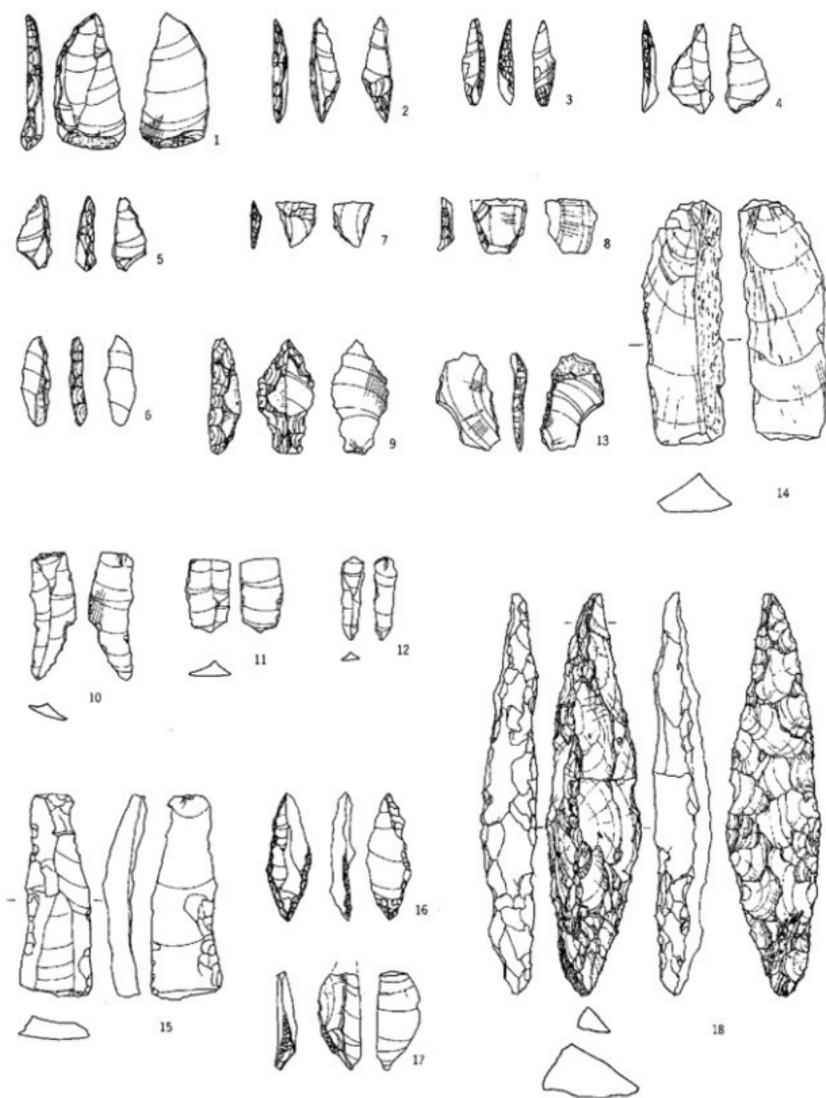


Fig. 209 周辺の旧石器時代遺跡分布図 (1/150,000)



各個台からの引目転載・一部改良。なお  
18は小畑弘之氏の作図・トレースである。

0 2cm

0 3cm

Fig. 210 周辺地域出土及び採集旧石器実測図 (1/1・2/3)

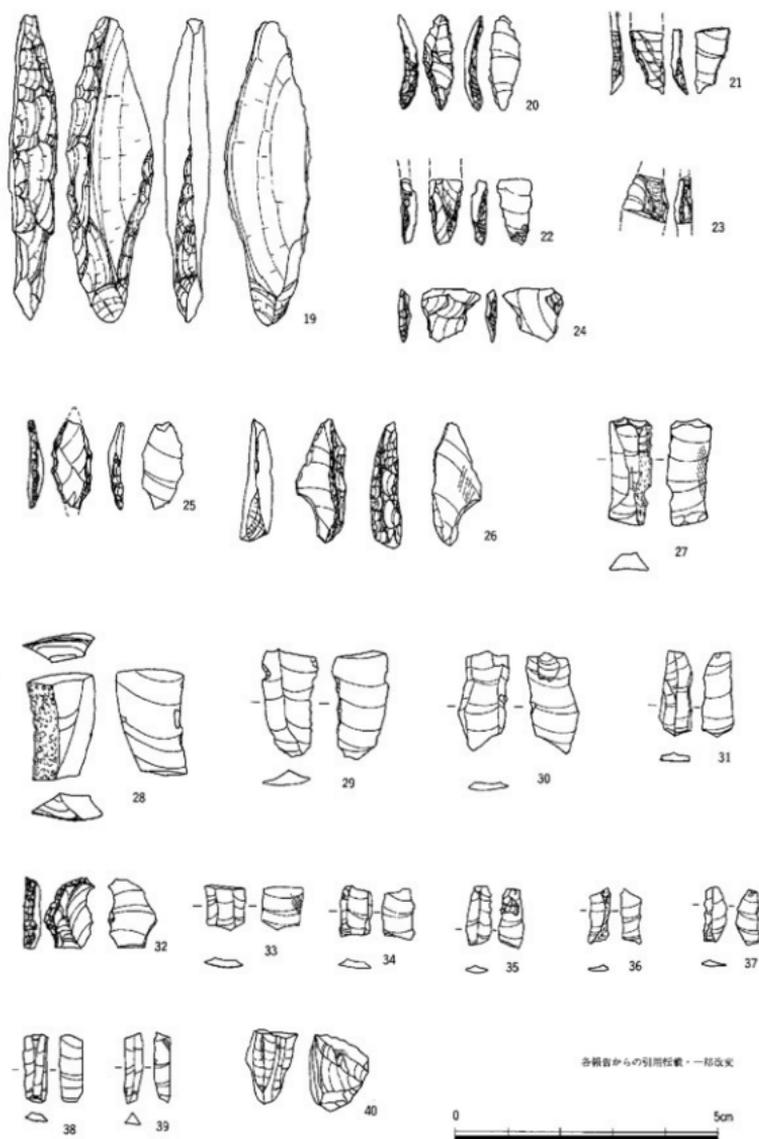


Fig. 211 周辺地域出土及び採集旧石器実測図 (2/3)



Fig. 212 九州島内の遺跡群分布概略図  
(吉留1983を転載・一部改変)

する三稜尖頭器などが採集されている<sup>(17)</sup>。また馬遠池より原ノ辻型台形石器などが採集されており、これについては別途発表予定である<sup>(18)</sup>。27は峠上池採集の縦長剥片で、針尾島産と考えられる黒曜石を素材とする。28～31は峠中池採集の縦長剥片で黒曜石を素材とする。ただし、31は細石刃の可能性も考えられる。32～39は峠下池採集の石器である。32は不定形剥片を素材とするナイフ形石器、33～39は細石刃である。石材は全て黒曜石である。立地を見てみると、峠上池・峠中池・峠下池は、大鳴山から派生する丘陵の一つに、連なった形で点在する。丘陵の南側を藪野川が流れ古賀の平野部を形成し、花鶴川となって玄界灘に注ぐ。この藪野川の対岸の丘陵に馬遠池・五毛池が存在する。40は鹿部・東山遺跡出土の細石刃核である。黒曜石を素材とし、半舟底型石核である。出土したのは、おそらく弥生時代を主体とする包含層からで、本来的な位置を保っていない<sup>(19)</sup>。ここまで紹介した石器の他に、裏池遺跡よりナイフ形石器が採集<sup>(20)</sup>、手光酒屋遺跡より黒曜石を素材とするナイフ形石器と珪岩(珪化木)を素材とする縦長剥片が出土している<sup>(21)</sup>。

こうしてみると、この地域には少なくともナイフ形石器を主とする石器群と細石刃を主とする石器群によって構成される二つの時期が存在したのが分かる。ナイフ形石器を主とする石器群には、剥片尖頭器や三稜尖頭器(角錐状石器)などが見られ、特に三苦遺跡出土の水晶や珪岩(珪化木)を素材とするものは<sup>(22)</sup>、手光酒屋遺跡出土の珪岩を素材とする縦長剥片の存在とともに、この地域の当該期の石材利用状況の特徴の一つとして考えても差し支えないであろう。珪岩(珪化木)は、古第三期層中に多く見受けられ、そこを供給源とした可能性が考えられる。その他の珪質の石材の供給源は、今後の課題の一つになろう。また北東側で接する宗像地域でも、剥片尖頭器や三稜尖頭器(角錐状石器)が確認されている<sup>(23)</sup>。石材は黒曜石やサヌカイトであり、珪質の石を素材にした石器は、現在のところ確認されていないが、形態や剥片剥離技術などの検討をすることによって、何らかの関連が見

かったもので、本来的な位置からの出土ではない<sup>(16)</sup>。下和白遺跡は三苦水浦遺跡と同一の丘陵上に位置し、谷に面した台地に立地するという状況も共通しており、一連のものと考えられる。19～24は太刀洗池遺跡採集の石器である。19～23はナイフ形石器、24は不定形の寸詰まりの剥片を素材とする台形石器である。19は横割ぎの剥片を素材とするが、いわゆる瀬戸内技法ではなく打面を交互に持つものである。20は不定形の縦長剥片、21・22は縦長剥片を素材とする。23の素材形態は不明である。石材は19がサヌカイト、20～24が黒曜石である。遺跡の立地は、立花山と三本松山とに挟まれた谷間で、今回扱う地域の中では最も山手に位置することになる。25・26は馬遠池採集の石器である。ともにナイフ形石器であり、25は黒曜石の不定形縦長剥片、26はサヌカイトの縦長剥片を素材とする。この他に、馬遠池および隣接する五毛池から、サヌカイトを素材とする横割の黒曜石を素材と

いだせるかもしれない。少なくとも採集資料が増加しているのは間違いなく、良好な状態の遺跡が見つかり比較検討が可能になるのを期待する。また石核が出土および採集された例が現在のところなく、剥片もしくは石器(tool)として遺跡内に持ち込まれた可能性が高い。細石刃を主とする石器群は資料が少なく、はっきりとしたことは言えないが、確認されている細石刃核は、いずれも半月底型の範疇にはいると考えられる。細石刃が確認されても細石刃核が確認されていない、もしくはその逆のパターンもあり、全くただの特異のための場所が遺跡として確認されているだけなのか、単に見つかっていないだけなのか、詳細は不明である。

さて、ここで吉留秀敏氏の「九州島内の遺跡群分布概略図」とこの地域との関連について考えてみたい。まず分布図の6：福岡・筑紫平野地域とこの地域の共通点として、ナイフ形石器を主とする石器群の様相として、剥片剥離行程の遺物が少ないことがあげられる。三苫永浦遺跡も出土した石器総数に占める石器(tool)と剥片の割合は高く、またSU07出土の破片は、本報告では図示していないが、石器(tool)製作時の最終的な調整を加えた際に作り出されたものと考えられる。石核は出土しておらず、前述したように剥片などの形で遺跡内に持ち込まれたと考えても差し支えないであろう。同様の状況は、三苫遺跡でも確認されている。また大型の器種に水晶やチャートといった珪質の石材を用いている状況は、三苫遺跡出土の資料に顕著に見られる。これは、福岡・筑紫平野地域に限ったことではなく、九州西北部の輝石安山岩の利用に対応する形で捉えられている<sup>(24)</sup>。ナイフ形石器を主とする時期におけるこの地域特有の様相としては、北東に隣接する宗像地域を含めて、剥片尖頭器や三稜尖頭器(角錐状石器)を多く持つことぐらいであろう。しかしこれは調査の進行上の一時的な現象である可能性も拭いきれないので注意が必要である。まとめると、この地域では層位的に検出された石器群というのは、本遺跡出土のものだけであり、個々の石器群の位置づけは推定の占める割合が非常に高く、現時点では避けるべきである。したがって福岡・筑紫平野地域の中にこの地域が含まれるかどうかははっきりしない点が多く、今後の精力的な発掘や採集活動による資料の増加に期待したい。

本稿を執筆するにあたって、吉留秀敏・平ノ内幸治・小畑弘己各氏より多大な援助をいただいた。この場を借りて感謝したい。(藤木 聡)

#### 註

- (1) 松尾健二・平ノ内幸治 1991 「福岡県粕原平野の旧石器-多々良川流域の採集資料」『福岡考古』15号
- (2) 福岡町教育委員会 井浦一氏の御教示
- (3) 吉留秀敏 1983 「九州における先土器時代の石器群集中分布の構造」『古文化談叢』11
- (4) 九州高等学校郷土部 1969 『すていし』創刊号
- (5) 福岡市教育委員会 1971 「下和白遺跡」
- (6) 日本住宅公団 1973 『鹿部山遺跡』
- (7) 山下実 1987 「藤ノ原砂丘遺跡の旧石器資料」『旧石器考古学』35
- (8) 古賀町誌編さん委員会 1986 『古賀町誌』
- (9) 山崎純男編 1993 「海の中道遺跡Ⅱ」福岡市教育委員会
- (10) (1) に同じ
- (11) (2) に同じ
- (12) (11) に同じ
- (13) (9) に同じ
- (14) 下山正一 1989 「福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層」『九州大学理学部研究報告-地質学』第16巻第1号
- (15) 西田大輔 1993 「夜臼・三代遺跡群」
- (16) (5) に同じ
- (17) 宇業町立歴史民俗資料館 平ノ内幸治氏の御教示
- (18) 原ノ辻型を含む数点の古形石器が馬造池より、またナイフ形石器が五毛池より採集されている。
- (19) (6) に同じ
- (20) (17) に同じ
- (21) (2) に同じ
- (22) 長尾伸、榎本義嗣編 1996 『三苫遺跡群 2』福岡市教育委員会
- (23) 平ノ内幸治 1995 「宗像地域の旧石器時代資料」『古代むなかた史をさぐる』
- (24) (22) の中で吉留秀敏氏が述べている。

## 第2節 三苦永浦遺跡群の縄文時代資料

### 1、はじめに

調査では縄文時代に所属する石器類が出土した。しかし、該期の遺構や土器類は発見できなかった。畑地造成などの開発により、遺構が失われたものか、本来の状況であるのか不明である。遺物は後出する時代の遺構内や攪乱、表土内に二次的に混入したものである。本地域では縄文時代についての研究や資料報告例が少ないことから、ここに再度まとめておきたい。

なお資料は、確実に縄文時代と判断できるものについて抽出し、所属時期と遺跡の性格について検討する。ただし、厳密な区分は困難である。

### 2、各時期の資料

縄文時代資料は、A、D、E、H、I地区で出土した。いずれも複数時期の石器が出土した。

縄文時代草創、早期の遺物はA、E、H、I地区の4カ所で出土した。石器は全て剥片石器であり、A・I地区では石鏃、E・H地区ではそれぞれ尖頭器、石匙、石鏃が出土している。尖頭器、石匙などは古銅輝石安山岩を用い、石鏃の多くは黒曜石製である。石鏃は多様であり、これらの石器類には時期幅がある。I地区の小型の三角鏃や局部磨製石鏃、H地区の五角形鏃などは、柏原F遺跡の調査成果からみて、早期初頭に位置付けられる。また、H、I地区の楕形鏃は押型文土器段階であり、早期後半に該当しよう。

なお、三苦永浦遺跡群において先行する細石刃段階の資料は、このH、I地区に出土し、旧石器時代終末から縄文時代早期にかけてこの場所が、何らかの有効な活動地点となっていた可能性がある。

次に縄文時代前期から中期の遺物としては、D、E、I地区において石鏃が出土している。石鏃は長身、鋸歯鏃であり、黒曜石を素材としている。地区ごとに形態差がある。

縄文時代後期から晩期には5箇所の地区で比較的豊富な遺物が出土した。石器には礫石器と剥片石器があり、前者としてE、I地区で石斧が出土している。剥片石器類には良質の黒曜石を素材とした剥片鏃、縦長剥片を利用した削器、つまみ形石器、また、縦長石核などが各地区から出土した。また、大型の古銅輝石安山岩剥片を利用した横長の削器がA地区の試掘時に出土した。剥片石器は石核の打面転移が著しく、剥片の形状も多分に不整形である。剥片を生産するの山口謙治氏の提唱する「類鈴桶剥片剥離技法」の範疇と見られる。こうした様相は福岡平野周辺において剥片鏃が多量に産出される後期中葉から晩期前半の中でも、より後出する時期であると考えられよう。礫石器は何れも軟質の石材であり、この時期に特徴的な「偏平打製石斧」である。A地区の大型削器もこの時期である。

### 3、まとめ

以上見たように本遺跡では縄文時代の各時期を通じて、何らかの生産活動の痕跡がある。しかし、後世の削平があるとはいえ、土器類の出土がなく、遺構も未検出である。石鏃などの石器生産は行っているが、定住的な生活拠点とは考え難い。湧水の多いH地区に遺物が多いことから、狩猟活動のキャンプとしての利用を考えるべきであろう。縄文時代後期以降には、A、E、I地区などの丘陵上や丘陵緩斜面において、偏平打製石斧や大型削器などを利用した植物食料生産も行われていたと考えられる。

(吉留秀敏)

(参考文献)

山崎純男編「柏原遺跡群Ⅰ」福岡市教育委員会(1983)

浜石哲也編「田村遺跡Ⅱ」福岡市教育委員会(1984)

## 第3節 三苦永浦遺跡の弥生時代資料

### 1、三苦地区の弥生時代土器編年

北部九州の弥生時代土器類の様相は、おおまかにみて旧国の筑前を中心とした西部地域と豊前を中心とした東部地域に分かれる。三苦永浦遺跡群のある粕屋部北部はこの両地域の境界に近く、福岡、早良平野などとは異なる様相がある。ここでは、三苦永浦遺跡群で出土した土器群の時期区分を出土遺物と、周辺の関連遺物を資料とし、本遺跡で遺構の最も多い弥生時代中期前半から後期初頭までに対応しておこなう。なお、土器型式・形式の分析作業を通じた詳細な編年の作業は改めて示したい。

〈1期〉 A地区 SC05住居出土土器、D地区包含層出土土器を基準とし周辺では古賀町花見遺跡第1号住居東側土器溜まりや、浜山遺跡1号住居の出土土器がある。

甕は、口縁端に断面三角突帯を貼りつけ、上面を平坦に仕上げるもの(A類)と、口縁部を「く」字形に折り曲げ、弱い如意形に仕上げるもの(B類)がある。A類には肩部に沈線や三角突帯を貼りつけるものがある。突帯上に刻目を施すものがあるが、前段階の前期末に比べて、出現比率は少ない。B類にも肩部に沈線を1~2条施すものや、三角突帯を付けるものもあるが、例数は少ない。これらの甕類の底部は厚く、上げ底となる。

〈2期〉 I地区 SC14、SX48出土土器を基準とする。周辺では、三苦京塚遺跡や古賀町花見遺跡第2地点2号住居土器がある。甕A類は、口縁部貼りつけの外方への引き出しが強まり、断面逆「L」字形となる。B類は屈曲が強まり、上面に粘土を貼りつけ端部の厚みを増すものが現れる。また、B類の端面を強くナデ、凹線状となるものがある(B2類)。肩部に沈線を施す例は激減し、中型より大きい器種では、肩部に三角突帯を付けるものが多い。突帯を2条付けるものも現れる。この段階に底部はなお厚いが、外方への張り出しは少なくなる。

〈3期〉 H地区 SX10出土土器を基準とする。甕A類は、口縁部外方への引き出しがさらに強まり、内側へも引き出す例が多い。口縁端がやや下に垂れるものもある。B類も引き出しと屈曲が強まる。また、B類の端面は強くナデられ、凹線状となる。肩部に沈線を施す例は激減し、中型より大きい器種では、肩部に三角突帯を付けるものが多い。突帯を2条付けるものも現れる。この段階に底部はなお厚いが、外方への張り出しは少なくなる。また、「く」字形口縁の端部を引き上げ、あるいは粘土帯をつけ、上部へ引き上げた、いわゆる「跳ね上げ口縁」系甕(C類)が現れる。C類には端面がB1類同様丸みをもつもの(C1類)と、強くナデて凹線状に仕上げるもの(C2類)がある。

この3期は、甕類のA・B類が主体を占める段階(3a期)と、逆転しC類が主体を占める段階(3b期)に分かれる。底部は次第に薄いものが増加する。

〈4期〉 H地区 SC07・SD08やI地区 SC33を基準とする。周辺では浜山・千鳥遺跡溝出土土器がある。甕A・B類は大型品や装飾性の強い器種を除いて激減する。かわってC類が主体を占める。甕C類では、C1類に対してC2類が圧倒的に多い。底部は薄く仕上げられ、抜地部から直線的に広がるものが現れる。

以上の時期区分を、甕類の特徴からこれまでの編年とを比較すると、1期は城ノ越式段階、2期は須玖Ⅰ式段階、3期は須玖Ⅱ式の古段階、4期は須玖Ⅱ式の新段階に対応しよう。これに後続する段階は本遺跡では明確でないが、古賀町鹿部山東町遺跡の土器溜まり出土土器類が該当しよう。

## 2、H地区溜井群の構造と性格

H地区において検出した溜井群は北面する丘陵斜面で、標高15~25mの位置にある。9基の「溜井」を検出した。これらの溜井は谷の斜面に沿って、おおよそ南北に主軸を取り、構築されている。すべて切り合いはない。遺構は本来の谷地形を掘削したもの(SX10、SX50、SX51、SX70)と、低丘陵上に掘削したもの(SX20、SX30、SX40、SX90、SX91)に分かれる。

検出した溜井は、平面形はすべて不整長楕円形であり、規模で3群に分かれる。大型のSX10は、検出面で南北約53m、東西約12mを測る。深さは南端と北側最深部で約6mのレベル差がある。中型は、長さ20m、幅10m前後で深さ2m以下で6基ある。小型は、長さ5m、幅2m前後、深さ1m未満で2基ある。断面はSX10が緩いU-V字形を呈し、他は逆台形を呈する。大、中型は基盤の第三紀層を掘り込んで造られている。SX10とSX40は床面が湧水のある礫層に達している。これらの遺構には、斜面下方にあたる北側に溝状の遺構が付設する。溝は直接谷の下方に延びるものと、別の溜井に連結するものがある。また、SX10は遺構北側と北東側の二カ所に溝があり、後者の溝は低丘陵の尾根を越えてSX40に連結している。同様の溝はSX70とSX50の間にもある。これらの丘陵尾根を切る溝の底の標高は、尾根の頂部付近が最も高く掘られている。SX10、SX30、SX50には、石組の「暗渠」状遺構が検出された。これは一旦掘った溝の底に角礫を詰め、再び土や粘土で埋めている。石組の間には流理のある水成堆積物が形成されていて、隙間に水の流れがあったとみられた。また、溜井内部の斜面には多数の柱穴や枕跡がみられる。直線的に並ぶものがあり、土止めや堰状の施設があった可能性がある。

溜井の築造された時期は、内部から出土した遺物で時期を推定すると、まず、3a期(須玖Ⅱ式古相)にSX10が造られ、順に3b期(須玖Ⅱ式新相)にSX50、SX80、高三礫式段階にSX30、SX40、下大隈式にSX20、SX70、西新町式にSX51が造られている。SX90、SX91は上器の出土がなく不明だが、SX20とSX70の間にあり、関連する可能性が高い。以上のように、この溜井群は同時期に造られたものではなく、順に新たなものを追加するあり方をとっている。その場合、まず、最初に湧水の多い谷部にSX10、SX50が造られ、その後、間の空間を埋めるように順次設けられている。連結された溝からSX10は高三礫式段階まで、SX50は下大隈式の段階まで利用されていることが分かる。ただし、SX50は埋没後布留式古段階には整地され、水田として利用されていることからみて、溜井の改修、特に掘り直しは行われず、築造後は自然に埋没されるままである。さらには周辺に集落が造られ、その廃棄物が溜井に投棄されている。関連集団によるこの溜井の維持管理は極めて不十分といえる。このことも次々と新たな溜井を造る背景の一つであったと考えられよう。

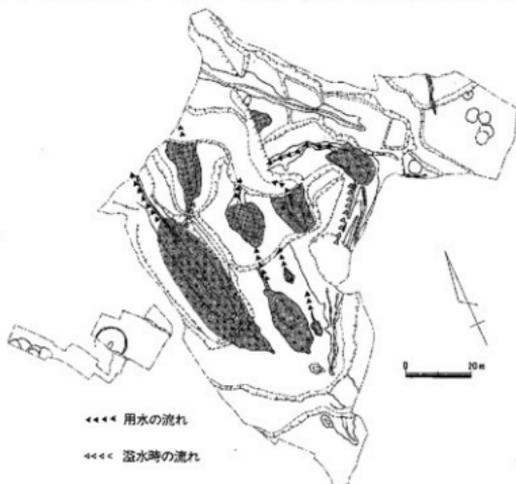


Fig. 213 溜井群の導水構造

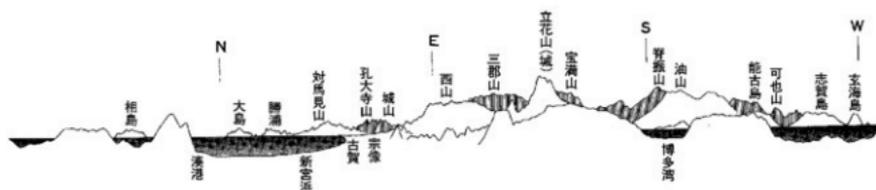


Fig. 214 J地区から見た360°の眺望

遺構内の埋没土からみてこの遺構が造られて後、帯水環境があったとみられる。しかし、珪藻分析では通常の安定した貯水の状態は考え難く、断続的、特に季節的な貯水が行われた可能性もある。

検出した溜井は弥生時代中期後葉以降に築造された貯水施設と判断され、その規模から水田灌漑用を主目的とするものと考えられる。技術的には、掘削主体の施設であり、床面の高低差から、北側にある程度の築堤を行っていた可能性が高い。貯水は湧水とともに雨水をも集約していたと見られ、SX70に連なるSD71、SD72は谷部に集まる雨水をSX70へと導く目的があるとみられた。この溝は、流水のためクレバス状に抉れ、また一部はトンネル状となっている。

なお、低丘陵尾根を越えて掘削された溝(SD13、SD54～57)は、こうした雨水により貯水量が許容範囲を越えると、隣接する溜井に分水、貯水できるように設けられたものと考えられる。なお、本遺構にともなう導水、井堰、水門、築堤技術など不明な点は多く、今後の検討課題である。

また、この溜井からの用水により、経営された水田は谷下方の沖積地に予測される。その範囲は新宮町湊集落のある新砂丘の後背地であり、地形から広い可耕地は望めない。水田経営とこうした灌漑施設の評価については別稿で示したい。

### 3、J地区集落の性格とその評価

J地区は調査区内東側の最高所付近にあり、標高約42～37mを測る。遺構は北に延びる狭い尾根に沿って竪穴式住居2、土壇2、柱穴などが分布する。遺構のある位置からの展望は良く、博多湾や玄界灘を始め、周囲の半径約30kmの島々を見渡すことができる(Fig. 214)。ただし、住居は玄界灘からの風雨を直接受ける位置に設けられており、住環境が良くないことは明かである。

住居は何れも比較的大型である。SC04は径約7mであり、1回の建て替えがある。火災により倒壊したものと見られた。SC07は北側斜面にあり、約1/2残存している。径約6mである。土壇はSC04の北側4mにあり、二基が切り合う。何れも平面方形であり、2.0×1.5m前後、深さ約0.2mである。

これらの遺構は、同時期に存在したのではなく、住居1と土壇1が一単位となり、2回建て替えられた結果と見ら



Fig. 215 北部九州における弥生時代中期の高地性集落と連絡網の推定

れた。両者の時期差は少なく、3期の古相と新相に対応する。

J地区で検出した遺構は、立地環境や規模、数から一般集落とは考え難く、いわゆる「高地性集落」と考えられる。住居の建て替え、土壌の切り合いなどから一定期間存続していたとみられる。

北部九州の弥生時代中期後半の高地性集落は、北九州市皿倉山遺跡、福岡市大谷遺跡、唐津市港中野遺跡など近年調査例が増えてきた。Fig.215では、J地区と共にその位置を示した。北部九州の海岸線沿いに点在しているが、現在のところ、これらの遺跡は直接には見通せない。しかし、J地区から眺望の利く前原市可也山を介すると湊中野遺跡を、宗像市孔人寺山付近を介すると皿倉山を、それぞれ望むことが可能である。現時点では予測の域を出ないが、これらの遺跡は関連し、ある種の連絡網を形成していたのではなからうか。未発見遺跡や、出土土器類からの同時性の問題も未解決であり、背景となる社会的動静など今後の課題は多い。

#### 4、永浦遺跡における弥生時代鉄器、石器類の組成と構造

三吉永浦遺跡では弥生時代中期～後期の、石器類が多量に出土した。また、併せて鉄製品も出土した。一遺跡において主要生産具であるこれらの変遷を見ることが可能である。これは地域の生産体系の検討と併せて、北部九州の中での地域性を見る上でも基礎資料となろう。若下の検討を加えたい。

まず、弥生時代中期前半（1・2期）には石鏃（磨製、打製）、石斧、石包丁、砥石、石錘がある。このうち1期までは磨製石鏃と共に黒曜石製の石鏃が確実に利用されている。しかし、2期には黒曜石の利用が明確でなく、少なくともこの段階に剥片石器の使用が減少したと見られる。1期には砥石があり、2期には増加する傾向がある。2期のSX14には小型の板状鉄斧があり、鉄製品の利用が開始されたと見られる。石鏃には釣鏃と漁網鏃があるが、この段階の量は少ない。

中期後半（3・4期）は石器として石戈、石斧、石包丁、磨石、くぼみ石、砥石、石錘、浮石などがある。剥片石器類はない。石戈は武器形石器であり、先端部に欠損がある。I地区採掘の石剣破片も形態からこの時期と見られる。石斧は大陸系とは異なり、薄みのものであるが、刃幅は広く、大型利器である。鉄器に小型の袋状鉄斧があり、石斧との使い分けがあったと見られる。石包丁のなかに立岩産の石材がみられる。石鏃には釣鏃と漁網鏃があり、多様化、増加する。漁網鏃には有頭石鏃と礫石鏃がある。礫石鏃は重量が近いものが多い。K地区SC01では、住居床面に火災を受け、散乱したとみられる一群の石鏃がある。出土状態から見て石鏃が装着された漁網が保管されていたと推定される。漁網は攪乱で失われた方も想定すると30～40個あったとみられ、一張りの漁網の大きさを推定することができる。I地区SC02ではやや大きい中型の礫石鏃がある。

後期前半には石包丁、浮石、砥石、石鏃などがある。鉄器はSX40で不明の鉄製品が出土している。石鏃には有頭石鏃が失われ、有溝石鏃があるが、多くは中期のものと変化ない。

後期後半には磨石、砥石、石鏃がある。鉄器には柱状の鉄製品、釣針がある。石鏃はすべて礫石鏃であるが、小型、中型、大型の3群に分かれる。このうち大型の石鏃は重量が10kgを越えるものもあり、船舵が追い込み漁に伴う袋部の大型鏃と見られ、後者なら漁網の改良を想定させる。こうした大型石鏃を神聖化し、住居に持ち込むことは、民俗事例にも残されていて興味深い。また、この段階に玉類の素材となる碧玉、水晶の剥片が多く出土する。再び剥片剥離技術が認められるが、中期段階までの当該技術の継承とは考えられず、石材と共に、改めて入手した技術と理解できよう。

## 5、三苫永浦遺跡群の集落変遷とその背景

三苫永浦遺跡の調査によって、この丘陵地帯で集落跡を調査した。人類活動の痕跡は旧石器時代や縄文時代もある。しかし、本格的な定住は弥生時代以降である。弥生時代には同じ丘陵に近接して集落、溜井群、高地性集落などがあり、背景に共通する集団を想定できる。ここでは、こうした弥生時代に焦点を当て、三苫永浦遺跡の集落の推移を考察する。

弥生時代中期初頭にはA地区やD地区に集落が出現するが、継続はしない。中期前半にはI地区に集落が造られる。西側に隣接する三苫京塚遺跡でもこの段階に集落ができるが、継続していない。

中期後葉にはH・I・J・K地区に集落が造られる。このうちI地区の規模が最も大きく、拠点集落であったと見られる。J地区は高地性集落であり、中期後半(3a・b期)の間だけ利用されている。H・K地区の集落もJ地区と同様に中期後半～末(3a～4期)が主体である。これらは独立した集落と見ると、I地区から一時的に分離したか、移動した集落と見られよう。

これらの集落からは石包丁や石鎌などの農耕具とともに、石錘などの漁労具も多く出土し、この集落の生産基盤は、半農半漁の状況であったと見られる。

三苫永浦遺跡の立地する湊川流域では、中流域の夜臼遺跡を拠点に早くから水田農耕が開始されたと見られる。中期初頭には下流域の三苫地域へも進出し、谷部の水田の造成が始まる。集落は当初日当たりの良いA・D地区や三苫京塚の南向きの緩斜面につくられた。中期後葉になると、開墾地の拡大にともない次第に水掛りの悪い谷部へ水田化が進み、こうした中でH地区の「溜井」の築造が行われた。これは水田用の灌漑施設である。溜井は弥生時代を通じてこの主な用水であるが、最初に設けられたSX10が最も大きい規模である。その築造を可能にした労働力は大きい。I地区などの集落レベルを越えた湊川流域を単位とする協業を考慮しておきたい。

高地性集落は西日本に広く分布し、抗争などの社会の緊張状態と関係して出現すると説かれている。弥生時代中期後半の北部九州全体の動向とも検討が必要である。J地区だけでなく、先に記したH、K地区の集落の成立もこうした状況を背景とみる動向を考えておきたい。

弥生時代後期中葉～古墳時代初頭には、I地区において引き続き集落形成がある。また、H地区の溜井群も構築が続いている。住居形態は長方形、方形に変化する。生産具は中期以来の半農半漁の様相が継続し、併せて碧玉(緑色片岩)や水晶などの玉造りの関連遺物が出土した。弥生時代の碧玉の玉製作の関連遺物は福岡市の博多遺跡群、比恵遺跡群に次いで北部九州で3例目の発見であり、本集落が漁業以外に交易などの海業に関与していたことを示唆する。

I地区において、古墳時代前期の集落は途絶えるが、同後期(6世紀代)になると再び集落の形成がみられる。なお、この時期、E・F地区には小規模ながら前方後円墳(永浦1・2号墳)が築造される。被葬者は少なくとも湊川流域の首長層であり、湊港を見下ろすこの位置が選地されたことは、ここが本地域の中で重要な位置を占めていたことを示す。永浦1号墳に後続する三苫京塚古墳では、豊富な副製品と共に朝鮮半島製の三葉環頭太刀が出土し、こうした立地条件と無関係とは考え難い。7世紀代にはD地区に小集落が形成される。鉄生産も行う集団であり、7世紀中頃には竪穴式住居から掘立柱建物に変わる。I地区でもこの時期の遺物や柱穴が見られるが、建物は復元できていない。この時期に造られた永浦3号墳は、この地域の首長層の最後の奥津城であったと見られる。

8世紀以降の集落は不明であるが、丘陵から下りた湊川沿いの新砂丘上に集落を移したと推定される。新宮浜に産出する砂鉄を利用した鉄生産は前段階から開始されるが、この時期以降本格化し、この地域の重要な生産活動となることが予測される。

(吉野秀敏)

## 6. 福岡市、三苫永浦遺跡の珪藻分析

### 1. はじめに

珪藻は、幾何学的な模様を持つ珪酸体の殻を有する単細胞藻類である。珪藻類全体の分布は淡水域から海水域のほぼ全ての水域環境にわたるが、個々の種は様々な環境要因に適応をみせ、それぞれ特定の生息場所を持つ。珪藻の化石は顕微鏡サイズながら、水成堆積物中から保存よくふつうに多産し、また化石群集の種の組成は堆積環境をよく反映するため、古環境の復元の指標としてよく利用されてきた。

ここでは、三苫永浦遺跡から検出された溜井状遺構について珪藻分析を行い、堆積古環境の推定を行った。

### 2. 試料

調査対象は、弥生時代中期後半～後期初頭とされる溜井状遺構(SX10、SX20)である。試料は、SX10の4層(黒褐色～黒色有機質粘土)と5a層(暗灰褐色粘土)、SX20の4層(灰褐色シルト質粘土)と5a層(灰褐色シルト質粘土)の計4点である。

### 3. 分析方法

風乾後、適量を秤量した試料に約15%の過酸化水素水を加えて加熱し、有機物の分解・漂白および一般堆積物と珪藻殻の分離を行う。反応終了後蒸留水を注ぎ、遠心分離をかけて上澄みを捨てることにより珪藻殻の濃集を行う。この操作を数回繰り返した後、適当な濃度に調整した珪藻懸濁液0.5ml程度をカバーガラスに滴下し乾燥させる。乾燥した試料上にプリユラックス等の封入剤を滴下し、スライドガラスに張り付け永久プレパラートを作成する。

検鏡は、油浸1000倍で行った。珪藻化石群集の組成を把握するために、メカニカルステージを用いて任意に出現する珪藻化石を同定・計数した。なお、珪藻殻が半分以上破損したものについては計数・同定は行っていない。珪藻の同定については、K. Krammer & Lange-bertalot (1985～1991)などを参考にした。また、古環境の復元のための指標としては、安藤(1990)の環境指標種群を主に参考にした。

### 3. 結果

珪藻化石の環境指標種群の設定は、安藤(1990)が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、また海水種と汽水種は不明種としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明種として扱った。各指標種群の概要は、以下の通りである。なお、胞子化石は、無色透明の球状～滴状の胞子類で、過酸化水素水で処理した後に残留していることから、珪酸質から構成される殻である。これらは、珪藻化石の休眠胞子類の化石殻と思われる。

[上流性河川指標種群 (J)]：上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。

[中～下流性河川指標種群 (K)]：中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。

[最下流性河川指標種群 (L)]：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。

[湖沼浮遊生指標種群 (m)]：水深が約1.5m以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼である。

[湖沼沼沢湿地指標種群 (N)] : 水深が 1 m 内外で、一面に植物が繁殖しているところ、および湿地である。

[沼沢湿地付着生指標種群 (O)] : 沼沢ならびに、前述した湿地で付着の状態での優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群 (P)] : ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群 (Q)] : 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である (陸生珪藻と呼ばれている)。

#### 4. 結果

分析の結果、SX10の4層では *Pinnularia borealis* や *Hantzschia amphioxys* が検出された。これらは、シメジメとした場所に生育する陸域指標種群である。したがって、同層の堆積当時は、水域ではないがシメジメとした環境であったものと推定される。これは、堆積物が有機質粘土からなることも調和的である。

SX10の5a層やSX20の4層・5a層では、珪藻化石は全く検出されなかった。なお、珪藻の休眠胞子と考えられる胞子化石が比較的多く検出されたが、この胞子は珪藻が水域でない場所において休眠状態にあると考えられている。したがって、各層の堆積当時は、珪藻が生育するような水域やシメジメとした環境ではなかったものと推定される。

(株式会社 古環境研究所 杉山真二)

#### 引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理 42-2p.7 3-88.  
 Krammer K. and H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae Susswasser flora von mitteleuropa 2(1) p.1-876.  
 Krammer K. and H. Lange-Bertalot (1988) Bacillariophyceae Susswasser flora von mitteleuropa 2(2) p.1-596.  
 Krammer K. and H. Lange-Bertalot (1991) Bacillariophyceae Susswasser flora von mitteleuropa 2(3) p.1-576.  
 Krammer K. and H. Lange-Bertalot (1991) Bacillariophyceae Susswasser flora von mitteleuropa 2(4) p.1-436.

珪藻化石	種群	SX10		SX20	
		4層	5a層	4層	5a層
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	5	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	?	1	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	?	1	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i>	Q	45	-	-	-
Unknown	?	2	-	-	-
骨針化石		7	3	1	7
孢子化石		41	8	44	40
堆積物 1 g 中の個数		2.5x10 <sup>4</sup>	7.1x10 <sup>3</sup>	2.7x10 <sup>4</sup>	3.1x10 <sup>4</sup>

Tab.3 珪藻化石産出表

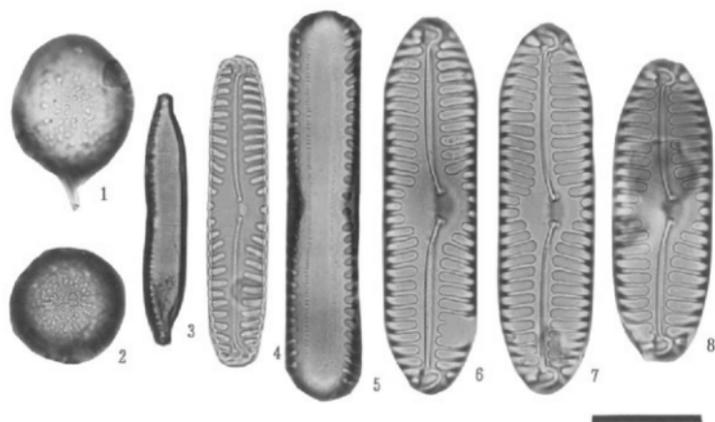


Fig. 216 三舌永浦遺跡の珪藻化石(スケール:10 $\mu$ m)

1~2, 胞子化石(SX20, 4層) 3, *Hantzschia amphioxys*(SX10, 4層)  
 4~8, *Pinnularia borealis*(SX10, 4層)

## 第4節 三苦永浦古墳群の成立と背景

### 1、三苦永浦1、2号墳の系譜について

三苦永浦遺跡群の調査でこれまで未確認であった古墳3基が発見された。何れの古墳も破壊が著しく、十分な調査調査成果が得られたとは言えない。しかし、発見された古墳はそれぞれの築造時期における和臼～下府地域では大型の古墳である。特に1、2号墳は小規模ながら前方後円墳であり、古墳時代における本地域の首長墓と考えられる。本古墳群のある新宮浜一帯は、これまで前方後円墳がほとんど知られていなかった。唯一、宗像群福岡町の西郷川左岸に全長約20mの亀山古墳が単独で確認されているのみであった。周辺を見渡すと前方後円墳が系統的に追跡できるのは東側では宗像郡津屋崎町の勝浦浜一帯の奴山古墳群、西側では博多湾に注ぐ多々良川の流域である。それぞれの地域では全長50～80m規模の前方後円墳が数十基あり、地域ごとの首長墓系譜を示している。しかし、新宮浜地域とは平野、水系を異にしている。ここでは改めて、本古墳群とその被葬者についての系譜を探り、その位置付けを試みてみたい。

永浦1号墳は、長さ28mの規模である。古墳は北側から見上げることが重視され、北側の墳丘、周溝を入念に造られ、南側は省略されている。石室は、単室の横穴式石室であり、内法は長さ3.1m、幅1.6～1.9mを測る。石室がやや古い形態を残すものの、こうした様相は粕屋郡北部から宗像郡域に多く認められる特徴である。副葬品や供献品から須恵器型式のTK10、およそ6世紀中頃の築造である。

永浦2号墳は1号墳の北西約100mにある。墳形や主体部の形態、規模、軸が類似する。古墳の規模は全長約26mと推定した。石室は単室の横穴式石室とみられ、内法は長さ約2.8m、幅約1.6mを測る。石室の周辺から出土した須恵器器台片からおおよそTK23～MT15、6世紀前葉の築造と見られる。

永浦1、2号墳は調査の結果、何れも前方後円墳であると復元した。また、同時に造られたものではなく、先に2号墳が6世紀初頭前後に、その後1号墳が6世紀中葉に造られている。両者の時期差は少なく、1/3世紀以下と考えられる。古墳の規模は何れも30m以下であり、古墳主軸や石室の開口方向もほぼ共通する。こうした点から2つの古墳は、累代墓の可能性が高い。

2つの古墳は、北側の湊港、湊川、新宮浜などを見渡せる位置を連地している。被葬者に係わる集団は、この北側の平野に活動拠点を置いたと見たい。

さて、この新宮浜地域では先の亀山古墳以外に前方後円墳は未確認である。弥生、古墳時代の集落や墳墓の多い大根（花鶴）川流域に今後の発見も期待される。しかし、現時点では少数ながら、この新宮浜地域という地理的環境を背景とした単位での集団により、単一の前方後円墳を含む首長墓の系譜があると予測される。

永浦2号墳に先行する古墳としては、同じ丘陵にある新宮町人丸古墳（5世紀前葉）があり、1号墳に後継する古墳は、福岡市三苦塚古墳（6世紀後～末葉）がある。いずれの古墳も墳壙の確認が充分に行われていないことが惜まれる。また、福岡市飛山古墳は丘陵頂部に立地し、石室や副葬品の豊富さからも、小規模群集墳ではなく、本地域の代表的な首長クラスの古墳として把握されよう。飛山古墳の墳丘は、形態、規模も不明であるが、円墳ではない可能性も指摘しておきたい。

（吉留秀敏）

## 2、三苦永浦1号墳出土の弓金具

### 1) はじめに

三苦永浦1号墳からは7点の弓金具が出土した。この金具は、かつては用途不明金具、留金具、あるいは馬具と共存する例が多いためか、その一部として報告されていたが、その後、市毛敷氏がそれまでの報告例を整理し(市毛1978)、田中新史氏の分析によって弓の付属品とする説が提示された(田中1979)。更に福島県の中小田横穴において弓弭金具とともに、弓本体が遺存し、そこにはめ込まれた状態の例が出土するに至り(櫻村1988)、その認識は揺るぎないものとなった。このように過去の研究によってその詳細は、ほぼ言い尽くされた観がある。そのため今回特に新しい知見は期待できないが、三苦永浦1号墳出土資料の所見と共に、これを機に福岡市内出土資料の整理と、福岡県内の集成を行い、若干の検討を試みるものである。

まず、これまでに解明された弓金具の基本的構造を再確認しておく。最も遺存状態の良い飾り弓である中小田横穴例では、この金具は弓の弭に近い部分に末弭側4本、木弭側1本以上が取り付けられている。その取り付け方法は、弓の本体に円孔をあけ、円筒形にした金属の薄板をこの孔に入れて、はみ出した両端を花卉状に切り削いて弓本体と固定し、更に鋸状の芯金を差し込んで反対側をたいて抜けないようにしたものと考えられている(市毛1978; 田中1979; 櫻村1988)。多くの場合弓本体は腐朽してしまっているので、出土した金具の皮金部分には木質の痕跡のみが遺存する。すなわち皮金の折り返しの内側に残るこの痕跡が弓の太さを反映していることになる。

### 2) 三苦永浦1号墳出土の弓金具

今回の調査で石室内から7点の弓金具が出土した。

各部分の寸法は、後の表に示した通りである(Tab. 4)。この7点をよく見ると、皮金の幅が5mm以上の太い個体群A(1、2、3、4、5)と、4mm台の細目の個体群B(6、7)に分れることが分かる。これらを実体顕微鏡で観察すると、その違いはより明確になり、金具の上下面の木目に、大きな違いが見える。A群では放射組織と呼ばれる木材組織が金具とほぼ平行で、これに導管が直行する。B群では逆に導管が平行し、放射組織が直行している。古墳時代の弓は丸木弓とされており(上原1993)、木弭と木頭で木取の方向が違うことは考えられない。A、Bの違いは2本の弓の存在を示すものであろう。

注目の木質遺存の幅は、計測可能な6本のうちAの4が26.4mmで最大、同じく1が23.5mmで最小、それ以外の4本は24.5mm前後(±1mm)とほぼ近い値を示している。この1と4の幅の差が、弭側と木頭側の太さの差を示しているのであろう。出土位置は石室の袖部分で、40cm×50cm程の範囲からほぼまとまって出土した(Fig. 36)。方向的には弓の本体を想定させる並び方はしておらず、7点がどのように配置されていたか等は分からないが、Aについては木質遺存部分の幅が細いものから太いものへと並んでおり、注目される。当該古墳の場合、石室石材が抜き取られ内部も荒らされており、弓金具がどの程度原位置を保っているか定かでは無いが、たとえ追葬に伴う副葬品の片付けや盗掘による攪乱があったとしても、7本というまとまった数が出土していることは、それほど失われていないことを示唆するものであり、とすれば、移動があったとしても、ある程度腐朽する以前、すなわち金具が弓本体から脱落する前と仮定できる。また逆に、弓金具の出土した袖部分が比較的擾乱を免れたと仮定するならば、この部分に立て掛けられていた2本の弓が、腐朽して崩れ落ちた状態とも見て取れる。

個々の構造は、鏝のため外見では分かりにくくなっており、皮金と芯金の境目も不明瞭である。芯金の太さはわずかに見える部分や途中で折れて断面が見える部分の観察で、3mm前後と考えられる。皮

金の折り返し部分は錆による変形や欠損などが有り、はっきりした折り返しは見られないが、7点のいずれを見ても花卉状に切り開いた痕跡は見られず、元々明瞭な花卉状は呈していなかったものと思われる。

またB群の2個は芯金が片側に寄っていて、鉄頭の突出部分の割合が左右で異なっている。A群の4点にはこの特徴は見られない。

### 3) 福岡市内出土の類例 (Fig.218、219、Tab.5)

次に、福岡市内の類例資料を見てみたい。福岡市内ではこれまでに17遺跡から44点の出土が報告されている。その内容は Tab.5に示す通りである。

以下、個々の資料について特徴的なものを選び出し詳細を記すと共に、実測できた資料の図と各部分の計測値を掲載する。(Fig.218、219 Tab.5)

#### 三苦塚1号墳 (69)

今回の調査地の谷を一つ挟んだ丘陵上に位置する。鉄地金銅張のイモ貝をはめ込む型式の雲珠、辻金具が出土。伴出した須恵器はTK-209型式期に相当するが<sup>9)</sup>、この古墳の馬具を検討した宮代栄一氏は、この時期の馬具の他に、更にもう一段階新しい時期の馬具があることを指摘している(宮代1995)。

#### 柏原古墳群A-2号墳 (71)

墳丘は不明瞭ながらも全長約40mの前方後円墳とされている。副葬品も鉄製ながら馬具のセットや、工具類など豊富に持つ。TK-209-217型式の須恵器が出土している。

柏原古墳群からは、このほかにE-1号墳、G-1号墳からそれぞれ2本ずつ出土している。時期はいずれもTK-217段階と、A-2号墳より新しい。

#### クエゾノ5号墳 (76)

出土した須恵器はTK-47型式に相当する。この他には鉄槌などの鍛冶工具が出土している。

弓金具は2点出土した。1点は途中で折れ、もう1点も錆による変形が著しいが、そのことを差し引いても、他の例とは形態的に異質な印象を受ける。本例の皮金端部の折り返しは、木目から判断した弓の真上(断面方向)から見ると、円を描くように湾曲しているのが分かる。錆によって大きく変形した結果にも見えるが、その内側には全体に木質痕が残る。この反対側の皮金端部も同一方向から見ると木質遺存の線が、同様に弧を描いている。左右の弧の推定線をつなぐと円になり、これは、まさに弓本体のシルエットが浮かび上がったものと推測できる。この円は直径18mmを計る。

また実体顕微鏡による観察では鉄頭部に、非常に薄く層状に剝離している箇所が観察された。この部分の一番外側は黒くて光沢があり、その下に赤茶色の同じく光沢のある膜が見られ、更にその下に地金の赤い錆が見える。このことから、漆の塗膜が残っているものと思われる。これ以外にも重留A-1号墳、早苗田C-3号墳例において同様の漆状の黒く光る部分が観察された。

#### タカバン塚古墳 (75)

2本の弓金具が出土した。木質は錆と同化しながらも比較的よく残る。TK-10-TK-217の幅広い時期の須恵器が見られるが、弓金具がどの時期に副葬されたかを知る手掛かりは無い。

#### 重留A-1号墳 (78)

弓金具は4点出土した。このうち皮金だけが残る個体に、花卉状の折り返しが明瞭に見られる。4弁が観察できるが、幅、形とも不揃いである。皮金の厚さは約1mmを計る。出土した須恵器はTK43-209型式に相当する。

#### 野方D-1号墳 (83)

報告書には掲載されていない資料である。錆びによる変形が著しいが、左右1弁づつだけ、皮金の折り返しが良く残っている。間隔的には4弁に復元される。またこの個体には、本体と平行の木質が見られるが、この木質は皮金を越えて鉄の側面にまで及んでおり、何か別の木質が二次的に付着したものと考えられる。

#### 高崎2号墳 (84)

今宿バイパス建設計画に伴い、福岡県教育委員会によって調査された。福岡市内の例では最多の8本が出土。金銅製の單鳳環頭や鉄地金銅張の馬具一式等、豪華な副葬品を持つ。須恵器は三木の脚をもつ有蓋壺など特殊なものも含むが、環蓋類は概ねTK-43-209型式に相当する。

以上概観した結果、全体の印象として、皮金の折り返しの大きさや、鉄の大きさに若干の差が認められるものの、大きな個体差は無く、型式分類や時期的な変化をたどることは難しい。ただし、三苦永浦1号墳のB群に見られた様な、鉄の突出の割合が左右で異なる例が、幾つか見受けられた。(柏原A-2号墳、同E-1号墳、重留A-1号墳、タカバン塚古墳等)当然のこととして、芯金が皮金より極端に長いものほど、このような特徴を示し易い。この原因としては、弓金具が地面と垂直かそれに近い状態で刃が置かれていたために、このような状況で錆びて固定されたといったことが考えられる。つまり、これは錆びる前は皮金の中で芯金が動く構造であったということを示しているものと思われる。

年代的にはクエゾノ5号墳出土例が突出して古く、5世紀代に属する可能性を持つ。また、三苦永浦1号墳の墳丘から出土した須恵器がMT-15型式まで溯り得る可能性があるものの、石室内の遺物とどの程度結び付くかが問題であろう。その他はTK-10~217型式並行期に集中するが、追葬やそれに伴う石室内の攪乱、盗掘のため、弓金具がどの時期に属するのかが判断することは不可能と思われる。しかしこの年代観を踏まえたくて、敢えて新古を知るための材料を探すとすれば、

1. 不定形なものから、真っすぐな整ったものへ
2. 太いものから細いものへ
3. 折り返しの大きいものから小さなものへ
4. 鉄の突出が少ないものから、多いものへ

といった点を挙げる事ができるかもしれない。そうすれば永浦1号墳のAとBも時期差として捉えることができる。しかし、そうなる今回は須恵器の年代観との間にずれが生じる等、問題も多い。可能性として今後更に検討したい。

また、実見した資料の内、同一古墳から複数個体出土している例で、永浦1号墳のように複数にグループ分けできる例は見い出せなかった。

属性の傾向では、前方後円墳の出土は少なく、多くは群集墳の中の円墳である。しかし同一古墳群内では副葬品の豊富な古墳に副葬されている。

内部主体は横穴式石室が圧倒的だが、出土する古墳の多くが後期以降ということで時期的な原因によるものであろう。

他の副葬品との共伴率は、高い順に、須恵器(100%)、鉄鎌(100%)、続いて刀子を中心とする工具(88%)、玉類(71%)、耳環(59%)、馬具、土師器(53%)、刀剣(41%)の順となっている。福岡市では甲冑との共伴率は皆無であった。元々甲冑の出土例が少ないことに加えて、これもまた時期的に重ならないことも原因の一つと考えられる。この数字をより正当に評価するには、それぞれの遺物が、もともと古墳の副葬品としてどの程度普遍的かを示す数値(仮に副葬率とする)との比較が必要

要であろう。福岡市内の後期古墳で副葬品の内容が分かっている、なおかつ報告されている古墳約260から算出した数値は以下のとおりである。(不明確なものも数字に含めている)

須恵器87% 土師器51% 玉類31% 耳環31% 工具類(農具、刀子等)38% 刀剣25% 馬具18% 甲冑1%

この結果、全体に弓金具との共伴率が副葬率を上回っており、この金具の出土する古墳が比較的豊富な副葬品を持っていることが、あらためて確認された。中でも馬具は、その差が顕著に表れていて、共伴率の高さが裏付けられた。

出土した古墳の地域性を見ると、福岡市の北東端の三苫、和自地域に3箇所、他はすべて早良平野の辺縁部に数多く存在する群集墳に分布が限られている。後者を更に細かく見ると、特に室見川の右岸、樋井川上流部分に分布の中心があり、ここだけで8箇所と、総出土数の半数近くを占める。残りは室見川左岸、飯盛山から延びる丘陵部に広がる古墳群に属する。東の月隈丘陵周辺や西の飯盛、長垂向山を結ぶ丘陵の西側の古墳集中部には、今のところ存在しない。これらの地域の古墳は他と遜色無い副葬品を持つにもかかわらず、弓金具は見られない。

#### 4) 県内出土類例の集成 (Fig.220, Tab.6)

更に視点を福岡県内に広げてみたい。ただし県内の資料については、すべて実見することができなかったため、情報のほとんどは各報告書に頼らざるを得なかった。別表に示した通り福岡市内を除く福岡県内では67例の出土を確認した。この他にも数例が田中新史氏の集成に掲載されているが(田中1979)、報告書の確認できなかったものについては含めなかった。また今回は限られた資料の中から集めたものであり、今後この数は更に増加することが予想される。

状況はこれまで見て来たものを大きく逸脱するものではない。円墳、横穴式石室からの出土が圧倒的で、共伴率も市内の場合とあまり変化はなく、鉄鏃(94%)、須恵器(90%)、工具(67%)、玉類(60%)、耳環(58%)、土師器(55%)、馬具(46%)、刀剣(45%)の順となっている。甲冑との共伴率は3%と、やはり他の副葬品に比べて極端に低い。田中氏の分析とは設定をやや変えているが、刀剣が馬具の数値を上回っている等、全国的なデータとは若干の相違を示す。

地域的には、宗像、福岡市、朝倉、八女といった部分に集中しているが、中でも宗像市の中央部は隣接する二つの古墳群から10例(一覧表の21-30)、那珂川町東端部の春日市と接する地域では、隣接する三つの古墳群から6例(一覧表の35-40)と、際立った集中度が注目される。

#### 5) まとめ

最後にこれまでの結果を踏まえ、幾つかの問題について、少々考えてみたい。

##### ◇出現はいつか

福岡市のクヱゾノ5号墳例が5世紀代に遡る可能性を持つ。更に県では、八女市の立山山23号墳が内部主体に堅穴系横口式石室を持ち、TK-208という極端に古式の須恵器を出土しており注目される。

##### ◇系譜はどこに求めることができるのか

今回は検討するだけの材料を集めることはできなかった。しかし5世紀代の出現は窯業技術や馬匹文化の波及と時を同じくしており、半島との関連を予感させるものである。実際韓国でも出土例があるようだが(嶺南大学校1987:釜山直轄市博物館1993)、日本の例との先後関係等詳細は確認していない。今後の課題としたい。

##### ◇金具を取り付けることの目的は、どこにあったのか

栃木県の七廻り鏡塚古墳から出土した弓の木筈に近い部分には、4個の小孔が側面から穿たれている。調査担当者によれば孔の用途を確かめることのできる直接の資料が付着していなかったとされ、毛や羽の類を差し込んだとの推測をしている(人和久1974p53)。この孔に何が取り付けられていたのか、或いは何も無かったのかは不明だが、いずれにせよその外見、構造は弓金具の取り付けられた弓と同じものである。直径2.5cm前後の弓に0.5cm程の孔を複数箇所空けるという行為が、弓本来の機能を著しく低下させるものであろうことは、すでに末永雅雄氏が指摘している(末永1981p536～537)。実戦用の弓というよりは儀器的性格の強いことは誰もが認めるところであり、甲冑と共伴する例が極端に少ないことも、その傍証になるであろう。

更に、この金具は視覚的にそれほど目立たない。小中田横穴例のように、黒漆の弓に金銅製の金具を取り付けた例もあるが、その多くが鉄製である。従って、それ自身は特に目を引くものではなく、しかも房などの飾りをつけた痕跡も現在のところ見られない。しかも弓本体は別にして、外部に露出した部分が黒漆で塗装されていた可能性も出ており、ますます取り付けの目的が視覚的な部分以外にあった印象を強めている。そこで先に述べた稼働式という構造が思い起こされる。もしこれが確かならば、弦を弾くと弦自身と共に金具がジャラジャラと鳴り音響効果を高める装置ということになる。弓に関わる祭祀には、弓弦を鳴らす、あるいは弓具の一部である柄を鳴らすといったように、音に関連したものが目に付く。(金子裕之1991p146:辰巳和弘1986p203)この弓金具は、そのための補助具といった位置付けができよう。更に想像を重ねるならば、鋸の突出が大きいほどその効果も高いことが想起され、そのような例が比較的新しい古墳で多く見られるのは、その効果を追求した結果と考えられないだろうか。

## 6) おわりに

以上、三芦永浦1号墳の弓金具からは木質の観察によって、複数本の弓の存在が確認された。福岡市内では他に例がなく、それなりの意義があるものと考えられる。詳細な観察によってより多くの情報が得られることが改めて確認された、と同時に弓金具の認識が浅い現在、他地域でも同様の例が埋もれていることが予想される。類例の増加を待ちたい。

また、その他にも、この金具に関していくつか検討を試みたが、その結果はいずれも推測の域を出ない不十分なものとなってしまった。今後稿を改めて検証したい。

なお、今回拙い文章を掲載する機会を与えていただいた吉留秀敏氏並びに、資料の実見に際し便宜を図っていただいた九州歴史資料館横田義章氏に、木筆ながら感謝申し上げます。(比佐陽一郎)

## 文献

- 人和久 1974 「七廻り鏡塚古墳」 帝國地方行政学会  
市毛勲 1978 「古墳出土の鉄製留金形小品について—その名称と用途をめぐって—」 『古代学研究』 87  
田中新一 1979 「古墳出土の飾り弓」 『鋸輪りの弓の出現と展開』 『伊知波良』 1  
末永雅雄 1981 『増補日本上代の武器』 木耳社  
辰巳和弘 1986 「古墳時代の武器とその性格」 『日本の古代』 6 王権をめぐる戦い 中央公論社  
福岡大学校博物館 1987 「狭川芋浦古墳A発掘調査報告」 金森澤  
樺村友延 (編) 1988 『小中田横穴群』 いわき市埋蔵文化財調査報告第20冊 福島県いわき市  
金子裕之 1991 「武器・武具・農具」 『古墳時代の研究』 3 生活と祭祀 堀山閣  
上原典人 1993 「遺物解説」 『水器集成図録、近畿原始編』 奈良国立文化財研究所  
蒙山立博物館 (編) 1993 『生谷洞加達古墳群』  
宮代栄 1995 「飯氏二塚古墳出土の馬具」 『飯氏二塚古墳』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第435集 福岡市教育委員会  
(本文中の引用した古墳の報告書は一覧表の文献と同じであるため、割愛させていただいた。)

## 註

- 1) 各部分の名称については便宜的に、外側を皮金、そこに通す鋸状の金具を芯金として以下の語を進める事とする。
- 2) 須惠器の編年は田辺昭三1981『須惠器大成』角川書店による

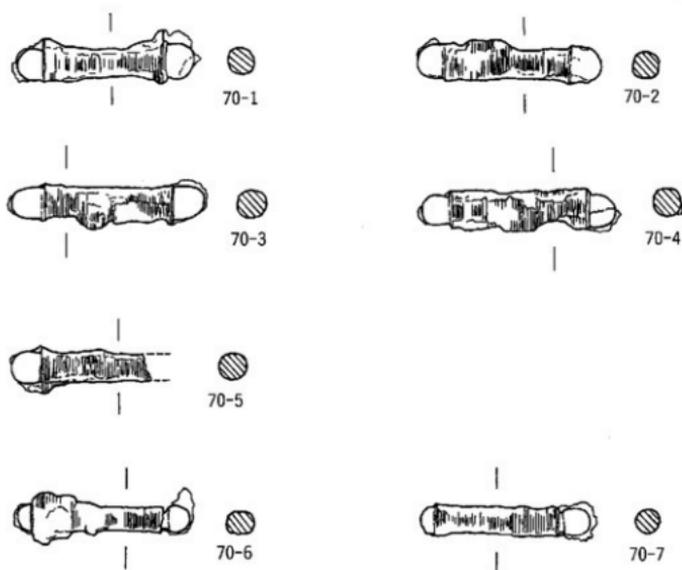
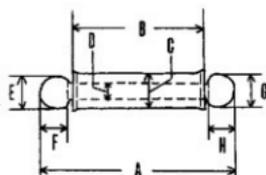


Fig. 217 三舌永浦1号墳出土土弓金具実測図

No.	A	B	C	D	E	F	G	H
1	34.3	23.5	5.0		6.4	5.6	6.1	5.2
2	36.2	24.5	5.2		6.1	6.0	6.6	5.7
3	37.4	24.6	5.4		6.6	5.8	6.35	6.85
4	37.3	26.4	5.5		5.75	5.7	6.0	5.2
5			3.0	3.2				
6	34.0	24.65	4.3	3.2	5.6	5.0	5.8	4.35
7	33.3	24.6	4.6		6.1	5.75	4.6	2.65

Tab.4 三舌永浦1号墳出土土弓金具計測値 (単位: mm)



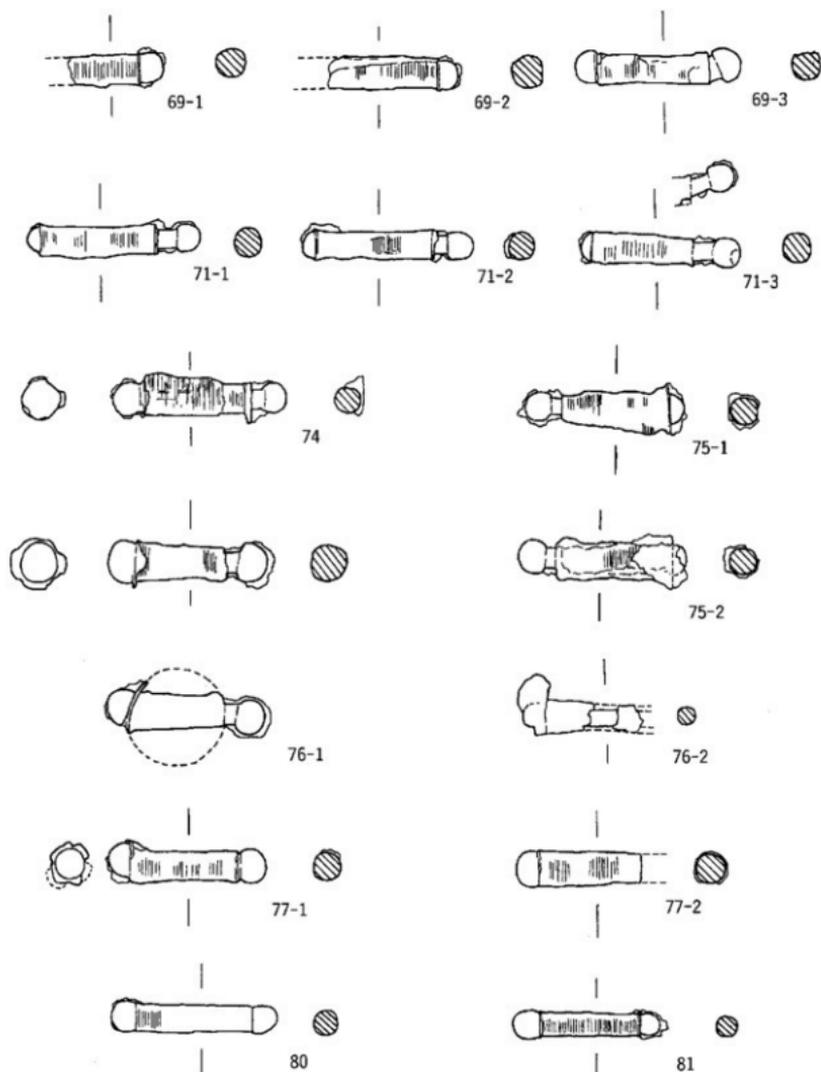


Fig. 218 福岡市内出土弓金具実測図 1 (1/1)

69-1~3 三宮京塚1号墳 71-1~3 松原A-2号墳

74 早苗田C-3号墳 75-1, 2 タカパン塚古墳

76-1, 2クエノノ5号墳 77-1, 2 山崎C-1号墳

80 金武古墳群乙石H-1号墳 81 金武古墳群乙石H-2号墳

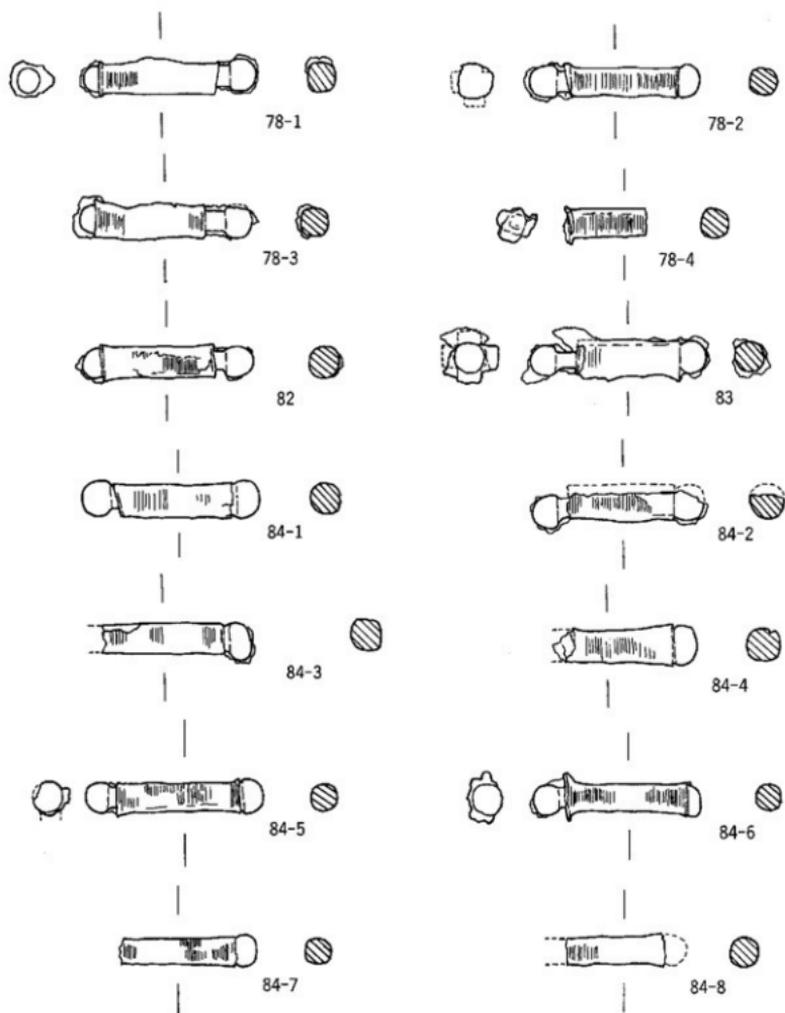


Fig. 219 福岡市内出土弓金具実測図 2 (1/1)

78-1~4 重留 A-1号墳 82 羽根戸 E-3号墳

83 野方 D-1号墳

84-1~8 高崎 2号墳

No.	A	B	C	D	E	F	G	H	78-2	33.5	21.6	4.9	6.2	5.8	5.7	4.3	
69-1			5.4		5.8	4.85			78-3	33.7	21.0	5.6	3.9	5.7	3.1	6.3	5.2
69-2			5.85	3.05	5.8	3.8			78-4			5.25					
69-3	32.0	22.0	5.0		5.9	4.4	5.1	4.2	80	32.2	23.1	5.0		6.0	5.0	5.0	4.15
71-1	33.3	21.2	5.2	3.7	5.35	2.5	5.0	4.6	81	28.8	19.5	3.85		5.35	5.0	4.3	3.6
71-2	32.9	22.7	5.25		5.2	2.5	5.4	5.2	82	32.1	21.45	6.2	3.3	5.1	4.0	5.1	3.3
71-3									83	34.85	20.0	6.0	3.55	6.2	5.25	6.15	5.4
74	33.8	20.25	5.6		6.6	6.3	5.4	7.3	84-1	34.8	23.0	5.9		6.9	5.75	6.0	3.7
75-1	31.0	21.0				5.6			84-2	34.65	21.67	6.2	3.0±	6.7	5.8		5.8
75-2	32.7	22.9		3.6	5.4	5.0		2.7	84-3			5.5		5.45		7.35	
76-1	31.3	18.25	6.1		6.85	5.1		5.6	84-4			6.5	3.6			7.35	
76-2				3.1					84-5	34.4	23.3	5.0		5.5	4.2	5.6	4.3
77-1	30.75	21.1	5.1		5.75	4.4	5.35	4.7	84-6	33.3	23.0	4.9		5.3	4.65	5.7	3.25
77-2			5.7	3.15	6.9	4.55			84-7			4.9	3.17			4.95	4.4
78-1	34.1	22.4	5.7	3.6	5.8	5.2	4.9	3.1	84-8			5.2	2.85				

Tab.5 福岡市内出土弓金具計測値 (単位: mm)

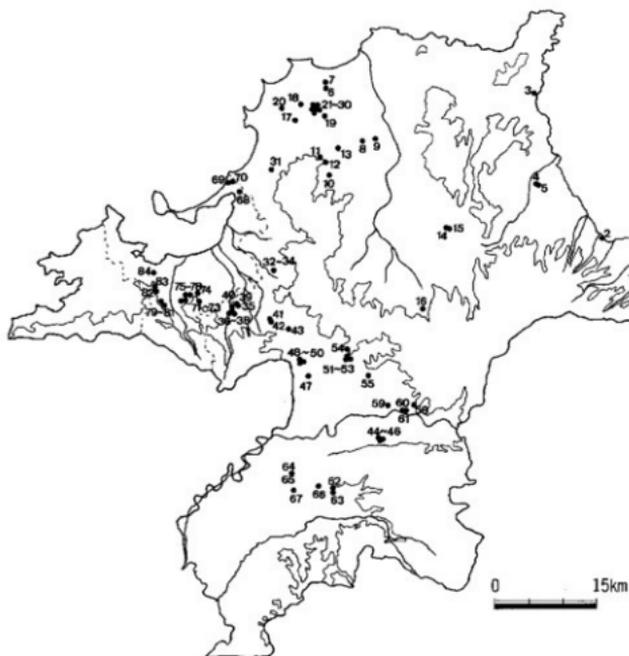


Fig. 220 福岡県内弓金具出土古墳位置図 (番号は一覧表に対応)

# 福岡県内弓金具出土地名表

No.	古 墳 名	所 在 地	墳形	内部形状	弓金具		共 伴 遺 物										その他の遺物/備考	文献	
					数	材質	銅器	土器	瓦器	刀剣	鏡	工器	埴輪	瓦	その他				
1	宇野台1号墳	筑上郡新宮村宇野	円	横穴式石室(準)	2	鉄													1
2	黒部3号墳	豊前市松江	円	横穴式石室	1														2
3	下吉田49号墳	北九州市小倉南区吉田	円	横穴式石室(準)	2														3
4	竹笠塚穴群 A-5号	行徳市竹笠	横穴	横穴	3														4
5	竹笠塚穴群 A-44号	行徳市竹笠	横穴	横穴	1														4
6	東田7号墳	遠賀郡岡垣町高倉	円	横穴式石室(準)	2														5
7	竜平2号墳	遠賀郡岡垣町吉本	円	横穴式石室(準)	1	鉄													5
8	銀冠塚古墳	鞍手郡鞍手町八尋	円	横穴式石室(準)	14														7
9	岡山4号墳	鞍手郡鞍手町新北	円	横穴式石室	5	鉄													8
10	熊子馬屋1号墳	鞍手郡若宮町下	円	横穴式石室(準)	1	鉄													9
11	萩ノ浦1号墳	鞍手郡若宮町山口	円	横穴式石室(準)	2	鉄													10
12	竹原古墳	鞍手郡若宮町竹原	円	横穴式石室(準)	2														11
13	南ヶ浦2号墳	鞍手郡富田町中有木	円	横穴式石室(準)	4*														12
14	伊田區塚横穴 D-3号	田川市伊田	横穴	横穴	2														13
15	伊田區塚横穴 D-4号	田川市伊田	横穴	横穴	1														13
16	新行坊古墳	嘉穂郡嘉穂町半隈	円	横穴式石室(準)	2	鉄													14
17	スベットの古墳	宗像市田嶋	横穴	横穴式石室(準)	2														15
18	相原2号墳	宗像市河東	円	横穴式石室(準)	10	鉄													16
19	石丸1号墳	宗像市石丸	円	横穴式石室(準)	2														17
20	大井三貴1号墳	宗像市	円	横穴式石室(準)	1	鉄													18
21	城ヶ谷3号墳	宗像市大田原	円	横穴式石室(準)	1	鉄													19
22	城ヶ谷6号墳	宗像市大田原	円	横穴式石室?	2														19
23	城ヶ谷8号墳	宗像市大田原	円	横穴式石室(準)	1	鉄													19
24	城ヶ谷10号墳	宗像市大田原	円	横穴式石室(準)	2	鉄													19
25	城ヶ谷16号墳	宗像市大田原	円	横穴式石室(準)	2	鉄													19
26	城ヶ谷21号墳	宗像市大田原	円	横穴式石室(準)	1	鉄													19
27	平等寺向原丘-7号墳	宗像市平等寺向原	円	横穴式石室(準)	4	鉄													20
28	平等寺向原丘-10号墳	宗像市平等寺向原	円	横穴式石室(準)	1	鉄													20
29	平等寺向原丘-11号墳	宗像市平等寺向原	円	横穴式石室(準)	1	鉄													20
30	平等寺向原丘-16号墳	宗像市平等寺向原	円	横穴式石室(準)	1	鉄													20
31	原口1号墳	糟屋郡古賀町	円	横穴式石室(準)	3														21
32	宇美観音浦 KE-1号墳	糟屋郡宇美町井野	円	横穴式石室(準)	1	鉄													22
33	宇美観音浦 KS-3号墳	糟屋郡宇美町井野	円	横穴式石室(準)	1	鉄													22
34	宇美観音浦 KS-20号墳	糟屋郡宇美町井野	円	横穴式石室(準)	1	鉄													22
35	西浦2号墳	春日市上白水	円	横穴式石室(準)	10														23
36	鏡香山V-21号墳	筑紫郡那珂川町中原	円	横穴式石室(準)	1	鉄													24
37	鏡香山V-31号墳	筑紫郡那珂川町中原	円	横穴式石室(準)	1														24
38	鏡山V-7号墳	筑紫郡那珂川町中原	円	横穴式石室(準)	1	鉄													25
39	カクチ方浦3号墳	筑紫郡那珂川町松木	円	竪穴式石室	2	鉄													26
40	カクチ方浦6号墳	筑紫郡那珂川町松木	円	竪穴式石室	2	鉄													26
41	唐人塚5号墳	筑紫野市杉塚	円	横穴式石室	1	鉄													27
42	唐人塚6号墳	筑紫野市杉塚	円	横穴式石室	1	鉄													27
43	砂ヶ谷2号墳	筑紫野市青志穂	円	横穴式石室(準)	1	鉄													28
44	益生田 A-5号墳	浮羽郡田主丸町益生田	円	横穴式石室(準)	2														29
45	益生田13号墳	浮羽郡田主丸町益生田	円	横穴式石室(準)	1														29
46	益生田15号墳	浮羽郡田主丸町益生田	円	横穴式石室(準)	2														29
47	横原塚1号墳	小郡市横原	円	横穴式石室	1	鉄													30
48	三沢17号墳	小郡市三沢	円	横穴式石室(準)	8	鉄													31
49	三沢横穴4-5-6号墓道	小郡市三沢	横穴墓道	横穴墓道	1	鉄													31
50	三沢横穴10-11墓道	小郡市三沢	横穴墓道	横穴墓道	1	鉄													31
51	仙滝2号墳	朝倉郡三輪町久光	円	横穴式石室(準)	3														32
52	仙滝8号墳	朝倉郡三輪町久光	円	横穴式石室(準)	1	鉄													32
53	仙滝9号墳	朝倉郡三輪町久光	円	横穴式石室(準)	5														32
54	栗田谷2号墳	朝倉郡三輪町栗田谷	円	横穴式石室(準)	3														33
55	柿原 1-2号墳	竹本市柿原	円	横穴式石室(準)	1														34
56	柿原 1-6号墳	竹本市柿原	円	横穴式石室(準)	2														34
57	桶原 D-8号墳	甘木市桶原	円	横穴式石室(準)	1														35
58	砂見3号墳	朝倉郡朝倉町	円	横穴式石室(準)	1	鉄													35
59	砂原古墳	朝倉郡朝倉町人地	円	横穴式石室(準)	9														33
60	山田 A-1号墳	朝倉郡朝倉町山田	円	横穴式石室(準)	1	鉄													36
61	山田 A-2号墳	朝倉郡朝倉町山田	円	横穴式石室(準)	2	鉄													36
62	立山山8号墳	八女市古本	円	横穴式石室(準)	9	鉄													37
63	立山山23号墳	八女市古本	円	竪穴式石室	2	鉄													37
64	山の跡1号墳	八女市広川町広川	円	横穴式石室(準)	1	鉄													38
65	山の跡2号墳	八女市広川町広川	円	横穴式石室(準)	2	鉄													38
66	山王山古墳	八女郡広川町長延	円	横穴式石室(準)	2	鉄													39
67	鬼塚古墳	八女市広川町新代	円	横穴式石室(準)	2														40

## 文献

1. 高橋章(編)『宇野古墳群』新吉富村文化財調査報告書 第5集 新吉富村教育委員会 1990
2. 酒井仁夫(編)『黒部古墳群』玄洋閣発刊株式会社 1979
3. 川上秀秋・前田義人(編)『下古古墳群』北九州市埋蔵文化財調査報告 第21集 財団法人北九州市教育文化事業同埋蔵文化財調査室 1983
4. 竹並道跡調査会(編)『竹並道跡』1979
5. 川達昭人(編)『東田古墳群』岡塚町教育委員会 1977
6. 木下修(編)『薨ぎ坂古墳群』福岡県文化財調査報告書 第106集 福岡県教育委員会 1993
7. 渡辺正気他(編)『銀塚塚』福岡県文化財調査報告書 第28集 福岡県教育委員会 1963
8. 中間研志(編)『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XII 福岡県教育委員会 1977
9. 井上裕弘(編)『鹿子馬原古墳群』若宮町文化財調査報告書 第3集 若宮町教育委員会 1981
10. 香間信(編)『荻ノ浦古墳群』若宮町文化財調査報告書 第10集 若宮町教育委員会 1991
11. 若宮町教育委員会(編)『竹原古墳』1982
12. 児玉真一(編)『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』第1集 福岡県教育委員会 1979
13. 柳田康雄(編)『夏吉古墳群・清瀬横穴群・伊田孤塚横穴群』田川市文化財調査報告書 第2集 田川市教育委員会 1983
14. 川達昭人(編)『新行坊古墳』嘉穂町文化財調査報告書 第2集 嘉穂町教育委員会 1981
15. 波多野純三・春成秀爾『東郷道跡群』日本住宅公園 1967
16. 酒井仁夫(編)『相原古墳群』宗像町文化財調査報告書 第1集 宗像町教育委員会 1979
17. 橋口達也(編)『石丸道跡』宗像町文化財調査報告書 第4集 宗像町教育委員会 1980
18. 酒井仁夫(編)『宗像 大井三倉道跡』宗像市文化財調査報告書 第11集 宗像市教育委員会 1987
19. 波多野純三(編)『城ヶ谷古墳群』クボタハウス株式会社/住友不動産株式会社 1977
20. 安部裕久(編)『平等寺向原 I』宗像市文化財調査報告書 第37集 福岡県宗像市教育委員会 1992
21. 石山勲・酒井仁夫(編)『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-IV- 福岡県教育委員会 1974
22. 平ノ内幸治(編)『宇美観音浦』宇美町教育委員会 1981
23. 平田定守・丸山康晴(編)『西浦古墳群』春日市文化財調査報告書 第13集 春日市教育委員会 1982
24. 佐藤昭則(編)『観音山古墳群』II 那珂川町文化財調査報告書 第14集 那珂川町教育委員会 1986
25. 佐藤昭則・茂和敏(編)『観音山古墳群』III 那珂川町文化財調査報告書 第17集 那珂川町教育委員会 1988
26. 宮原千佳子(編)『カクチガ浦道跡群』那珂川町文化財調査報告書 第23集 那珂川町教育委員会 1990
27. 川達昭人(編)『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XVII- 福岡県教育委員会 1977
28. 山野洋一・奥村俊久(編)『杉の谷古墳群・カケ塚古墳埋蔵文化財調査報告書』筑紫野市文化財調査報告書 第2・3集 筑紫野市教育委員会 1979
29. 栗原和彦・石山勲・高山浩一(編)『田主丸古墳群』田主丸町文化財調査報告書 第1集 田主丸町教育委員会 1984
30. 速水信也(編)『横隈孤塚道跡』II 小都市文化財調査報告書 第27集 小都市教育委員会 1985
31. 宮田浩之(編)『三沢古墳群』I 小都市文化財調査報告書 第62集 小都市教育委員会 1990
32. 石山勲(編)『仙道古墳群』福岡県文化財調査報告 第78集 福岡県教育委員会 1987
33. 高山明(編)『埋もれていた割倉文化』福岡県立朝倉高等学校史学部 1969
34. 中間研志・平嶋文博(編)『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-6- 福岡県教育委員会 1986
35. 小池史哲(編)『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-19- 福岡県教育委員会 1990
36. 小池史哲(編)『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-23- 福岡県教育委員会 1992
37. 佐田茂・伊崎俊秋(編)『立山山古墳群』八女市文化財調査報告書 第10集 八女市教育委員会 1983
38. 西谷正(編)『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-III- 福岡県教育委員会 1972
39. 川達昭人・池部元明(編)『山王山古墳』広川町文化財調査報告書 第3集 広川町教育委員会 1983
40. 川達昭人(編)『地塚古墳群』広川町文化財調査報告書 第5集 広川町教育委員会 1986
41. 柳田純孝他(編)『和自道跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第18集 福岡市教育委員会 1971
42. 藤本正志(編)『三苦京塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第243集 福岡市教育委員会 1991
43. 山崎純男(編)『柏原道跡群』II 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第125集 福岡市教育委員会 1986
44. 柳田純孝(編)『片江古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第24集 福岡市教育委員会 1973
45. 古畑秀敏(編)『タカノ塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第335集 福岡市教育委員会 1993
46. 常松幹雄(編)『ケモノ道跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第420集 福岡市教育委員会 1995
47. 濱石哲也(編)『山崎古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第380集 福岡市教育委員会 1994
48. 下條信行・定森秀夫(編)『重留A群第1号墳』財団法人 古代学協会 1984
49. 柳沢一男(編)『重要遺跡確認調査報告書』I 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第68集 福岡市教育委員会 1981
50. 塩屋勝利(編)『夫婦塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第51集 福岡市教育委員会 1980
51. 宮井善朗(編)『羽根戸古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第198集 福岡市教育委員会 1989
52. 下村智・加藤良彦『野方古墳群D群(第5地点)』『生松古』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第226集 福岡市教育委員会 1990
53. 浜田信也(編)『今宿・バイス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 福岡県教育委員会 1971

















Fig. No.	図名	1:100000	1:50000	1:25000	1:10000	1:5000	1:2500	1:1000	1:500	1:250	1:100	1:50	1:25	1:10	1:5	1:2.5	1:1	1:0.5	1:0.25	1:0.125	1:0.0625	1:0.03125	1:0.015625	1:0.0078125	1:0.00390625	1:0.001953125	1:0.0009765625	1:0.00048828125	1:0.000244140625	1:0.0001220703125	1:0.00006103515625	1:0.000030517578125	1:0.0000152587890625	1:0.00000762939453125	1:0.000003814697265625	1:0.0000019073486328125	1:0.00000095367431640625	1:0.000000476837158203125	1:0.0000002384185791015625	1:0.00000011920928955078125	1:0.000000059604644775390625	1:0.0000000298023223876953125	1:0.00000001490116119384765625	1:0.000000007450580596923828125	1:0.00000000372529029846140625	1:0.000000001862645149230703125	1:0.0000000009313225746153515625	1:0.00000000046566128730767578125	1:0.000000000232830643653837890625	1:0.0000000001164153218269189453125	1:0.00000000005820766091345947265625	1:0.000000000029103830456729736328125	1:0.0000000000145519152283648691640625	1:0.00000000000727595761418243459230703125	1:0.00000000000363797880709121717116953125	1:0.000000000001818989403545608585765625	1:0.0000000000009094947017728042928828125	1:0.00000000000045474735088641464644140625	1:0.00000000000022737367544320732322030703125	1:0.000000000000113686837721603661616103515625	1:0.00000000000005684341886080308080517578125	1:0.0000000000000284217094304040404040390625	1:0.00000000000001421085471520202020201953125	1:0.000000000000007105427357601010101009765625	1:0.0000000000000035527136788005050505048828125	1:0.00000000000000177635683940025252525244140625	1:0.0000000000000008881784197001262626262220703125	1:0.00000000000000044408920985006313131311103515625	1:0.0000000000000002220446049250315768420703125	1:0.000000000000000111022302462515842103515625	1:0.00000000000000005551115123129210703125	1:0.0000000000000000277555756146053515625	1:0.000000000000000013877787807302675765625	1:0.00000000000000000693889390365133787878140625	1:0.0000000000000000034694469518256689390365133787878140625	1:0.000000000000000001734723475912834469696969220703125	1:0.000000000000000000867361737956423484848481103515625	1:0.0000000000000000004336808689782122424242405517578125	1:0.0000000000000000002168404344891061212121202765625	1:0.00000000000000000010842021724455306060606013828125	1:0.000000000000000000054210108622776530303030069140625	1:0.00000000000000000002710505431138826651515151034703125	1:0.0000000000000000000135525271569433257575750173515625	1:0.000000000000000000006776263578471663888888036703125	1:0.000000000000000000003388131789233194444440183515625	1:0.000000000000000000001694065894619722222200917578125	1:0.00000000000000000000084703294730961111111004517578125	1:0.0000000000000000000004235164736548055555500225765625	1:0.000000000000000000000211758236818274027777700112878125	1:0.00000000000000000000010587911840913638888800056390365133787878140625	1:0.00000000000000000000005293955920456944444400281953125	1:0.000000000000000000000026469779602284722222200140765625	1:0.0000000000000000000000132348898011423611111100070378125	1:0.000000000000000000000006617444900571805555500035190365133787878140625	1:0.000000000000000000000003308722450285902777770001759517578125	1:0.000000000000000000000001654361225142951666660000879765625	1:0.0000000000000000000000008271806125714777770000439878125	1:0.000000000000000000000000413590306285738888800002199390365133787878140625	1:0.000000000000000000000000206795153142944444000109969517578125	1:0.0000000000000000000000001033975765714722222000054984765625	1:0.00000000000000000000000005169878828573611111100027492378125	1:0.00000000000000000000000002584939414285716666600013746190365133787878140625	1:0.0000000000000000000000000129246970714285783333000068730765625	1:0.000000000000000000000000006462348535714285716666600034365378125	1:0.000000000000000000000000003231174267857142857166666000171826878125	1:0.0000000000000000000000000016155871338928571428571666660000859134390365133787878140625	1:0.0000000000000000000000000008077935694692857142857166666000042956719517578125	1:0.0000000000000000000000000004038967847346428571428571666660000214783595765625	1:0.000000000000000000000000000201948392367321428571428571666660000107391797878125	1:0.000000000000000000000000000100974196183661428571428571666660000053695897878125	1:0.000000000000000000000000000050487098091836614285714285716666600000268479489390365133787878140625	1:0.0000000000000000000000000000252435490459183661428571428571666660000013423974469696969220703125	1:0.00000000000000000000000000001262177452295918366142857142857166666000000671198723484848481103515625	1:0.00000000000000000000000000000631088726147895918366142857142857166666000000335599369696969220703125	1:0.00000000000000000000000000000315544363073947895918366142857142857166666000000167799684848481103515625	1:0.000000000000000000000000000001577721815369478959183661428571428571666660000000838998424242405517578125	1:0.0000000000000000000000000000007888609076847394789591836614285714285716666600000004194992121212102765625	1:0.000000000000000000000000000000394430453842197394789591836614285714285716666600000002097496060606013828125	1:0.000000000000000000000000000000197215226921098947895918366142857142857166666000000010487480303030069140625	1:0.00000000000000000000000000000009860761346049478959183661428571428571666660000000052437401515151034703125	1:0.00000000000000000000000000000004930380673022478959183661428571428571666660000000026218700768420703125	1:0.000000000000000000000000000000024651903361011247895918366142857142857166666000000013109350390365133787878140625	1:0.000000000000000000000000000000012325951680505624789591836614285714285716666600000000655467519517578125	1:0.00000000000000000000000000000000616297584025281247895918366142857142857166666000000003277337595765625	1:0.00000000000000000000000000000000308148792012641247895918366142857142857166666000000001638668797878125	1:0.000000000000000000000000000000001540743960063206247895918366142857142857166666000000000819334390365133787878140625	1:0.000000000000000000000000000000000770371980031610124789591836614285714285716666600000000040966719517578125	1:0.00000000000000000000000000000000038518599001570506247895918366142857142857166666000000000204833595765625	1:0.000000000000000000000000000000000192592995007852531247895918366142857142857166666000000000102416684848481103515625	1:0.000000000000000000000000000000000096296497500392616247895918366142857142857166666000000000512083424242405517578125	1:0.000000000000000000000000000000000048148248750019630812478959183661428571428571666660000000002560417121212102765625	1:0.00000000000000000000000000000000002407412437500098154062478959183661428571428571666660000000001280208560606013828125	1:0.000000000000000000000000000000000012037062187500049077031247895918366142857142857166666000000000640104280303030069140625	1:0.000000000000000000000000000000000006018531093750002453851562478959183661428571428571666660000000003200521401515151034703125	1:0.00000000000000000000000000000000000300926554687500012269257812478959183661428571428571666660000000001600260700768420703125	1:0.0000000000000000000000000000000000015046327734375000061346289062478959183661428571428571666660000000000800130350390365133787878140625	1:0.0000000000000000000000000000000000007523163867187500003067314453031247895918366142857142857166666000000000040006517519517578125	1:0.0000000000000000000000000000000000003761581933593750000153365722672656247895918366142857142857166666000000000020003258768420703125	1:0.000000000000000000000000000000000000188079096679687500000766828633813281247895918366142857142857166666000000000010001629390365133787878140625	1:0.0000000000000000000000000000000000000940395483398437500000383414166416410312478959183661428571428571666660000000000500081469696969220703125	1:0.00000000000000000000000000000000000004701977416992187500000191707083208080517578125	1:0.000000000000000000000000000000000000023509887084996093750000009585354160404040390625	1:0.000000000000000000000000000000000000011754943542499301875000000479267702020201953125	1:0.00000000000000000000000000000000000000587747177124996509375000000239633851010101009765625	1:0.00000000000000000000000000000000000000293873588562499301875000001198166925050505048828125	1:0.000000000000000000000000000000000000001469367942812499650937500000599083475252525244140625	1:0.000000000000000000000000000000000000000734683971404993018750000029954173762626262220703125	1:0.000000000000000000000000000000000000000367341985702249965093750000149770868813131311103515625	1:0.0000000000000000000000000000000000000001836709928512499650937500000748854424242405517578125	1:0.009183549642562499650937500003744272121212102765625	1:0.00459177482128124996509375000018721361060606013828125	1:0.00229588741064124996509375000009360680303030069140625	1:0.001147943705320624996509375000046803401515151034703125	1:0.00057397185264124996509375000023401700768420703125	1:0.000286985926320624996509375000011700850390365133787878140625	1:0.000143492963161062499650937500000585042519517578125	1:0.00717464815805312499650937500002925212595765625	1:0.0035873240794026562499650937500001462606287878125	1:0.0017936620397013281249965093750000073130314469696969220703125	1:0.000896831019850664124996509375000003656515734848481103515625	1:0.000448415509775332062499650937500001828257868420703125	1:0.00022420775488766610624996509375000009141289390365133787878140625	1:0.0001121038774444333062499650937500000457064469696969220703125	1:0.005605193872221665312499650937500000228532234848481103515625	1:0.0028025969361108266249965093750000114266117390365133787878140625	1:0.00140129846805554412499650937500000571330587878125	1:0.000700649234027772206249965093750000028566529390365133787878140625	1:0.0003503246170138811062499650937500001428326469696969220703125	1:0.0001751623085069405312499650937500000714163234848481103515625	1:0.00875811542547226562499650937500000357081619517578125	1:0.0043790577127361328124996509375000017854080768420703125	1:0.0021895288563680664124996509375000008927040390365133787878140625	1:0.0010947644281840332062499650937500000446352019517578125	1:0.000547382214092166249965093750000022317600768420703125	1:0.000273691107046083124996509375000011158800390365133787878140625	1:0.000136845553523041662499650937500000557940019517578125	1:0.006842277676152081249965093750000027897000768420703125	1:0.000000000000000
----------	----	----------	---------	---------	---------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	------	------	------	-----	-------	-----	-------	--------	---------	----------	-----------	------------	-------------	--------------	---------------	----------------	-----------------	------------------	-------------------	--------------------	---------------------	----------------------	-----------------------	------------------------	-------------------------	--------------------------	---------------------------	----------------------------	-----------------------------	------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	----------------------------------	-----------------------------------	------------------------------------	-------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------------	--	--	--	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	--	---	---	--	--	---	---	--	---	---	---	--	---	--	---	---	--	---	---	---	---	--	--	--	---	--	---	---	--	---	---	--	--	--	---	--	---	---	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	---	---	---	--	---	---	--	---	---	--	---	--	--	--	--	--	--	---	--	---	---	--	---	---	---	--	--	---	---	--	--	---	---	---	---	---	--	--	--	---	---	---	---	--	--	---	---	--	--	--	--	---	---	---	---	--	---	--	---	--	--	---------------------



三<sup>み</sup>苦<sup>とま</sup>永<sup>なが</sup>浦<sup>うら</sup>遺跡

図 版



1. 三苫水浦道跡全景 (西から)



2. 試掘トレンチT-115 (西から)



3. 試掘トレンチT-95 (南から)



4. 試掘トレンチT-2 (南から)



5. 試掘トレンチT-50 (北から)



6. 試掘トレンチT-51 (東から)



1. 三吾永浦周辺航空写真 (1947年)



2. 三吾永浦周辺航空写真 (1989年)



1. A地区全景（北から）



2. A地区透景（南東から）



3. SC05遺物出土状態（北東から）



4. SC05遺物出土状態（南東から）



5. SC05完掘状態（北西から）



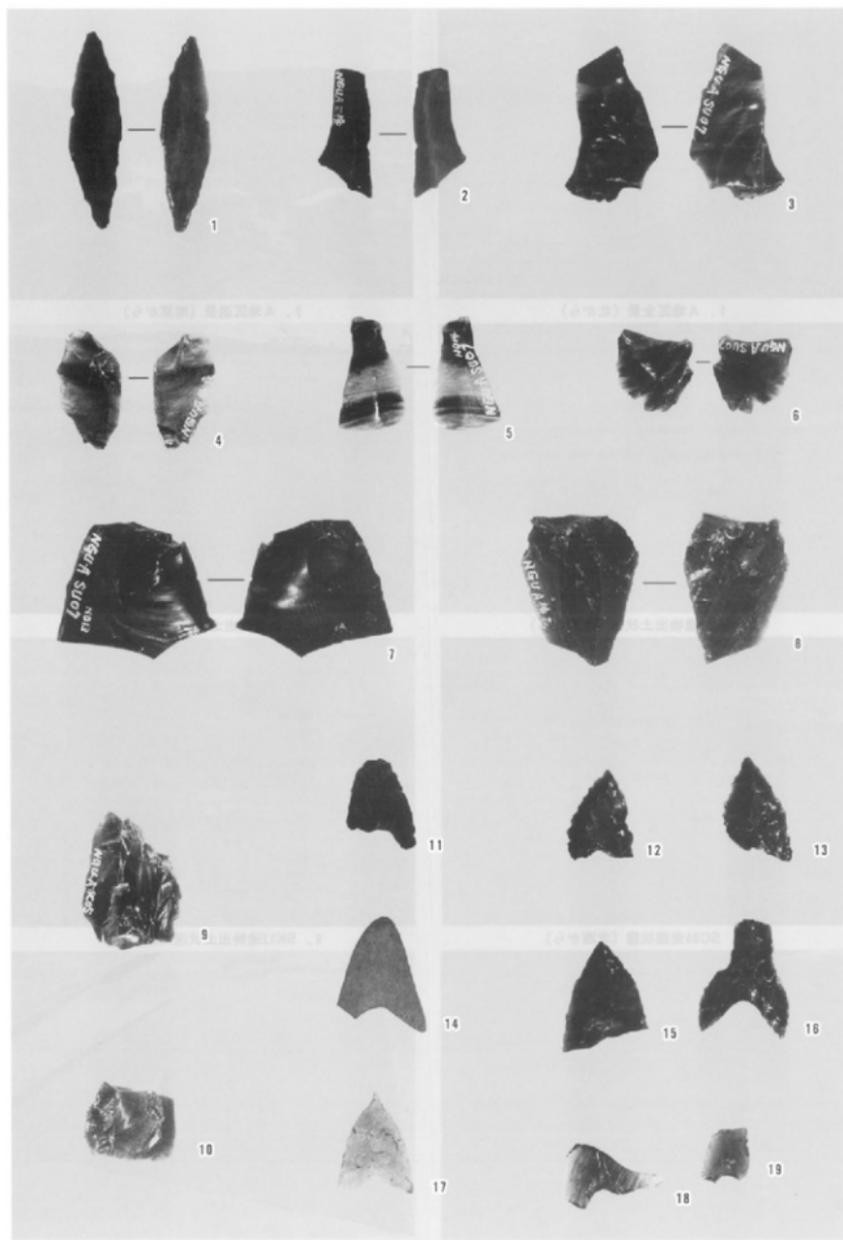
6. SK12遺物出土状況（東から）



7. SC03（東から）



8. 旧石器調査区（SU07）（北から）



A地区出土遺物



1. D地区近景 (南から)



2. D地区遠景 (西から)



3. D地区遠景 (南から)



4. D地区作業風景 (南から)



5. D地区全景 (北から)



6. D地区全景 (東から)



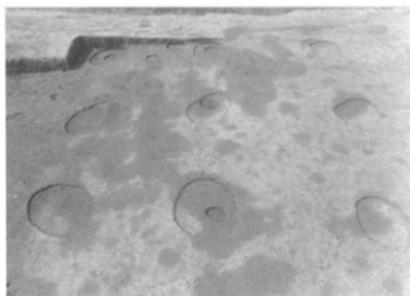
7. SC05 (東から)



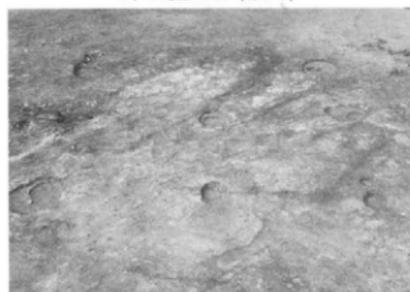
8. SC06 (東から)



1. D地区 SC07 (北から)



2. SB01 (北から)



3. SB02 (北東から)



4. SB09 (北から)



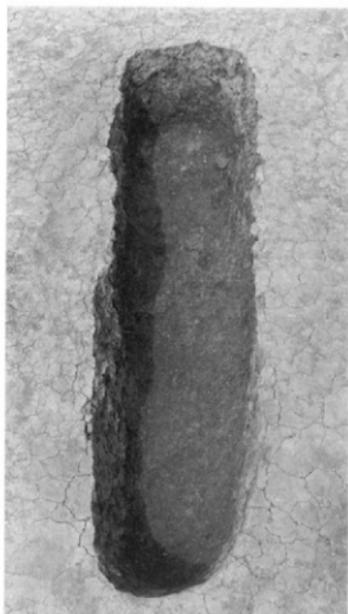
5. SB01土層断面 (南東から)



6. SB11 (西から)



1. D地区SK08 (西から)



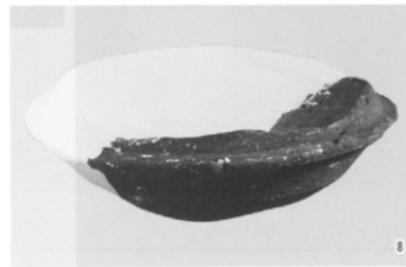
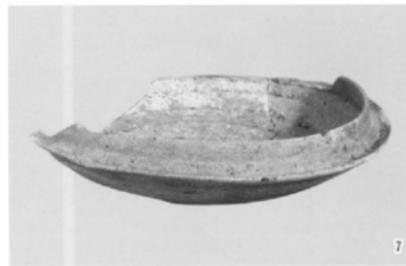
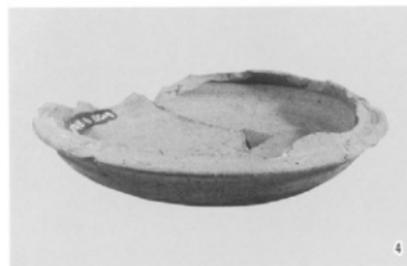
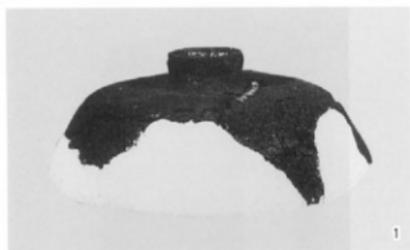
2. SK08完掘状態 (南東から)



3. SK08遺物出土状態 (南から)



4. SK08土層断面 (南から)



D地区出土遺物



1. E地区1号墳填丘遠景 (西から)



2. 1号墳填丘 (西から)



3. E地区調査前状況 (西から)



4. 1号墳調査前状況 (南から)



5. 1号墳調査前状況 (西から)



6. 1号墳填丘 (西から)



7. 1号墳填丘 (西から)



8. 1号墳填丘土層 (北から)



1. E地区1号墳調査風景 (南から)



2. 1号墳石室 (南から)



3. 1号墳石室 (東から)



4. 1号墳石室 (南から)



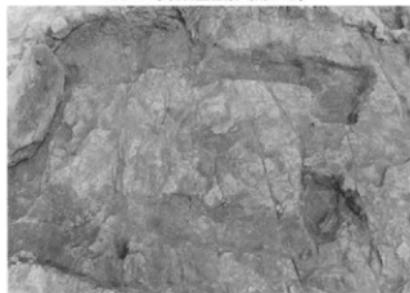
5. 1号墳石室 (東から)



6. 1号墳石室全景 (南から)



7. 1号墳掘方 (南から)



8. 1号墳掘方 (西から)



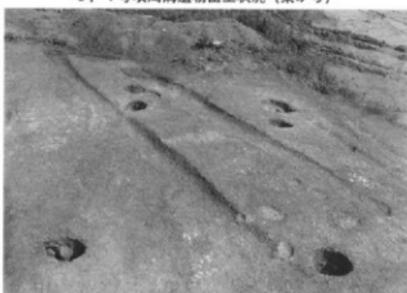
1. E地区1号墳周溝土層断面(北から)



2. 1号墳周溝遺物出土状況(東から)



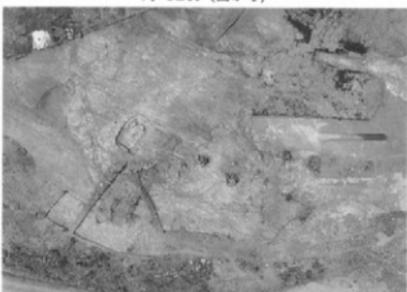
3. 1号墳周溝遺物出土状況(東から)



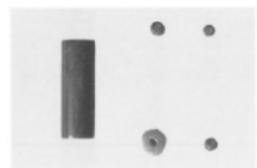
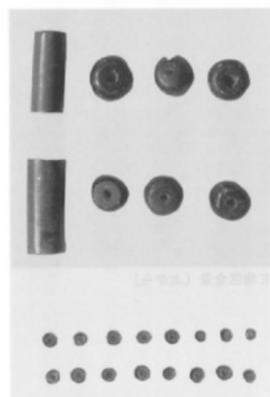
4. SB05(西から)



5. E・F地区全景(南から)



6. E地区全景(上から)



E地区出土遺物 (含F地区遺物)



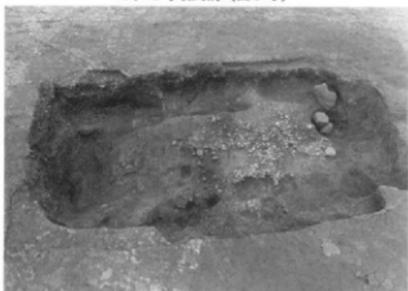
1. F地区調査前風景 (南から)



2. 2号墳周囲 (西から)



3. 2号墳墓坑状態 (南から)



4. 2号墳石材残跡 (西から)



5. 2号墳敷石 (西から)



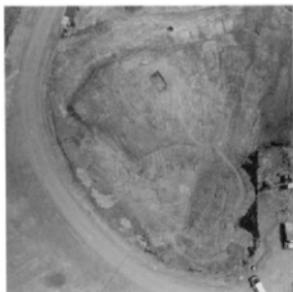
6. 2号墳敷石 (南から)



7. 2号墳石室掘方 (西から)



8. 2号墳石室掘方 (南から)



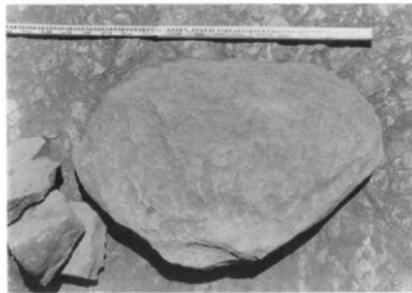
1. F地区全景 (上から)



2. D～F地区全景 (北から)



3. F地区古墳石材 (北から)



4. 2号墳異壁石材 (東から)



5. D～F地区全景 (西から)



1. H地区周辺風景（新宮方面を望む）



2. H地区全景（南から）



3. H地区全景（西から）



4. H地区遠景（東から）



5. H地区全景（南から）



1. H地区 SX00 (南から)



2. SX00 (南から)



3. SC01・05 (北から)



4. SC02・03 (東から)



5. SC01・05完掘状態 (西から)



6. SC01・05完掘状態 (西から)



7. SC02完掘状態 (西から)



8. SC04完掘状態 (南から)



1. H地区 SC03 (東から)



2. SC03完掘状態 (西から)



3. SC04完掘状態 (南から)



4. SC07 (東から)



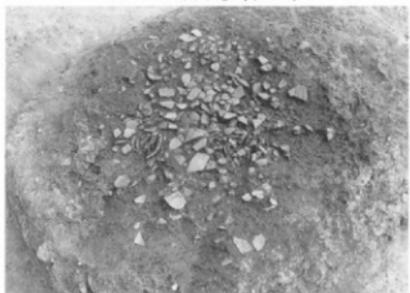
5. SC07・SD08完掘状態 (北から)



6. SD08完掘状態 (東から)



7. SD08遺物出土状態 (南から)



8. SX09 (北から)



1. H地区 SX10完掘状態 (南から)



2. SX10全景 (上から)



3. SX10全景 (南から)



4. SX10a~h区 (南から)



5. SX11土層断面 (北から)



1. H地区 SX10AA'ベルト土層断面 (北西から)



2. SX10BB'ベルト土層断面 (南から)



3. SX10CC'ベルト土層断面 (南西から)



4. SX10'ベルト土層断面 (東から)



5. SX10BB'ベルト東側土層断面 (南から)



6. SX10BB'ベルト中央断面 (南から)



7. SX10CC'ベルト土層断面 (南から)



8. SX10EE'ベルト土層断面 (北から)



1. H地区 SD11土層断面 (北東から)



2. SD11土層断面 (北から)



3. SD12土層断面及び完掘状態 (北から)



4. SD12増築石組 (西から)



5. SX13 (北から)



6. SX13 (西から)



1. H地区 SX10作業風景 (南から)



2. SX20冠水状態 (南西から)



3. SX10冠水状態 (南西から)



4. SX10測量風景 (南東から)



5. SX10C区遺物出土状態 (北東から)



6. SX10C区遺物出土状態 (北東から)



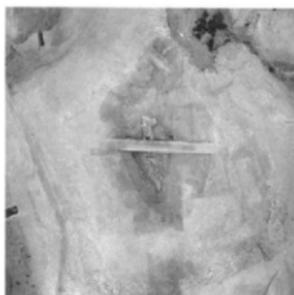
7. SX10遺物出土状態 (西から)



8. SX10紡錘車出土状態



1. H地区 SX20 (上から)



2. SX30 (上から)



3. SX20 (北から)



4. SX20・30 (北から)



5. SX30土層断面 (北から)



6. SX30暗渠出土状態 (西から)



7. SX30暗渠出土状態 (西から)



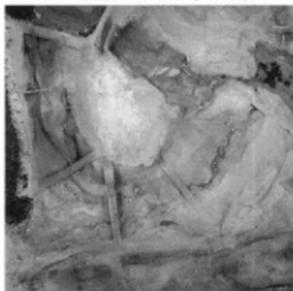
8. SX30暗渠出土状態 (南から)



1. H地区 SX50~70 (上から)



2. SD53 (西から)



3. SX50~60 (上から)



4. SX50BB'ベルト土層断面 (西から)



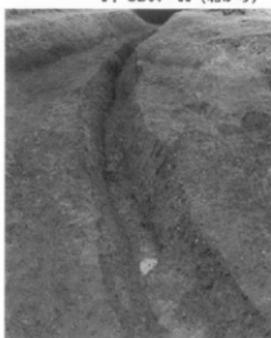
5. SX50CC'ベルト土層断面 (北から)



6. SD54+55 (北から)



7. SD55 (北から)



8. SD54 (北から)



1. H地区 SX50DD'ベルト土層断面 (北から)



2. SX30土層断面 (南から)



3. SD53石組 (北西から)



4. SX50水田跡櫛列出土状態 (北から)



5. SX30完掘状態 (南西から)



6. SX80石戈出土状態



1. H地区 SX40 (上から)



2. SD80 (東から)



3. SX90 (北から)



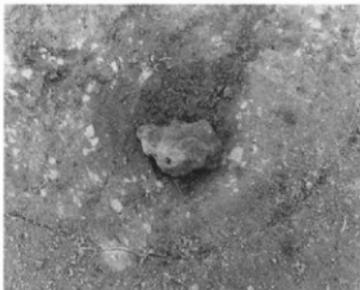
4. SD80CC'ベルト土層断面 (東から)



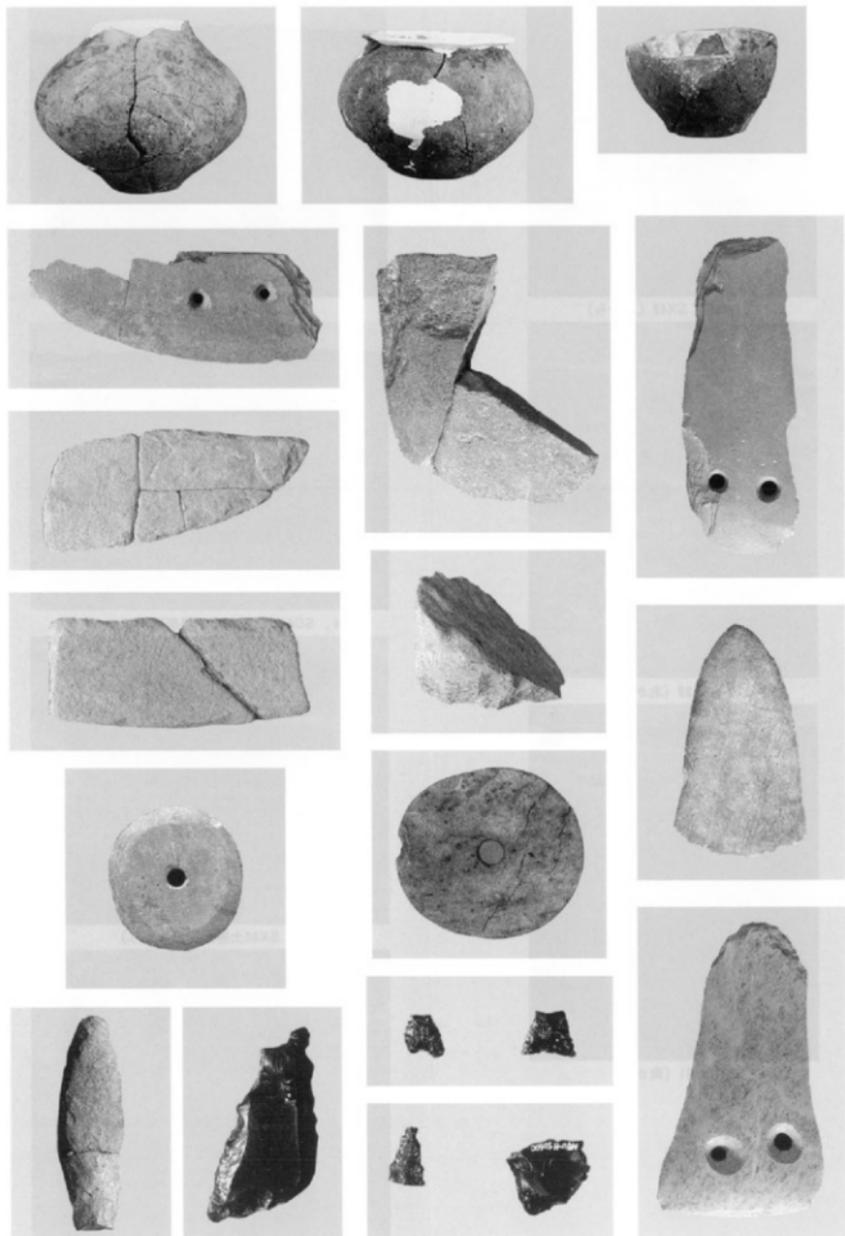
5. SX91 (南から)



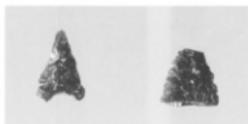
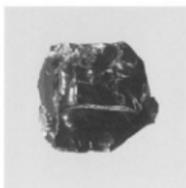
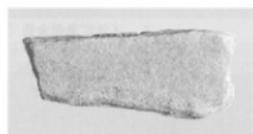
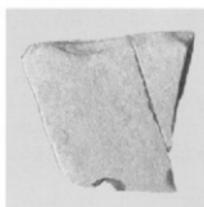
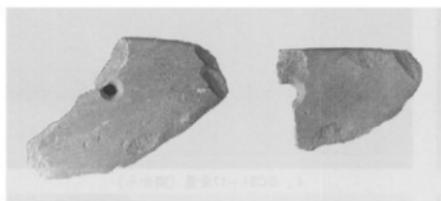
6. SX90土層断面 (北から)



7. SX91鉄弁出土状態



H地区出土遺物 1



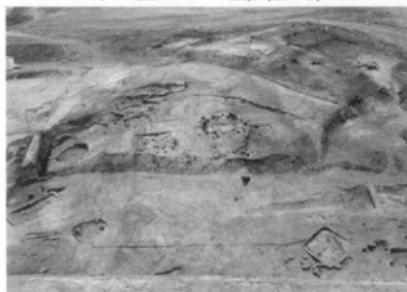
H地区出土遺物 2



1. I地区 SC01~17全景 (南から)



2. I地区全景 (北から)



3. I地区南側全景 (西から)



4. SC01~17全景 (南から)



5. I地区土層断面 (南から)



6. SC04土層断面 (北から)



7. SC02 (西から)



8. SC18 (東から)



1. I地区 SC14 (南から)



2. SC12炭化物出土状態 (東から)



3. SC17 (北から)



4. SC17 (北から)



5. SC33遺物出土状態 (東から)



6. SC33 (北から)



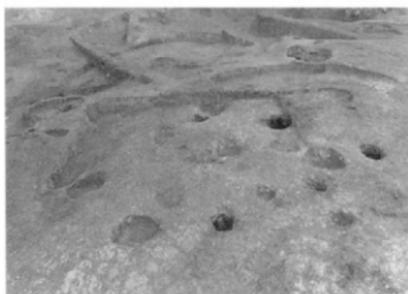
7. SC01ベルト (西から)



8. SC01遺物出土状態 (西から)



1. I地区 SC01 (西から)



2. SC07 (西から)



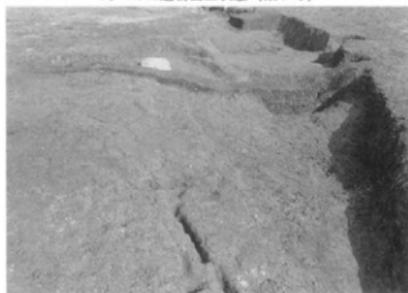
3. SC13遺物出土状態 (北から)



4. SC13遺物出土状態 (東から)



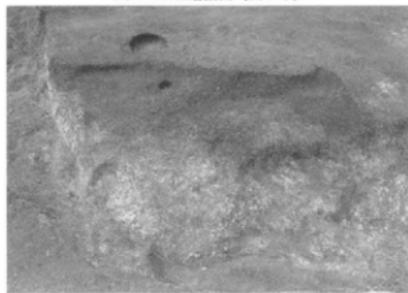
5. SK10遺物出土状態 (東から)



6. SK08土層断面 (西から)



7. SC06 (西から)



8. SK11 (東から)



1. I地区 SC42・43・45・46 (西から)



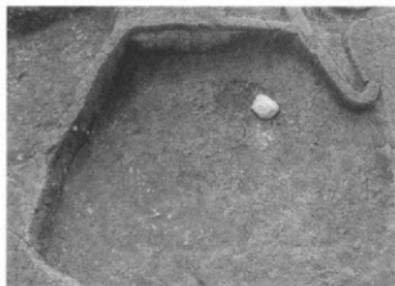
2. SC37~40 (西から)



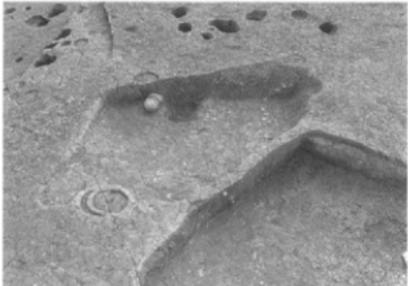
3. SC45 (北から)



4. SC45 (西から)



5. SC43 (北から)



6. SC42土層 (北から)



7. SC61 (北から)



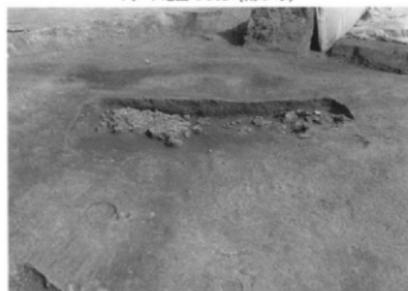
8. SC38 (東から)



1. I地区 SC62 (南から)



2. SC63 (西から)



3. SC32遺物出土状態 (南から)



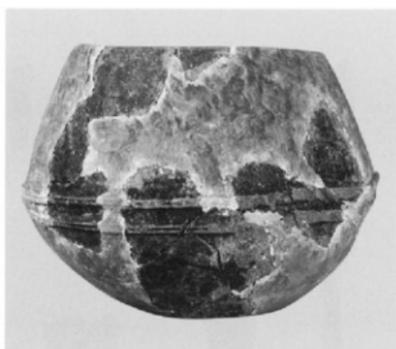
4. SC32 (北から)



5. SC37ベルト (北から)



6. SC37 (東から)



I地区出土遺物



三古水浦遺跡出土鉄器



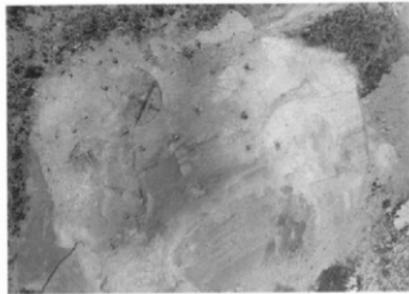
1. J地区周辺風景 (志賀島方面を望む)



2. J地区遠景 (東から)



3. J地区全景 (北から)



4. J地区全景 (上から)



5. SC04調査風景 (南から)



6. SC04 (南から)



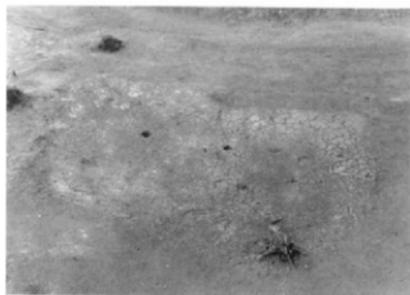
7. SC04中央土壙土層断面 (東から)



8. SC04中央土壙 (南から)



1. J地区 SC07 (東から)



2. SC07 (東から)



3. SK05土層断面 (南から)



4. SK06遺物出土状態 (南から)



5. J地区包舎層 (東から)



6. SC04 (南から)



1. K地区a区全景(南西から)



2. SC01作業風景(北から)



3. SC01炭化物検出状態(東から)



4. SC01完掘状態(東から)



5. SC01完掘状態(東から)



6. SC01完掘状態(西から)



7. SC01中央土層断面(北西から)



8. SC01中央土層完掘状態(東から)



1. K地区b区全景(北西から)



2. SC02完掘状態(西から)



3. SC02土層断面(北東から)



4. b区AA'ベルト土層断面(東から)



5. b区BB'ベルト土層(北西から)



6. SC08完掘状態(西から)



7. SC07、09完掘状態(北東から)



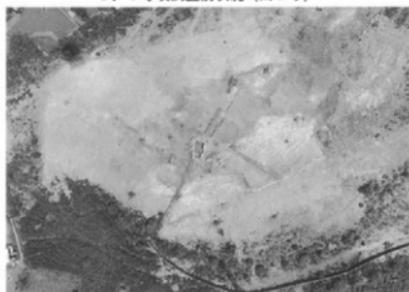
1. L地区3号墳調査前状況(西から)



2. 3号墳調査前状況(西から)



3. L地区周辺風景(博多湾方向を見る)



4. L地区全景(上から)



5. 3号墳(南から)



6. 3号墳(上から)



7. 3号墳全景(北から)



8. 3号墳北側周溝土層(北東から)



1. L地区3号墳裏込め(東から)



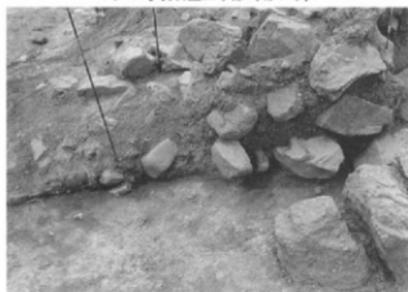
2. 3号墳石室裏込め(南から)



3. 3号墳石室上半部(北から)



4. 3号墳閉塞施設(東から)



5. 3号墳石室出土状態(東から)



6. 3号墳敷石検出状態(北から)



7. 3号墳敷石検出状態(北から)



8. 3号墳石室全景(南から)



1. L地区3号墳遺物出土状態（東から）



2. 3号墳石室内遺物出土状態（北から）



3. 3号墳敷石奥壁（南から）



4. 3号墳敷石（東から）



5. 3号墳石室西側石組及び床石出土状態（東から）



6. 3号墳石室東側石組及び床石出土状態（西から）



7. 3号墳石室西側石組（北東から）



8. 3号墳後道石組（東から）



1. L地区3号墳羨道(北から)



2. 3号墳石室敷石除去状態(南から)



3. SK02(南から)



5. 3号墳出土須恵器高杯



4. K地区SC01出土石斧



6. 3号墳出土須恵器杯身



7. 3号墳出土須恵器杯蓋

福岡市埋蔵文化財調査報告書第476集

三 苦 永 浦 遺 跡

1996年（平成8年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 秀巧社印刷株式会社  
福岡市南区向野2丁目13-29